

CNEAS

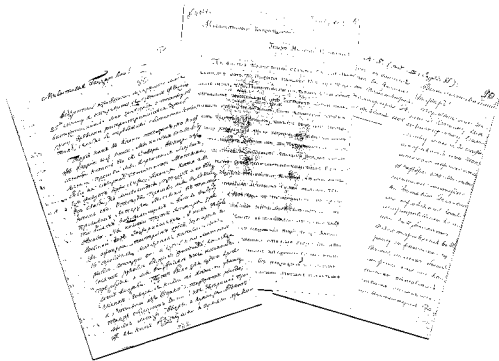
ロシア史料にみる 18～19 世紀の日露関係

第 4 集

平川 新 監修

寺山恭輔・畠山 禎・小野寺歌子 編

CNEAS



CENTER FOR NORTHEAST ASIAN STUDIES  
TOHOKU UNIVERSITY

東北アジア研究センター叢書 第 36 号

東北大学東北アジア研究センター

東北アジア研究センター叢書 第 36 号 平川 新 監修

ロシア史料にみる 18～19 世紀の日露関係 第 4 集

東北大学東北アジア研究センター

CNEAS

**ロシア史料にみる 18～19 世紀の日露関係  
第 4 集**

平川 新 監修

寺山恭輔・畠山 禎・小野寺歌子 編

---

東北アジア研究センター叢書 第 36 号

---

東北大学東北アジア研究センター

Japanese-Russian Relations in the 18th and 19th Centuries

A Documentary Record

Vol. 4.

(CNEAS Monograph Series No.36)

Supervised by HIRAKAWA Arata

Edited and Translated by TERA YAMA Kyosuke,

HATAKEYAMA Tadashi, ONODERA Utako

---

Copyright ©2009 by Center for Northeast Asian Studies, Tohoku University

Kawauchi 41, Aoba-ku, Sendai City, Japan 980-8576

All rights reserved

<http://www.cneas.tohoku.ac.jp/>

---

## 目 次

日露関係史料集第4集の刊行にあたって 平川新 .....	1
出典一覧 .....	6
訳 語 表 .....	8
用語解説 .....	14
凡 例 .....	16
1. シェリホヴァ夫人から侍従武官長、砲兵監長、タヴリダ総督であるズーボフ伯爵への書簡。1795年11月22日。 .....	17
2. イルクーツク商人たちの意見。1795年に海難に遭遇した日本人15人を彼らの祖国に送還するための船の艀装および日本との交易について。1796年末。 .....	22
3. ルィリスク名誉市民、米会社共同出資者シェレホフの未亡人ナタリヤ・アレクセエヴァからの報告。1796年11月5日。 .....	24
4. イルクーツクで商業に従事する、他都市出身の商人たちの意見。交易関係の樹立と日本人の祖国への送還を目的とする日本遠征隊の組織について。1796年12月。 .....	26
5. 日本遠征隊の組織費用配分にかんする皇帝パーヴェル一世宛の請願を求める、イルクーツクとコリヴァンの前総督、元老院議員I.O.セリフオントフから元老院総裁A.B.クラークキンへの文書。1797年2月9日。 .....	27
6-1. イルクーツク県支配人、陸軍少将L.T.ナゲリからイルクーツク総督セリフオントフへの上申書。1797年3月4日。 .....	30
6-2. イルクーツク総督セリフオントフからイルクーツク県支配人ナゲリへの書簡。1797年4月29日。 .....	33
7. 三等文官I.O.セリフオントフの文書と関連した、元老院総裁A.B.クラークキン公爵からパーヴェル一世への上申書。1797年3月20日。 .....	33
8. N.A.シェリホヴァの文書より。「米会社の成功にかんする説明」。1798年8月3日以降。(㊦No.156) .....	34
9. 商業参議会からパーヴェル一世への報告。1799年1月11日。(㊦No.159) .....	38
10. イルクーツク県知事A.I.トルストイから元老院総裁P.V.ロブーヒン公爵への文書。イルクーツクに在住する日本人の祖国送還について。1799年1月18日。 .....	42

11. イルクーツク県知事 A.I.トルストイからの情報。アレウト列島で船が遭難し遭難した日本 <small>シヤンダイガーベルニア</small> の仙 台 県 の住民 15 名について。1799 年 2 月 18 日。 .....	44
12. 元老院総裁 P.V.ロプーヒンから皇帝パーヴェルー世への上申書。イルクーツクに住んでいる日本人の祖国送還について。1799 年 3 月 8 日。 .....	46
13-1. 元老院総裁 P.V.ロプーヒンから商業参議会議長 P. A.ソイモノフへの文書。1799 年 3 月 30 日。 .....	47
13-2. 商業参議会議長 P.A.ソイモノフから元老院総裁 P.V.ロプーヒンへの文書。日本人 15 人の送還にかんする件の遂行について。1799 年 4 月 3 日。 .....	48
13-3. 日本人 15 人の祖国送還にかんする件の推移と関連した、元老院総裁 P.V.ロプーヒンからの 1799 年 3 月 30 日付照会に対する商業参議会の回答。1799 年 4 月 3 日。 .....	49
14-1. 元老院総裁 P. Kh.オボリヤニノフから商業参議会議長 G.P.ガガーリン公爵への文書。イルクーツク商人の日本交易について。1800 年 8 月 10 日。 .....	51
14-2. 商業参議会官房への文書。1795 年にアレウト列島よりシェレホフの船で移送された日本人にかんする詳細な情報の送付について。1800 年 9 月 11 日。 .....	52
14-3. 商業参議会議長 G.P.ガガーリン公爵より元老院総裁 P.Kh.オボリヤニノフへの文書。アレウト列島より移送された日本人の祖国送還にかんする情報について。1800 年 9 月 12 日。 .....	52
15-1. ロシア帝国大臣委員会における諸問題の審議。1803 年 2 月 20 日。 .....	53
15-2. ロシア帝国大臣委員会における諸問題の審議。1803 年 3 月 27 日。 .....	54
16. 商務大臣 N.P.ルミャンツェフよりアレクサンドルー世への報告。1803 年 3 月 27 日。(⑩ No. 188) .....	55
17-1. 露米会社総本部からの指示の草稿。1803 年。 .....	57
17-2. 露米会社総本部より I.F.クルーゼンシテルンへの指示の草稿。1803 年。 .....	60
17-3. 露米会社総本部からの指示の草稿。1803 年。 .....	63
18-1. 世界一周航海に派遣される I.F.クルーゼンシテルンの遠征隊および N.P.レザーノフの日本使節団の名簿。1803 年。 .....	63
18-2. 世界一周航海に派遣される I.F.クルーゼンシテルンの遠征隊および N.P.レザーノフの日本使節団の名簿。1803 年。 .....	66
18-3. 世界一周航海に派遣される I.F.クルーゼンシテルンの遠征隊および N.P.レザーノフの日本使節団の名簿。1803 年。 .....	67
19. フヴォストフの父から N.P.レザーノフへの手紙。1803 年 5 月 27 日。 .....	68

20.	ナジェージダ号、ネヴァ号の世界一周旅行出帆に際して、露米会社理事会から N.P.レザ ーノフ使節団の日本派遣通告書と共に I.F.クルーゼンシテルン艦長に出された通達より。 1803 年 5 月末。 .....	69
21.	アレクサンドル一世のレザーノフへの勅書。1803 年 6 月 10 日。 .....	69
22.	N.P.ルミャンツェフから遣日ロシア使節 N.P.レザーノフへの指示より。1803 年 7 月 10 日。(㊦No.191) .....	70
23.	N.P.レザーノフへの書簡。1803 年 7 月 20 日。 .....	76
24.	ブラジルの N.P.レザーノフから海軍大臣次官 P.V.チチャゴフへの書簡。1804 年 5 月 17 日。 .....	76
25.	G.I.ラングスドルフの報告書より。ナジェージダ号の航海について。1804 年 6 月 7 日～ 10 日。(㊦No. 210) .....	77
26.	ニジネカムチャツク警備司令官 P.I.コシェレフ少将に海軍士官の不服従を訴える N.P.レ ザーノフの手紙。1804 年 7 月 5 日。 .....	82
27.	P. I.コシェレフ少将への N.P.レザーノフの手紙。1804 年 8 月 8 日。 .....	82
28.	I.F.クルーゼンシテルン提督の経歴及び N.P.レザーノフ対日使節団に関する資料を収集 する際、F.F.ヴェショリーの古文書を利用したものが作成した文書より。 .....	83
29.	N.P.レザーノフよりイルクーツク総支部への通信。1804 年 8 月 16 日。 .....	84
30.	N.P.レザーノフから皇帝アレクサンドル一世付属秘密委員会委員、科学アカデミー総裁 N.N.ノヴォシリツェフへの書簡。1804 年 8 月 20 日。 .....	86
31.	N.P.レザーノフから N.P.ルミャンツェフ伯爵への書簡。1804 年 8 月 22 日ないしは 25 日。 .....	90
32.	N.P.レザーノフから商務大臣 N.P.ルミャンツェフへの書簡。1804 年 8 月 25 日の日本出 航以前。 .....	91
33.	露米会社総本部よりルミャンツェフ伯爵への報告書。1804 年 9 月 13 日。 .....	93
34.	F.I.シェメリンの日誌より。長崎港で日本の役人が N. P.レザーノフ使節団を出迎えたこ と。1804 年 9 月 26 日。 .....	96
35.	長崎で N.P.レザーノフが日本の役人に渡した文書。1804 年 9 月 26 日。 .....	97
36.	露米会社を代表して N.P.レザーノフが F.I.シェメリンに出した通達より。1804 年 9 月 26 日。 .....	97
37.	日本滞在中の使節 N.P.レザーノフから皇帝アレクサンドル一世に宛てた上申書。1804 年 10 月 15 日。 .....	98

38.	N.P.レザーノフがアレクサンドルー世宛に書いた手紙。1804年9月19日の嵐について。 1804年10月15日。 .....	100
39.	F.I.シェメリンの日記より。N.P.レザーノフの使節と日本人との関係について。1804年 12月。 .....	101
40.	F.I.シェメリンの日記より。N.P.レザーノフの日本側への要求とそれに対する返答。1804 年12月24日。 .....	104
41.	F.I.シェメリンの日記より。N.P.レザーノフ使節団が連れてきた日本人に対する長崎港 運上所 <sup>クモージニヤ</sup> の日本の役人について。 1804年12月27日。 .....	105
42.	F.I.シェメリンの日記より。光太夫 <sup>コウダウ</sup> の運命について。1805年1月4日。 .....	105
43.	N.P.レザーノフの長崎県知事への手紙。 .....	106
44.	遣日特命使節、侍従長である帯勲者レザーノフ氏が、両帝国間の交易を開設する際に拠 るべき原則について江戸にて日本国の公使たちと交渉することになった場合のための公 使覚書。 .....	106
45.	I.T.カラシニコフ「あるイルクーツク住民の回想」より。 .....	108
46.	シベリア総督イヴァン・オシポヴィチ・セリフオンツェフより商務大臣ニコライ・ペトロ ヴィチ・ルミャンツェフ伯爵宛の文書。イルクーツク国民学校日本語生徒の処遇につい て。1805年2月13日。 .....	109
47.	F.I.シェメリンから使節 N.P.レザーノフへの対日輸出入に関する情報収集命令遂行報告。 1805年3月10日。 .....	110
48.	皇帝の命を受けた長崎県知事から N.P.レザーノフへの通告。1805年3月25日。 ...	111
49.	日本皇帝の使者からロシア使節レザーノフへの挨拶。1805年3月27日。 .....	112
50.	商務大臣・伯爵 N.P.ルミャンツェフよりシベリア総督 I.O.セリフオンツェフ宛の返信。イ ルクーツク国民学校の日本語生徒6人について。1805年4月5日。 .....	112
51.	N.P.レザーノフの報告書で検討されている諸問題に対する露米会社本部による回答 1805年4月29日。 .....	113
52.	露米会社総本部より手代フォードル・シェメリン宛の指令。1805年4月29日。 .....	117
53-1.	シベリア総督 I.O.セリフオンツェフから商務大臣 N.P.ルミャンツェフ伯爵への通信。クリ ル列島で発見されペトロパヴロフスク港に到着した6人の日本人について。1805年5 月10日。 .....	118
53-2.	シベリア総督 I.O.セリフオンツェフから商務大臣 N.P.ルミャンツェフ伯爵への通信。 1805年8月14日。 .....	119

53-3. シベリア総督 I.B.ペステリから商務大臣 N.P.ルミャンツェフ伯爵への通信。1805 年 10 月 26 日。 .....	119
54. シベリア総督 I.O.セリフォントフより商務大臣・伯爵 N.P.ルミャンツェフ宛の通信。イルクーツク国民学校の日本語生徒について。1805 年 6 月 3 日。 .....	120
55. イルクーツク社会保護局よりシベリア総督宛の報告。1805 年 6 月 1 日。 .....	121
56. イルクーツク国民学校校長 E.クラutzよりシベリア総督 I.O.セリフォントフへの報告。同校の日本語生徒の学習について。1805 年 6 月 1 日。 .....	121
57. イルクーツク国民学校で 1805 年に日本語を学ぶ生徒の名簿。 .....	122
58. 遣日ロシア使節 N.P.レザーノフの皇帝アレクサンドル一世への報告。使節団に対する日本政権の対応について。1805 年 6 月 8 日。 .....	123
59. N.P.レザーノフによる露米会社本部宛の報告書。1805 年 6 月 8 日。 .....	143
60. N.P.レザーノフによる露米会社本部宛の報告書。1805 年 6 月 10 日。 .....	146
61. 露米会社手代フョードル・シェメリンによる露米会社本部宛の報告書。1805 年 7 月 14 日。 .....	148

### Архивные документы по истории японско-российских отношений (1795 – 1805)

2. Мнение иркутских купцов о снаряжении судна для отправки потерпевших в 1795 г. кораблекрушение 15-ти японцев на их родину и о торговле с Японией. — Конец 1796 г. ....	160
3. Донесения вдовствующей Рыльского имянитого гражданина и Американских компаний компаньона Шелехова жены Натальи Алексеевой. — 5 ноября 1796 г. ....	162
4. Мнение иногородних купцов, торгующих в Иркутске об организации экспедиции в Японию для установления торговых связей и отвозе японцев в их отечество. — Декабрь 1796 г. ....	164
5. Обращение бывшего Иркутского и Колыванского наместника, сенатора И.О. Селифонтова к генерал-прокурору А.Б. Куракину с просьбой о ходатайстве перед императором Павлом I о выделении средств на организацию экспедиции в	

Японию. — 9 февраля 1797 г. ....	166
6-1. Донесение правителя Иркутской губернии генерал-майора Л.Т. Нагеля Иркутскому генерал-губернатору И.О. Селифонтову. — 4 Марта 1797 г. ....	169
6-2. Его прев-ву Нагелю. — 29 Апреля 1797 г. ....	173
7. Докладная записка генерал-прокурора князя А.Б. Куракина Павлу I на отношение тайного советника И.О. Селифонтова. — 20 марта 1797 г. ....	173
10. Отношение Иркутского губернатора А.И. Толстого генерал-прокурору князю П.В. Лопухину об отправлении живущих в Иркутске японцев в их отечество. — 18 января 1799 г. ....	174
11. Справка иркутского губернатора А.И. Толстого о потерпевших на Алеутских островах кораблекрушение 15-ти жителей Шандайской губернии Японии. — 18 февраля 1799 г. ....	177
12. Докладная записка генерал-прокурора П.В. Лопухина императору Павлу I об отправке японцев, живущих в Иркутске, в их отечество. — 8 марта 1799 г. .....	179
13-1. Записка генерал-прокурора П.В. Лопухина президенту Коммерц-коллегии П.А. Соймонову. — 30 марта 1799 г. ....	180
13-2. Записка президента Коммерц-коллегии П.А. Соймонова генерал-прокурору П.В. Лопухину о производстве дела об отправке 15-ти японцев. — 3 апреля 1799 г. ....	181
13-3. Ответ Коммерц-коллегии на запрос от 30 марта 1799 г. генерал-прокурора П.В. Лопухина о движении дела по поводу отправки на родину 15-ти японцев. — 3 апреля 1799 г. ....	182
14-1. Записка генерал-прокурора П.Х. Обольянинова президенту Коммерц-коллегии князю Г.П. Гагарину о торговле иркутского купечества с Японией. — 10 августа 1800 г. ....	184
14-2. Записка в канцелярию Коммерц-коллегии о доставлении обстоятельных сведений о вывезенных в 1795 г. судном Шелехова с Алеутских островов японцах. — 11 Сентября 1800 г. ....	185
14-3. Записка президента Коммерц-коллегии князя Г.П. Гагарина генерал- прокурору Сената П.Х. Обольянинову о сведениях, касающихся вывезенных с	

Алеутских островов японцев в их отечество. — 12 сентября 1800 г. ....	186
15-1. Рассмотрение вопросов в Комитете Министров Российской империи. — 20 февраля 1803 г. ....	187
15-2. Рассмотрение вопросов в Комитете Министров Российской империи. — 27 марта 1803 г. ....	188
17-1. Фрагмент чернового материала инструкции Главного правления Российско-Американской компании.— 1803 г. ....	189
17-2. Фрагмент чернового материала инструкции Главного правления Российско-Американской компании И.Ф. Крузенштерну.— 1803 г. ....	192
17-3. Фрагмент чернового материала инструкции Главного правления Российско-Американской компании.— 1803 г. ....	195
18-1. Реестр на отправляемую в кругосветное плавание экспедиции И.Ф. Крузенштерна и посольство Н.П. Резанова в Японию. — 1803 г. ....	196
18-2. Реестр на отправляемую в кругосветное плавание экспедиции И.Ф. Крузенштерна и посольство Н.П. Резанова в Японию. — 1803 г. ....	198
18-3. Реестр на отправляемую в кругосветное плавание экспедиции И.Ф. Крузенштерна и посольство Н.П. Резанова в Японию. — 1803 г. ....	199
19. Письмо отца Хвостова Н.Р. Резанову. — 27 Мая 1803 г. ....	201
23. Николаю Петровичу Резанову. — 20 июля 1803 г. ....	201
28. Из записей неизвестного автора, пользовавшегося архивом Ф.Ф. Веселаго при сборе материалов к биографии адмирала И.Ф. Крузенштерна и о посольстве в Японию Н.П. Резанова. ....	202
29. Сообщение Н.П. Резанова в Иркутскую главную контору Российско-Американской компании. — 16 августа 1804 г. ....	204
30. Письмо Н.П. Резанова президенту Российской Академии наук Н.Н. Новосильцеву, члену Негласного комитета при императоре Александре I. — 20 августа 1804 г. ....	206
31. Письмо Н.П. Резанова графу Н.П. Румянцеву. — 22 или 25 августа 1804 г. ...	210
32. Письмо Н.П. Резанова министру коммерции Н.П. Румянцеву. — До отплытия 25 августа 1804 г. в Японию. ....	211
33. Донесение Главного Правления Российско-Американской компании графу	

Румянцеву. — 13 Сентября 1804 г. ....	213
34. Фрагмент записи Ф.И. Шемелина о встрече посольства Н.П. Резанова японскими чиновниками в порту Нагасаки. — 26 Сентября 1804 г. ....	216
36. Из инструкции Н.П. Резанова Ф.И.Шемелину от имени Российско-Американской компании. — 26 Сентября 1804 г. ....	218
37. Донесение посла Н.П. Резанова императору Александру I из Японии. — 15 Октября 1804 г. ....	219
39. Фрагмент записи Ф.И. Шемелина в судовом журнале корабля «Надежда» о встрече посольства Н.П. Резанова в японском порту Нагасаки. — Декабрь 1804 г. ....	220
40. Запись Ф.И. Шемелина о вопросах Н.П. Резанова к японской стороне и полученных ответах. — 24 декабря 1804 г. ....	225
41. Фрагмент записи Ф.И. Шемелина о таможенных действиях японских чиновников в порту Нагасаки в отношении японцев, привезенных посольством Н.П. Резанова. — 27 декабря 1804 г. ....	225
42. Фрагмент записи Ф.И. Шемелина о судьбе Кодая, вернувшегося из России. — 4 января 1805 г. ....	226
44. Министерская нота посланника Н.П. Резанова при готовленная на тот случай, если бы случилось оному в Иэдо с японскими министрами трактовать о основании на коем должна быть поставлена между обеих империй торговля. ....	227
45. Калашников И.Т. Записки иркутского жителя (фрагмент рукописи). ....	229
46. Обращение Сибирского генерал-губернатора И.О. Селифонтова к министру коммерции графу Н.П. Румянцеву с вопросом об устройстве учеников Иркутского главного народного училища, обучающихся японскому языку. — 13 февраля 1805 г. ....	230
47. Из донесения Ф.И. Шемелина посланнику Н.П. Резанову о выполнении инструкции о сборе сведений о товарах экспорта и импорта Японии. — 10 марта 1805 г. ....	232
48. Объявление посланнику Н.П. Резанову Нангасакского губернатора по повелению Его Императорского Величества. — Ненго Бунива, второго лета в 7	

день Сангватса. ....	233
49. Приветствие Императорского японского посланника к российскому послу. —Ненго Бунива, второго лета в 9 день Сангватса. ....	234
50. Отношение министра коммерции графа Н.П. Румянцева Сибирскому генерал-губернатору И.О. Селифонтову о шести учениках Иркутского народного училища, обучавшихся японскому языку. — 5 апреля 1805 г. ....	234
51. Выдержка из ответов Главного Правления Российско-Американской компании на вопросы, рассматриваемые в сообщениях Н.П. Резанова. — 29 апреля 1805 г. .....	235
52. Приказание Главного Правления Российско-Американской компании приказчику компании Федору Шемелину. — 29 апреля 1805 г. ....	239
53-1. Сообщение Сибирского генерал-губернатора И. О. Селифонтова графу Н.П. Румянцеву о прибывших в Петропавловскую гавань шести японцах, найденных на Курильских островах. — 10 мая 1805 г. ....	240
53-2. Сообщение Сибирского генерал-губернатора И.О. Селифонтова графу Н.П. Румянцеву. —14 августа 1805 г. ....	242
53-3. Сообщение Сибирского генерал-губернатора И.Б. Пестеля графу Н.П. Румянцеву. — 10 октября 1805 г. ....	242
54. Сообщение Сибирского генерал-губернатора И.О. Селифонтова к министру коммерции Н.П. Румянцеву об учениках, обучающихся в Иркутском народном училище японскому языку. — 3 июня 1805 г. ....	243
55. Донесения к Сибирскому генерал-губернатору Иркутского Приказа общественного призрения. — 1 июня 1805 г. ....	244
56. Рапорт директора Иркутских народных училищ Е. Кранца Сибирскому генерал-губернатору И.О. Селифонтову об обучении японскому языку учеников Иркутского народного училища. — 1 июня 1805 г. ....	245
57. Список ученикам, обучающимся японскому языку в Иркутском Главном народном училище за 1805 год. ....	246
58. Донесение российского посланника в Японию Н.П. Резанова Императору Александру I об отношении японских властей к посольству. М8 июня 1805 г. ....	247

59. Донесение Н.П. Резанова в Главное Правление Российско-Американской компании. — 8 июня 1805 г. ....	268
60. Донесение Н.П. Резанова в Главное Правление Российско-Американской компании. — 10 июня 1805 г. ....	272
61. Донесение приказчика Российско-Американской компании Федора Шемелина в Главное Правлении компании. — 14 июня 1805 г. ....	273

監修者、編訳者、訳者一覧

## 日露関係史料集第4集の刊行にあたって

平 川 新

2000年に共同研究として「前近代における日露交流資料の研究」を立ち上げた私たちのグループは、これまでに本書を含めて4冊の翻訳史料集を刊行してきた。第3集までは、ロシアで出版されている史料集から日本に関係のある史料を選別し、それを翻訳して収録した。この第4集でも、ロシア語史料集から採録した史料が数点ある。だが大半は、ロシアの史料保存機関から独自に収集した史料をもとに編集した。これが本書の大きな特徴になっている。

ロシアでの史料収集にあたっては、ロシア科学アカデミー・東洋学研究所のアレクセイ・キリチェンコさん、同アカデミー・シベリア支部歴史研究所の(故)ウラジミール・ポズナンスキーさんとマリア・マルィシェヴァさんに多大なご協力をいただいた。コピーや写真撮影が許可されないことも多いため、時間をかけて筆写していただくというご苦勞をおかけすることになった。だがこうした献身的なご協力のおかげで、良質のロシア史料を入手できたことに深甚の謝意を表したい。残念なことは、2005年にポズナンスキーさんが亡くなられたことであった。

史料館で筆写した史料はその後パソコンで入力されて、私たちのもとに送られてきた。本書のもうひとつの特徴は、こうして送信されてきたロシア語の原文も収録したことである。今回収録した史料の多くはロシアでも活字化されていない文書であるため、そう簡単に原文で確認することはできない。翻訳文に頼るのではなく原文で確認したい方のために、翻訳のもとになった入力版と一緒に公開することで、ロシア語に通じた利用者の便をはかろうとしたものである。ただし、原文書からの筆写やパソコン入力などの作業のなかで、ロシア語のスペルの間違いや脱落が発生している可能性はある。その点は事情ご賢察のうえ、ご海容を請いたい。

＊

＊

本書に収録したのは、1795年から1805年までの16年間の史料66点である。第2回遣日使節レザーノフの派遣と、日本人漂流民の送還をめぐる史料を中心に編集した。1800年から1815年までを収録した第1集と時期は重なるが、本書で新たな史料が追加されたことにより、この時期のロシアの動向をさらに詳しく検討することが可能になるだろう。

仙台領石巻の若宮丸がアリューシャン列島の小島に漂着したのは、ロシア暦の 1794 年 5 月 27 日(西暦では同年 6 月 7 日、日本暦では寛政 6 年 5 月 10 日)のことであった。先住民のアリュートに救助された乗組員は、同島に毛皮狩猟に来ていたロシア人のもとに連れていかれ保護された。翌 1795 年、漂流民たちは狩猟会社ゴリコフ・シェレホフ会社の船に乗せられてアリューシャンを離れ、オホーツクに向かった。シベリアの中心都市イルクーツクには、同年から翌年にかけて 3 班に分かれて移送されている。

ロシア政府はカムチャツカ半島やアリューシャン列島、クリル列島で活動する狩猟者に対して、日本人漂流民に遭遇したなら保護するように指令していた。北太平洋海域に進出してきたロシア帝国にとって、日本は毛皮市場として、また極寒の地シベリアへの食料供給基地として、どうしても通商関係を結びたい国家だった。ロシア政府は保護した漂流民を送還することで、鎖国日本と国交を開く交渉のきっかけにしたいと考えていたのであった。そうした流れをつかむことができる史料群である。

以下に、収録史料から興味深い点をいくつか紹介しておきたい。

史料 1 はイルクーツクの有力商人シェレホフ夫人が書いた 1795 年の書翰だが、ここにはアメリカ大陸の北西海岸でロシアとイギリスが熾烈な領土争いをしていたことが記されている。ロシア商人たちが進出したアラスカにイギリスの遠征隊がやってきて、ここはジェームズ・クックが発見した土地だと主張したとか、2 年後にはイギリスの軍艦が到来するかもしれないなど、領土獲得をめぐる生々しい状況が見てとれる。ロシア帝国の先兵として毛皮商人たちが、いかにしてアメリカ先住民を支配下においていったのか、その具体的過程の一部が史料 8 に記されている。若宮丸漂流民がアリューシャン列島で救助されたのは、北太平洋におけるロシア毛皮商人のこうした広域的な活動があったからでもある。

日本人漂流民 15 人がイルクーツクに到着するとすぐに、同地の商人たちから漂流民を日本に送還したいという声があがった。送還をきっかけとした日本との交易交渉に期待したのである。史料 2～13 は送還方法をめぐるシベリア商人やロシア政府の動きを示したものだが、商人たちは国有船の提供を強く求めている。商業参議会からロシア皇帝への報告書である史料 9 は、露米会社(ロシア・アメリカ会社)設立の経緯を明らかにしているが、シベリア資本を糾合した同社の設立に、日本人漂流民の送還と日本との通商問題が多少なりともかかわっていることが見てとれる。

漂流民の日本送還が決まると、ロシアの対アジア外交は、北京や広東との交易をも同時に推

進する動きをみせはじめた。史料 15・16 などがそれである。なお、商務大臣から皇帝に宛てた 1803 年の報告(史料 16)で注目しておきたいのは、これより前の 1793 年に、第 1 回遣日使節のラクスマンが長崎への入港許可証を得たことについて、「この幸運な成功」と書いていることである。ロシア側からすれば、長崎入港許可証は貿易許可証に等しいものとして受けとめられていたのであった。史料 30～32 など、日本に到着する前のレザーノフの書翰が楽観的に書かれているのは、そのためであろう。史料 32 には日本との通商の開始を見込んで、カムチャツカに商館を設置するための準備も指示したとある。だがこの使節が長崎に入港した途端、期待は大きく裏切られることになる。

史料 30 は、南アメリカ大陸の南端ホーン岬から太平洋を縦断してカムチャツカに入港し、長崎へと南下する前にレザーノフが科学アカデミー総裁に宛てた書翰である。ここには、ながい航海のあいだに、レザーノフが通訳として伴ったキセリョフから日本語を教わり、それを日本語辞書および日本語の手引書として取りまとめたことが記されている。キセリョフとは若宮丸漂流民の一人である善六のことだが、イルクーツクに入るとすぐにロシア正教の洗礼をうけて帰化していた。これらの書物は現在、ロシア科学アカデミー東洋学研究所ペテルブルグ支部に保管されており、その訳書も『露日辞書・露日会話帳』(田中継根編訳、東北大学東北アジア研究センター叢書第 2 号、2001 年)として刊行されている。江戸時代の日本語や石巻の方言なども研究できる史料集である。

通訳のキセリョフこと善六は、しかし長崎には行かず、レザーノフの命によりカムチャツカで下船した。受洗した善六を長崎に連れていくことで、キリスト教を禁止した日本の役人を刺激することを怖れたからだ。もう一つ、母国に戻る 4 人の日本人とのあいだにトラブルがあったためでもあった。ロシアに帰化した善六はイルクーツクの日本語学校教師を勤め、参議会記録官十四等文官という官位を与えられ、金時計を下賜される厚遇を得ていた。ロシア人として生きていくことを選択した善六に対する帰国組の微妙な感情が、ながい航海のあいだにもつれ合い、ついには憎悪から嫌悪に変わったという。

史料 34 以下には、レザーノフに同行した露米会社の社員シェメリンの航海日誌から、断片的だが日本滞在中のいくつか記録を収録している。使節レザーノフの『日本滞在日記』(大島幹雄訳、岩波文庫、2000 年)、およびレザーノフに随従した海軍少尉レーヴェンシテルンの日記(生田美智子『外交儀礼から見た幕末日露文化交流史』所収、ミネルヴァ書房、2008 年)などと読み合わせれば、ロシア側からみた日本の外交のあり方を複眼的にとらえることができるだろう。

また通商交渉の経緯と結果についても、史料 58～60 に収録したレザーノフの皇帝や露米会社に宛てた報告書と、史料 61 にあげたシェメリンの露米会社宛の報告書を読み比べると、とらえ方の違いが確認できておもしろい。

シェメリンの航海日誌の一つ(史料 42)に、1993 年にロシアから帰国した伊勢の大黒屋光太夫に関する記事がある。長崎の役人曰く、光太夫は故郷に戻ることも許されず、知人や身内との接触も禁じられ、12 年間も江戸に幽閉されている、と。この話を聞いた漂流民の太十郎が絶望のあまり自殺をはかったことは、先のレザーノフ『日本滞在日記』に詳しく記されている。史料 43 は、この自殺未遂事件に驚いたレザーノフが、それまで拒んでいた漂流民の引き渡しを慌てて長崎奉行に申し出た文書である。だが今度は逆に日本側が、江戸からの指令が来ないことを理由に引き取りを延期した。外交の駆け引きに翻弄される漂流民の切ない姿が目につくようだ。

大黒屋光太夫幽閉の情報は、彼が江戸の番町(東京都千代田区)にある薬園内に住居を与えられたことが誤って伝えられたのだろう。しばしば幕府はロシア情報の漏洩を防ぐために光太夫らを幽閉したと理解されているが、光太夫と磯吉は蘭学者と自由に交際し、江戸市中のあちこちに出向いてロシア語やロシアからの持参物を披露している。幽閉どころか幕府は、兩人に金 30 両の報奨金のほか、養い金として光太夫には毎月 3 両、磯吉には 2 両を与えていた。こうした破格の待遇を与えたのは、むしろ貴重な情報をもつ兩人を幕府の膝下においておくためであったと理解したほうがよいだろう。

史料 45、46、50、54～57 には、イルクーツクに開設された日本語学校に関連する文書を収録した。ロシア政府が設置した日本語学校の教師として名前がわかるもっとも古い人物は、1696 年、カムチャツカに漂着し、1705 年にペテルブルグで日本語教師に取り立てられた大坂商船の乗組員デンベイ(伝兵衛か)である。その後、これまでの研究では、ロシアに帰化した 15 人の漂流日本人がペテルブルグやイルクーツクで日本語教師になったことが判明している。

本書収録史料からは、彼らがどのような待遇をうけたのか、どのような生徒がいたのかなど、断片的ではあるが、その様子をうかがうことができる。史料 46 によれば、1791 年にイルクーツクの国民学校に日本語教室が開設されている。これに関連して本書の巻末には、1805 年に新築されたイルクーツクのギムナジウム(中等学校)の図録を掲げておいた。地元の伝承によれば、このギムナジウムの一室に日本語学校がおかれたという。新築なったこの校舎に、市中から移転してきたのだと思われる。日本語通訳であり日本語教師でもあったキセリョフこと若宮丸の善六は、ここで教鞭をとっていたのであろう。このギムナジウムはその後増築され、現在もな

お専門学校として利用されている。

＊

＊

この第4集も、多くの方々のご助力によって刊行することができた。第1集以来、献身的に支えてくださっている東北アジア研究センターの寺山恭輔准教授には心より感謝したい。寺山氏がおられるからこそ、この事業が継続できている。また本書の翻訳をはじめ編集実務全般にわたっては、小野寺歌子氏と畠山禎氏に助けていただいた。18～19世紀の難解なロシア語の翻訳に取り組んでくださったのは、巻末にあげた7人の方々である。

英語とは異なってロシア語の壁は相当に高い。それだけに、ロシア語史料が翻訳されて日本の社会や学界に提供されることの意義は相当に大きいのではないかと思う。だがそれも、こうした地道な作業に携わってくださる方々がいればこそである。あらためて皆さんに、篤く御礼を申し上げたい。

## 出典一覧

(番号は各文書末尾の出典に対応)

### 史料館\*

- (1) (旧)ロシア外交史料館  
АВПР (Архив внешней политики России)  
(現)ロシア帝国外交史料館  
АВПРИ (Архив внешней политики Российской империи)
- (2) (旧)ソ連科学アカデミー・歴史学研究所レニングラード支部史料室  
Архив ЛОИИ АН СССР (Архив Ленинградского отделения Института истории Академии наук СССР)  
(現)ロシア科学アカデミー・サンクトペテルブルグ歴史学研究所史料室  
Архив СПБИИ РАН (Архив Санкт-Петербургского института истории Российской Академии наук)
- (3) ロシア地理学協会史料室  
Архив РГО РАН (Архив Русского географического общества)
- (4) ロシア国民図書館手稿部  
ОР РНБ (Отдел рукописей Российской национальной библиотеки)
- (5) (旧)国立中央海軍史料館  
ЦГАВМФ (Центральный государственный архив военно-морского флота)  
(現)ロシア国立海軍史料館  
РГАВМФ (Российский государственный архив военно-морского флота)
- (6) (旧)ソ連国立中央歴史史料館  
ЦГИА (Центральный государственный исторический архив СССР)  
(現)ロシア国立歴史史料館  
РГИА (Российский государственный исторический архив)

### 刊行された文献

- (7) 『ロシアの往時』  
«Русская старина»
- (8) P. ティフメネフ編『露米会社の形成と現在までの活動の史的概観』  
Тихменев П. (Сост.) Историческое обозрение образования Российско-американской компании и действий ее до настоящего времени. СПб., 1861-1863. Ч. 1-2.
- (;) G.H.フォン・ラングズドルフ『ロシア皇帝宮廷顧問官、聖アンナ二等勲章帯勲者、アカデミーおよび学術団体の会員 G.H.フォン・ラングズドルフによる、18<3～18<7 年の世界一周旅行

---

\* ロシア語の「アルヒーフ」の訳。史料館以外に、資料館、文書館などの訳も可能。

記』

von Langsdorff 9 G.H. 9 Bemerkungen auf einer Reise um die Welt in den Jahren 1803 bis 1807 von G.H. von Langsdorff, Kaiserlich Russischen Hofrat, Ritter des St. Annen Ordens zweiter Klasse, Mitglied mehrerer Akademien und gelehrten Gesellschaften. Fr. M. 91812.

## 訳 語 表

### 官庁など

Адмиралтейский департамент	海軍省
Адмиралтейская коллегия	海軍参議会
воеводская канцелярия	地方長官所
губернская канцелярия	県庁
земский суд	地方裁判所
кабинет е.и.в.	帝室官房
Охотская канцелярия	オホーツク政庁
Коллегия иностранных дел	外務参議会
Коммерц-коллегия	商業参議会
Правительствующий Сенат	元老院
приказная изба	役所
приказная палата	ブリカース[官庁]所
провинциальная канцелярия	地区政庁
Сибирский приказ	シベリア庁

### 官位・役職など

адмирал	海軍大将
боцман	掌帆長
боцманмат	掌帆兵曹
бригадир	陸軍准将 (1722～1799 年)
вице-адмирал	海軍中将
воевод	地方長官
военный губернатор генерал	軍務知事
войсковой старшина	コサック軍中佐 (コサック軍のみ)
генерал адмирал	海軍元帥 (1708 年～)
генерал-губернатор	総督
генерал-интендант	主計長
генерал-лейтенант	陸軍中将 (18 世紀末～)

генерал-майор	陸軍少将
генерал от артиллерии	砲兵大将 (1796 年～)
генерал от инфантерии	歩兵大将 (1796 年～)
генерал от кавалерии	騎兵大将 (1796 年～)
генерал-поручик	陸軍中將 (1730 年代～18 世紀末)
генерал-прокурор	元老院総裁
генерал-фельдмаршал	陸軍元帥 (1699 年～)
главный командир	総司令官
главный правитель	総支配人
губернатор	県知事
есаул	コサック大尉 (～1884 年)
инженер-генерал	工兵大将 (1796 年～)
кабинет секретарь	帝室官房長官
капитан	歩兵大尉 (～1884 年)、海軍佐官、艦長、船長
капитан 1-го ранга	海軍大佐
капитан 2-го ранга	海軍中佐
капитан 3-го ранга	海軍少佐
капитан-командор	海軍准将 (1722～1799 年)
капитан-лейтенант	海軍大尉 (1698～1884 年)
капитан-поручик	歩兵中尉 (1705～1798 年)
квартирмейстер	補給兵曹
команда	乗組員、部隊、小隊など
командир	指揮官、司令官、艦長など
комендант	警備司令官
комиссар	監察官
контр-адмирал	海軍少将
корнет	(騎兵・国境警備) 少尉補 (～1884 年)
лейб-гвардия	親衛隊
лейтенант	海軍中尉 (～1885 年)
майор	陸軍少佐 (1698～1884 年)
мастер	親方など
матрос	水兵

министр коммерции	商務大臣
министр морских сил	海軍大臣
мичман	海軍少尉（～1885 年）
начальник порта	港長官
обер-офицер	尉官
передовщик	先導者
подполковник	陸軍中佐
подпоручик	陸軍第二少尉
подъесаул	コサック中尉（～1884 年）
полковник	陸軍大佐
поручик	陸軍少尉（～1884 年）
правитель	支配人
прапорщик	陸軍少尉補（～1884 年）
президент Коммерц-коллегии	商業参議会議長
премьер-майор	陸軍中佐
приказный человек	官吏
прикащик; приказчик	ブリカース員、手代など
промышленник	毛皮採集者
работные люди	役夫
ротмистер	騎兵大尉（～1884 年）
служилые люди	下級勤務員
сотник	コサック少尉（～1884 年）
ундер(унтер)-офицер	下士官
управитель	管理者
флагман	艦隊司令官
хорунжий	コサック軍少尉補（～1884 年）
шкипер	掌帆長
штабс-капитан	歩兵中尉（1798～1884 年）
штабс-ротмистр	騎兵中尉（～1884 年）
штурман	航海士

**文書など**

атлас	地図帳
вахтенный журнал; журнал плавания;	
шканечный журнал	航海日誌、当直日誌
ведение	通達、報告
выписка	抜粋
докладная записка	報告書
доношение	報告
журнал заседаний	會議録
журнал путешествия; путевой журнал	旅行日誌
записка	文書、報告
известие	通知
извлечение	抜粋
инструкция	通達、指示
итоговая карта	総括地図
конвенция	条約、協定
(Морской) регламент	(海軍)規定
Морской устав	海軍操典
наказная память; ордер	命令書
наставление	指示
определение	決議
перевод	転写、翻訳
показание	証言、供述
предложение	提議
предписание	指令
представление	報告書、上申書、請願書
приложение	添付文書
проект	構想、草案
пропозиция	動議
реляция	戦況報告、功績調書、報告
рапорт	上申書、報告
расспросные речи	談話記録

регест	要旨
рескрипт	詔書、勅書
сказка	陳述書
сообщение	手紙、報告
указ	勅令（皇帝の場合）、命令書
экстракт	要約、要約報告

## 船

бот	小船艇
бриг	ブリッグ型帆船
бригантина	二檣帆船
буер	輕帆船
буса	(東洋の)大型木造船
галера	ガレー船
галиот	平底帆船
дубель-шлюпка	ダブル・スループ船
коч	コーチ船
лодья(ладья)	ロジャー(ラジャー)船
пакетбот	パケットボート
тендер	单檣帆船
фрегат	フリゲート船
шитик	シチク船
шлюп	スループ船
шлюпка	搭載艇
шхербот	平底小船艇
ялбот	船載ボート

## その他

иноземец	異郷人
инородец	異族人

острог

要塞

посольство

使節団

поход; экспедиция

遠征、航海

промысел

毛皮事業、毛皮採集

## 用語解説

### 度量衡

アルシン	約 71 センチメートル
アンカー	約 34.35 リットル
インチ	約 2.54 センチメートル
ヴェドロ	約 12.3 リットル
ヴェルシヨーク	約 4.45 センチメートル
オシミナ	約 105 リットル
クルシカ	約 1.23 リットル
サージェン	約 2.134 メートル
シトーフ	10 分の 1 ヴェドロ(約 1.23 リットル)
ゾロトニク	約 4.25 グラム
チャルカ	約 0.123 リットル
チェトヴェルチ	4 分の 1 アルシン(約 18 センチメートル)
ノット	船の速度単位。毎時 1.87 キロメートル
フィート	約 30.48 センチメートル
プード	約 16.38 キログラム
フント	約 409.5 グラム
露里(ヴェルスタ)	約 1.067 キロメートル

### 地名

アレウト列島	アリューシャン列島
ヴォストーチヌイ洋、ヴォストーチ	太平洋
ノエ海(それぞれ東洋、東海の意)	
カディヤク島	コディアック島
クリル列島	千島列島

### その他

アルテリ	ある種の筋肉労働者などによって組織される、労働、消費、利益分配のための協同組合をさす。ただし、本史料
------	--

	集においては、毛皮採集者の作業班の意で用いられている。
下級勤務員	おもに兵士をさす。
掌院(アルヒマンドリート)	ギリシャ正教における黒僧(修道僧、禁妻帯)の階位の一つ。修道院長などの要職につくことが多い。
毛深いクリル人、毛深人	クリル列島民のうちカムチャツカ半島から遠方にある島々に居住する者。ロシア皇帝に臣従しておらず、したがってヤサク税(後述)を納めていない。
トヨン、クニャゼツ、アタマン	順に、選出された族長、シベリア異族人の族長、首領、の意。
バイダーラ、バイダルカ	海獣の皮で作られた小舟。バイダルカはバイダーラよりも小型のものをさす。
役夫	労力を要する単純作業に従事する者や毛皮採集に従事する猟師などをさす。
ヤサク税	帝政期において、狩猟を営む非ロシア系民族に科せられていた現物税。クロテン、狐、ビーバーなどの毛皮類で納められた。

## 凡 例

1. 本史料集では、おもにロシア各地の史料館に所蔵されている未刊行史料、帝政時代の刊行物で紹介された史料の日本語訳を収録した。このうち前者については、ロシア語テキストも掲載した。
2. これらに加えて、N.N.バシュキナほか編『ロシアとアメリカ合衆国——関係の形成(1765–1815)』Бапкина Н. Н. и др.(Сост.) Россия и США: становление отношений (1765–1815). М., 1980 からも関連史料を若干、追加した。この史料集を出典とする場合、史料題名のあとに⑩と表記し、そのあとにこの史料集における整理番号も付した。なお本史料集シリーズ第1～3集の出典となったロシア語史料集①～⑩の書名等については、第1～3集の凡例を参照されたい。
3. 所収史料の出典に付された丸カッコの番号は、「出典一覧」に対応している。
4. 既刊史料集第1～3集およびそれらの出典となったロシア語史料集などを参考に、内容を損なわないよう配慮したうえで、日本語訳、ロシア語テキストの体裁を統一した。
5. 史料の一部が省略されている場合、省略部分は(略)と示されている。この部分はロシア語原文の ... と対応している。なお、省略および史料の部分的引用は、基本的にロシア語史料筆写者により行われたものである。
6. 本書の監修者、編訳者、訳者の側で補足した部分は、脚注ではそれぞれ【監修者補注：】、【編訳者補注：】、【訳者補注：】として記し、文中では〔 〕内に入れた。
7. ロシア語テキストの場合、史料筆写者によって付された注は脚注ではそのまま記し、文中では〔 〕内に入れた。
8. 語彙、文意が不明な箇所にかんしては、やむを得ずロシア語をラテンアルファベット表記したものを残し、下線を引いた。
9. 目上の者に宛てた文書は、必ず敬体(ですます調)で訳すこととした。
10. 地名や人名について、原典の同一文書内でも表記のゆれが見られる。その表記が一般的な表記と異なる場合、〔 〕内に一般的な表記を補足した。
11. 本史料集では、とくに断りがながざり旧暦(ユリウス暦)が用いられている。新暦(グレゴリオ暦)に直すためには、18世紀においては11日、19世紀においては12日を加える必要がある。

## 1. シェリホヴァ夫人から侍従武官長、砲兵監長、タヴリダ総督であるズーボフ伯爵<sup>1</sup>への書簡

1795 年 11 月 22 日

慈悲深き伯爵閣下

閣下のご支援を賜り、わが夫、リュリスク名誉市民シェリホフにより創設された北東米会社は、夫の死の直後、遺産として私と子どもたちがその経営を引き継ぎました<sup>2</sup>。閣下のご慈悲に対し長い間、心から感謝し、閣下が祖国の利益に対して比類なき愛を抱いていることも存じ上げておりますので、私は会社により課せられた責務により、本年 8 月 6 日、アメリカよりオホーツクに到着した、アメリカ・ロシア会社のフリゲート船フェニックス号にて私が受信した通知を、この恭順なる報告をもって閣下にお届けいたします。通知の内容は以下のとおりです。

亡きわが夫は、さる 1793 年に閣下のお力添えで前述の会社が賜った耕作者と職人を、1794 年 8 月 13 日、当地[イルクーツク]の総司令官から与えられた指令書とともに、自らの手で 2 隻の船にてオホーツクより送り出しました<sup>3</sup>。同年 9 月 24 日、彼らは派遣された聖職者団とともにアメリカの島カディヤクに到着し、同島のパーヴェル港で越冬しました。現在、この地の要塞建造物の中に会社の総本部と支部が入っております。私の夫からかの地の会社支配人[バラノフ]に対し、その年の秋、前述の耕作者と職人を、入植を目的に大陸のチュガッチ湾かケナイ湾[クック湾]に送り届けるよう指令が出されておりましたが、時期が遅すぎたため、また暴風雨により船が損傷したために実行できませんでした。しかしながら、本年春には彼らはかの地に送られたので、入植に適した土地を探し出すでしょう。このような土地を探し出すために、必要であるならば北緯 58 度付近にあるルトゥア湾まで到達する予定であり、この事業の成果にかんする情報は来年、受信できるはずです。一方、カディヤク島で越冬中、聖職者団を率いているイオアサフ掌院は大陸と島々から彼のもとに集まってきた多くのアメリカ人[現地住民]に洗礼を施し、婚儀を執り行い、その後、当地の主教座下ならびにサンクトペテルブルグとノブゴロドの府主教ガヴリル座下に、自分自身の報告を、私を介して送り届けました<sup>4</sup>。しかしながら、前述の港にて起工したこの地方の木造寺院は、船がそこから出航したのでまだ完成しておりません。大陸沿岸の入植地にも同様の寺院が一堂、建立される予定です。両聖堂には聖障と教会用具一式が、掌院が皇帝陛下から賜ったもの以外に、亡きわが夫により十分に提供されました。前述のロシア人耕作者のうち 7 名がア

<sup>1</sup> [編訳者補注：P.A.ズーボフ——1789 年よりエカチェリーナ二世(在位 1762～96 年)の寵臣。黒海艦隊司令官(1796 年)。1796 年、「至高なる公爵」の称号を得る。歩兵大将(1800 年)。1801 年の皇帝パーヴェル一世(在位 1796～1801 年)暗殺に加わった]

<sup>2</sup> [編訳者補注：シェリホフがゴリコフと共同で創設した北東米会社の活動については、史料 No.8 を参照]

<sup>3</sup> [編訳者補注：平川新監修、寺山恭輔、畠山禎、小野寺歌子、藤原潤子編『ロシア史料にみる 18～19 世紀の日露関係』第 2 集、東北アジア研究センター叢書第 26 号、東北大学東北アジア研究センター、2007 年(以下、史料集第 2 集と表記する)No.46 を参照]

<sup>4</sup> [編訳者補注：聖職者団の活動については、史料 No.8 の第 9 項および脚注を参照]

メリカ人の女性と結婚しました。ただ、会社支配人はこの耕作者たちに不満を持っています。彼らは厚かましく、将来、彼らの入植で不可欠となる必需品を用意する仕事を厭い、自分たちのためにさまざまな食料の準備に励み、分不相応にも食糧やその他の多くの物品を十分に与えるよう要求しました。これらのものはすべて、亡きわが夫がオホーツクにて彼らにあり余るほど与え、くわえて、彼らの入用の検討と供給を担当する特別な手代が彼らに十分かつ誠実に支給しております。とうとう彼らは、命を奪うと言ってこの手代を脅迫し、さらに彼らに野獣からの護身用の銃が渡されて船で大陸沿岸へと向かっているときに、この船を乗っ取り、クリル列島に行き、彼らのうち一人を航海者に選ぶという陰謀を企てました。彼らのもとからはすでに3丁の銃と弾薬が発見されました。しかし、会社支配人はこのたくらみを見抜き、当地の総司令官から与えられた指令書の中で示されている指示にもとづき、首謀者である3名のならず者を鞭打ちの刑に処し、べつべつのアルテリ[毛皮採集隊]へ送り、彼らの陰謀を無力にしました。

1793年の新聞紙上で予告されたイギリスの遠征隊は、1794年、私どもの会社の毛皮採集隊が作業を行っていたチュガッチ湾、ケナイ湾、ヤクタット湾にやって来ました。この遠征隊は2隻のフリゲート船、すなわち三檣帆船ディスカヴァリー号と二檣帆船チャタム号からなり、前者をヴァンクーヴァー船長<sup>5</sup>が、後者をプロジェクト船長が指揮していました。彼らはこの地で出会ったあらゆるものを観測し、これらの湾の小さな入り江や港の一番奥でさえも水深を測りました。これらにくわえ、ヤクタット湾には3隻目の商船が到来しました。彼らはわが社の毛皮採集者ブルトフとその仲間たちと会い、ロシア人はこの地をもう長いこと占拠しているのかと質問し、この地およびルトゥア湾の先も1741年からロシアに属している<sup>6</sup>との答えを得ると、それに対して、これらの地の最初の発見は有名な誉れ高き航海者である彼らのクック船長によってなされたのだと反論してきました。しかしながら、事は友好的に決着がつき、彼らはわが社の者たちによって歓待されました。彼らは会社支配人と面会し、境界と関連して、彼ら[の領地]と隣接するノトカ[ヌートカ]のアメリカ海岸をどこまで領有するのか交渉しようとしてしました。しかし、彼が別の場所に外出していたので、彼の帰りを待てませんでした。遠征隊員でロシア語単語を少し知っている者が、われわれは2年後にキナイ入江[クック湾]に5隻ないしは6隻のイギリスの軍艦が占拠目的に到来するのを覚悟せねばならず、2年後に到来しない場合、この地はわれわれの手元に永遠に残るだろうというようなことを伝えてきました。このような情報、またかの地では翻訳できる

<sup>5</sup> 【編訳者補注：ヴァンクーヴァーVancouver(1757～98年)——イギリスの航海者。クックの第二、三回世界一周航海の参加者。北アメリカを調査した(1790～95年)。アラスカにて、ロシアの毛皮事業者や航海者らと交流した】

<sup>6</sup> 【編訳者補注：この地がチリコフにより最初に発見され、そこに航海士デメンティエフらが留まったとされることが、ロシア領有権の根拠となっている(巻末地図を参照)】

者はおりませんでしたが、彼らからロシア人毛皮採集者たちに手渡された3通の書簡は、その後、以上すべてにかんする会社支配人の詳細な報告とともにオホーツク地方の警備司令官に送られました。さらに、会社支配人は当地 ナメストニチュストヴォ 総督管区の支配人様に宛てた報告の中で、大陸沿岸においてルトゥア湾を越えて、かつてロシア遠征隊のチリコフ佐官がアメリカに最初に到達し、その海岸で部下17名を見失った場所まで事業を拡大してよいのか決定するよう請願しました。もっとも支配人は、この湾を越え、かの地で観測を行い、政府から会社に委ねられた秘密の板を地中に埋めることを断念したくはありませんでした。

外洋船舶の建造を試みるようにとの、わが夫から支配人バラノフへの指示に従い、1793年、バラノフ支配人はチュガッチの地のヴォスクレセンスカヤ[復活]という名の港で、英語で spruts[トウヒ spruce]という名の現地の材木を使って3本マスト、二重甲板、全長73フィート、幅23フィート、甲板部分の全高79フィート、下部の外板から上甲板までの深さ13.5フィートのフリゲート船の建造を始めました。会社が保有する鉄と樹脂が大いに不足している状況下、彼は松脂や樹脂のかわりにトウヒの樹脂、硫黄の黄土そして鯨脂からなる耐久性のある混合物を考案し、それをコーキングに用い、1794年9月に船を完成させました。そして、このフリゲート船に乗ってカディヤクに向かい、そこからこの船で先述の情報をオホーツクに送り、また私に3年間分の毛皮猟の成果を届けたのです。この船以外にも、彼はアメリカ沿岸の観測に都合の良いように、また総本部への往復用に2隻の小型船を建造しました。これら2隻の船とフリゲート船が建造されたヴォスクレセンスカヤ港を示す平面図と断面図を、本状に添えて謹んで進呈いたします。

かくて、賜りました職人たちが到着する前に、船を建造する基盤が形成されました。建造された船は、亡き夫の希望と労力を無に帰すことなく報いるでしょう。彼[支配人]は鉄鉱石についても書いており、それはカディヤク島とキナイ入江に大量にあるそうで、すでに彼自身が精錬して小さな鉄の棒を試作し、それを私に送ってきました。ただ、この金属を手動のふいごを使ってさらに加工する技術を持った者がおらず、そのような人材を派遣して欲しいとのことで、もちろん私はそうするよう努めるつもりです。ところで、わが社の支配人はアメリカ大陸の多数の原住民について調査を行い、1793年と1794年にすでに一覧を作成し、人質を取りましたが、以前に行ったこの調査ののち、さらに少なからぬ数のアガラフムト族、カリュグ族、アリャクシン族ら遠方に住む諸部族がロシア人と非常に友好的な交流をするようにさせ、彼らすべての一覧を作成し、人質を取りました。これらにくわえ、カディヤク島から今日まで知られていない島影が認められました。発見したいという願望が強かったにもかかわらず、はっきりとは確認されておりませんでしたので、1793年と1794年に会社の船を送りました。しかし、いずれも霧のためにどうしても近づくことができず、この探索は将来に持ち越されました。この探索地図を閣下のご検討に付

すべく本状に添えて謹んで進呈いたします。

これらアメリカの施設、そしてさる 8 月 6 日にアメリカからオホーツクに到着した、アメリカ・ロシアのフェニックス号と名づけられた社有の新造フリゲート船にくわえて、聖アレクサンドラの事業号と命名された亡き夫に属するもう 1 隻の船が、毛皮猟の成果を積んでアレウト列島からオホーツクへ到着しました。この船はアフト[アトカ]島に滞在中、思いがけず 15 人の日本人を拾いました<sup>7</sup>。彼らの船はこの島付近で完全に難破してしまい、彼らは残された船載艇 1 隻に乗ってこの島に向かっていました。彼らは嵐によってそこに運ばれました。彼らは自分たちの港から別の港へ米を運んで行く途中でしたが、岸から遠ざかり、嵐で舵を失い、アレウト列島まで運ばれて来ました。彼らのうち 3 名は当地イルクーツクへ送られました<sup>8</sup>。

去年、アメリカへ耕作者を送る際、亡き夫は船がなかったので彼らをクリル列島へ送り出せませんでした。今年、耕作者 4 家族を毛皮採集者 32 名の護衛のもと、大砲およびその他の装備、家族用 semeinyi[播種用 semennyi か]の穀物、家畜その他の必需品とともに、オホーツクの国有船で第 16 島へ送りました<sup>9</sup>。私は、彼らが無事そこへ到着したという知らせを本年、受け取れるのではと楽しみにしております。そのような知らせを受信しましたならば、閣下にご報告申し上げなくてはならないと心得ております。

以上すべてを閣下にご報告したうえで、恐れ多くもわが社に対する閣下の慈悲深き庇護を頼りに、謹んで提案させていただきます。私の乏しい知識で考えるところでは、ロシア国領の境界をイギリス人との間で確定すべき時が今まさに到来しました。イギリス人たちが最も不躰な手段でわれわれを退却させないよう警戒する必要がある現在、なおさらそうであると思われます。ルトゥア湾の先へ到達するという、もっぱらわれわれの熱望から想像され、拡大した現在のわれわれの占拠地のため、そして目下、本格的な入植と耕作が計画されている、かつ前述したイギリスのフリゲート船 2 隻が今回、最後に寄港していたケナイ湾とチュガッチ湾に実在するもののためにも、ロシア人航海者たちによって最初に発見された北緯 55 度までのアメリカ沿岸に対する、真実の、議論の余地のない権利が、今までのロシアによるかすかすの遠征によって、そして遠征の結果、得られた証拠によって正式に承認されなければなりません。イギリス人自身の間でも、1741 年にデメンティエフと 17 人のロシア人水夫が北緯 57 から 58 度の地域で、原住民の航海士たちのもとに留まったことが知られております。さらに、最も確かな証拠として、ひそかに地面に埋められた、「ロシアの領土」と刻まれた銅板を付け加えることができます。これらの板は政府からわが

<sup>7</sup> [編訳者補注：史料 No.10、11 を参照]

<sup>8</sup> [監訳者補注：救助された漂流日本人 15 人は 3 班に分けてオホーツクからイルクーツクへ移送された。第 1 班の 3 人はロシア暦 1795 年 9 月 15 日に出発し、1796 年 2 月 21 日にイルクーツクに着いた]

<sup>9</sup> [編訳者補注：原文のまま。耕作者と毛皮採集者が上陸したのはウルフ島(第 18 島)]

社に与えられました。アメリカ大陸においてこれらの板が設置された正確な場所につきましては、わが社の航海士たちが銅板を設置する際、さまざまなときに作成した 5 枚の秘密図面を本状に添えて贈呈いたしますので、閣下の洞察に富むご検討をお願い申し上げます。ルトゥア湾以遠だけはこのような板が設置されておられません。しかしながら、本年、そこにも当社支配人によってこのような板が設置される予定です。これらすべてを閣下の洞察に富むご検討に委ね、本件にかんして、今、国家のために何かをすべきで、それを行わなければ聖イリヤ岬以遠に計画されている植民と農耕が定着しないというのであれば、慈悲深き閣下が偉大なる女帝陛下[エカチェリーナ二世]に請願し、ご承認を賜りますようお願い申し上げます。

さらに、これまで米会社に庇護を賜りましたが、今後も変わらぬ庇護を賜りますよう、恐れながら閣下に謹んでお願い申し上げます。現在、私は航海者を必要としております。と申しますのも、アメリカには会社の保有船が 5 隻あるにもかかわらず、航海士は 1 名だけで、おまけにこの者は病気がちです。引き続き発見と観測を行い、アメリカに向かい、またアメリカから現地の情報や毛皮を運ぶためには航海者が必要です。船舶の配備、そして国家が必要としている確固たるロシア入植地の設置を早めるべく、造船がアメリカで試みられ、この事業が多数の船舶の建造という成功をもたらすに違いない現在においては、なお一層そうです。中央政府に願ひ出てこのような航海者を確保していただくよう、亡きわが夫は生前、当地の県知事様に請願し、県知事様から元老院に上申がなされましたが、いまだに何の決定もありません。一方、現在、このような航海者が以前にもまして必要となっており、この夏到着した上述のフリゲート船フェニックス号をアメリカへ戻す人材もなさそうです。アメリカへは来年、大量の商品、家畜、穀物の種そしてその他の物品を、移民と聖職者団のために昨年のももの追加として送る必要があります。このフリゲート船でアメリカから戻って来たオホーツクの航海士は、オホーツクの定員不足が大変深刻なので、オホーツク港での国家輸送事業のために残らねばなりません。この件にかんして、元老院宛てに作成した上述の請願書の写しを本状に添えて謹んでご報告するとともに、閣下の慈悲深き陳情をお願い申し上げます。本件の重要性和会社の活動がもたらした利益について女帝陛下に閣下からお口添えいただければ、会社はますます発展し、女帝陛下のご好意を賜るでしょう。航海者が派遣されたあかつきには、面接を行い、これらの者たちの中で品位において最も信頼できる者をしかるべく選抜します。その者は境界にかんする協定をイギリス人と結び、耕作者あるいは会社に所属する毛皮採集者による騒動にも、場合によっては対処できるでしょう。官吏および君主から派遣された勤務者は、罪人を移送し、かの地において高い威厳と地位を持つお方は他にはいない、聖職者団の長イオアサフ掌院の主たる監視下で処罰する際にも、会社支配人よりも利点があるからです。

最後に、以上の私の説明と請願で閣下の平穩を乱しましたことを、寛大にもお許し下さるようお願い申し上げます。寡婦そして天涯孤独となり、幼子を抱えた私には、後援者の愛国心に頼る他ありません。閣下以外には、自分自身の庇護を求められるお方はございません。

閣下への深い尊敬と心からの忠誠の念を、生涯抱き続けます。

慈悲深き閣下の忠実なる僕

ナタリヤ・シェリホヴァ

(8) Тихменев П. Историческое обозрение образования Российско-американской компании и действий ее до настоящего времени. СПб., 1861–1863, ч. II, прил., с. 108–113.

(斉藤由佳・畠山禎 訳)

## 2. イルクーツク商人たちの意見。1795 年に海難に遭遇した日本人 15 人を彼らの祖国に送還するための船の艤装および日本との交易について

[1796 年末]

イルクーツクとコリヴァンの総督の任にあられる種々帶勲者、陸軍中將イヴァン・オシポヴィチ[・セリフオントフ]閣下<sup>10</sup>からイルクーツク<sup>ナメストニチューストヴォ</sup>總督管区支配人、種々帶勲者であられる陸軍少將ラリオン・ティモフェエヴィチ[・ナゲリ]閣下<sup>11</sup>に通知された、アレウト諸島の一島で発見された 15 人の日本人を国有船、ないしは船主自身とその他の商人が交易を目的に自分たちの商品を日本へ輸送できる商人船にてオホーツクから彼らの祖国へ送還すべしとの女帝陛下[エカチェリーナ二世]のご意志にかんして、当地[イルクーツク]の市民および当地で商業に従事する他郷の商人が、全体の利益のためにこの女帝陛下のご意志の遂行に全員で合意するよう、現市長殿が取り計らうべしとの命令を、閣下[ナゲリ]は市長殿に送付しました。この命令に沿って、陸軍少將閣下は商人キセリョフにより予定されている、会社による日本での交易事業を確認すべく、キセリョフから提出された計画書の写しを命令書に添付なされました。

しかしながら以下に署名しましたわれわれは、オホーツクにて準備の整った、この輸送に適した船どころか、いかなる船も所有しておりません。それゆえ、日本人の祖国への移送をお引き受けできません。とはいえ、理由があつて申し上げますが、日本人の移送のために国側からしかるべき人員が乗船し、派遣された船長の指揮のもとで国有船が送られ、かつ船の出航と人員にかか

<sup>10</sup> 【編訳者補注：I.O.セリフオントフ——イルクーツクとコリヴァンの総督(1796～97 年)、元老院議員(1797 年)、シベリア総督(1803 年)、元老院議員(1805 年)】

<sup>11</sup> 【編訳者補注：L.T.ナゲリ——イルクーツク県知事(1792～97 年)】

わる費用が国庫により全額賄われる場合には、陛下のご意志を遂行するためにわれわれ忠実なる臣民が準備しているということだけを示すべく、われわれは日本へ商品を輸送する最初の試みに着手する所存です。輸送を行う場合、日本人との交易を試みるために、適当な商品を当地で見つけられるだけ、われわれの側から特別に派遣された手代、彼のもとで働く使用人を付けて送らせていただきます。オホーツクへの商品の輸送費は非常に高額となり、さらにさまざまな困難も伴い、しばしば商品が損傷を被りますので、日本への商品の輸送や船に乗る人員については、費用を一切われわれに請求しないでください。当地の商人キセリョフから閣下に提出された、大規模な事業内容を含む、日本人との交易にかんする上述の計画書は、日本人との交易がそれ以前にすでに試みられていて、どのような条件のもとで彼らと交易すべきなのか、彼らがとくにどのようなロシア製品を必要としているのか、その製品を当地で確保できるのか、あるいはどこから入手可能なのか、さらに日本側から商品と交換にどのような品物がわれわれに提供されるのか、またかの地での商売からどれだけの利益が得られるのか完全に判明していれば、特別な関心が払われないままとはならなかったでしょう。そうならば、収益次第では引き続きこの計画書の検討に着手できたでしょう。とはいえ、未経験であるがゆえに何一つ明らかではないので、今回の実際の試みもこの商人キセリョフの計画書にもとづかざるを得ません。かの地へ輸送する物品に求められる品質が明らかではなく、取引にかんする情報やかの地で行う取引の規定も未入手なので、大規模な事業計画は実行できません。最初の取引がかの地の交易事情を伝え、利益をもたらしうる手段が見出されたあかつきには、またそれよりも前ではありませんが、基盤の確立を可能にする特別指令を必ず出します。引き続き閣下の側より出されるであろう交易許可にもとづき、以下に署名いたしました者全員の決定にもとづき、かの地において適切な商品を購入すべく、日本交易の最初の試みのための資金を、われわれ全員が自分たちの状況におうじて、あらかじめ委任された者に遅滞なく金銭や適当な商品で納入します。この指令が出されるまでは、必要なこと一切につきまして、自分たちの間で1796年12月8日特別規定の作成をお許しください。

以下の者が原本に署名いたしました。イルクーツク——名誉市民ミハイロ・シビリャコフ、第一ギルド商人ニコライ・ムイリニコフ、第二ギルド商人ドミトレイ・シズィフ、ピョートル・サルダトフ、イヴァン・ドウドロフスコイ、アレクセイ・メスニコフ、セミョン・スタルツォフ、イヴァン・ミチュリン、アレクセイ・シズィフ、エフィム・スヒフ、イヴァン・ルィチャゴフ、ミハイロ・ザシヒン、アンドレイ・リトゥヴィンツェフ、アレクセイ・オスタニン、ミハイロ・サヴァテエフ、ステパン・ドウドロフスコイ、ピョートル・トラペズニコフ、アレクサンドル・アプレルコフ、ミハイロ・レザンツェフ、ヤコフ・プロタソフ、イリヤ・シズィフ、イヴァン・ザイツォフ、ヤコフ・ポボフ、ガヴリロ・ベレズィン、アンドレイ・サヴァテエフ、プロコペイ・

ダヴィドフ、フョードル・ドウドロフスコイ、イヴァン・シズィフ、ヴァシレイ・メドヴェドニコフ、イヴァン・シェストゥノフ、第二ギルド商人ステパン・キセリョフ、イヴァン・キセリョフ、同じくイヴァン・キセリョフ、町民ウヴァル・シズィフ。

原本に相違ありません。十等文官イワン・コリュコフ

(6) РГИА, ф. 1374, оп. 1. д. 236, л. 9–10; 87–88 об.

(横井幸子・畠山禎 訳)

### 3. ルイリスク名誉市民、米会社共同出資者シェレホフ[シェリホフ]の未亡人ナタリヤ・アレクセエヴァ[・シェレホヴァ、シェリホヴァ]からの報告

1796 年 11 月 5 日

閣下[ナゲリ]から当地の市長殿に対して出され、オホーツクに自分たちの船を所有する他都市出身の商人および当地[イルクーツク]の商人に対して要請された、日本人を彼らの祖国に送還し、日本国と交易を試みる任務を引き受ける者はいないのかという旨の 10 月 16 日付第 1701 号命令を遂行し、閣下に以下をご報告申し上げます。閣下もご承知のとおり、私と子どもたちは私の共同経営者であるゴリコフとともに米会社に参加し、とくにアレウト列島にて会社船舶を保有し、それゆえ太平洋において非常に重要な商取引を行っております。今回以外に、船がオホーツクに停泊していれば、計画されている課題を遂行すべく、日本への船の派遣準備にも喜んで早速取り掛かったでしょう。閣下もご存知とは思いますが、1795 年の夏に到着し、オホーツクに停泊中のフリゲート船フェニックス号は、かの地で着手された農耕のために、そしてかの地の聖職者団を統括しておられる掌院に対し、掌院をこの地方全体の主教に叙聖するという皇帝陛下のご意向を通知するためにも、補強を施したうえでアメリカに必ず戻さなくてはなりません。新船を建造するにも、今は時間がありません。したがって、全体の幸福と君主のご意志を実現せんとする私の熱意から、長官であられる閣下にご支援を求めるとともに、必要な場合には以下を請願していただきますようお願い申し上げます。他に術がありません。第一に、<sup>ナシカサフ</sup>長崎へ派遣すべく、オホーツクにある国有輸送船の中からそのような航海に望ましい適当な船一隻を、過去に行われた日本遠征の例にならって、索具とその他の必要な装備一切を取り付けたうえで私にご提供するようお願い申し上げます。必要なものとして私が要望するのは以上です。これらすべて、そして船自体も査定し、受領時と同様の状態で国庫へ間違いなく返却すべく、米会社毛皮事業の株式を一株 2,000 ルーブルとし、船の評価額に相当する株数の徴収を担保として受け容れます。第二に、船の操縦

ができる、国家海軍艦隊の勤務員を通常の倍の人数にあたる最低 10 名賜りますようお願い申し上げます。さまざまな身分の出身で、海上での経験が非常に乏しい者の中から会社が雇用した役夫にもっぱら船を任せるのは、危険であるばかりでなく、かくもきわめて重要な事業の利益にも反しております。航海者にかんして言うならば、船の指揮は彼に任せるべきです。皇帝陛下のご意向により米会社に賜った 4 名の航海士のうち 1 名を、私は航海者として用います。彼の補助として、またあらゆる不測の事態に備えて、オホーツクの副航海士あるいは航海士見習いのうち 1 名をご提供いただきませんか。閣下がこの私の要望をご検討くださり、閣下が長官として計画を支援なされることをご承認いただくのであれば、私はその他のご要望の遂行も決意いたします。すなわち、その船で、私が存じている、日本人が必要とするあらゆる商品を、亡き夫が先回の遠征に際して商人ロフツォフと共同で送った数量と同じだけ発送いたします。計画用に発送すべき商品の数量、そしてまさしく船と索具、人員の給養、その他一切の準備について、一定の、それ自体が明白であるべき事前の見積もりを行うようにいたします。この[見積もられた]全資本を株式に分割し、私の事務所で証書を作成し、当地そして他都市の商人のうち株式取得での参加希望者に対し、この事業において私と一緒に行動するよう呼びかけます。さらに、すべての資本および日本交易の試みの責任者となる人材については、私が全力を尽くして選抜します。

この事業は多大な時間を要するので、閣下がこの私の計画を慈悲深くもご承認なされる場合、日本向けに必要な商品を時宜よくモスクワから取り寄せるべく準備を行い、その他にもオホーツクから離れているがゆえに必要な指示を与え、そして 3 月、4 月には間違いなく商品やその他の重量物、食糧の輸送に着手できるように、通知書にて私を喜ばせていただけませんか。国有船のご提供につきましては、これについて閣下が命令を誰かにしかも前もって出していたかなくてはなりません。それにもとづき、私も国側の人員への追加として、雇用にて人員を間違いなく準備し、その他の指示を出し、滞りなく、時宜を得て至急、この計画中の遠征隊を派遣できます。したがって、ご好意からの閣下の決断を期待いたします。原本に未亡人シェレホヴァの命により、彼女の代理人である十等文官イヴァン・ゼレンスキー<sup>12</sup>が署名いたしました。

(6) РГИА, ф. 1374, оп. 1, д. 236, л. 91–92 с об. 写し

(横井幸子・畠山禎 訳)

<sup>12</sup> [編訳者補注：I.O.ゼレンスキー——イルクーツク県の官吏をへて、八等文官として露米会社に勤務(1799 年)。露米会社総本部取締役(1802～24 年)]

#### 4. イルクーツクで商業に従事する、他都市出身の商人たちの意見。交易関係の樹立と日本人の祖国送還を目的とする日本遠征隊の組織について

〔1796 年 12 月〕

イルクーツクの県都にて、1796 年 12 月某日、われわれ以下に署名いたしましたロシアのさまざまな都市出身の商人は、日本国と交易を行う新たな試みの開始について皇帝陛下からきわめて聡明なるご配慮を賜り、感激し、喜んでそして衷心より参加を希望し、自筆の署名をもってこれを確認いたします。われわれの同意事項は以下のとおりです。第一に、当総督管区支配人、種々帯勲者であられる陸軍少将[ナゲリ]様の公益に対するご好意と庇護により、イルクーツク〔(他都市出身の)商人〕団体は、この機会に会社を組織し、交易を試みることに同意致しました。イルクーツク商人ステパン・キセリョフにより提出された計画書にもとづき、一株を 200 ルーブルとして、われわれに相応な株式投資あるいは資本の一部拠出による、この試みへの参加を希望いたします。われわれのうち誰がどれだけの額を支出し、参加を希望するのか、証書あるいは共同出資協定を作成する際に自分自身がそれに記し、署名するか、あるいはこれを誰かに委任いたします。第二に、かの地が遠方にあり、どのような商品を取引するのか不明であるにもかかわらず、会社を創設し交易を試みる理由は何か、当初から資本のみならず着想も一つにまとめ、盤石な基盤を形成する必要がどれだけあるのか、自分たち自身を納得させるために簡潔な言葉で説明がなされる必要があると考えます。それらの事情が、ロシア商人にとってどれほど有益だとしても、またロシアに好都合な交易を継続させる希望をどれだけ大きく与えているとしても、十分な根拠を持っている下記の諸要因が、参加者にとって好ましくない結果を懸念させていることも認めなければなりません。第一に、ヴォストーチヌイ洋は非常に遠いので、船の入手希望者はあまりおりません。第二に、船を入手するには多大な困難と出費が伴います。材木の他に、航海事業に必要なあらゆるもの、たとえば必需品である道具、鉄、さまざまな錨、索具類、その他資材、食糧、そして人間の生命を維持するために不可欠なものを、イルクーツクからオホーツクへ非常に多くの障害に遭遇しながら、長い時間と高額の輸送費をかけて運ばなくてはなりません。とりわけヤクーツクからは、乗用馬でかなりの労力を使って運搬することになります。第三に、この海で発生する非常に濃い霧や長時間にわたる暴風により船は頻繁に危険にさらされ、また船の往來が緩慢なために、しばしば利益が出ません。第四に、さまざまな会社が同一商品を取引し、我先にと競い合い、一方が他方を破綻させようとするならば、お互いが値段引き上げの妨げとなり、また他の者よりも先に十分な数量をできるだけ売却しようとして、取引を行って、オホーツクに戻ろうとして、それによってこの国での交易が完全に途絶えるかもしれません。第五に、特別に交易に携わって

いる経営主が死ぬと、堅実に交易を取り仕切れなくなり、交易は衰退へと向かうでしょう。

イルクーツク商人ステパン・キセリョフは、ヴェルフネウディンスク第二ギルド商人アレクサンドル・ダニロフ・シェヴェリョフを、参加通知書にもとづき、協定の原本にてこの会社の参加者に登録しました。

原本に署名いたしました。カルーガ商人オシプ・ポルトノフ、ヤクーツク町人ダニラ・シャボシニコフ。

(6) РГИА, ф. 1374, оп. 1, д. 236, л. 89–90. 写し

(横井幸子・畠山禎 訳)

5. 日本遠征隊の組織費用配分にかんする皇帝パーヴェルー世宛の請願を求める、イルクーツクとコリヴァンの前総督、元老院議員 I.O.セリフォントフから元老院総裁 A.B.クラーク<sup>13</sup>への文書

第 52 号

1797 年 2 月 9 日

公爵閣下 慈悲深き[クラーク]様

至福の、永遠に記憶すべき[今は亡き]エカチェリーナ・アレクセエヴナ[エカチェリーナ二世]女帝陛下は、さる 1796 年 7 月 28 日に私に与えた勅令にて以下のとおりご命令なされました。アレウト列島の一島にて船の難破後、発見され、オホーツクへ移送された 15 人の日本人を、この機会を利用して日本にかんする詳細な情報を入手し、この地域におけるロシア商業の拡大を促進する目的で祖国へ送還すべし。私[セリフォントフ]のイルクーツク到着後、国有船あるいは商人船の中で好都合かつ有利と判明した船にて前述の日本人たちを祖国へ送還することについて、しかるべき措置をとるべし。私の前任者である、陸軍中將、帶勲者ピーリ氏<sup>14</sup>に発せられた 1791 年 9 月 13 日付命令<sup>15</sup>にしたがい、日本への同様の派遣が行われたことに忠実にならい、幾人かの商人に対しても贈り物を持たせて、まさしくこの船で出発することを許可する。この命令にもとづき、日本人の給養および本遠征関連のその他の支出用に必要となる資金をイルクーツク県の歳入から借用し、これらの支出全額のしかるべき見積もりを [クラーク]公爵閣下の前任者であるアレクサンドル・ニコラエヴィチ・サモイロフ伯爵<sup>16</sup>に事前に提出し、遠征の遂行と成果については女

<sup>13</sup> 【編訳者補注：A.B.クラーク——元老院総裁(1796～98 年)】

<sup>14</sup> 【編訳者補注：I. A.ピーリ——イルクーツクとコリヴァンの総督(1789～94 年)】

<sup>15</sup> 【編訳者補注：史料集第 2 集 No.37 を参照】

<sup>16</sup> 【編訳者補注：A.N.サモイロフ——元老院総裁(1792～96 年)】

帝陛下に報告すべし、と。

イルクーツクに到着後、私はかかるご命令の遂行に着手するはずでした。しかしながら陛下のご命令により、イルクーツク県出納局により発生した混乱と怠慢にかんする諸件を元老院にて審理するよう指示を受け、これらの諸件のために私はサンクトペテルブルグの元老院に長期間引き止められました。それゆえ、私は時間を無駄にせず、イルクーツク県知事、陸軍少将である帯勲者ナゲリ氏に対し以下の情報を送るよう手紙を書きました。第一に、先回の秘密海洋遠征<sup>17</sup>ののちに残された「ロシアの栄光」号と黒鷲号という名の船は、どの程度使用に適した状態にあるのか。それらの船のうちどちらが日本への派遣に好都合なのか。第二に、それらの船の規模はどの程度なのか、各船はどの程度、荷を積み込めるのか。第三に、それらの船にある索具も使用に適した状態にあるのか。計画されている航海の全行程で役に立つのか。第四に、オホーツクにある国有輸送船のうち、この派遣に適当な船はないのか。第五に、期待に反し、上述の遠征で残された船や輸送船に派遣可能なものと期待できないならば、かの地の海洋毛皮事業者の中には自分たちの海洋船を所有している者がいるのだから、彼らのうち誰かが自分の所有船にて日本人を祖国に送還することを引き受けてくれないだろうか。この船では、船主そしてその他の商人自身に対し、日本での交換を目的に商品を送付することが許されている。第六に、これに誰も同意しなければ、日本人の送還を目的に新船を建造せねばならないだろう。その場合、造船に必要な木材を準備するのに適した場所はどこなのか。

この指令に対し、前述のイルクーツク県知事ナゲリは、昨年 11 月 12 日付でつぎのとおり私に報告しました。すなわち、秘密海洋遠征ののち残された船のうち、第一の船「ロシアの栄光」号は使徒聖ピョートルとパヴロの港[ペトロパヴロフスク港]に停泊していますが、きたる 1798 年の夏以降でなければオホーツク沿岸に移動できません。この船は日本への派遣に好都合ですが、大量の荷を載せ、操縦を行うためにはさまざまな海軍勤務員が 60 人程度必要となります。今回、艀装用の索具とロープが、備蓄用も含め 1,300 プード程度、必要です。それらの一部は、あらかじめ上述の港に搬送されていなければなりません。オホーツクにはこれらの物資が十分にはないからです。したがって、国庫金を余分に支出せねばならず、1792 年における同様の日本人の祖国送還に即するならば、これらの理由によりこの船は適当ではないと判断されます。第二船の黒鷲号は 1,700 プード以上の荷を積みません。にもかかわらず、鋭い暗礁を考慮に入れるならば、島々の間にある浅瀬の、水深 10 フィート以下の場所を通過できません。それゆえ、未知の場所への派遣には適さないと思われます。輸送船はオホーツク港では 5 隻にものぼりますが、それらのうち第一船は聖エカチェリーナ号という名の二檣帆船で、1792 年と 1793 年に[ラクスマン遠征隊の船

---

<sup>17</sup> 【編訳者補注：ピリングス、サルイチェフらの北東地理学・天文学遠征隊をさす】

として]日本に滞在しました。昨年、ニジネカムチャツカ市に送られ、きたる 1797 年 8 月までにはオホーツクへ戻れません。とはいえ、この船の構造は良好かつ堅固で、5,600 プード程度まで荷を積みます。第二船は佯狂者聖アレクセイ号という名の小船艇で、小型で老朽化しています。第三船は「ロシア大聖堂の復活」号という名の二檣帆船で、老朽化しているので遠洋航海への派遣は期待できません。第四船は「聖コンスタンティンと聖エレーナ」号という名の二檣帆船、第五船は聖ナジェージダ号という名の平底帆船です。両船ともしっかりとした構造で、荷も前者は 5,800 プードまで、後者は 5,500 プードまで積みます。必要によってはこの派遣に使用できますが、新しい索具一式と新しい帆 2 組を装備しなくてはなりません。さらに、両船は船体も修理しなければなりません。新船の建造については、オホーツクに木材が準備されていると当てにはできず、現地で木材の浮送や船の建造も 1798 年 6 月以前には達成できません。オホーツク以外で船が建造可能な場所については、イルクーツク滞在中の海軍准将フォミン氏はウダ堡壘以遠とアルダマ川付近には行ったことがないので、情報を提出できませんでした。自分の船で日本人を祖国まで送還することを引き受けそうな海洋毛皮事業者、そして日本での交易のために自分の商品を発送することに同意してくれそうな者については、彼らから情報を入手後、私に報告すると伝え、期待を持たせました。

その後、県知事ナゲリ氏はイルクーツク商人およびかの地に在住する他都市出身の商人から情報を収集し、どのような条件で彼ら商人一人ひとりが日本への船の派遣と商品の発送、日本交易の開設に着手したいと申しているのか報告しております。それらについては詳細に申し上げず、ここではナゲリ氏から原本にて私に届けられた、各人により提出された日本への船の派遣および日本人との通商関係樹立にかんする計画書の写しについてご説明いたします。すなわち、A という文字が付されたイルクーツク第二ギルド商人キセリョフ、同じく B—イルクーツク商人たち、V—イルクーツクに在住する他都市出身の商人たち、G—シェリホヴァ未亡人の計画書です。これらから、彼らから提示された日本交易の開設計画が多種多様な条件を含んでいること、また自分たちの所有船で日本人を祖国へ送還することには彼らのうち誰一人として同意していないことを、閣下のご慧眼でお読み取りください。したがって、もはやオホーツク港に停泊中の国有船のうち一隻を艤装しなければなりません、それらのうち一隻たりとも、修繕を行わずにはこれ程の遠洋派遣は遂行できないので、船の修理と索具、帆すべての装備には国庫金を用いるべきです。その金額については、陛下のご命令の内容にもとづき、私のオホーツク到着後、見積もりを行い、閣下にご報告いたします。船員とその長に必要な人数についても同様にいたします。さらに上部機関に対して、日本人との間で交易の交渉を毅然とした態度で行い、契約できそうな長を、日本へ派遣すべく提供するよう要望しなければなりません。これは、かの地域の情勢を知り、ロ

シア国内外の商業にかんする十分な知識を得るためでもあります。ともあれ、必要となる費用を国庫より支出し、上述の日本人たちを国有船にて彼らの祖国へ返還すべしとのご命令を、皇帝陛下より賜うことができますでしょうか。本件につきまして閣下が陛下にご承認を請い、私に通知を送ることはできませんでしょうか。

真の尊敬と完全なる献身の念を抱く光栄を有します。

慈悲深き閣下

公爵閣下の恭順なる僕

イヴァン・セリフォントフ

(6)РГИА, ф. 1374, оп. 1, д. 236, л. 1–4 об.; 79–82 об. [史料筆写者による注]文書一枚目の余白に書き込み。「陛下に報告するために抜粋を作成すべし」。

(横井幸子・畠山禎 訳)

#### 6-1. イルクーツク県支配人、陸軍少将L.T.ナゲリからイルクーツク総督I.O.セリフォントフへの 上申書

1797 年 3 月 4 日

イルクーツク

イルクーツク総督の任にある陸軍中將、種々帶勲者イヴァン・オシポヴィチ閣下への

イルクーツク県支配人の任にある陸軍少將、帶勲者からの

上申書

二等文官であられる種々帶勲者アレクサンドル・ニコラエヴィチ[・ヴォロンツォフ]伯爵様に与えられた、至福の、永遠に記憶すべき[今は亡き]エカチェリーナ・アレクセエヴナ二世女帝陛下の名の勅令にもとづき、元老院はさる 1795 年 9 月 6 日付命令にて以下を通知なされました<sup>18</sup>。さる 1792、93 年の日本遠征に参加したさまざまな官吏や下級勤務員に対し、女帝陛下は以下の褒賞をご決定なされました。隊長だった陸軍中尉アダム・ラクスマンを八等文官に昇任させ、これに相当する役職が決定するまでは年 450 ルーブルの俸給を与える。未払い分の俸給、特別支出のために使用された現金、さらに日本の支配者が彼に与え、国家が使用する目的で彼によって提出された米および軍刀の代金、合計 7,038 ルーブル 6 コペイカ半を与える。陸軍少尉補の位にある航海士ヴァシリー・ロフツォフは、陸軍中尉の官位とその俸給を与えたうえで職を解き、遠征中に未受領だった俸給 1,066 ルーブル 66 コペイカ半を支給する。測量士である下士官エゴール・

<sup>18</sup> [編訳者補注：史料集第 2 集 No.48 を参照]

トゥゴルコフをその日本語能力により参議会通訳官に、定員規定でこの官位に決定されている俸給をもって任命する。測量士である下士官イヴァン・トラペズニコフを陸軍少尉補に昇進させ、彼を郡測量士としてイルクーツクの欠員の一つに任命する。航海士ヴァシリー・オレソフを陸軍少尉補に、定められた俸給をもって昇進させる。下士官ヴァシリー・コフを陸軍少尉補に昇進させ、掌帆兵曹ティホン・サポジュニコフと補給兵曹セミョーン・コシュレフは病気を理由に、彼らが現在受け取っている俸給を増額し、年金を給付したうえで解任する。ヴェリーキー・ウスチューク商人ヴラス・バビコフには黒緞入りの赤色の綬が付いた金メダルを与える。七等文官キリル・ラクスマンには 3,000 ルーブルを一括にて賜与する。上記以外に、日本語を教える目的でイルクーツクの国民学校に残された日本人 2 名に対し、その採用日から他の教師たちと同等の俸給を与え、日本語の学習のために選抜された神学校生徒たちに対しては十分な生活費を支給する、と。元老院がイルクーツク県庁に対して出したご命令を遂行すべく、私に関係することをしかるべく遂行いたしました。ところで、閣下の前任者としてこの遠征について女帝陛下に上奏し、その中でこのラクスマンが日本から持ち帰り、オホーツクにて国側の監督のもと、一俵あたり 4 プード 25 フントの目方で 99 俵、合計 457 プード 35 フントを受領したキビ psheno[米]、やはりかの地で保管されている、贈答品として日本に持参し[て持ち帰っ]たさまざまな商品、イルクーツク県出納局が保管している遠征の残金、総額 6,078 ルーブル 83 コペイカ半、そして遠征後に余剰となった食糧を売却し、オホーツクで得た現金について、これらすべてをどこに振り向けるよう指示が与えられることになるのか説明しました。天体観測器具およびその備品については、必要が生じたときのためにかの地で今後も保管する許可を陛下に願い出ました。しかし、上述の元老院令では許可について何も記されておらず、1795 年 11 月 14 日付文書にて二等文官であられる種々帯勲者アレクサンドル・ニコラエヴィチ伯爵様に、これらの物品とキビをどのように扱うべきなのかご命令を求めざるを得ませんでした。これらは(キビを除き)、売却が決定された場合はオホーツクで十分売却可能であり、国庫に利益をもたらすものであります。商人によってオホーツクに運ばれているキビ pusheno[麦類のことか]は 1 プードあたり 20 ルーブルで販売されておりますが、小口でしか売れぬものであり、したがって日本から持ち帰ったものを国庫から出して販売しようとしても、ただちには完売できないと思われます。キビは大量にあり、長期間放置され、湿気、保存に不適当な気候により傷むかもしれません。これにかんしては、オホーツク警備司令官である陸軍第一少佐ムィシェツコイ公爵からすでに報告を受けております。キビはかの地の海辺の空気のもと、食糧庫(ここにキビもあります)で不適当な小袋にべつべつに保存され、袋から腐敗がキビに拡がり、そのうえネズミが少しずつキビを掠め取って食べているので、次第に食用に適さなくなってきていると述べています。どこでこのキビを消費すべきか、あるいは希望者に

販売すべきか、彼は私の命令を求めています。オホーツク地 oblastnoe [県の下部行政単位] 出納局 kaznacheistvo に保管されている、遠征後に残された贈答品、すなわちラシャ、スタメット[格子織りの毛織物]、ベルベットそしてモロッコ革についても同様であります。長期間の放置により損傷を受けて価値が下がらないように、これらをどこで使用するべきか彼は決定を求めています。私は上述の文書にいかなる決定も見出しておらず、閣下の当地への一刻も早い到着を待ちながら、命令が下されるまでの必要な保管のためにあらゆる手をつくすよう、オホーツク警備司令官に確認する必要があると考えております。というのは、とりわけキビは管理が行き届いていれば、損傷を未然に防げるからです。しかしながら、近づきつつあるこの春までに彼に対して決定が下されない場合は、その状態を彼自身が検査し、俵が湿気を帯びている場合はこれを乾燥させるよう私は助言しました。しかし、予防措置を取ったとしても、かの地ではこれらすべてを望ましい状態で長期間保管できません。それゆえその場合につきまして、本件について閣下をご検討下さるよう私は申し上げなくてはなりません。なお、贈答品について本状にその一覧表を添付致します。

陸軍少将リュドヴィク・ナゲリ

保管を目的にオホーツク地方出納局に運び込まれた、日本遠征において支出後、残されているさまざまな贈り物および物品の一覧

物品の数量	
20 アル[シン]	緑色のラシャ
14 ヴェル[シヨーク]	
30 アル[シン]	暗青色のラシャ
2 巻	緑色のスタメット、うち一巻は深緑色でいくつかの部分に分けられている。長さ 33 アルシン半
72 アル[シン]	暗青色のベルベット
	モロッコ革
5	鮮紅色
6	淡青色
3	黄色
3	緑色
39 アル[シン]	鮮紅色の呉縞

十等文官イヴァン・コルトウコフ

(2) Архив СПбИИ РАН, ф. 36, оп. 1, д. 609, л. 32–35. 原本

(小野寺歌子・畠山禎 訳)

## 6-2. イルクーツク総督セリフォントフからイルクーツク県支配人ナゲリへの書簡

1797 年 4 月 29 日

イルクーツク

慈悲深きリュドヴィク・ティモフェエヴィチ[・ナゲリ]様

閣下の 3 月 4 日付上申書にかんし、私は陛下に奏する栄を賜り、閣下に対する陛下のご命令を受けた。日本のキビは県内で閣下の指揮下にある軍隊に穀物の代わりとして分配すべし。同様にラシャやスタメットは軍装具よりも質が劣るならば軍隊にて利用すべし。上質のものならば、ラシャと革そして他の物品を都合の良い時にときどき、少しずつ私に送り届けるべし、と。

本状をもって、陛下のご意志を遂行するとともに、ともあれ真の、偽りのない尊敬の念を抱き続ける。

閣下の従順なる僕

〔イルクーツク総督イヴァン・セリフォントフ〕

(2) Архив СПбИИ РАН, ф. 36, оп. 1, д. 609, л. 36. 原本

(小野寺歌子・畠山禎 訳)

## 7. 三等文官 I.O.セリフォントフの文書と関連した、元老院総裁 A.B.クラークン公爵からパーヴェルー世への上申書

1797 年 3 月 20 日

日本交易について

かつてイルクーツクおよびコリヴァンの総督の任にあり、現在、元老院議員である三等文官セリフォントフは、自分自身の文書において以下を申し上げております。すなわち、船の難破によりアレウト列島の一島で 15 人の日本人が救助され、オホーツクに移送されたことにつづいて出された、亡き女帝陛下の 1796 年 7 月 28 日付命令は、「彼らを祖国に送還し、この機会に日本をできるだけ詳細に理解し、この民との間で利益をもたらし得る交易を開始し、確立すべし。この目的で、ペトロパヴロフスク港に停泊中の、1791 年に同様の航海を行った国有船のうち一隻を使用するか、あるいは商人たちが自分たちの所有船にて彼らを送還することに同意するようにさせ、彼らがかの地へ少量であれ初めて商品を発送するよう提案すべし。かの地の市民[商人]に対する提

案にもとづき彼らから提出された、日本への商品発送と商業団体の設立にかんする計画書を、本状[返信のこと]に添付して私宛に送付すべし」、というものでした。この計画書の中で、商人たちは君主に支援を求め、そのうち最も主要な要望は、国有船の利用が望ましく、航海術を知る長と水夫10名を提供いただくというものでした。その他はすべて彼らが自分たちで取り計らい、そうしていただけないならば、彼らは自分たち自身と財産をこのような未知の、危険な航海に委ねることには同意できない、とのことでした。ペトロパヴロフスク港に停泊中のナジェージダ号という名の船が、この派遣に最も良好かつ好都合な一隻であり、若干の修理と2組分の索具と帆の補給だけが必要なのですが、それには多額の費用がかかるでしょうと述べ、この文書を締めくくっております。しかしながら、その費用がどれだけのなか、現在の任務へ彼を至急、召喚したために彼は算定できませんでした。

以上を最も恭しく皇帝陛下にご報告申し上げ、陛下のご命令を賜りますようお願い申し上げます。

(6) РГИА, ф. 1374, оп. 1, д. 236, л. 93–93 об. 写し

(横井幸子・畠山禎 訳)

#### 8. N.A. シェリホヴァの文書より。「米会社の成功にかんする説明」(⑩No.156)

【1798年8月3日以降】<sup>19</sup>

【記載地は判明していない】

わが夫、亡きシェリホフは、1784、85、86年に3隻の船でアメリカに滞在中<sup>20</sup>、アリヤクサ[アラスカ]の住民、カディヤク島とアフグナク島の民、さらにアメリカ大陸のキナイ[ケナイ]湾もしくはクック川[クック湾]から北緯57度のルトウア湾までの間に居住するさまざまな部族の民を撫柔し、12万人以上をロシア臣民としました。みな自ら臣民となることを望んだ者だけをそのようにいたしました。これらの諸民族と交易を開始し、毛皮事業会社を設立しました。以上は、厳正かつ確実な規則にもとづき決定されました。

<sup>19</sup> このおおよその日付は、本文書の省略部分で、イルクーツク市における露米商事会社の設立証書への署名について言及がなされているという事実にもとづいている。周知のように、この署名は1798年8月3日に行われた(РГАВМФ, ф. 198, оп. 1, д. 79, л. 237 с об.). 本文書を記述した場所は確定していない。

<sup>20</sup> アメリカ沿岸に向かうシェリホフの遠征は、3隻の船(平底帆船)でウラク川河口(オホーツク港付近)を1783年8月16日に出航した。このうち2隻だけが、9月24日、ベーリング島に到着し、この島付近で越冬した。1784年6月、平底帆船はアレウト列島をめざして出航し、8月3日バーヴェル湾(カディヤク島)に到着し、ここで越冬した。1785年5月、シェリホフはロシア人、コニャグ人、アレウト人からなる大作業隊をアメリカ沿岸部に送った。彼らは毛皮採集者のために要塞と越冬小屋を建設した。詳しくは航海にかんするシェリホフの文書を参照。РГАДА, ф. 248, д. 4383, л. 717–736 об.; Шелихов Г. И. Российского купца Григория Шелихова странствования из Охотска по Восточному океану к американским берегам / Под ред. и с примеч. Б.П.Полевого. Хабаровск, 1971.

シェリホフはかの地から帰還する際、会社経営の補助者たちに以下で述べる業務を遂行するよう指示しました。その結果、以下が遂行されました。

1. アリャクサ半島が十分に観察され、半島を横切り、岬とウニマック島との間にある危険な海峡を迂回せずにブリストリ湾の北側へ出る最短かつ最適な抜け道が発見されました。アリャクサの住民にかんする知識を深め、人質を取りました。
2. クックが自分の名の川と呼ぶキナイ湾には、毛皮採集者の狩猟アルテリが設置されました。彼らは住民を十分にいつくしみ、彼らと交易やあらゆる交際を始めました。
3. チュガチ湾にもアルテリが置かれました。さらに 1794 年、ここで試みとして現地の木材を使って 3 隻の船が建造されました。24 門の大砲を備えた見事なフリゲート船フェニックス号、そして 2 隻の小型船すなわちペガス号、オレグ号です。多くの住民と知り合い交際を始めました。
4. モンタギュー島あるいはシュクリュ[ツクリュ]島の聖イリヤ岬に要塞が築かれました。
5. カディヤクに学校が設けられました。ここではアメリカの少年たちがロシア語の読み書き、算術、航海術を学んでいます。10 名の少年はイルクーツクに移され、さまざまな楽器を習い、[1]793 年、カディヤクに戻されました。娯楽好きのかの地の住民を喜ばせました。
6. ヤクタット湾とルトゥア湾にて、大陸沿岸の調査が若干行われました。この辺りの住民は他地域の住民よりも気性が荒く、1795 年まで彼らの撫柔は少ししか成功しておりません。しかし、望みがないわけではありません。物物交換はとくにこれといった危険もなく行われているからです。

前述のルトゥア湾は北緯 55 度地点のやや先にあり、ヌートカのイギリス人居留地と隣接しています。アメリカにおけるロシア領の境界となるに違いありません。
7. これらすべての湾その他の場所には、政治的な理由により、「ロシア領土」と刻まれた銅板が地中に埋め込まれています。
8. われわれが人質を取った多数のアメリカ原住民と島民は、聖職者の立ち合いなしに洗礼を受けました。彼らのうちの多くがロシア国人の生活様式をまね、遠方から一族もろともロシア人毛皮採集アルテリが置かれた場所付近に寄って来ます。彼らの同族の者たちは、ほんのささいなことから互いに物を奪い合い、殺し合う悪習があり、こうして彼らは攻撃から身を守っています。
9. このようにして、かの地の住民がロシア人、そしてわれわれの法律に忠実になり始めると、私の夫は[1]793 年、中央政府の長官に対し宣教者を派遣していただくよう請願し、当社の負

担で掌院を長とする聖職者団<sup>21</sup>がかの地に送られました。彼らは 1794 年の最初の冬と 1795 年の春にカディヤク島で 8,000 人の住民に洗礼を施し<sup>22</sup>、アメリカ原住民同士、またロシア人とアメリカ原住民女性との婚儀を多数執り行い、仲睦まじく礼儀正しく生きる必要を説きました。当社の負担でカディヤク島に寺院が建立されました<sup>23</sup>。

これらの功績に対し、1796 年、掌院はかの地の主教に任ぜられるとともに、副主教の定員が与えられました。自分自身の叙聖のためにイルクーツクに向かう任務が主教に課せられ、この夏にはオホーツクに到着しているはずで<sup>24</sup>。彼の成功は偉大なものに違いありません。

10. 私の夫は彼自身がカディヤク島に滞在中、さまざまな穀物と野菜の播種を試み、成功しました。それゆえ、宣教者の派遣を請願する際、不遇を困っている者たちから耕作者 20 家族、また造船のために鍛冶工、大工などの職人を 10 名派遣するよう請願しました。彼らをチュガチ湾の聖イリヤ岬の先、もしくはさらに遠方へと北緯 55 度まで渡り、入植に好都合な場所が見つかったところに入植させるべく、[1]794 年、夫はイルクーツク総督[ピーリ]から与えられた命令を持たせて、彼らをかの地へと出発させました<sup>25</sup>。これら移民を送り出し、あらゆる種子と用具、そしてあらゆる繁殖用の家畜と家禽を、彼らが自分たちで連れてきたものに加えて彼らに供給しました。

1795 年、入植者と聖職者団は場所探しのためにカディヤク島を出発し、大陸沿岸へと向かいました。彼らがどこにどう落ちついたのか、今では知らせが待たれております<sup>26</sup>。わが夫は

<sup>21</sup> 掌院イオアサフを長とする布教団のことである。彼らは 1794 年 8 月にロシア領アメリカに派遣され、アメリカにおけるキリスト教の普及に大きな役割を担った。布教団員には修道司祭のマカリイ(1795 年に帰還)、アフアナシイ(1825 年に退去させられた)、ステファン(溺死)、ネクタリイ(1807 年に退去させられた)と修道士ゲルマン(カディヤク島に居住した)が入った。団員には修道司祭ユベナリイも含まれていたが、1796 年夏、「上司であるイオアサフ主教に許可を求めずに 3 人の毛皮採集者、新たに洗礼を受けた数人のキナイ人とともに大陸の北岸、さらにアリヤスカ以遠へと方々を旅するようになり、まだわれわれに友好的ではないかの地の民に殺された」(「ロシア領アメリカにおけるシェリホフ・ゴリコフ会社の経営活動と毛皮事業活動にかんする情報」より—РГАВМФ, ф. 198, оп. 1, д. 79, л. 101 с об.)。

<sup>22</sup> 宗務院への 1795 年 5 月 19 日付報告で、イオアサフは現地住民 6,000 人を洗礼したことについて書いている。АВПРИ, ф. РАК, д. 109, л. 55–56 об.を参照。

<sup>23</sup> カディヤク島の寺院は 1796 年に建てられた。

<sup>24</sup> 主教への叙聖に際して、イオアサフは 1798 年、シェリホフ会社の船フェニックス号でオホーツクに向かった。ロシア領アメリカへの帰路、1799 年夏、フェニックス号は難破し、イオアサフは死亡した。РГАВМФ, ф. 198, оп. 1, д. 79, л. 101 を参照。

<sup>25</sup> 史料⑩No.144「イルクーツクとコリヴァンの総督 I.A.ピーリからエカチェリーナ二世への上申書」(1794 年 3 月 1 日)を参照。

<sup>26</sup> 1798 年 8 月 25 日以降と日を付すことができる「ロシア領アメリカにおけるシェリホフ・ゴリコフ会社の経営活動と毛皮事業活動にかんする情報」では、つぎのように述べられている。「本年 6 月 10 日付でカディヤク島の現地支部が以下を通知しました。移住者は 1796 年、入植を目的にアメリカ大陸沿岸へ送られました。ベーリング・ヤクタット湾[ヤクタット湾]でスラヴォロシアと名づけられた入植用の土地が探し当てられました。移住者 30 家族と毛皮採集者 20 名が送られましたが、この移住者と毛皮採集者のうち現在までに 20 人が壊血病で死亡しました。会社支配人が最後にこの入植地に行ったのは 1797 年 10 月です。穀物栽培の成果については書かれておりませんが、まだ入植地の施設は建設中だと報告されております。以前のものに加え、あらゆる家畜を送るよう求めております」(РГАВМФ, ф. 198, оп. 1, д. 79, л. 101 с об.)。しかしながら、穀物(ライ麦、大麦、燕麦、キビ、えんどう豆)はロシア領アメリカでは「湿気のため」、つまり湿潤気候と「荒れた土

この入植地に寺院をもう一堂、要塞、家屋、倉庫 pokkhauz、そして安全かつ十分な生活のために必要なあらゆる施設を建設するよう命じました。この居住地、またこれにならい地方全体をスラヴォロシヤと名づけました。

11. 彼はまた同様の入植、耕作、会社居留地の設置を、将来的に日本との間でも交易関係を結ぶべく、日本から近いクリル列島第 18 島[ウルップ島]で行ないました<sup>27</sup>。
12. 夫はまた、200 名の特別部隊からなる同様の会社を、クジラ猟とセイウチの牙猟を目的にアレウト・ズーボフ列島[アレウト列島]の北方の島々に設立しました。会社の総本部はウナラシュカ島に置きました。

彼がこの会社を設立した意図は、アレウト列島全島、ベーリング海峡方面へと北方に位置するすべての島、そして互いに対峙するアジアのチュコトの地とアメリカ大陸沿岸双方を占有し、かの地の民と交易を開始し、可能な場所では要塞と入植地を設け、それらによって、かの地に到来し、島民から下らぬ装飾品と交換に貴重な毛皮を巻き上げているねたみ深い外国人に対して警告を与えることにあります。

13. 以上すべてを実行すべく、今日に至るまでにシェリホフは 11 隻の船を建造しましたが、そのうち 1 隻が 1790 年、ウナラシュカ島付近で難破しました。
14. 以上の遂行をより適切に指揮すべく、彼は 1794 年、イルクーツクに会社支部を設置しました。そしてすべての施設と商事を含む会社の全資本を 150 万ルーブル強と算定し、全資本と施設を彼自身の監督下で運営するのに適切な規則をこの支部に付与しました。

以上を実施しているまさしく最中の 1795 年、彼は他界しました。彼の遺志により、私はこれらの会社の運営を開始しました(略)<sup>28</sup>

(5) РГАВМФ, ф.198, оп.1, д.79, л.233-238 с об. 写し、ロシア語

(斎藤由佳・畠山禎 訳)

---

地」のせいで実が成熟しないことが判明した。野菜(かぶ、大根、甜菜、レタス)とじゃがいもはよく育った。移民はまた「有角獣と馬」、豚と家禽をうまく繁殖させた。詳しくは Исторический календарь Российско-американской компании // К истории Российско-американской компании: (Сб. документальных материалов) / Под ред. А. И. Блинова и др. Красноярск, 1957, с. 20, 33 を参照。

<sup>27</sup> シェリホフは(クリル列島の)ウルップ島にロシア人入植地を築く許可を得て、1795 年、ヴァシーリ・ズヴェズドチョフ率いる毛皮採集者隊とその妻子を送った。彼らはイトウルプ島[エトロフ島、第 19 島]へ移り、北海道島(松前島)に住んでいる日本人と交易をしながら 10 年ほどそこで暮らした。

<sup>28</sup> この文書の省略箇所、シェリホフは会社共同出資者ゴリコフを訴え、「米会社の合併と 1 月 1 日までの特権にかんする件」を審理するよう求めている。

## 9. 商業参議会からパーヴェルー世への上申書 (㊦No.159)

〔1799 年 1 月 11 日〕<sup>29</sup>

〔サンクトペテルブルグ〕

前元老院総裁であられる二等文官クラークン公爵は、アメリカでの毛皮採集を目的に、アメリカにあるシェリホフとゴリコフの会社と同様の米商事会社を設立したいという一部のイルクーツク市民からの希望にかんする、彼、元老院総裁の恭順なる上申書に対する陛下のご命令を、1797 年 8 月 7 日、本参議会議長に通知しました。すなわち、「既存の会社と新規に設立される会社は、商業参議会の管轄下に置かれるべし。ただし、前者が同意し、事前に双方により結ばれた、本件にかんする絶対的な取り決めにもとづいている場合に限り、希望者に対し同様の毛皮事業を新規に開始する許可が与えられる」、と。その際、彼、クラークン公爵は本件に関連する情報も添付されました。すなわち、前イルクーツク県文官知事であられる三等文官セリフオントフからクラークンに宛てた報告、イルクーツクおよび他都市出身の商人による計画書 4 通、クラークンから陛下に宛てた上申書に添付されて奏された日本交易にかんする文書、またもう一人のイルクーツク県知事であられる三等文官ナゲリからクラークンに宛てた書簡、彼[ナゲリ]の恭順なる上申書、上申書に添付された、アメリカに多くの会社が存在することから生じる害と会社の合併により生じる利益にかんする彼、クラークン公爵の文書です<sup>30</sup>。

皇帝陛下の命令に沿い、商業参議会がこれらの情報、また旧商務委員会の保管文書のうち、本件と関連して委員会が受信した文書に限りすべてを検討した結果、それらの文書は本件を判断するにはまったく不十分であると判明しました。それゆえ 9 月 7 日、イルクーツク県知事に対し補足として以下を要望することを決議しました。すなわち、北東海[太平洋の一部、ベーリング海、北氷洋東部をさす]の航海にかんする情報と地図、本件にかんする新規事業の計画案、かの地で従前そして現在、毛皮採集に参加する者たちの過去の証言、彼らの相互的な取り決めにかんする文書、北東アメリカ大陸とその海域にある島々における毛皮猟、交易、施設、防御設備すべてにかんする詳細な記述、現在、会社の創設を希望している者についての通知、彼らの取り決めと規則についての通知、またどれだけ多数であっても、その他の小規模な毛皮事業者にかんし彼らの毛

<sup>29</sup> 本文書の作成日は原本に記入されていない。この日付は商業参議会にてこの上申書が承認された日である。РГАДА, ф. 1261(Воронцовы), оп. 1, д. 797, л. 2. 商業参議会会議事録の 2~17 頁を参照。

<sup>30</sup> ここで言及された文書は、その写しがパーヴェルー世の侍従武官クシェリョフに送付され、РГБВМФ, ф. 198, оп. 1, д. 79 に保存されている。すなわち、1797 年 8 月 5 日付上申書、元老院総裁クラークン公爵の記述「アメリカに多くの会社があることから生じる害とこれらの会社の一社への合併から生じる利益について」(л. 89-94, 95-97)、セリフオントフの手になる、合同会社設立についての 1797 年 2 月 9 日付書簡(л. 68-71 об.)、クラークンによる補足が加えられた、セリフオントフによる 1797 年 3 月 21 日付報告「日本交易について」(л. 72-80)、ナゲリからクラークンへの書簡とナゲリから皇帝への上申書(どちらも 1797 年 4 月 24 日付)である。後者には彼の上申書の裁可にかんするクラークンによる 1797 年 6 月 9 日付補足が添付されている(л. 82-88 об.)。クラークンの 1797 年 8 月 5 日付上申書の写し、ナゲリからパーヴェルー世への 1797 年 4 月 24 日付上申書の原本は РГИА, ф. 1374, оп. 1, д. 236 のそれぞれ л. 25-27 об. と л. 17-20 に所在する。

皮事業と商業がどのような状況なのかについての通知、そして最後に、日本との交易開始に向けてイルクーツク商人によって着手された試みについての情報です。これを遂行後、商業参議会議長は同年9月9日、イルクーツク県知事ナグリから皇帝陛下へ奏された、イルクーツクにおける米商事会社設立についての上申書およびこれに添付された、会社内部での協定 *uslovie* 2 通の写しを、陛下の命令を示し、この命令を検討したうえで、これに対して加えた注釈を会社に提示すべく送付しました。

皇帝陛下の命令に対し、本参議会はまさしく同日、陛下に以下の恭順なる上申書<sup>31</sup>を奏する榮に預かりました。すなわち、本参議会はこの会社の設立趣旨が、シェリホヴァ未亡人が彼女自身の協定で述べている<sup>32</sup>会社運営証書 *akt* が十分かつ確かな根拠を持って作成される場合に限り、大変有益であると認識しております。しかしながら、かくも強大な合同会社 2 社、すなわちクルスク県名誉市民ゴリコフと貴族シェリホヴァの会社、そしてイルクーツク県商人ムイリニコフとその共同経営者たちの会社が毛皮事業のほぼすべてを手中に収めると予測されるので、その場合、2 社同様、毛皮事業に参加する小規模な業者が他にもあるのであれば、陛下のご許可にもとづき、会社による同意および彼らの間での相互的な取り決めにもとづき、このような事業者にもこの会社への参加を許可するのが望ましくないでしょうか、と。この恭順なる上申書は、商業参議会議長に対する元老院総裁の意見をもとに、陛下のご意向により帝室に設けられた評議会にて検討されました。評議会はこの上申書を承認しました。その際、他の事業者にもこの会社に参加する機会を与えるために、イルクーツク県知事は彼ら全員を召集し、この一社への合併を提案すること、これに必要な証書が作成され、皇帝陛下のご判断とご承認を賜るべく送付されること、この会社の支援を目的に慈悲深くも陛下が会社に 20 年間の特権を賜るよう、請願が行われるようにすることを、意見として付け加えました。皇帝陛下は評議会の意見をご承認なされ、これを受けて、元老院総裁は商業参議会に対し、本参議会在イルクーツク県知事と連絡を取り、特権についてこの

<sup>31</sup> つぎの文書をさしている。ナグリから皇帝への上申書およびナグリより元老院総裁クラークンへの上申書(ともに 1797 年 7 月 22 日付)、2 通の「協定」、すなわち 1 通目は 1797 年 7 月 18 日付の「合同イルクーツク米商事会社協定」という仮名が付された文書、2 通目は 1797 年 7 月 19 日付の「合同米商事会社共同出資者の協定、権利、義務および出資」という名の文書、さらに商業参議会からパーヴェル一世への 1797 年 9 月 9 日付上申書である。これらの文書は РГИА, ф. 1374, оп. 1, д. 236 に保存されている。報告の原本はそれぞれ л. 32-34, 23-24, 49-50 об.、「協定」の写しは л. 35-40 と 55(1 通目の「協定」の終わり), л. 56(2 通目の「協定」の初め)と 41-48(文書はこのファイルに不正確に綴じられている)。収録されているナグリへの 1797 年 10 月 31 日付書簡の中でクラークンは、彼につぎの情報を伝えた。皇帝は商業参議会と皇帝付属評議会の意見を承認し、毛皮事業者を召集し、彼らに対し「株式へのしかるべき資本分割による」一社への合併証書を合意のうえで作成するよう提案し、この証書を皇帝に送り、承認を得て、「外国における他の同種の会社が有している 20 年間の特権をこの会社が賜るよう皇帝陛下に願い出ることを」命じた、と(РГАВМФ, ф. 198, оп. 1, д. 79, л. 99-100; Иркутские губернские ведомости, 1893, No. 29, летопись г. Иркутска)。

<sup>32</sup> おそらくシェリホヴァの「日記」(日付は入れられていない)と「アメリカ会社の確固たる開設のための諸方策について」をさしていると思われる。РГАВМФ, ф. 198, оп. 1, д. 79, л. 241-275 を参照。本上申書の中で言及されている他の文書は発見されていない。

会社にどのようなものを授けるべきか、陛下のご承認を得るべく上申書を準備するようにと通知しました。

商業参議会は陛下のご許可を遂行し、同年 11 月 16 日、本参議会が以前、送信した文書の内容を確認すべく、本件のために本参議会が不可欠とする情報を県知事ナグりに要求しました。これに対し、この会社に現在参加している者たちが、この事業の壮大さと重要性にかんじて自分自身の意見をナグりに述べ、これに不可欠な証書を作成するために十分な時間を彼に求めたとの通知を、さる 1798 年 2 月 23 日および 3 月 26 日、ナグリから受信しました。その後、イルクーツク県民務知事職に任ぜられた歩兵大将トレイデン<sup>33</sup>は 7 月 12 日、現在の参加者はこの間にいかなる証書も彼に提出しなかったどころか、彼らとその他の事業者との間で不和と論争が発生していると本参議会に通知しました<sup>34</sup>。本参議会は、参加者たちが遠方に居住していることからというよりは、もっぱら彼らの間にある意見の相違から遅滞に遭遇し、その一方では本参議会が要望した情報を受信しておらず、それらなしにはかくも重大な案件について決定を下し、確実かつ根拠のある[会社]規則を実施できませんでしたので、責務により上述の県知事に 7 月 19 日付で再度要求いたしましたところ、ついに合同会社が 8 月 3 日に作成した証書<sup>35</sup>を、9 月 27 日、彼、県知事から受け取りました。

ただちにこの証書の検討に取りかかり、もっぱらこの会社の参加者にかんしては、この証書が会社を設立し運営するのに十分な規則を備えていることが判明しました。しかし、陛下におかれましてはこの事業に参加する他の業者もこの会社に加わるべしとのご意向であり、また本参議会議長に対する貴族シェリホヴァからの回答によれば、この会社は彼らだけではなく、会社への参加を希望する、陛下のすべての臣民を共同経営者にしたいと考えております。本参議会はこの陛下のご意向[の遂行]を第一の課題とみなし、本件の遂行と関連した情報がまだすべて提供されていなかったたので、これらの情報を再度 10 月 25 日付で県知事に要望し、その一方で、できるだけ早く陛下のご命令を遂行すべくあらゆる手段を尽くし、可能な場所で本参議会がいまだに入手していなかった最重要の情報を収集した結果、今日そして将来における国益と会社創設者全員の利

<sup>33</sup> 【編訳者補注：Kh.A.トレイデン——イルクーツク県民務知事(1797～98)】

<sup>34</sup> 発見されていない。

<sup>35</sup> 「協力によって北海、北東海、太平洋[太平洋]においてロシア商業を増強、拡大、改善し、永久に確立するための」会社の、1798 年 8 月 3 日付「合併」証書をさす。「合同米会社」の中には、シェリホフとゴリコフの米北東、北、クリル会社【各社の活動内容は、史料 No.8 のそれぞれ第 1～10 項、第 12 項、第 11 項に対応する】と N.P.ムイリニコフを代表とするイルクーツク商人の会社が入った。アメリカとイルクーツクの商社会社合併にかんする 1798 年 8 月 3 日付証書の原本は РГИА, ф. 1329, оп. 1, д. 217, л. 83–103 に保存されている。また P.ティフメニェフ『露米会社の形成と現在までの活動の史的概観』第 1 部、付録 1～19 頁 Тихменев П. Историческое обозрение..., ч. I, прилож., с. 1–19 として公開されている。この証書には 17 人の共同出資者の署名が付され、個人印が押されている。印は赤い絹のリボンの上に十字架の形で固定されている。証書には共同出資者が「さる[1]797 年 7 月 18 日および 19 日に事前に合併し、書面による契約でこの合併を確認した」と記入されている。

益を守るには、会社の基礎と方針となりうる上述の証書を取り消、補足、説明するための規則を作成する必要があると判断しました。本規則の骨子は以下のとおりです。

最初に提出された会社資本金は 72 万 4,000 ルーブルで、724 株に分割され、自分たちの財産を投じて会社への参加を希望する者全員を満足させるには十分な[発行]数ではなく、またかくも壮大な事業がさらなる国益のために着手されるというのであれば、この事業に比しても十分とはいえません。それゆえ本参議会は、これ以降に入手した通知にもとづき、会社のさまざまな事業が大きな成功を収め、会社の資本は大きく増加したと推測し、船舶、商品、施設、その他からなる会社全資産の正確な収支を作成するつもりです。現段階の証書に署名した者の他に、会社創設時の資本にもとづき発行された株の所有者を加えた参加者全体を対象に、総額を現在の株数で割り、この価格から一株あたりの価格を算定したうえで、永年にロシア臣民となる意思のない外国人のみを除く希望者に資本金から導き出されたこの価格で分配するために、さらに 1,000 株を加えるつもりです。それゆえこの会社は、皇帝陛下から賜った特権により、また会社自体の性格にもとづき、露米会社と名づけられます。このような方法により、本参議会は現在保有する資本にもとづき株価を決定するための最初の規則を前提条件とし、そこから生じる利益を享受する権利をロシア臣民の者全員に与え、そのうえでまさしくこの地域で船舶を有しているかつての毛皮事業者のうち誰かが何らかの理由で合同会社への参加に同意しない場合、このような者が陛下の法律により彼らに与えられた毛皮事業の自由に則り、この会社が設立するかなり前から生産を開始していたがゆえに、彼らの船が帰還するまでは自分自身の毛皮事業を継続し、この猟で得た利益のすべてを獲得できるという規定 *polozhenie* を作成する必要があると考えました。それ以降は、彼ら自身はもはやこの事業に参入してはならず、違反した場合は事業に使用した財産を失い、会社の利益となります。本規則のその他の条項は、会社に入った利益の分配、イルクーツクにすべての業務を運営するための総本部を設置すること、そしてその監督下、各地に支部を設置すること、取締役の選出、宣誓、任務、会社によって作成された現在の証書に、全条項が効力を持ったまま、本規則により廃止されることなく、今後、事前に本参議会の検討に付したうえで、会社の見解にもとづく必要な補足を会社に許可すること、についてであります。

これらの規則を作成し、この規則に準じて、述べられた地域におけるあらゆる獲得、毛皮事業、交易、施設、新たな土地の発見、そしてこれらの遂行とかかわるその他の有利をも含むこの会社の特権<sup>36</sup>を提案し、これらの特権や規則そしてまさしく証書を本状に添付し、ご検討していただくために謹んで陛下にお送りする栄を賜ります。くわえて以下を謹んでご報告申し上げます。会

<sup>36</sup> 「規則」と「特権」の草案は АВПРИ, ф.РАК, д. 130, л.7-17 に保管されている。また、1799 年 1 月 11 日付商業参議会会議事録のテキストにも記載されている。РГАДА, ф. 1261(Воронцовы), оп. 1, д. 797, л. 2 об. – 11 об.を参照。

社の運営のために決定された本規則の要綱は、会社の参加者全員により署名された証書から借用され、あとは個人のみの利益ではなく全ロシア臣民の共通の利益と国益を原則として、新規参加者用に追加する株式にかんする内容を盛り込むだけでしたので、本参議会はこの件にかんし現在、会社に参加している者の意見を求める必要はないと判断しました。そうしたとしても、最果ての地との通信で無駄な時間を失うだけです。意見を受け取ったとしても、彼らにより署名された証書の決定事項と同様の内容が再度寄せられるにすぎません。以上、恐れながら本状を陛下のご意旨に委ねさせていただきます。

ピョートル・ソイモノフ<sup>37</sup>、イヴァン・ドリンスキー、アントニー・カシャリョフ、  
ピョートル・リトケ、ピョートル・イリインスキー、  
フェドセイ・パイコフ、セルギイ・ベネヴォレンスキー、  
ヤコヴ・ベリャフスキー、ダヴィド・ヴォロノフスキー  
秘書 ミハイラ・ブラガスクロノフ

(1) АВПРИ, ф.РАК, д. 130, л.1–6 об. 原本、ロシア語。[史料集⑩編者による注]Архив Государственного совета, т. I–V. СПб., 1869–1904, т. II, с. 516–521 として刊行されている。

(斎藤由佳・畠山禎 訳)

#### 10. イルクーツク県知事 A.I.トルストイ<sup>38</sup>から元老院総裁 P.V.ロプーヒン公爵<sup>39</sup>への文書。イルクーツクに在住する日本人の祖国送還について

1799 年 1 月 18 日

イルクーツク

慈悲深きピョートル・ヴァシリエヴィチ[・ロプーヒン]閣下

歩兵大将であられる帶勲者フォン・トレイデン氏より私が引き継いだ諸件のうち、さる 1795 年、アレウト列島よりリュリリスク名誉市民故シェリホフの船でオホーツクに移送された 15 人にかんする件の遂行が私の任務となりました。彼らのうち 1 人は、ヤクーツク滞在中の 1796 年 11 月に死亡しました。彼らについては、当地の前県知事ナゲリから亡き女帝陛下に宛てた 1795 年 10 月 24 日付および 1796 年 3 月 16 日付の、そして前元老院総裁サモイロフ伯爵様とアレクサンドル・アレクセエヴィチ・ベズボロトコ公爵様に宛てた同日付の、彼らについてしかるべき解決を

<sup>37</sup> 【編訳者補注：P.A.ソイモノフ——商務委員会委員、1796 年より国家評議会議員】

<sup>38</sup> 【編訳者補注：A.I.トルストイ——イルクーツク県知事(1798～1800 年)】

<sup>39</sup> 【編訳者補注：P.V.ロプーヒン——元老院総裁(1798～99、1803～10 年)】

請う文書があります。

彼らの給養にはいかなる費用も支出されておりましたので、彼らを当方へ移送後、上述の県知事ナゲリ氏が、彼の裁量下にある中国人関係の国境警備費から一部を支出して彼らを外国人として給養することを決定しました。そして、現在は 14 人の日本人全員が支給を受けています。彼らとの関係で、当時、イルクーツク総督の任を命じられていた、陸軍中將(現三等文官、元老院議員)であられる帯勲者セリフォントフ氏は、国有船あるいは商人の船にて日本人を彼らの祖国へ送還することにかんする、1796 年 7 月 28 日にセリフォントフ氏に与えられた勅令をこのイルクーツク県知事ナゲリ氏に通知しました。これを遂行するにあたり、オホーツク港に停泊する国有船にかんする情報、また海事共同出資者からの要望の聴取、すなわち誰かが、船主およびその他の商人が日本交易のために自分たちの商品を発送可能な自分たちの所有船にて、この日本人たちの祖国送還を引き受けてくれないか情報を求めています。

県知事氏は、上記にかんする情報を収集し、商人たちからも回答を得ました。彼らは、日本人たちの祖国への送還を引き受けることには同意しておりますが、彼らへの国有船の提供を条件としております。県知事氏は、同 1796 年、上述の陸軍中將セリフォントフ氏に本件についての詳細な説明を添えて情報や回答を提出しましたが、これに対してはいかなる決定もなされませんでした。一方、国家商業参議会は、参議会が受信した日本人たちにかんする往復書簡について結論を下さなくてはなりませんので、1797 年 9 月 14 日付通信の中で、「日本人たちを日本へ送還する計画において、一部のイルクーツク商人が日本交易を試みるべく資金を拠出する予定である。まさしく誰がこれへの参画を希望しているのか。彼ら一人一人がどれだけの金額を拠出するつもりなのか。彼らはこの計画を持ち続けているのか」、この県知事に対して情報をお求めになりました。このような情報が、歩兵大將であられる帯勲者フォン・トレイデン氏から 1798 年 11 月 2 日付で国家商業参議会へ発信されました。

さる 1792 年における遠征の例にならった、やはりかの地への日本人移送を目的とした遣日使節団は、最高権力のご許可次第であります。しかしながら、どのようにして上述の日本人たちが自分たちの祖国を失ったのか、海上でどのような漂流を余儀なくされたのか、そしてどのようにしてロシアに救出されたのか、当方から閣下にご説明申し上げなくてはなりません。彼らのうち 2 人はギリシア正教を受け入れ、3 人目のタミノスケ・ドイヤという名の者もキリスト教への入信を心から望んでいることとお読み取り下さい。したがって、先回の例にならい、彼らはもはや自分たちの祖国に二度と戻れません。最初の 2 人は国庫からの給養ではこれ以上、滞在できません。もう一人も彼自身の望みが叶うのであれば、これから彼ら 3 人全員にどのような人生を送らせるべきでしょうか。閣下からの慈悲深きご決定をお願い申し上げますとともに、滞在している日本

人たちが自分たちの祖国に送還されずにいる間、イルクーツク県出納局が、予測不能な支出用に毎年配分されている費用から彼らに給養費を支給するようご命令いただけませんか。中国人との関連で私の裁量へ割り当てられている年 1,000 ルーブルは、切実な必要のために不可欠だからです。あるいは、1789 年 6 月 13 日付で発せられた元老院命令にもとづき、これらの日本人たちが自分たちの労働によって十分生活できるようにさせていただきませんか。最後に、私の心からの尊敬と深き献身の念とともに、申し上げます。

慈悲深き閣下

閣下の恭順なる僕

アレクセイ・トルストイ

(6) РГИА, ф. 1374, оп. 1. д. 236, л. 65–66.

(横井幸子・畠山禎 訳)

11. イルクーツク県知事 A.I.トルストイからの情報。アレウト列島で船が難破し、遭難した日本  
の<sup>シャンドイグーベルニア</sup>仙台県[藩]の住民 15 人について

1799 年 2 月 18 日

アレウト列島よりオホーツクへ移送された 15 人の日本人にかんする説明

彼らはみな、日本国の首都江戸のロシア側にある仙台県の臣民です。彼らの名前は、1 人目が水夫で、同県農民出身のジェンゾシェガレ・ヘベスダヤ[ゼンゾウのせがれ、スダヤ・ヘエベエ]\*、2 人目はタツゾ・サクラヤ\*\*、3 人目はサジソボロ・アベヤ、4 人目はショーズー、5 人目はミノスケ、6 人目はムロノハマ町のイジゴロ [イチゴロウ]、7 人目はギフェ[ギヘエ]、8 人目はコダゲハマ町のタジュロー、9 人目はキジロージ、10 人目はサタヴァハマ町のモジフェ[モジヘエ]、11 人目はツンダユ [ツダユウ]、12 人目はサダユ、13 人目はタミノスケ、14 人目はサフェ[サヘエ]、そして 15 人目がジンザプロです。彼らはさる 1793 年 11 月 29 日\*\*\*、仙台県に雇われ、県の船で<sup>イシノマキ</sup>石巻という名の停泊地から首都江戸に送り出されました。石巻から江戸までは日本の単位で 170 里、ロシアの単位で 979 露里離れており<sup>40</sup>、かの地に滞在している県知事の家族と屋敷に駐在する軍隊の食糧用に、日本の単位で 2,332 俵、ロシアの単位では 9,328 プードの米を積んでいました。日本人の古くからの慣習では、県知事はみな君主からは何も借用せず、県自体の収入で県全体を賄うばかりでなく、首都の屋敷に駐在する軍隊にも支給していたからです。県知事は首

<sup>40</sup> 【編訳者補注: 以下、石巻と仙台の距離、石巻から遭難地点の距離について、日本の長さ単位(里)とロシアの長さ単位(露里)の換算基準が異なっている】

都に屋敷を所有し、妻と家族全員をずっとそこに留め、一年おきに彼らのもとに赴きます。日本人たちは、停泊地から 40 里、ロシアの単位ではおよそ 113 露里離れたところで、向かい風のために 12 月 2 日まで錨を下ろして留まりました。引き返そうと考えましたが、引き返している途中で暴風が発生し、舵が破損し、帆も引き裂かれてしまったので、彼らは帆柱を折り、積荷の 4 分の 1 を海中へ投げ捨てざるをえませんでした。12 月 5 日には陸地が見えなくなりました。その後、彼らのところではたいい側面に設置されている艀口が強い波で破損し、7 日から 13 日までは風の中で漂っていましたが、その後ふたたび強風で船尾が破損し、船はもはやまったく操縦できない状態で、1794 年 2 月 2 日まで漂流しました。この間、彼らは積荷をさらに投げ捨てました。真水が不足したときには、大雨に恵まれました。その一方で、船内に残っていた帆柱の横木から帆柱を作りました。舵を取り付け、小さな帆を修繕し、吹く風のままに海を漂流しました。日本の航海者たちは航海中に船の位置を推算しないので、船がどこにいるのか分かりませんでした。1794 年 5 月 10 日、彼らは島と小さな停泊地を見つけました。そこに近づき、錨を下ろしました。そこに同月 30 日まで停泊し、真水を探し求めて船載艇<sup>ボート</sup>で岸へと向かいましたが、人どころか、なにかの獣さえも見かけませんでした。同日中に錨を上げ、別の場所に行って誰か人に会おうと考えておりましたが、突然、猛烈な風が発生し、あまりにも多くの水が流れ込んだので、やっこのことで船にたどり着きました。船の錨を下ろし、6 月 4 日、風が収まってから、彼らは船載艇に乗って船を離れ、岸に沿って西へと漕いで行きました。同日、島民に出会いました。マトマイ島に住む、かの地の県知事の臣民であるクリル人だと彼らは考えましたが、会話をしても彼らの言葉がわからなかったなので、後になってアレウト人だと分かりました。そこに 6 月 16 日まで滞在しましたが、この地で仲間の一人ジェンログが病氣にかかり、11 日に死亡し、失いました。というのは、彼らは全員で 16 人だったからです。一方、アレウト人からもたらされた情報を聞きつけて、この地にロシアの毛皮業者が到着し、彼らを船載艇に乗せてロシアの港まで連れていきました。このロシアの港から、残された船を見に行きましたが、船はその骨組みまで壊れてしまっていて、そこから錨を 2 本だけ取って引き返しました。そうこうしているうちに、亡きシェリホフの会社船が、ギリシア人航海者デラロフの指揮下、到着しました。彼は自分の食事と衣服を提供し、1795 年 4 月 4 日まで面倒を見たのち、[彼らを連れて]オホーツク市に向けて出発し、6 月 28 日に到着しました。彼らは 8 月 12 日までやはり彼の負担で養われておりましたが、この日以降は国庫からの給養を受けて滞在しておりました。

(原文の注)

\* 1796 年 5 月 18 日、24 歳のときイルクーツクでギリシア正教に入信し、教父イルクーツク商

人ステパン・フォードロフ・キセリョフ、教母イルクーツク商人アンドレヤン・キセリョフの妻、未亡人アンナ・ヴァシリエヴァによってピョートル・ステパノフ・キセリョフと名づけられました。

\*\* 1796 年 5 月 18 日、21 歳のときイルクーツクでギリシア正教に入信し、教父コンドラトフ大尉 sekund-maior、教母リュリスク名誉市民シェリホフの妻、未亡人ナタリヤ・アレクセエヴナによってアンドレイ・アレクサンドロフ・コンドラトフと名づけられました。

\*\*\*日本の暦では、日本の<sup>イムペラートル</sup>天皇[徳川家斉]の治世第 7 年 11 月 29 日にあたります。

アレクセイ・トルストイ

(6) РГИА, ф. 1374, оп. 1, д. 236, л. 67–68.

(横井幸子・畠山禎 訳)

## 12. 元老院総裁 P.V.ロブリーヒンから皇帝パーヴェル一世への上申書。イルクーツクに滞在している日本人の祖国送還について

1799 年 3 月 8 日

イルクーツク県知事トルストイは、彼の前任者から彼が引き継いだ諸件のうち、暴風によりアレウト列島の一島に漂着し、さる 1795 年にこの島からオホーツクに移送された 15 人の日本人にかんする件の遂行が彼の任務になったと報告しました。前イルクーツク県知事セリフォントフは、1796 年 6 月[7 月の誤り]28 日、日本人たちを国有船ないしは商人の船で彼らの祖国まで送還すべしとの陛下の命令を受けました。イルクーツクの商人たちは、この日本人たちの送還を引き受けることに同意しました。ただ、彼らに対する国有船の提供を条件としております。

一方、この機会に、イルクーツク商人たちが日本交易を試みるべく資金を集めようとしておりましたので、商業参議会は商人たちがこの意志を抱き続けているのか、彼らのうちまさしく誰がそれへの参画を望んでいるのか、情報を提供するよう要求しました。そのような情報がさる 1798 年にも商業参議会に届けられましたが、日本人たちの送還について最終的な決定にはまったく至りませんでした。補足として県知事は、日本人たちのロシア滞在中、彼らのうち 2 人がキリスト教信仰を受け入れて洗礼を受け、さらにもう 1 人がやはりわれわれの[神の]掟に加わる希望を持っていると報告し、この最後の者が自分の望みを叶えてもよいのか、そして彼ら全員にどのような人生を送らせるべきなのか決定を求めています。その一方で、彼らの送還が決定されるまでの

間、イルクーツク県出納局が彼らを毎年配分される特別支出費で給養するよう求めています。彼の裁量下にある中国人関係の諸件のための年 1,000 ルーブルは、これまで彼らの給養に支出され、彼にとっては切実な必要のために不可欠だからです。あるいは、彼らが自分たちの労働で生活する許可を求めています。

以上につきまして、陛下にご報告する栄を賜り、本件につきまして君主であられる陛下のご許可を県知事に賜りますようお願い申し上げます。

(6) РГИА, ф. 1374, оп. 1, д. 236, л. 69–70.

(横井幸子・畠山禎 訳)

### 13-1. 元老院総裁 P.V.ロプーヒンから商業参議会議長 P.A.ソイモノフへの文書

1799 年 3 月 30 日

慈悲深きピョートル・アレクサンドロヴィチ[・ソイモノフ]様

イルクーツク県文官知事である四等文官トルストイが、1796 年に暴風によりアレウト列島に漂着した 15 人の日本人の日本送還にかんする件と関連して、商業参議会が現地の県知事に対し、イルクーツク商人たちは日本人の祖国送還を引き受けることに同意し、この送還の機会に日本交易を試みるべく資金を集めたいと考え続けているのか、まさしく誰がそのような考えを持っているのか情報を求めている、と通知してきました。これに対し、すでにさる 1798 年 11 月 2 日、前イルクーツク県軍務知事フォン・トレイデンから商業参議会に返信がなされました。

本件にかんし今後何かを遂行するためには、商業参議会がこの返信に対して何を決定したのか、情報が必要ですので、慈悲深き貴殿に本件の全容を私に通知いただきますようお願い申し上げます。なくてはなりません。

ともあれ(略)

(6) РГИА, ф. 1374, оп. 1, д. 236, л. 71. [史料筆写者による注]文書は大雑把で、読み易さに欠ける筆跡で書かれている。単語は省略され、文末では慣例的な結びの文が欠けている。

(横井幸子・畠山禎 訳)

13-2. 商業参議会議長 P.A.ソイモノフから元老院総裁 P.V.ロプーヒンへの文書。日本人 15 人の送還にかんする件の遂行について

第 577 号

1799 年 4 月 3 日

慈悲深きピョートル・ヴァシリエヴィチ[・ロプーヒン]公爵様

暴風によりアレウト列島に漂着した 15 人の日本人を彼らの祖国に送還し、この地との交易を試みるというイルクーツク商人ならびに他都市出身の商人たちの意図にかんする情報を送付されたし、との公爵閣下のご要望にお応えし、本状とともに本件の全容にかんする文書をお送りいたします。この文書により、本件が皇帝陛下のご命令により海軍大将グリゴリー・グリゴリエヴィチ・クシェリョフ伯爵<sup>41</sup>に送付されたことに公爵閣下はお気づきになられるかと存じますが、本件について何が遂行されたのか商業参議会では把握いたしておりません。そのうえで、本参議会は米会社の創設にかんする恭順なる上申書を提出する許可を待っていたために、本件のさらなる遂行を中止していたこと、そして会社が創立したあかつきには、もはやかの地の毛皮事業全体を会社自体の管理に完全に置くであろうがゆえに、上述の日本人送還とこの地との交易の樹立もより好都合かつ確実に遂行できると考えておりましたことを、公爵閣下にご報告申し上げなくてはなりません。

真の尊敬と完全なる献身の念を公爵閣下に永遠に抱き続ける光栄を有します。

慈悲深き閣下

恭順、従順なる僕

ピョートル・ソイモノフ

(6) РГИА, ф. 1374, оп. 1, д. 236, л. 72. [史料筆写者による注]左側の余白につぎのメモがある。

「クシェリョフ伯爵に手紙を書くこと」。

(横井幸子・畠山禎 訳)

<sup>41</sup> 【編訳者補注: G.G.クシェリョフ——海軍大将(1799 年)、パーヴェル一世の侍従武官長(1799 年)】

13-3. 日本人 15 人の祖国送還にかんする件の推移と関連した、元老院総裁 P.V.ロプーヒンからの  
1799 年 3 月 30 日付照会に対する商業参議会の回答

1799 年 4 月 3 日

計画されている日本人の祖国送還についての文書

前元老院総裁、二等文官であられる帯勲者アレクセイ・ポリソヴィチ・クラキン公爵様は、1797 年 8 月 11 日、米会社にかんする情報、そして今は亡き女帝陛下のご命令にもとづいた、船の難破によりアレウト列島の一島で発見され、オホーツクに移送された 15 人の日本人の祖国送還およびこの地との交易樹立にかんするイルクーツク商人および他都市出身商人の計画書 4 通を私に送付いたしました。

これらの計画書のうち、第一のイルクーツク商人キセリョフの計画は、一株あたり 200 ルーブルの株式で日本会社を設立し、最初[の航海で]は日本人の送還およびかの地に発送される商品の積載のために国有船を彼に提供する、というものです。第二のイルクーツク商人および町人 34 名\*の計画は、日本人の送還を目的にやはり国有船、必要な航海者、船長を官費にて彼らに提供し、その船で試みに商品を発送し、今回の輸送が成功するまでは商人キセリョフにより提案されている日本会社の設立を保留とし、彼らの商品から得られる利益の国庫への分配もけっして要求しない、というものです。第三の、他都市出身の商人および町人 3 名\*\*の計画は、商人キセリョフ作成の規定にもとづき、彼らはイルクーツク商人たちの会社への参加に同意する、というものです。第 4 の貴族シェリホヴァの計画は、船の価値を評価し、国庫に相違なく返還すべく一株 2,000 ルーブルの米会社株をしかるべき数量、彼女から徴収し、そのうえで国有船を索具類や食糧一切とともに彼女に提供し、船には国家海軍勤務員を 10 名提供し、これらの者たちとともに彼女は日本人や必要な商品を送り出し、この事業に他の参加者も誘う、というものです。

これらの計画や前イルクーツク県文官知事であられる三等文官セリフオンツ氏の文書をもとに、上述の元老院総裁は文書を作成し、皇帝陛下に上奏し、ご判断を仰ぎました。その際、ペトロバヴロフスク港にはナジェーダ号という名の国有船があり、この船は最良かつこの派遣に最適な船のうちの一隻で、これを使用するには資金だけが必要である旨を上申いたしました。この上申にもとづき、陛下は以下を命令なされました。本件と関連する文書をすべての添付書類とともに、侍従武官長、現海軍大将グリゴリー・グリゴリエヴィチ・クシェリョフ伯爵様に送付すべし。くわえてクシェリョフ伯爵は彼すなわち元老院総裁に対し、本件についていかなる指令が出されるのか通知すべし、と。かくて、本件は本年 3 月 21 日、クシェリョフ伯爵に送付されました。

以上への補足として、商業参議会がイルクーツク県知事たち、そして最終的には歩兵大将であ

られる帯勲者フォン・トレイデン氏に求めたさまざまな情報のうち、上述の商人たちが日本人たちの祖国送還とかの地への商品発送のために資金を拠出することについて、従前の意志を持ち続けているのか知る必要があると、同参議会は彼[トレイデン]に表明しました。これに対し、昨年12月20日、彼より本参議会宛てに通知が、イルクーツク市長から彼に提出された報告の写し、そしてこれに添付された、前回の署名者たちから新たに集めた4通の誓約書の写しとともに寄せられました。誓約書のうち一通目では、イルクーツク商人9名が\*\*\*、自分たちは米会社に参加したので、この会社の方針に沿って行動せねばならず、これまでの企画にもはや着手できないと表明しました。2通目では、商人すなわちヤクーツクのポポフ、ヴェルフネウディンスクのシェヴェリョフ、イルクーツクのシャボシニコフそしてアレウト列島に滞在している船の共同経営者たちが、毛皮事業と交易への1万ルーブルの拠出に署名しております。イルクーツクのキセリョフ2名とアンドレイノフは、彼らに国有船が提供されるか、ないしは米会社が自社船にて、ないしは他の者の船を購入することで日本への派遣に同意した場合は、株式を取得して共同参加者となることに同意し、事業に着手する用意があると表明しました。3通目では、20名の商人が\*\*\*、前回の自分たちの意志をすべて再確認しております。

これらの情報以外には商業参議会はいかなる情報も持たず、また上述のとおり陛下の命令により本件は海軍大将クシェリョフ伯爵様に送付されましたので、本件にかんし何が遂行されたのか関知しておりません。

(原文の注)

\* [商人]シビリャコフ、ムイリニコフ、スイズィイ4名、サルダトフ、メスニコフ、スタルツォフ、ミチュリン、スヒフ、リュチャゴフ、ズィシヒン、リトヴィンツォフ、アスタニン、サヴァテエフ2名、ドゥドロフスキー3名、トラペズニコフ、アプレルコフ、レザンツォフ、プロタソフ、ザイツォフ、ポポフ、ベレズィン、ダヴィドフ、メドヴェドニコフ、シェストゥノフ、キセリョフ3名、町人スイズィイ。

\*\* ヴェルフネウディンスク商人シェヴェリョフ、カルーガ商人ポルトノフ、ヤクーツク町人シャボシニコフ。

\*\*\* ムイリニコフ、スタルツォフ、ドゥドロフスキー3名、リトヴィンツォフ、ダヴィドフ、キセリョフ、オスタニン。

\*\*\*\* バジェノフ、シビリャコフ、スイズィイ4名、メスニコフ、サヴァテエフ2名、プロタソフ、レザンツォフ、サルダトフ、シェストゥノフ、トラペズニコフ、メドヴェドニコフ、アプレルコフ、ベレズィン、キセリョフ、リュチャゴフ、ズィシヒン。

(6) РГИА, ф. 1374, оп. 1, д. 236, л. 73–75 с об.

(横井幸子・畠山禎 訳)

14-1. 元老院総裁 P.Kh.オボリヤニノフ<sup>42</sup>から商業参議会議長 G.P.ガガーリン公爵への文書。イル  
クーツク商人の日本交易について

第 8166 号

1800 年 8 月 10 日

慈悲深きガヴリロ・ペトロヴィチ[・ガガーリン]公爵閣下

イルクーツク県軍務知事である歩兵大将レッツァノ<sup>43</sup>は、以下を私に通知しました。すなわち、  
1795 年にアレウト列島からオホーツクへ商人シェリホフの船で移送された 15 人の日本人のうち、  
二人がギリシア正教を受け入れ、他の 10 人は帰国する予定であり、商業参議会がイルクーツク商  
人に対し日本への商船の出航を許可することだけを待っています。彼ら商人につきましては公爵  
閣下にすべての情報が 1798 年 11 月 2 日付、1800 年 3 月 12 日付で送付され、その際、改宗した  
日本人をどの種の人生に就かせるべきなのか、また指令を待っている間、送還される者をどのよ  
うにして給養するのか決定を求めました、とのこと。よって、イルクーツク商人の日本交易  
について商業参議会が何を遂行なされたのか、本件がまもなく完了となるのか、私にご通知を賜  
りますよう貴殿にお願い申し上げます。

完全なる尊敬の念を抱く光栄を有します。

慈悲深き公爵閣下の従順なる僕

ピョートル・オボリヤニノフ

(6) РГИА, ф. 13, оп. 2, д. 298, л. 16 с об.

(オイドフ・バトバヤル、畠山禎 訳)

<sup>42</sup> 【編訳者補注: P.Kh.オボリヤニノフ——元老院総裁(1800～01 年)】

<sup>43</sup> 【編訳者補注: B.B.レッツァノ——イルクーツク県軍務知事(1798～1800 年)】

14-2. 商業参議会官房への文書。1795 年にアレウト列島よりシェレホフ[シェリホフ]の船で移送された日本人にかんする詳細な情報の送付について

第 3087 号

1800 年 9 月 11 日

商業参議会官房から商務大臣官房宛てに以下の詳細な情報を至急、ご送付いただきますようお願い申し上げます。1795 年にアレウト列島から商人シェレホフの船で移送された日本人のうち 10 人を帰国させる件について、また彼らのうちギリシア正教を受け入れた 2 人について、同参議会へまさしく誰からいついかなる文書が届いたのでしょうか。参議会より彼らにかんし何が、またいつ遂行されたのでしょうか。

(6) РГИА, ф. 13, оп. 2, д. 298, л. 3-4.

(横井幸子・畠山禎 訳)

14-3. 商業参議会議長 G.P.ガガーリン公爵より元老院総裁 P.Kh.オボリヤニノフへの文書。アレウト列島より移送された日本人の祖国送還にかんする情報について

第 3100 号

1800 年 9 月 12 日

慈悲深きピョートル・フリサンフォヴィチ[・オボリヤニノフ]様

閣下がイルクーツク県軍務知事である歩兵大将レッツァノから受信なされた、アレウト列島から移送された日本人たちを彼らの祖国へ送還し、この国家との交易を開設する計画についての通知と関連する、閣下の敬意を表すべき文書に対して、慈悲深き閣下に至急ご報告申し上げます。商業参議会と同前議長ソイモノフが取り扱った諸件の書類と照会しましたところ、本件は皇帝陛下のご命令にしたがい海軍大将クシェリョフ伯爵様に送付され、本件について何が遂行されたのか商業参議会は把握しておりません。閣下にご賢察していただくため、私は本件にかんする簡潔な文書を本状に添付いたします<sup>44</sup>。この文書は 1799 年 4 月 3 日、商業参議会議長ソイモノフより前元老院総裁ロプーヒン公爵に送付されました。これに、以下を補足する必要があると考えます。本件と関連して、イルクーツク県軍務知事より 1798 年 11 月 2 日付で私に届けられたとされる情報を、私は当時、まだ商業参議会を統括しておりませんでしたので受信しておりません。私が彼に宛てた、中国貿易をより良い状態にする適切な手段を見出す件についての文書に対する、彼か

<sup>44</sup> 【編訳者補注: 史料 No.13-2、13-3 を参照】

ら私に宛てた本年3月12日付書簡はありますが、そこでは補足として、この日本人たちを彼らの祖国へ送還することから生じる利益およびかの国家との交易開設について言及されているにすぎません。この書簡に4月26日付で彼に返答し、彼の考えと同意見であると表明し、そのような日本への送還は露米会社次第であり、この会社には閣下もご存知のとおり1799年7月8日に陛下よりご承認を賜った規則と特権が与えられ、皇帝陛下じきじきの庇護下であり、規則第12項にもとづきイルクーツクに設立された同社総本部が、会社の運営全般およびこの運営により収めた成功について直接、皇帝陛下に上申する、と通知しました。

ともあれ、真の尊敬と完全なる献身の念を抱きつづける光栄を有します。

慈悲深き閣下

閣下の従順なる僕

ガヴリル・ガガーリン公爵

(6) РГИА, ф. 1374, оп. 1, д. 236, л. 107-108. 写し。[史料筆写者による注]左側の余白につぎの注記がある。「クシェリョフ伯爵へ問い合わせること」。

(横井幸子・オイドフ・バトバヤル・畠山禎 訳)

#### 15-1. ロシア帝国大臣委員会における諸問題の審議

1803年2月20日

皇帝陛下の御前にて、1803年2月20日午後6時30分、一等文官とその次官を除く各大臣とその次官が、陛下の居室で委員会を開催し、以下の諸件を検討した。

(略)

(4) 商務大臣が2件の文書を読み上げた。

一通目は日本交易、二通目は広東交易にかんするもので、その中で商務大臣は、交易を首尾良く開始するために日本と広東に官吏を派遣することを提議した。両文書は皇帝陛下のご承認を得て、委員会で可決された。

皇帝陛下は9時半に委員会よりご退席なされ、会議は終了した。

ピョートル・ザヴァドフスキー伯爵

ニコライ・ルミャンツェフ伯爵<sup>45</sup>

アレクセイ・ヴァシリエフ伯爵

<sup>45</sup> 【編訳者補注: N.P.ルミャンツェフ——商務大臣(1802～1814年)】

V.コチュベイ伯爵

大臣次官チチャゴフ

(6) РГИА, ф. 1263, оп. 1, д. 2 (1803 г.), л. 34 об. 原本; АВПРИ, ф. С.-Петербургский  
Главный архив, I-7, оп. 6, 1802 г., д. 1, п. 2, л. 12.

(斎藤由佳・前田ひろみ・畠山禎 訳)

## 15-2. ロシア帝国大臣委員会における諸問題の審議

1803 年 3 月 27 日

皇帝陛下の御前にて、1803 年 3 月 27 日午後 7 時、一等文官を除く各大臣とその次官が、陛下の居室で委員会を開催し、以下の諸件を検討した。

(略)

(2) 商務大臣が以下を提議した。

計画中の世界一周航海への派遣、そしてこの派遣にかかわる 2 通の指示書、すなわち 1 通は上述の任務のために派遣される官吏に宛てたもの、もう 1 通は遣日使節団に登用される官吏に宛てたものにかんする報告。報告は陛下により承認され、署名された。一通目の指示書には、派遣される官吏がカムチャツカを視察する際、そこで何らかの重大な背任行為を見出した場合、これを停止させ、すべての不正と混乱を正すよう努力すべしと追加することが、陛下のご承認を得て委員会により決定された。特別支出への 2 万 5,000 ピアストルの割り当てが決定された。

皇帝陛下は 9 時に委員会よりご退席なされ、会議は終了した。

ピョートル・ザヴァドフスキー伯爵

ニコライ・ルミャンツェフ伯爵

アレクセイ・ヴァシリエフ伯爵

セルゲイ・ヴァズミチノフ

V.コチュベイ伯爵

ガヴリイル・デルジャヴィン

大臣次官チチャゴフ

(6) РГИА, ф. 1263, оп. 1, д. 2 (1803 г.), л. 41-41 об. 原本

(斎藤由佳・畠山禎 訳)

16. 商務大臣 N.P.ルミャンツェフよりアレクサンドルー世への上申書 (㊦No. 188)

第 4 号

1803 年 3 月 27 日

サンクトペテルブルグ

北アメリカの豊富な自然産物は、すでに久しく世界中の注目を集めてきました。先見の明ある優れた知性の持ち主だったピョートル大帝は、まさしく自然によりロシアに与えられた利益の確かさを予見しました。大帝はその利益への見通しをすでに定め、そのうちいくつかがこの大君亡きあと、称賛に値する彼の後継者たちによって実行されました。1728 年にはベーリング遠征隊が派遣され、1740 年、1741 年にはまさしくこのベーリングが佐官チリコフとともに初めて北アメリカ沿岸を北緯 55 度まで記録し、それによってその土地を永遠にロシアの領土としました。それ以降、私人がかの地へと航海の行先を拡げ、航海術や教養がまったく欠けていたにもかかわらず、もっぱら獣の毛皮猟からしばしば莫大な富を得て帰還しました。しかし時がたつにつれて、他の商業大国もこの商品に注目しはじめました。イギリスの栄えある航海者クックは、自国民にこの新たな商業領域を紹介しました。彼らはヌートカ・ズンド[ヌートカ・サウンド]へ自分たちの関心を集中させ、この地の獲得をあまりにも重視した結果、ここに居座ろうとするイスパニア人たちに宣戦布告しました。一方、ロシア人はアメリカの自国領を毎年訪れていましたが、民間の商取引は諸事情によりさまざまな変化にさらされ、われわれに事業の確立を一度たりとも約束しませんでした。シェリホフとゴリコフは最初の会社<sup>46</sup>を設立し、また前者は彼自身アメリカに滞在し、この地方に入植するための若干の基盤を整備したとはいえ、彼らが出した資金はこの地の広大さと比して不十分でした。多くの人びとの結束が求められ、そしてこれこそが現在、約 350 万ルーブルに達する商品、船舶、施設を有する露米会社設立のきっかけとなりました。

皇帝陛下のご意向により私が商務省の職務に就いた当初から<sup>47</sup>、私はこの機関[商務省]が商業の拡大にかなり配慮していると考えております。しかし、自然条件上、実現不可能なことが、この機関の成功をいつも阻んできました。ヤクーツクからオホーツクまでの物資輸送は困難を極め、せいぜい 5 プードの荷しか運べない荷馬で重量物を運搬するのは不便なので、錨をいくつかの部分に切断し、それらをオホーツクで溶接せねばなりません。運搬料は年々上昇し、この商業が会社にどんなに大きな利益をもたらしていたとしても、商業を一層、苦痛に満ちたものにし、ヤクート人はカムチャツカに駐屯する連隊用の食糧を一度輸送しただけで馬を失い、しだいに完

<sup>46</sup> 北東会社をさしている。この会社はシェリホフ家と I.I.および M.S.ゴリコフによって 1781 年 8 月に創設され、10 年間にわたりアレウト列島および北アメリカ地域において共同で毛皮事業を行い、「アメリカ沿岸および島に集落や要塞を築く目的で」活動した。

<sup>47</sup> ロシアの省はアレクサンドルー世の 1802 年 9 月 8 日付勅令によって設置された。ПСЗРИ, т. XXVII, с. 243–250 を参照。このとき、ルミャンツェフが商務大臣に任命された。

全な疲弊状態に陥っております。これらすべての事情により、会社にとっては自社の重量物をバルト海の港からアメリカに送るほうが比較にならないほど大きな利益をもたらすのですが、熟練した航海者の不足が新たな障害を生み出しています。会社が必要としている援助を与えるよう、今、陛下が政府にご命令いただけるならば、株主たちはすみやかに試みに着手します。彼らはイギリスにて430トンと450トンの2隻の船を購入し、世界一周航海に派遣する予定です。陛下のご治世の年代記はロシア国人によるこの最初の偉業で飾り立てられ、また君主の庇護下、ロシア国人は商業によっても彼らにふさわしい敬意を上流社会で勝ち取るでしょう。

会社の事業について陛下にご報告申し上げるとともに、この事業とかかわりのある大規模な商業の展望についても謹んで申し上げなくてはなりません。北アメリカにおける毛皮事業は、この豊富な毛皮を広範囲で販売可能な場所となる泉が発見されない限り、本来の利益をけっしてもらしません。私が知るところでは、北方の島々ではこの会社によってオットセイだけで百万枚以上の毛皮が集められましたが、キャプタにおいてオットセイ皮は、年6万枚以上は交換しません。中国では人口が多く、広く用いられておりますので、この獣の毛皮にかなりの金額を支出していますが、中国人はこれを広東にてイギリス人とボストン人から入手しております。アメリカで採取される鯨油もいずれは商業の重要な領域となるかもしれません。シベリアの北辺で産出されるマンモスの牙やアメリカで採集されるセイウチの牙も同様ですが、その売却先がありません。かの地の自然はまだ調査されておらず、商業の手段もなく、ロシアは宝の持ち腐れだと容易に推測できます。私はこれらの状況をすべて考慮した結果、国益のためにアメリカから獲得された物品を検討し、それらをまとめたうえで、広東での取引を開始し、日本およびその他のアジア地域との取引にも目を向けることが肝要であると考えます。これらの提案をすべて実施すべく、このたびアメリカに向かう予定の船団に、陛下がご存じで、この重大な計画を遂行するのに不可欠な能力や政治、商業の知識を備え、かつアメリカを整備するために民事にかんする必要な情報をすべて持ち、公正や熱意により皆から賞賛を得ている官吏を陛下がご任命いただけませんか。このような者を陛下による特別の庇護で激励し、日本宮廷への使節として用い、[1]793年に日本へ行った遠征<sup>48</sup>によって[日本] イムペラートル ナンガサキ 皇帝が長崎への船一隻の来航をすでに許可し、この幸運な成功で希望が与えられているがゆえに、ロシア帝国の威厳についてかの地の宮廷に礼節をもって正しく理解させ、かの地において交易の確固たる基盤を築くようこの者に委ね、またこの目的で使節団に必要な人員や贈り物を彼に提供するようご命令いただけませんか。さらに使節団の任務遂行後、アメリカを視察し、ロシアの統治地域について詳細な記述を作成し、学者と画家を提供して風景を描写させ、この地方の全容にかんする正確な報告を携えて帰還するよう命じてい

<sup>48</sup> 1792～1793年に行われたラクスマンの日本遠征をさしている。

ただけませんか。この提議が陛下の意に沿うのであれば、2 通の指令書を謹んで陛下のご裁量に委ねます。これらの指令書は、2 つの課題にかんしてこの官吏に宛てて作成されたものであり、この者による遠征の詳細を含んでおります。

またこの機会に、優れた才能ゆえに陛下の覚えがめでたく、中国宮廷との国家間の通信によってこの分野にかんする必要な情報をすべて把握している官吏を北京にも派遣するよう、恐れ多くもお願い申し上げます。この者は北京にて、当地から北アメリカへ初めて船を派遣することを口実に、船に必要なが生じた際には中国の港で友好的な援助を与えるよう要請し、広東交易についてもかの地の政府に対し、すべてのヨーロッパ人が交易と関連して得た許可と同様のものを、かの地へ大量の毛皮が運び込まれることで、中国人自身が利益を多く得ることを十分認識させたうえで中国人に求めるよう命じます。この提議が期待される成功を収めた場合、ロシア領アメリカの集落には毛皮、獣脂、魚、その他の自然産物をさまざまな場所で売却する展望が開け、集落は学問や芸術に通じているさまざまな種の人びとを引き寄せ、彼らは金属、皮革、その他の工場の設立に着手し、こうしてかの地に徐々に芸術家や手工業者の団体が形成され、これらの集落からついには町が生まれ、それらによってこの地方はまったく違った様相を得るでしょう。時をへて、両インド[インドとアメリカ大陸]との交易は確固とした基盤を得るでしょう。

商務大臣ニコライ・ルミャンツェフ伯爵

アレクサンドル一世の書き込み。裁可。 サンクトペテルブルグ、1803 年 3 月 27 日。

(1) АВПРИ, ф. С.-Петербургский Главный архив, I-7, 1802 г., д. 1, п. 2, л. 17-22. 原本、ロシア語。[史料集⑩編者による注]Внепшняя политика России XIX и начала XX века. М., 1960, т. 1, с. 403-405 として刊行されている。

(斉藤由佳・畠山禎 訳)

#### 17-1. 露米会社総本部からの指示の草稿<sup>49</sup>

[1803 年]

(略)

3. 本状に添付された G という文字が付された写しが、ロシア商業にとってまったく新しく、重要かつ有益な事態を貴殿に明かすだろう。その事態とは、日本宮廷への栄えある使節団という賢

<sup>49</sup> [編訳者補注：マリシェヴァとボズナンスキーにより文書の一部だけが収集されたこの史料は、露米会社総本部が A.A.バラノフに宛てた指示の草稿と推測される]

明なる任務である。全権大使として使節団長には、貴殿も存じているセリホフ[シェリホフ]家の親族、故グリゴリー・イヴァノヴィチの娘婿で、帝室侍従長、聖アンナ二等勲章帯勲者、イェルサレム洗礼者聖ヨハネのマルタ大十字名誉騎士団長勲章<sup>50</sup>帯勲者であるニコライ・ペトロヴィチ・レザーノフ閣下が抜擢された。レザーノフ閣下とともに、前述の船のうち1隻、すなわちなジェージダ号に、陛下が会社の負担からご自身の負担へとお引き受けなされた、乗組員の2年間分の俸給と食糧、そしてその他の備蓄一切を積載して、使節団の貴族身分出身者4名と学者10名、たとえば技師、教授すなわち天文学者、鉱物学者、博物学者、医師、画家、そしてかくも重要な本事業に有用かつ不可欠な人びとが出発する。この使節団の目的は、船の難破によりアトハ[アトカ]島から移送されてすでに8年がたつ数人の日本人を送還する際に、貴殿も存じているとおり、やはり不運な日本人たちを伴って派遣されたラクスマン氏に対して日本帝室から与えられた書状[信牌]にて、ロシアと日本との間で相互的な商業を確立し、この航海において、他地域および両インドでロシアが商業活動を行う際にも有用となりうるものをすべて検分するという観点から、できるだけ緊密な関係を結び、交流を深めることにある。このまたとない機会に皇帝陛下がどのような決定をなされたのか、貴殿の関心は高く、興味深いだろうが、それはいまだ公式に発表されておらず、総本部自身がまだそれを入手していないので、今回それを貴殿に送付できない。Vの文字が付された上述の写しからGの文字が付されたこちらの写しへと目を移していただければ、レザーノフ閣下の任務のために作成された非常に明確な計画を見出すだろう。この計画は、総本部の側から会社の全権を委ねられて、貴殿に委ねられた地方においてすべてを設立し、整備し、改善するというものであり、それは将来の政治関係にも大きな利益となりうるだろう。それゆえ今回、本件について事前に通知を受けた貴殿は、この計画のために一切を全面的に準備なされるようお願い申し上げます。それは、かくも高名かつ会社自身の課題にとっても重要で、諸事情から会社にとって信頼に足る客人たちを受け入れるべく、貴殿ができる限り、上述のとおり貴殿のもとで平穏かつ豊かな滞在を彼らに提供するためであり、また貴殿の力に合わせて、この滞在を彼らの性格や会社の体面に相応させるようにするためである。本件と関連して、全体の幸福に対する貴殿の熱意を理解している総本部は、貴殿に十分な供給を行う予定である。貴殿はこの計画の中に以下を見出すだろう。すなわち、第2項でも述べたように使節団は日本での任務を完了後、カムチャツカに向かう。この地では、やはり陛下から上述のレザーノフ氏に対してこの地方を視察する任務が与えられている。かの地の民は援助が行き届いていないがゆえに貧しく、多くの不足が生じているという観点から、この地方を整備できたならば、カムチャツカに滞在してから貴殿のもとへ到着するだろう。この使節団の前に、ネヴァ号が貴殿のもとに到着する。その指揮官

---

<sup>50</sup> 【編訳者補注：イェルサレム洗礼者聖ヨハネ勲章第一等】

にかんしては、上で添付された指示で説明したとおり、貴殿はこの者もしくはこの者が任命する誰かを利用できる。一方、当社にとって有用な探索、そして貴殿が必ず果たさなくてはならない何かその他の任務のために、貴殿には別の船が予定されているので、貴殿に何か必要が生じた場合、民間会社の仲買人としてではなく、北アメリカ地方総支配人の称号を持つ帝国官吏として行動されたし。誇りを持ち、勤務を熟知し、豊富な経験をもとに知識を吸収し、参謀将校の官位を持つ者にふさわしい礼節が求められる今回の貴殿の交流を考慮して、陛下は自らこのような称号を貴殿に賜ったのだ。総本部は上述の船舶の両艦長に対し、タリンと同様の行為がなされることをもはや予期していない<sup>51</sup>。このような行為にかんしては、貴殿との間にあった通信について海軍参議会にてこの者から事情を聴取したうえで、貴殿に対する無礼や不服従により、会社の主張にもとづき彼は必ずやしかるべく処罰されるだろう。日本使節団が貴殿のもとから帰還したならば、先に添付された A という文字が付された当本部の恭順なる上申書に対して出された皇帝陛下のご意向に何よりも沿って、両船にて広東に向かわなくてはならない。これはかつて故シェリホフがすでにあたため、のちには現在の会社構成員が持った意向にもとづいた商業的展望にも沿うものであり、そして何よりも現在、上述のラリオフ氏<sup>52</sup>への通知にあった貴殿の見解、貴殿が以前遭遇したボストン人および英国人による畏にかんする情報、これらの放浪者がどれだけ会社に魅了されているのかについての推測、そして当然、会社の利益に属する貴殿の視野によって、会社が鼓舞されているからである。現在の幸福な時代に実現しつつあるこの計画、そして発展中のあらゆる種類のロシア産業に留意しつつ、貴殿は助言や行動をもってこれを支援すべく準備し、貴殿のもとから遠征隊が帰還する際には、広東そして貴殿の地方における他の場所で交易を行うために、貴殿が見つけれられるだけの毛皮製品を遠征隊に必ず供給されたし。予期に反し、この 2 隻の船が到着するまでに、貴殿のもとからそれまで蓄えられていた毛皮が発送されていない場合は、本状に添付された特別目録に記されている当本部の指定にしたがい、毛皮の一部を発送し、やはりそこに記されて指定されている残りについては、この 2 隻の船でオホーツク経由にて送付されたし。これについて当本部にすべてを通知し、そして何よりも遠征隊が貴殿のもとに無事に到着する機会に居合わせたならば、陛下にご報告申し上げるべく情報を送付されたし。君主は全体の幸福にご配慮なされ、これまで君主の多くの愛顧を賜ってきた当社に格別のご関心があるからだ。これを遂行するために、貴殿の報告書と集められるだけの毛皮の荷を積載して、オホーツ

<sup>51</sup> 【編訳者補注：ロシア領アメリカにおける A.A. バラノフの活動にかんする、露米会社からアレクサンドルー世への 1802 年 7 月 29 日付上申書によると、G.T. タリンの強情と不服従により鷺号はチュガチ海岸付近で難破し、5 人が溺死し、2 万 2,000 ルーブル相当の積み荷を失った(©Болховитинов Н. Н.(Отв. Ред.) Российско-американская компания и изучение Тихоокеанского севера, 1799–1815 гг.: сборник документов. М., 1994, с. 38 より)】

<sup>52</sup> 【編訳者補注：ラリオフ——露米会社ウナラシユカ支部管理人(1796～1806 年)】

クに向かう毎年の定期航路を開設したならば、これによって貴殿の地方にかんする情報をしばしば受信できるようになり、貴殿はきわめて大きな奉仕をしたことになるだろう。実を言うと、今回、政府は過去の諸件に対し貴殿が迅速に対応したことから希望を抱き、本条項の遂行を貴殿に期待している。貴殿から今まで3年間まったく情報を受け取らない上司が何らかの疑念を抱くこと、また参加する株主たちも新たな利益を見出さず、同様の考えに至ることを想像し、貴殿はこの提議は義務であると認識されたし。株主たちはこの利益のため、またすべての榮譽を貴殿と分かち合うために、何よりも当社に投資し、この資金によって会社の商業を上首尾に運営しうだけの信用が与えられ、今後も参加する株主がいるのだ。

4. 総本部は貴殿に対し、さらに2通の文書を添付する。すなわちDという文字が付された、以下に続く、オットセイの毛皮にかんする会社決議からの写し、もう1通はEという文字が付された、貴殿の関心のための、本日までの会社株主名簿の写しである。一通目からは、オットセイの毛皮が島々におよそ100万枚集められているにもかかわらず、当地やキャフタでは、以前輸送されてきたもののうちあまりにも少ない数だけが売却され、それゆえ述べるのも恥ずかしいほどで、また価格も4年程前はオットセイ皮が1枚につき6から7ルーブルで送り出されていたのに対し、せいぜい2ルーブルなので、会社は自分たちによってオットセイ皮が根こそぎ採集されている、いやそれどころか根こそぎ採集されたと感じていることを貴殿は見出すだろう。昨年輸送の際、支配人のポレヴォイ氏は貴殿とラリオノフに対し、この島々を休ませ、その一方で採集したオットセイの毛皮を売り尽くす予定であること、オットセイが生息する島々から人員を撤収させること、また彼らを貴殿のもとに送り届けることを通知した。[以下の文章は欠けている]

(6) РГИА, ф. 15, оп. 1, д. 1, л. 75–78 об.

(渡邊聞・小野寺歌子 訳)

## 17-2. 露米会社総本部より I.F.クルーゼンシテルンへの指示の草稿<sup>53</sup>

[1803 年]

(略)

### VII

使節団が皇帝陛下により課せられた日本での任務を完了後、貴殿の船にある会社の積荷、とり

<sup>53</sup> 【編訳者補注：本史料は、平川新監修、寺山恭輔・藤原潤子・伊賀上菜穂・島山禎編『ロシア史料にみる 18～19 世紀の日露関係』第 1 集、東北アジア研究センター叢書第 15 号、東北大学東北アジア研究センター、2004 年(以下、史料集第 1 集と表記する)No.13 の草稿の一部である】

わけカムチャツカ行きの積荷を届けなくてはならない。使節団の成功についても遅滞なく、できるかぎり最短の距離と時間で至急便を陛下にお送りすべきである。貴殿が世界を回ってこの地方に到着したことについても同様である。これらの事情、また遣日使節団に委ねられた任務同様、重要な、新たに続くであろう任務を使節団が受信するためにも、貴殿はまず日本からロシア領のカムチャツカ半島にあるペトロパヴロフスク港に直接向かうべきである。ここで会社の荷を降ろし、使節団の至急便を発送し、使節団に対し新たにあるであろう指示を受信するために必要な時間を過ごし、そこからリシャンスキー氏と合流すべくカディヤク島に向かわなくてはならない。

## VIII

日本からカムチャツカまでの貴殿の航海が、何らかの事情により順調に進まず、時間に遅れ、カムチャツカからの出航準備が10月以降に整うと予測される場合、この時期にはかの海上は激しく荒れることがあり、危険なので、当本部はペトロパヴロフスク港で越冬するよう助言する。しかし、貴殿が行わなくてはならない越冬をカディヤク島でするのが当本部は最も望ましいと考える。この地では、冬の間中、新鮮な魚、あらゆる野鳥を獲ることができる。さらにこの地では、自分の家にいるときのように貴殿と全隊員は何も失わず、気楽にあらゆる食糧が供給され、この機会をカディヤク島とその住民、会社の関連施設、そして貴殿が調査を行う価値のあるその他について詳細に理解するために利用できるだろう。しかしながら、貴殿の希望に反し、カムチャツカでの越冬を余儀なくされた場合、貴殿と全隊員、使節団員が必要とする物資が会社手代諸氏よりできるかぎり供給されるよう、現在、総本部は指令を出している。

## IX

リシャンスキー氏はカディヤク島にて1805年8月半ば以降は貴殿を待てないだろうし、またこの時期がその地からの帰路に最適なのだからそうすべきではないだろう。貴殿とその船が、何らかの不測の事態によりこの時期までにカムチャツカからカディヤクに到着できない場合について、あらかじめ彼に以下を命令されたし。カディヤク島にて上記の1805年8月半ばまで出発を遅らせたうえで、貴殿との合流地点として貴殿が彼に指定した集合場所へと復路を進み、またそこで彼がどれだけの時間、滞在しなくてはならないのか待ち時間を限定し、そこでもこの時間までに貴殿と合流できない場合はそこからの進路を行くべし、と。カディヤクから出発する際、バラノフ氏のもとにある毛皮製品からなる、かの地の会社の荷をすべて受け取られたし。しかしながら、彼[リシャンスキー]がカディヤクに滞在しなくてはならない間、この時間を無駄に過ごさないように、またバラノフ氏がかの地のどこかを視察し、記述する計画を立て、たとえば祖国と会

社のために必要な課題について彼に要望することがあるならば、その課題の重要性に応じて、自身の船あるいはかの地のバラノフ氏のもとにある船の一隻にて、彼が自分自身の誓約に従ってそのような観察旅行に着手するか、あるいは部下のうち最も信頼のおける者にその遂行を委ねるよう彼に命令されたし。

## X

観測旅行中、他国の領土にけっして立ち寄らず、またそこでは不快事や苦情のもととなるどのような小さな口実も彼らに与えないように。しかし、まったく思いがけず他国の領土に立ち寄ってしまった場合、そこでは外国人、また未開人もできるだけいつくしみ、どんなささいな疑念も起こさせないように。これについて彼[リシャンスキー]に必ず通知されたし。しかしながら、総本部は貴殿に対してもこの規則を推奨する。教養があり礼儀正しい人物であるお2人に対し、いかなるときでもできるかぎり分別と温和さを持って行動し、将来の利益のため、そして総じて国民の名誉と栄光のために、同胞に希望と成功の足跡を残すよう期待する。

## XI

総本部は、上記以外にも貴殿と遠征隊が休息する場所を想定しているが、必ずそのように遂行すべしとは要求できない。貴殿の旅行において起こりうるが、現在は予見できないあらゆる出来事を、貴殿の経験から培った知識や諸事情に委ねる。しかしながら、何の役にも立たず、まったく必要がないにもかかわらず、頻繁に停泊しないよう期待する。とりわけ貴殿においては、皇帝陛下により決定された遣日使節団の展望が開かれ、好機を逃がさず使節団を送り届けるべく貴殿が全面的に支援しなくてはならないときにはそうである。さらに総本部は、貴殿に対し以下に留意するよう要請する。すなわち、遠征隊がカディヤクに向かう航路を維持し(略)

(6) РГИА, ф. 15, оп. 1, д. 1, л. 152–153 с об.

(渡邊聞・小野寺歌子 訳)

### 17-3. 露米会社総本部からの指示の草稿<sup>54</sup>

[1803 年]

(略)

6. 日本に滞在中、かの地で何らかの取引を終結せざるを得ない事態が生じた場合、もっぱら将来のために経験を積み、結末を知るために、レザーノフ閣下じきじきの指令に従って取引を行い、この機会に貴殿が遭遇するであろうあらゆる事情をできるだけ注記し、しかるべきときに当本部に提出すべく文書を作成するよう努められたし。同様に、会社はどのような商品や物品を送付できるのか、とくに大きな利益をあげられるものは何か、したがって彼らからどのような商品や物品をどのような商品との交換で、あるいは金銭で受け取ることができるのか、どこで日本から得た商品を販売するのか、ここロシアでなのか、あるいはどこか別の場所でなのか、留意し、理解するよう努められたし。今回の試みとしての取引にどのような商品を貴殿に持たせて特別に送るべきなのか、これについては貴殿に与えられた送り状のなかで個別に記されている。会社の入植地ではクジラやその他の魚類の脂、タラその他の干物を豊富に、非常に好都合に入手できるので、これらすべての産物を、魚を他の食品よりも好んで食べる日本で売却可能なのか、またどのように、どんな値段で売却できるのか、この機会に貴殿が留意するよう本部は要請する。以上にとくに注意を払い、カディヤク到着後、ニコライ・ペトロヴィチ閣下およびカディヤク総支配人にこれらを提案し、考慮していただくようにされたし。(略)

(6) РГИА, ф. 15, оп. 1, д. 1, л. 173.

(渡邊 潤・小野寺歌子 訳)

### 18-1. 世界一周航海に派遣される I.F.クルーゼンシテルンの遠征隊および N.P.レザーノフの日本使節団の名簿

[1803 年]

遠征隊においてナジェーダ号に乗船する者の人数にかんする一覧から作成した名簿

#### 1. 艦長、海軍大尉クルーゼンシテルン

士官

<sup>54</sup> 【編訳者補注：マリシェヴァとボズナンスキーにより文書の一部だけが収集されたこの史料は、露米会社総本部が手代シェメリンに宛てた指示の草稿と推測される】

海軍中尉

2. ラトマノフ
3. ロンベルフ
4. ゴロヴァチョフ

海軍少尉

5. レーヴェンシテルン
6. ビリンガウゼン

航海士

7. 12 等カメンシコフ
8. 副航海士スボロホフ

医務員

9. 医学博士 エスペンベルフ
10. 医師 ジブガム

47 名の海軍下級勤務員

使節団員

1. 特命全権公使、侍従長、帯勲者レザーノフ

使節団の帯勲者

2. 七等文官フォッセ
3. 陸軍少佐フリデリツィイ
4. 近衛中尉トルストイ伯爵
5. 自然史教授、七等文官ティレジウス
6. 天文学者ゴルン
7. 芸術家、アカデミー会員クルリヤンドフ
8. 医学修士、九等文官ブリッキン

洗礼を受けていない日本人 4 名

日本語通訳官十四等文官キセリョフ

乗客

陸軍幼年学校生徒、コツェブ氏の子息 2 名

使節団付下級勤務員 3 名

会社手代シェメリン

毛皮事業者 7 名

---

合 計                    83 名

ネヴァ号

1. 艦長、海軍大尉、帯勲者リシヤンスキー一世

士官

海軍中尉

2. アルブゾフ

3. ポヴァリシン

4. コヴェヂャエフ

海軍少尉

5. ベルフ

航海士

6. カリニン

7. 見習いマリツォフ

医務員

8. 医学博士ラバイト

9. 医師見習いムトヴキン

10. 船匠職人コリュキン

11. 修道司祭ゲデオン

12. 会社手代コロビツィン

海軍下級勤務員 42 名

毛皮事業者 3 名

---

合 計                    57 名

---

総 計 140 名

(6) РГИА, ф. 15, оп. 1, д. 1, л. 188–189.

(渡邊聞・小野寺歌子 訳)

18-2. 世界一周航海に派遣される I.F.クルーゼンシテルンの遠征隊および N.P.レザーノフの日本  
使節団の名簿

〔1803 年〕

シンガイ ノ クニ <sup>グーベルニア</sup>  
仙台の国と呼ばれる 県 からの、病気にかかった日本人たち

1. ツダイ・年長者 乗船
  2. ギフェイ・オクダヤ[奥田屋] 乗船
  3. サフェイ・ドイヤ[土井屋] 乗船
  4. タジュロ・オクダヤ[奥田屋] 乗船
- 

洗礼を受けた者

7. ピョートル・キセリョフ 通訳官として乗船
8. イヴァン・キセリョフ
9. アンドレイ・コンドラトフ
10. セメヨーン・キセリョフ<sup>55</sup>

(6) РГИА, ф. 15, оп. 1, д. 1, л. 204.

(渡邊聞・小野寺歌子 訳)

---

<sup>55</sup> 5 番および 6 番の番号を付された日本人の姓名は線を引かれて消されており、解説は不可能と思われる。

18-3. 世界一周航海に派遣される I.F.クルーゼンシテルンの遠征隊および N.P.レザーノフの日本  
使節団の名簿

〔1803 年〕

ナジェージダ号乗船の遣日使節団

1. 特命全権公使、侍従長、帯勲者レザーノフ  
使節団内の帯勲者
2. 七等文官フォッセ、出納官を兼任
3. 陸軍少佐フリデリツィイ——技師
4. プレオブラジェンスキー連隊近衛中尉トルストイ伯爵
5. 自然学教授、七等文官ティレジウス
6. 天文学教授ゴルン  
芸術アカデミー会員 クルリヤンドツォフ
7. 自然史のための医学修士、九等文官ブリュキン
8. 剥製師

洗礼を受けていない日本人

9. ツダイ
10. ギフエイ
11. サフエイ
12. タジュロ
13. 通訳官、14 等文官ピョートル・キセリョフ

乗客

- 14, 15. 陸軍幼年学校生徒、コツェブ氏の子息 2 名

レザーノフ氏に所属する下級勤務員

16. 領主農民
17. 身分的に自由な料理人

ナジェージダ号の合計 84 名(兵士を含む)

ネヴァ号の合計 56 名<sup>56</sup>

(6) РГИА, ф. 15, оп. 1, д. 1, л. 205–205 об.

(渡邊聞・小野寺歌子 訳)

#### 19. フヴォストフの父から N.P.レザーノフへの手紙

1803 年 5 月 27 日

慈悲深きニコライ・ペトロヴィチ[・レザーノフ]様

閣下が、後世にまで語り継がれるために、またご自身の名誉のために成し遂げようとされている旅に出発する時が近づいてまいりました。ここに残り、閣下の無事のご帰還を願う者は、神が力と健康を授け、閣下の事業が成し遂げられることだけを祈っております。閣下がアメリカにいる私の息子をご自分の庇護のもとに置き、当方へと出発する船で彼に帰路の移動手段を与えてくださるならば、私は申し上げるまでもなく閣下に親としての感謝の意を持ち、私と妻は閣下に対してこの気持ちを今も、そして永遠に抱き続けるでしょう。

このような航海をつうじて、私たちと息子が会う機会を与え、またかかる大航海を遂行する、責任ある士官に息子を仕立て上げてくださることでしょう。それは今後長きにわたり、息子の勤務に役立つでしょう。

真の尊敬の念を永遠に抱き続けます。

慈悲深き閣下

従順なる僕

アレクサンドル・フヴォストフ

(1) АВПРИ, ф. С.-Петербургский Главный архив, I-13, 1803–1812 гг., оп. 10, д. 14, л. 1.

(斎藤由佳・小野寺歌子 訳)

<sup>56</sup> 6 番を付されて記載されたのは、当初「芸術家クルリャンドツォフ」だった。その後、線を引かれて削除され、6 番には 2 名の氏名が書き加えられた。細かい筆跡で「天文学教授ゴルン」、そしてやや大きく「芸術アカデミー会員クルリャンドツォフ」と記入されたのである。当然、当初 7～17 番と付された番号は 1 つずつ繰り下がる。ナジェージダ号乗船者の合計は 1 名分加えられて修正されている。すなわち 83 名が 84 名に訂正されている。これらすべては、遣日使節団がいかに入念に計画されたのか明瞭に示している。

【編訳者補注：ネヴァ号の乗船者は史料 No.18・1 では 57 名、史料 No.18・3 では 56 名となっている】

20. ナジェージダ号、ネヴァ号の世界一周旅行出帆に際して、露米会社理事会から N.P.レザーノフ使節団の日本派遣通告書と共に I.F.クルーゼンシテルン艦長に出された通達より

1803 年 5 月末

通達第 16 条の補足として理事会は、勲章保持者ニコライ・ペトロヴィチ・レザーノフ侍従が皇帝陛下[アレクサンドル一世]の命により特命全権大使として日本に派遣されるのみならず、加えて通商にかかわる一切の商品とロシア・アメリカ地方の開発が皇帝陛下からこの者に委ねられたことを通達する。我が社の設立当初からの代理人であり、皇帝陛下の全権委任者でもあり、かつ終始誠実にその利益のために尽くしてきたレザーノフに、航海中のみならずアメリカにおいても全権を与えることにより、理事会は心からの謝意を表したい。よって理事会はレザーノフに社の特別信任状を付与した。本通達の内容の一部は皇帝陛下の御意志に基づくものである。

航海中、貴下の技術、知識、経験を要する艦及び乗組員の管理保全については、すべての権限は貴下に属する。ただし理事会は貴下及び全士官が、祖国の利益と深く関わっている露米会社の利益に添うよう行動すること、レザーノフが社の利益と目的にかなうと判断した場合常に彼に従うことだけは守られるよう申し添えておく。なぜなら通商及び社の利益に関してレザーノフは管理者として全権を委ねられているからである。この件に関しては 1803 年 5 月 21 日、本理事会から皇帝陛下に報告された。

(7) Военский К. Русское посольство в Японию в начале XIX века (Посольство Резанова в Японию в 1803–1805 гг.) // Русская старина, 1895, октябрь, No. 10, с. 204<sup>57</sup>.

(藤原潤子 訳)

21. アレクサンドル一世のレザーノフへの勅書

1803 年 6 月 10 日

侍従レザーノフ殿！

日本との通商の面からもアメリカ地域の開発(当地の住民の運命は汝にかかっている)の面からも国益を約束する偉大なる事業に私は汝を推挙し、日本国 <sup>インペラートル</sup> 皇帝 宛の親書を汝に託すよう最高文官に命じた。また商務大臣には、上記二件に関して汝にしかるべき指示を与えるよう命じた。指示の内容はすでに私の了承済である。私も良く知っている汝のその能力と熱意によって、汝が着

<sup>57</sup> 【訳者補注：この論文には、日本語の抄訳がある：ウォエンスキ著、堀竹雄訳「十九世紀初年日本に於けるロシア使節」『史学雑誌』19・3,4,5、1907 年】

手したすばらしい事業が大きな成功を収めること信じている。そして、それがもたらす国益が汝に栄達の道を開くであろうことも。と同時に、私が汝により深い信頼をよせるようになることも疑いない。

アレクサンドル

(7) Военский К. Русское посольство в Японию в начале XIX века // Русская старина, 1895, июль, No. 7, с. 128.

(藤原潤子 訳)

## 22. N.P.ルミャンツェフから遣日ロシア使節 N.P.レザーノフへの指示より<sup>58</sup> (㊦No.191)

第4号

1803年7月10日<sup>59</sup>

サンクトペテルブルグ

皇帝陛下は慈悲深くも日本宮廷への使節として閣下を任命なされ、この目的のために閣下にすでに特別指示<sup>60</sup>を与えているが、一層のご信頼を閣下に置かれ、以下の条項で述べられている他の領域の遂行も閣下に委ねられた。閣下にとって光栄にも、祖国に忠実、勤勉なる息子である閣下が、帝国に荣誉と栄光をもたらし得るものを見逃さず、旅行から大きな利益が期待できるゆえに、この旅行をロシアの年代記において傑出した出来事にすべく閣下がすべての力と知識を間違いなく使うと陛下は確信しておられるからである。任務の内容は以下のとおりである。

### 1

アメリカへ向かうナジェージダ号とネヴァ号は、露米会社の商業を主要任務としている。これらの船は商業を目的に会社の負担で購入され、艀装され、十分な荷が供給されたのである。陛下はこの商業を庇護なされ、会社に将校と水兵を提供するようご命令なされた。さらに今回、遣日使節団を派遣し、使節団が乗船する予定の一隻[ナジェージダ号]の費用を君主の負担とし、またこ

<sup>58</sup> レザーノフは遣日使節に任命されたが、日本の宮廷は彼の接見を拒否し、ロシア政府からの贈り物や公式書簡さえも受領しなかった。指示の遂行が不可能となったため、レザーノフは1805年6月にカムチャツカに戻った。

<sup>59</sup> アレクサンドル一世が承認した日付にもとづいている。

<sup>60</sup> レザーノフに宛てた1803年7月10日付特別指示[日本語訳は史料集第1集 No.22を参照]の中で、ルミャンツェフは日本到着後、「回避できない危険がある場合を除き、長崎港以外のかの地のどの港にも接岸しないように」、と指令している。またこの指示において、レザーノフの船を訪れると考えられる日本宮廷の使者をどのように迎えるべきか事細かに説明している。この使者たちとの対談の大まかな筋書きも示されている。АВПРИ, ф. С.-Петербургский Главный архив, 1-7, 1802 г., д. 1, л. 28, л. 56-66. 一部が、Военский К. Русское посольство в Японию в начале XIX века // Русская старина, 1895, июль, т. 84, с. 132-136 として公刊されている。

の船の乗組員の 2 年分の給養も同様にご負担なされ、食糧その他の物品を積載したのちに積載可能な量の商品を積み込むことを慈悲深くも露米会社にお許しになられた。両船および会社の職務に就いている将校、下級勤務員は閣下の指揮下に委ねられた。貴殿が全権代表を委ねられている会社の利益を考慮し、会社の利益において発生しうる害や損失から会社を守られたし。

## 2

部分的には彼らに備わっている技能や情報次第であるがゆえに、貴殿の遠征中、艦隊と海軍勤務員の指揮を海軍大尉のクルーゼンシテルン氏とリシャンスキー氏に任せ、また彼らのうち前者に指揮権を委ねつつ、閣下におかれてもクルーゼンシテルン氏と一緒に、寄港は本当に必要に迫られたときとするよう監視する責務を負い、乗組員をできるかぎりしかるべく維持するため、また閣下に与えられた目的をできるだけすみやかに達成するためにも全面的に支援するよう努力されたし。

## 3

寄港地は、おおよそ以下のとおり指定されている。

(1)ボーツマス、(2)テネリフェ島[テレニェフ、カナリヤ諸島の一島]、(3)ブラジル沿岸のリオデジャネイロ、(4)ヒリのヴァリパライソ[ヴァリパレゾ]港、(5)メンドズィニ[メンドーサ]諸島、(6)サンダイチ[サンドウィッチ、ハワイ]諸島。最後の地からは、海軍大尉リシャンスキーに航海に係る特別指示を与え、彼の指揮下にある一船にカディヤク島に向かうよう命じ、閣下はもう一隻の船で日本沿岸への航路を維持して長崎港に入り、貴殿に与えられた指示にもとづき閣下が来航した理由を日本政府に通知されたし。最終的に 1804 年に貴殿の使命を果たしてから、カムチャツカのペトロパヴロフスク湾へ向かい、この地から閣下の使節団にかんする報告を陛下に送り、その際、閣下の航海と日本滞在にかんする簡潔な日誌を、敬意を表するに値する注記をできる限り付したうえで送り届けねばならない。ただ、ここでは寄港地が指定されているが、予想不可能な事情があらゆる決定を変更させるものなのだから、これに厳密に従う義務はまったくない。そのような事態においては、貴殿や海軍大尉クルーゼンシテルン氏が特別かつ根拠のある理由なしにはどこであっても余計な出費を認めず、航海中に遭遇した事情によって規定された港にのみ入るよう努力するものと十分に信頼している(略)<sup>61</sup>

<sup>61</sup> 指示において省略された項目には、科学や技術と関連する具体的な指示、ロシアへの帰路についての提案が記されている。

カムチャツカに滞在中、サンクトペテルブルグからの新たな指示を受信し、広東交易の許可およびその他の、ヨーロッパにおける政治情勢や閣下の出航後に生じた変化にかんする通知を受け取られたし。1805年には、航海が可能となり次第、ただちに出航し、北アメリカのカディヤク島に針路を取られたし。道中、露米会社の商品集積地の一つであるウナラシュカ島にできるかぎり立寄るように。島内の港を視察し、現地住民の困窮、さらに毛皮猟の方法についても必ず詳細に究明されたし。この地について十分に理解してから、カディヤク島に向かわれたし。この島では、閣下はその他の課題に着手しつつも、ウナラシュカ島民の負担軽減や島の整備に向けて、閣下に権限が与えられているあらゆる指令を出されたし。この土地は、露米会社の商業にとってきわめて重要であるからだ。

カムチャツカからカディヤク島の越冬地にうまく到着し、閣下とクルーゼンシテルン氏の助言により、好都合かつ乗組員にとってより快適な越冬地を見つけたならば、解氷後の最初の航海では、会社総本部からの計画で示された利益を考慮して、アメリカ沿岸と会社の最重要施設の視察に時間を割かれたし。

カディヤク島には宣教師団が滞在し、会社のアメリカ総本部[以下、本部と書かれている]がある。ここに到着したら、キリスト教信仰の布教、かの地の啓蒙や商業、造船の着手、耕作や畜産、その他経営部門の強化と関連するすべてに取り組まれたし。アメリカ人[原住民]の風習、彼らの困窮、会社本部の運営状況を詳細に究明し、本部に対してこの地方に合った計画を提示し、可能ならば裁判所や住民裁判所 *rasprava* を開設し、住民を苦しめているあらゆるものを除去し、整備全般についても確固たる基盤を築かれたし。カディヤクから遠く離れているロシア領とその住民について正確な情報を収集し、できるかぎり柔和な態度を取り、いつくしみ、彼らからロシアへのおお層の忠誠を勝ち取り、彼らの貧窮をもっぱら和らげうるものをすべて彼らに提供されたし。期待に反し、ヴァンクーヴァー船長の航海以前にかの地に滞在した航海者たちが語ったような、毛皮採集者による住民に対する獣のような扱いが残っているならば、貴殿が善良な行動の範を示して彼らの記憶を消し去り、ロシア国人たちに対しては、彼らはどこにしようと人類を神聖なものとして尊ばなくてはならず、そうしない場合には厳罰に処するとよくよく言い聞かせられたし。アメリカ人に対しては、閣下が来訪したおもな目的は皇帝陛下による彼らの慈悲深き保護であり、

陛下の庇護下では彼らは臣民として身の安全のみならず、彼らの財産自体も保護されることを理解させるように。会社により派遣された支配人には、閣下が命じた規則からのわずかな逸脱も厳格に責任が問われると注意されたし。会社の経営活動がまったく滞らないよう、とはいえ経営活動と住民の利益ができるだけ一致するように、会社の業務を毛皮事業、建設、その他の業務に分けられたし。これらすべてにかんし、閣下の到着後、陛下に詳細な報告を送られたし。

## 8

ロシア帝国領については、1741年に佐官チリコフによって行われた最後の発見を境界とされたし。つまり北緯55度までと考えられたし。アメリカ支配人に対し、ロシア国人のうち何者もこの地点を越えて勢力をけっして拡大せず、境界を越えて、他の海洋大国が占有している土地に入らないよう指示を与えられたし。彼らに対し、この指令は絶対神聖かつ大切に守られなければならないとよくよく理解させるべし。というのは、それによってわれわれと同盟関係にある海洋大国からのあらゆる不快事が永遠に除去され、会社は議論の余地なくロシアに属している獲得物にとどまり、もっぱらその所有物で自分自身を維持することで、外国人が到来する土地との間でより友好的な交流を確立し、それによって自分たちにふさわしい敬意と万人からの信頼をより早く得ることができるからである。

## 9

皇帝陛下は閣下に金メダル25枚と銀メダル300枚を賜るようご命令なされた。忠誠と服従の範を示したアメリカの族長、<sup>トロン</sup> <sup>クニャスヨーク</sup> 首長あるいは長老にこれらを褒美として手渡されたし。この授与が貴殿の名誉となるよう、また支配人が何かひいきから貴殿に推挙したのではなく、閣下によって貢献が評価され、授与によって貢献が十分に奨励されるように気を配られたし。授与に際し、アメリカ人にこの君主のご慈悲の重みを感じさせるようなある程度、厳粛な儀式を行うように。未開人たちと博愛的に接して彼らの愛と信頼を勝ち得た、あるいは農業、造船その他の有益な経営事業において成功を収めたロシア国人にこの褒賞を与えることも、閣下には許されている。

## 10

ロシア国人に広東での交易が許可された場合、カディヤク島で両船に商品を積み、広東に向かわれたし。許可されない場合、交易を試みるべくマニラもしくは他の場所に行き、この地のいたるところで外国人が行っている交易を詳細に調査し、閣下の注記を作成されたし。カディヤク島での商品の受け取り、他の物品あるいは現金と商品の交換、そしてそれらを航海の途上で[東]イン

ド商品の購入に充てることが会社の課題である。したがって、本件については総本部から閣下を与えられたこの事情にかんする計画を指針とされたし(略)<sup>62</sup>

14

アメリカにおける自然の 3 王国[動物界、植物界、鉱物界]すべての産物を記述するために、自然史教授、植物学者、鉱物学の課程を修了した学生が閣下に提供されている。この目的で彼らを用い、閣下の側から詳細な指令を与え、彼らを保護し、さらに都合が許すかぎりさまざまな岩石、土壌、化石、塩類、硫黄、金属、樹木、植物、種子を、現地人によるそれらの使用方法も記述したうえで当方へ持ち帰るべし。また獣、鳥、魚、両生類、昆虫、貝、珊瑚を収集し、可能なものは剥製やアルコール漬けにして、あるいは乾燥させて届けられたし。これらすべてに番号を付け、それぞれにその入手先を記入するように。

15

アメリカに滞在中、住民の風習、身体的特徴、芸術、信仰、習慣、言い伝え、規則、そしてまさしく彼らの応対の様子を必ず注記されたし。彼らの服装、道具、住居、航海術、家政、食事、狩猟、漁撈、戦闘、家畜について正確な情報を集められたし。可能なものは実物を、そうでなければスケッチを持ち帰られたし。会社のすべての最重要施設、火を吹いている山など注記に値する場所の風景も同様である。この目的のために、閣下には 2 名の画家が提供されている。すなわち、風景画のためのアカデミー参事官プリョトニコフ、服装画のためのアカデミー会員クルリャンドツォフである(略)<sup>63</sup>

18

アメリカに存在する疾病およびその治療方法に閣下の注意を向けられたし。苦しみを緩和するために、閣下にとって可能な手段をすべて提供し、また閣下とともに派遣される医者にもその実行を委ねられたし。家畜の間に発生し、かの地における家畜の繁殖を妨げている病気についても見落とすのしないように(略)<sup>64</sup>

21

この話はまったく正確ではないかもしれないが、ベニオフスキー[ベニョフスキー]は彼と一緒に

---

<sup>62</sup> 第 4 項末尾の注と同じ。

<sup>63</sup> 第 4 項末尾の注と同じ。

<sup>64</sup> 第 4 項末尾の注と同じ。

逃亡した者たちのうちラブチョフという名の者を含む 8 名が琉球諸島の一島ウスマリチョンに自分たちの意思で留まったと語っているので<sup>65</sup>、航海中、この島でロシア国人に会うかもしれない。また、北方にあるベーリング島にて、やはりこの物語で知られているオホーチンを発見するかもしれない。そのときには、閣下は君主の名のもとに彼らを許し、忠実なる臣民の責務を果たすように求め、宣誓を行いこれを証明するよう説き伏せてもよい。彼らがわれわれの商業や商業の計画に助力する場合は、彼らに皇帝のご慈悲さえも約束してよい。

22

航海中および他国の領土となっている島々にて外国人と出会ったとき、外国人がアメリカにおけるわれわれの入植地の境界について見解を述べ始めるかもしれない。私は以下の点に注意するよう閣下に申し上げなくてはならない。閣下はあらゆる手段を尽くしてこれを避け、われらが君主は国内に広大な領土を有しているので、国境が侵されないことのみを心に砕いているとだけ説くよう努められたし。このような場合には、私がよく存じている閣下の慎重さと才能に全幅の信頼を置いている。

23

最後に、閣下にかくも壮大な任務——富の新たな源泉の発見、この地方全体の整備、説得し君主の大国の庇護下に入れることが閣下に委ねられている多数の人びとの運命——について述べてきたが、かかる重大な任務にどれだけの価値があるのか、またこれらの任務が祖国の真の息子にどのような対応を求めているのか、貴殿は察しておられると私は強く確信している。新たな力で燃え上がっている閣下の進取の気性が新たな道を切り開き、国家に栄光をもたらし、閣下の名は不朽のものになると私は確信している。今日の幸福な治世においては、献身的な臣民による尊敬に値する偉業こそが、慈善に満ちたロシア君主への最上の献身であると私は保証する。

原本には皇帝の自筆で以下のように記されている。裁可、アレクサンドル。

(1) АВПРИ, ф. С.-Петербургский Главный архив, I-7, 1802 г., д. 1, п. 28, л. 3-10. 写し、ロシア語。[史料集⑩編者による注]全文が *Внешняя политика России XIX и начала XX века. М., 1960, т.1, с.491-497* として公刊されている。

(斎藤由佳・小野寺歌子 訳)

<sup>65</sup> ベニオフスキーの回想録をさしている。Voyages et memoires de Maurice Auguste comte de Benyowski. Paris, 1791 を参照。

### 23. N.P.レザーノフへの書簡

第 2096 号

1803 年 7 月 20 日

皇帝陛下は、閣下のもとで出発した日本人たちが、閣下に委ねられた特別金から給養費を受け取り、何かが不足し、けっして困窮しないようにとご命令なされた。また、私の予想に反し、東方の民がしばしば些細な理由で合意そのものを反故にして、<sup>ナングサキ</sup>長崎港への入港が禁止された場合、閣下とともに発送された贈り物も当然その行き先には届かないので、そのときには鏡やクリスタルガラスの食器のような大きな空間を占める物品は、世界一周の帰路における好都合な航路には代え難いがゆえに、陛下はこれを広東ないしはより好都合な場所にて有利な値で売却するよう努め、その代金を、またその他の物品は現物にて、到着後、返却するようご命令なされた。

(1) АВПРИ, ф. С.-Петербургский Главный архив, I-7, 1802 г., оп. 6, д. 1, п. 11, л. 82-82 об.

(畠山禎・小野寺歌子 訳)

### 24. ブラジルの N.P.レザーノフから海軍大臣次官 P.V.チチャゴフへの書簡

1804 年 5 月 17 日

慈悲深きパーヴェル・ヴァシリエヴィチ[・チチャゴフ]様

私は貴殿の公明正大さを存じておりますので、私の窮状をご審議していただくために、ご多忙のなか祖国の利益のためにお時間を少し割いていただけるものと期待しております。私は会社取締役諸氏に、私の苦悩を貴殿に説明するよう依頼いたしました。閣下、どうか私のために裁き手となっただき、当初から私が講じた最も穏健な手段が乱暴狼藉を鎮められなかったことにご驚嘆ください。ここで繰り返し申し上げるのはお恥ずかしいかぎりですが、私はすでに耐え忍ぶ覚悟を決めました。この度の遠征を準備する際に混乱がすでに発生していたことの結末を、現在、痛感しております。この遠征の派遣において閣下ご自身の参画があったならば、私は任務に専念し、無意味な通信から解放されていたと確信しております。官位の位階制が存在せずには、どこであって何事も実現できませんので、せめてこの度の災いから教訓が生まれ、今後、より望ましい形で不快事から各人を保護すべきです。私に対する閣下のご好意に自分自身を委ね続け、深き尊敬と献身の念を抱く光栄を有します。

慈悲深き閣下の従順なる僕

N.レザーノフ

(8) Тихменев П. Историческое обозрение образования Российско-американской компании и действий ее до настоящего времени, ч. II, прил., с. 187.

(畠山禎・小野寺歌子 訳)

25. G.I.ラングズドルフの報告書より。ナジェージダ号の航海について (⑩No. 210)

1804 年 6 月 7 日～10 日<sup>66</sup>

ハワイ

(略)<sup>67</sup>6 月 7 日、36 海里<sup>68</sup>の距離にハワイ島の東先端(北緯 19 度 34 分)が見えました。サンドヴィッチ[ハワイ]諸島最大の島であるこの島は、現代における最も偉大な航海者[クック]が最後を遂げた地としてよく知られています。クックの死から数年後、彼の優秀な弟子であったヴァンクーヴァーがこの諸島の詳細な地図を作成しました。

艦長クルーゼンシテルンは 9 月末までには日本の大貿易都市である長崎に到着しようと考え、船足を速め、北東貿易風の向きが変わる時期を避けようとしてしました。というのも、今月半ばにも風向きがしばしば変わるからです。そのような事情で、時間を稼ぐために彼はハワイ島のケアラケクーア湾では投錨せず、他の航海者の例にならい、時間を無駄にせずに、島民との間で有利な物々交易をしながら岸沿いに進み、こうして数日間で十分な量の豚とあらゆる種類の食糧を補給しようとしてしました。

この目的で、9 日までこの島の南岸に沿って航行しました。しかしわれわれ全員が非常に落胆したことに、今回、島民はほとんど現れず、携えてきた食料にも非常に高い値を吹つけてきたので、艦長クルーゼンシテルンは食糧の調達が可能である見込みは薄いと見え、これ以上の試みを断念し、島を離れ、どこにも寄港せず、カムチャツカを目指すことにしました。全乗組員の健康状態が良好だったので、これは可能でした。

この島で観察する機会に恵まれた島民は裸足で、きたならしく、貧弱な体格に中背でした。皮膚はどす黒い褐色で、吹出物や潰瘍で覆われていました。これはカヴァ[Piper methysticum]飲料の摂取のせい、性病のせいだと思います。多くの男性は前歯がありません。彼らが言うには喧嘩で石を投げ合って無くしたのだそうです。多くの人の臍はとても突き出ていて、腫瘍のようで破裂するのではないかと思います。泳ぎは達者です。彼らは腕とわき腹にトカゲ、ヤ

<sup>66</sup> 日付はラングズドルフのハワイ訪問にもとづいている。報告書が作成されたのはかなり後である。

<sup>67</sup> この文書の初めの部分では、クルーゼンシテルンの 2 隻の船すなわちネヴァ号とナジェージダ号による、マルケサス諸島最大の島ヌクヒヴァの訪問について述べられている。

<sup>68</sup> 【編訳者補注：1 海里 *morskaia milia* は約 1.852 キロメートル】

ギ、小銃、その他ひし形の文様を刺青していますが、ヌクヒヴァで目にしたのは違い少しも人体を飾っておらず、むしろ見苦しくしていました。身長と体格において地球上で最も美しい人びとに間違いなく数えられる住民がいた島をつい最近(5月17日)あとにしたばかりだったので、この島の住民が持たせた不快な印象がなお一層強められました。その他の点でも、サンドウィッチ諸島の住民は、おそらくヨーロッパ人との接触がより多いためでしょうか、ヌクヒヴァ人よりも狡猾であるように思われます。われわれ一行のフランス人カブリ<sup>69</sup>はこの島の男女にすっかり嫌気がさし、これらの嫌な人びとの間に留まる決意がつかず、彼をここで下船させるつもりだった艦長クルーゼンシテルンに頼み込み、カムチャツカに連れて行ってくれたほうがいいと言い、艦長もそのようにしました。カブリはヌクヒヴァの人びとの言葉をすばらしく理解していましたが、ハワイ島民と話をしようと無駄な努力をよくしていました。われわれが英語の単語をいくつか使って交渉したほうが、うまくいったときもありました。

彼らが外洋へと何マイルも漕ぎ出して行くカヌーは軽く、非常に美しく精緻に仕上げられていました。このことは、航海において、この島民がヌクヒヴァの島民よりも遥かに成功していることを証明しています。

われわれがその付近を航海した沿岸は、見た目に快い景色でした。多種多様な農作物、椰子とバナナの木木がたくさん並んでいるのを見ました。とりわけマウナ・ロア山<sup>70</sup>の偉容が目を惹きました。これまでの観測では標高 2,578 トゥアズ<sup>71</sup>と測定されておりましたが、われらの研究熱心な天文学者ホルネル博士は 2,254 フランス・サージェンしかないと計測しました。この壮観な山はテネリファ峰の標高を 300~400 フランス・サージェン上回っているのですが、麓、そして海面からさえも山頂まで実になだらかに立ち上がっており、これぞ自然の驚異であり、見事な光景です。もちろん、他のどの場所においても、こんなに軽やかにこれほどの高さまで上がることは不可能でしょう。これを可能にしているのは温暖な気候です。標高が非常に高いにもかかわらず、山頂は赤道付近における積雪が形成される高さの基準となる線にわずかに到達しているにすぎません。われわれは1年のこの時期には、山頂にまったく雪がないことを確認しました。

当地では未知の植物をさらにどれだけ多く発見でき、当地の植物界にかんする地理と自然史にどれだけ大きな貢献を成しえるのでしょうか！ 誰か博物学者が1年だけでもこの島に滞在し研究に従事すればよいのですが。

結局、われわれは6月10日にハワイを出発し、この島の現状にかんするいかなる情報も集めら

<sup>69</sup> クルーゼンシテルンがハワイ諸島に連れてきたヌクヒヴァ島民の一人。ナジェージダ号が島を出る際、悪天候のために彼を下船させられなかった。

<sup>70</sup> 【編訳者補注：マウナ・ロア山の現在の標高は 4,169 メートル】

<sup>71</sup> 【編訳者補注：1 トゥアズは 1.949 メートルなので、ホルネルは 4,393 メートルと測定した】

れませんでした。私は 1805～1806 年にかけてアメリカ北西海岸で越冬しましたが、そのときこの地にかんする情報を集める機会を得ました。これについて、今から手短かに述べさせていただきます。

サンドウィッチ諸島群はアメリカ北西海岸方面、そしてアレウト列島もしくはカムチャツカへ航行するすべての船にとって、一時停泊地として大変好都合です。安全な入り江に恵まれ、島々には豚、穀物、バナナ、ココナッツ、タロイモ、サツマイモ、塩、木材、水などが豊富にあります。これらの島々は休息にはもってこいの場所です。アメリカ自由合衆国の航海者たちは、毎年、アメリカ北西海岸への航海の途上でここに立ち寄り、鉄製品、布、ナイフ、斧、台所用品、米、糖蜜、乾パン、火薬、小銃を島民が持つラッコ(Intra marina)の毛皮と交換します。中国人はこの毛皮に大変高い値をつけるので、その後これを広東に運ぶのです。イギリス人とスペイン人がヌートカ・サウンド海峡から出て行き、かつてそこにあった入植地を去ったのち、この交易はなかなかうまく行っております。ほぼ毎年、6 隻から 8 隻の船が北緯 50 度から 57 度までのヌートカ、クイーン・シャーロット諸島、ノーフォーク・サウンド地域を航海しておりますので、この物物交換は大いに儲かっているに違いありません。これらの船は、広東向けのラッコ毛皮からなる良質の積荷を 1 年で集められなかったときには、10 月もしくは 11 月にコロンビア川、あるいはより多くはサンドウィッチ諸島を目指し、そこで越冬し、3 月初めまでにアメリカ北西海岸で物物交換を再開するという目論見で旅立ちます。

ケアラケクーア湾に立ち寄る船が多数で、住民との交易が常態化していることは、今日まで島々の文化に甚大な影響を与えてきました。ここの民は[南太平洋]のどの島々の民よりも早く文明化の道に沿って長足の進歩を遂げ、南海文明的な商業国家へと変貌しつつあります。

トムマ王<sup>72</sup>はアメリカ合衆国の航海者となつねに接触し、とくにヤング氏とデヴィーDevi[Davie]氏はもう長いこと王のもとで暮らし、同時に王の大臣も務めているがゆえに、王はヨーロッパの風習、英語、イギリス風の習慣を身につけております。そのため、島民のうち多数の、そしてもっとも活動的な部分は今では英語を話します。トムマはこの諸島の全島を支配下に置くことに成功し、この諸島唯一の君主です。交易と物物交換を定期的に行ったおかげで、王は 1、2 年の間に銀の価値を理解し、彼のもとに来航する船に喜んでスペイン・ターレルないしはピアストルの現金で自国の産物を売りました。十分な額の金銭を貯めるとすぐに、あるアメリカ人から船を 1 隻購入し、その乗組員を一部は自分自身が所有する者、一部は外国人の水夫で充たしました。後者のうちの多くが今でもハワイ諸島に住んでいます。アメリカ合衆国出身の水夫は豊富な自然の恵み、楽な労働、美しい娘たちがことのほか気に入っており、この島に 1 名ないしは数名の乗組員を降

---

<sup>72</sup> カメハメハー一世[大王]。

ろさずにここを去る船はほとんどないほどです。王は船長から良い推薦を受けた品行方正な者にだけ、この島への滞在を許可します。一方、地元民はすっかり海上生活に慣れ、優秀な水夫になっています。私はアメリカ北西海岸で、ハワイ諸島から到着したボストンの船で働いていた島民と話す機会がありました。彼らは水夫として雇われ、月 10～12 ピアストルの俸給を得ていました。彼らは大綱、網用の縄、綱、さまざまな索具を(おそらく *Phormium tenax* Forst[マオラン、ニュージーランド麻 *Phormium tenax* J.R. et G.Forst]の繊維から)作る方法を十分に習得したので、船乗りたちはもはや索具類をすべてこの地で用意し、サンドウィッチ諸島民の作った索具はヨーロッパ製の索具よりも丈夫だと見なしています。

トムマは何をするにつけてもすぐれた判断力、洞察力、精力を発揮しています。短期間のうちに自分の海軍力を大いに増強し、1806 年にはすでに 15 隻の船を自分の配下に置いていました。その中には数隻の三檣帆船、ブリッグ型帆船、カッター船 *kuter* が含まれていました。同年、彼はノーフォーク・サウンドのノヴォアルハンゲリスクにいる露米商事会社代表バラノフへ以下の伝言を頼みました。アメリカ北西海岸に行ってきた人びとの話から判断すると、北西海岸のロシア人入植地は食糧やその他の物品の深刻な欠乏に見舞われることがあるので、それらとの引き換えに手頃な価格でラッコの毛皮を譲ってもらい、これを転売目的で広東に発送できるのであれば、彼は毎年、塩、豚、サツマイモその他の食糧、そしてヨーロッパ産のものも積せた船を送る用意がある、と\*。

王は他の事業と平行して造船事業に大いに取り組み、聞くところによると、あれこれの船の長所や短所をかなり正確に指摘できます。そのため、造船に不可欠な道具一式や装置は物物交換の際、最も有利な物品となります。また大工としての腕もある水夫が、ここではとくに歓迎されます。彼らは土地を分け与えられ、その他の特権も与えられます。

数年前、ハワイ島で、きわめて注目に値する発見がなされました。造船に適した材木が見つかったのです。この地方の水域で船に多大な被害を与えるフナクイムシ(*Teredo navalis* Linn)をまったく寄せつけません。この発見が十分に確認されたならば、通常、不可欠な銅版による船体の外張りがまったく不要となります。

ところで、サトウキビもこの群島の産物です。この作物を改良し、栽培して大きな利益をあげたならば、いずれここからカムチャツカと全シベリアに砂糖を供給できるでしょう。

ここ数年、ヨーロッパでの戦争と政治的事件により、起業家精神に富んだ商人たちの関心はこれらの地域からそらされ、ヨーロッパに釘付けになっています。しかし、いつの日か、海上の自由と他の諸国民の航行が回復されたあかつきには、これらの地域との交易から得られる利益も忘

れられたままとはならないでしょう。クック、ラペルーズ、ミレーズ<sup>73</sup>、ポートロック<sup>74</sup>、ヴァンクーヴァー、マルシャン<sup>75</sup>、ブロートン<sup>76</sup>、クルーゼンシテルン、その他多数がはっきりと指摘しています。

6月10日午後6時、「万歳」三唱しながらわれわれは僚船ネヴァ号と別れました。艦長リシャンスキーはネヴァ号でカディヤク島とアメリカ北西海岸へ向かわなくてはなりません。彼の方はわれわれほど急がされているわけではありません。そこで、彼は数日間ケアラケクーア湾で投錨し、乗組員を休ませることにしました。

しかし、4日間われわれは沿岸にて食糧を調達できなかったのも、艦長クルーゼンシテルンはこのことでこれ以上時間を失わず、上述の湾で投錨せずに一路カムチャツカを目指して出航しなくてはならないと決断する必要を感じました(略)<sup>77</sup>

(原文の注)

\*私はサンクトペテルブルグに戻ったあとで知ったのですが、この通商関係は実際に確立していました。帝国ロシア商社会社[露米会社]はノヴォアルハンゲリ스크からハワイへ船を送り、王から食糧だけではなくカッター船 kater も購入し、それに乗って会社の代理人が北西海岸に戻りました。

手稿は発見されていない。[史料集⑩編者による注] (9) von Langsdorff, G.H., Bemerkungen auf einer Reise um die Welt in den Jahren 1803 bis 1807 von G.H. von Langsdorff, Kaiserlich Russischen Hofrat, Ritter des St. Annen Ordens zweiter Klasse, Mitglied mehrerer Akademien und gelehrten Gesellschaften. Fr.M., 1812 として刊行されている。ここでは、163～169頁からの抜粋を刊行した。von Langsdorff, G. H., Voyages and Travels in Various Parts of the World During the Years 1803, 1804, 1805, 1806 and 1807: Vol. I, II. London, 1813-1814, vol. I, p.182-189.

(斎藤由佳・小野寺歌子 訳)

<sup>73</sup> 【編訳者補注：ミレーズ Mieres——スペインの航海者。ヌートカ号でアメリカ沿岸に到達した(1787～89年)】

<sup>74</sup> 【編訳者補注：ポートロック Portlock——航海者。世界一周航海の際、アラスカを訪問した(1786～87年)】

<sup>75</sup> 【編訳者補注：マルシャン Le Marchand(1755～1793年)——フランスの航海者】

<sup>76</sup> 【編訳者補注：ブロートン Broughton(1763～1822年)——イギリスの航海者。ヴァンクーヴァーの探検に参加(1790年)。南太平洋を航海した。中国、日本沿岸を調査した(1795～98年)】

<sup>77</sup> 報告書において、ここで刊行された抜粋の直後に続く部分では、ナジェージダ号によるカムチャツカへの航海について記されている。

26. ニジネカムチャツク警備司令官 P. I. コシエレフ少将に海軍士官の不服従を訴える N. P. レザーノフの手紙

1804 年 7 月 5 日

私はどうしても閣下にお会いし、皇帝陛下に委任された任務のために、地方長官であります閣下に援助をお願いしたく存じます。航海の途中、海軍士官たちが船で暴動を起こしたのです。私の味わった失望感がどれほどものか、閣下には想像もつかないでしょう。やっとのことでこの荒くれどもと祖国にたどり着きました。危険を忍んでここまで来ながら遠征を中断するのは身を切られるような思いです。しかし私がどんなに努力したところで、日本へ行行って使節団としての任務を遂行するのは不可能です。とりわけこのあつかましい海軍士官どもが妨害し、国家の計画を永遠にぶちこわしてしまうような状態では。

私は皇帝陛下の元へ行くことに決めました。閣下には遠征に際して私に預けられていた物すべてを地方長官としてお引き受け下さいますよう、切にお願い申し上げます。

(7) Военский К. Русское посольство в Японию в начале XIX века // Русская старина, 1895, октябрь, No. 10, с. 214.

(藤原潤子 訳)

27. P. I. コシエレフ少将への N. P. レザーノフの手紙

1804 年 8 月 8 日

パーヴェル・イヴァーノヴィチ殿！

閣下には航海途中に私の身に起こった不愉快な出来事について手紙でお知らせするとともに、ナジェージダ号のすべての役人と乗組員にそれが事実であることを確認された上で、皇帝陛下に報告していただきますようお願い致しましたが、閣下の前で海軍士官たちが述べた反省の言葉は彼らが今後私に従うことを保証するものでありましょうし、私が全人生をささげてきた祖国の利益は私が個人的に受けた侮辱よりも重要です。目的を達することができるならば今回のことはすべて喜んで水に流したいと思います。ですからどうか、私が手紙に書いたことは忘れてください。皇帝陛下には私に託された遠征について、すべてうまくいっていると御報告することに致します。

(7) Военский К. Русское посольство в Японию в начале XIX века // Русская старина, 1895,

октябрь, No.10, с. 214–215.

(藤原潤子 訳)

28. I.F.クルーゼンシテルン提督の経歴及び N.P.レザーノフ対日使節団に関する資料を収集する  
際に、F.F. ヴェショーリーの古文書を利用した者が作成した文書より

〔日付は空欄〕

レザーノフにまつわる事件は実に際立っており、どんなに短くしようとしても黙って通り過ぎるわけにはいかない。彼はカムチャツカへの航海の途中幾多の困難に遭遇したので、アヴァチンスクの入り江にたどり着いた時には6ヶ月にも及ぶ艱難の生活の末に初めて上から下まで侍従服に身を包み、後甲板に出て十字を切り、大声で叫んだ。「神に感謝します！ 私はついに祖国の法に守られるのです！」 彼は岸に下り立つとすぐに軍事援助と軍事委員会を開くための法務官を要求するため、ニジネカムチャツクの警備司令官に使者をやった。

日本への全権大使が来ることをすでに知っていた警備司令官コシェレフ少将は中隊を伴って急ぎ参上し、法務官を同行させるのも忘れなかった。

聡明かつ真に温厚な人物であるクルーゼンシテルンは、これがどういう事態を招くかをたちどころに察した。そこですぐさま警備司令官にいさかいの一部始終を説明し、仲を取り持ってもらえるよう頼み込んだ。

警備司令官はこれを聞き入れ、皆を仲直りさせることに成功した。おかげでコルベット艦の船長は不愉快な目にあわずにすんだし、遠征隊の名誉も守られた。反乱のきっかけを作ったとされた者は海岸伝いに送り返され、チャーツキー<sup>78</sup>風に表現すれば「アレウト人のふりをして」ペテルブルグにもどった。警備司令官は連隊の新たな随員として自らの兄弟である副官と士官の中で最も優秀なフォードロフ大尉を選んだ。こうして使節殿は再びコルベット艦に乗ることを決意し、長崎に向けて出発したのである。

ここで悲しい事件に触れないわけにはいかない。この和解のせいで全く罪なき一人の士官と当時傑出した船乗りと言われたある男が死ぬことになったのだ。彼の遺体は、ヨーロッパ中に名を馳せたかの有名な動乱者<sup>79</sup>を10年後その岸に迎えることになるセント・エレーナ島に残された。

自分のことに話を移そう。私はレザーノフの出発後すぐにトボリスクの総督の元へ向かった。

<sup>78</sup> チャーツキー——ロシアで広く知られている A. S. グリボエドフ著『知恵の悲しみ』の主人公。

<sup>79</sup> 1815年の戦いに敗れてセント・ヘレーナ島に流され、そこで死んだナポレオン・ボナパルト(1769～1812)を指す。

レザーノフが戻って来ることはなかった。当時のあらかたの知事の例にもれず目端の利くしたたかなトレスキン<sup>80</sup>は、ペステリ<sup>81</sup>の限りない信頼を得てその右腕として働き、完全に我々を取り仕切っていた。ほどなく彼の注意を私に向けさせる事件があった。それがこれである。

レザーノフがオホーツクを出た後、レザーノフがノヴォアルハンゲリスクから乗ってきた会社の船の指揮官フヴォストフ海軍中尉はすでに受けていた指令により、単檣帆船アヴォシ号指揮官ダヴィドフと合流するために「アニヴァ」湾に向けて出発し、そこで日本の村を破壊した。しかし指令はあいまいにはあるが後から変更されていた。ふたりがそろってオホーツク港に戻ると、プハーリンは彼らの逮捕を決めた。ふたりは拘禁状態からヤクーツクに逃れ、それから総督の許可無しにイルクーツクにやって来た。

【サイン、日付はなし】

(5) РГАВМФ, ф. 315, оп. 1, д. 813, л. 4 об. – 6 об. 手稿

(藤原潤子 訳)

## 29. N.P.レザーノフよりイルクーツク総支部<sup>82</sup>への通信

第 237 号

1804 年 8 月 16 日

7 月 4 日、私はナジェージダ号でペトロパヴロフスク港に到着いたしました。一方、ネヴァ号はサンドヴィッチ諸島でわれわれと別れ、アメリカに針路を取りました。今頃は神の御加護によりすでにカディヤク島に着いていることを願っております。当地へ運ばれてきた露米会社の商品を、本状に添付した文書に記された価格で販売開始しました。これにより、オホーツクにおける輸送料は大幅に下落するはずです。というのは、添付された目録により支部におかれても明らかに、アメリカおよび当地に輸送された商品の数量は非常に多く、支部はごく少数の、輸送されていない品物だけを発送する必要があると思われるからです。私は非常に不満を感じておりますが、私が当地にて支部からカムチャツカに送られた総額 2 万 8,000 ルーブルの手形 3 枚を発見したとき、収益 2 万 0,000 ルーブルが当地から送金されました。このような指令は経営者にとって恥ずべきことであり、会社手形の引受拒絶はどのようなものであっても収支決算の重荷となるだけでなく、事前に一切の予告なしに収益が送金される場所において、このとき金銭を支払おう

<sup>80</sup> トレスキン、ニコライ・イヴァーノヴィチ——イルクーツク県知事。

<sup>81</sup> ペステリ、イヴァン・ボリソヴィチ——シベリア総督(1806～1819)。

<sup>82</sup> 【編訳者補注：本史料では、イルクーツクの露米会社支部を総支部 glavnaia kontora ないしは支部 kontora と表記している】

とする者からの手厳しい対応が引き起こされるはずだと警告せざるを得ません。仲買人ヴィホトツォフとの間で結ばれた契約において、私はこのような軽率な事業遂行に気づきました。この契約では、遠征で私に委ねられ輸送された商品から得られる利益の半分が彼の所得に含まれていました。私はこの根拠のない決定を無効としました。彼が訴訟を起こす場合は、彼は彼自身と契約を結んだ人物に対して行動しなくてはなりません。

今、私は日本へ向かいます。使節団の任務が完了後、神の御加護のもと、来年6月に帰還したいと願っております。そして当地からカディヤク島に行き、そこで毛皮を引き取り、販売すべく広東に向かい、そこからサンクトペテルブルグに戻ります。あるいは、日本でオットセイ皮の需要があるならば、交易を開始する目的で海軍大尉クルーゼンシテルン氏に再度、日本に寄港するよう要請します。

しかしながら、われわれのもとには来年分の食糧がありませんので、私はオホーツク支部に大至急、ライ麦乾パン 790 プード、塩漬け肉 400 プード、エンドウ豆 60 プード、バター 60 プード、燕麦のひき割り 60 プード、蕎麦のひき割り 20 プードを用意し、通常、出航する8月にはなく、航海が可能となったばかりの6月初めに船を送るよう指令しました。その際、私は5万枚から10万枚のオットセイ皮と、保有するすべてのロシア革<sup>83</sup>、シカのなめし皮 1,000 枚も送るよう命じました。これらの商品のうちオットセイ皮は、日本で売れなくても広東に輸送できます。要求された数量の商品を船に積めないのであれば、食糧は半分だけ送付し、オットセイの皮をできるだけ積むようにし、その際、腐った皮がけっして入らないようにあらかじめ不良品を取り除かなくてはなりません。このことにかんし、支部は自分たちの側から遂行を指令すべきです。会社に船がないためのために、私は港を管理している佐官バシュツキー氏に、国有輸送船を提供し、将校や航海士についても支援するよう要請しました。これに備えて支部が、本状に添付した私からイヴァン・オシボヴィチ閣下[シベリア総督セリフオントフ]に宛てた文書を届けていただき、遠征隊がこの地で無駄に時を過ごして時間を失わないよう、そしてこの支援を受けずに偉業が完全に止まってしまうように決定を請願し、ただちにオホーツクに至急便を送っていただくようお願いいたします。その一方で、支部は私の報告を[ペテルブルグの]総本部にやはり至急便で送付しなくてはなりません。

最後に、今後、ペトロパヴロフスク港を会社商品の集積地に定め、この地へ商館を設置する予定であることをイルクーツク総支部に通知します。アメリカにとって必要な商品を積んだ船は、ペトロパヴロフスク港までしか航行せず、ここで荷を降ろし、アメリカからの荷を受け取り、一方でアメリカから来た船はこの地で毛皮採集者とオホーツクからの商品を引き取り、こうして毎

---

<sup>83</sup> 【編訳者補注：純粋なタールを利用してなめした皮革】

年、船は双方の自分たちの場所へと戻るはずですが。イルクーツク総支部は自分の側から指示を与え、アメリカ行きの最初の船で、アメリカからすみやかにこちらの港に向けて出発するよう知らせ、一方、オホーツク支部に対しては、同支部も最初の航海でただちに発送し、アメリカからの船が港で逗留しないように、また毛皮採集者についても、派遣される場合は無駄に会社の負担で越冬しないように指示すべきです。このような事態になった場合、船を送り出すのが遅くなってしまった拠点にはきわめて大きな責任があります。このような定期航路の設置が即刻着手されるべきです。今がまさにその好機です。添付されたネヴァ号の積荷一覧表から支部が把握なされるように、ネヴァ号によって大量の商品が発送されましたので、アメリカへは何も送るべきではないと考えます。当地での最初の事業に向けて、私はオホーツク支部に対し、毛皮採集者の中から自由雇用の者 20 人と 3 年間程、当地での倉庫建築や他の作業の遂行を目的に当地に来よう契約し、毎年彼らのために食糧と塩を送り、ここで畜産業を発展させるために 20 頭ほどの有角獣を、また重量物運搬用に 3 頭の馬を送るよう命じました。一方で、1806 年には彼らが必ず港に滞在できるように、イジガ[ギジガ]の仲買人には、あらかじめイジガで彼らのために冬用の食糧を用意するよう指示を出しました。イルクーツク支部に対し、以上の課題を機会を逃さず遂行するよう委ね、本件にかんする全権を与えた総本部に通知し、陛下に謹んでご報告いたしました。

(6) РГИА, ф. 15, оп. 1, д. 2, л. 13–14.

(渡邊聞・小野寺歌子 訳)

30. N.P.レザーノフから皇帝アレクサンドル一世付属秘密委員会委員、科学アカデミー総裁 N.N. ノヴォシリツェフへの書簡

1804 年 8 月 20 日

慈悲深きニコライ・ニコラエヴィッチ[・ノヴォシリツェフ]様

ブラジルから私が皇帝陛下にお送りした上申書が到着し、不快を抱かせたとしても、良心は私にその原因なのだと私を少しも責めておりません。露米会社の取締役たちは閣下に、その他にも私が航海中に蒙った出来事を説明するでしょう。私はただ国益のために筆舌に尽くしがたい侮辱に耐え、そして国益のためにあらゆる上部機関に対して法にもとづき与えられている厳格な措置にこれを委ねざるを得ませんでした。荒れ狂った者どもをしかるべく服従させる手段を持たなかったため、私は当地に駐在する将官の支援を得て、彼らが自分たちの領分をどれだけ大きく越えたのか彼らに痛感させました。私にとって遠征の中断がどんなに遺憾であったとしても、私は[遠征を中断してペトロパヴロフスクから]陛下のもとに向かう決心をしました。陛下から任務を与

えられた者に対する敬意を配下の者たちが完全に忘れてしまっているのに、どうして私は遣日使節団の任務を遂行し、帝国にふさわしい敬意を得ることができるでしょうか。私の決断は彼らを憂鬱な気持ちにさせました。彼らはこの地で絶望を味わいながらも、服従を約束しました。私も彼らを許し、彼らによる私への個人的な侮辱ではなく、国家事業の頓挫が私を深い悲しみに突き落としたのだと認識させました。

陛下に宛てた私の上申書によって、閣下は私の気持ちをご理解いただけるでしょう。私はあらゆる手段を用いて彼らが厳格な責任を問われないようにしました。また閣下におかれましては、陸軍少将コシエレフの上申書が彼らの激情の裏付けとなるでしょう。トルストイ伯爵は規則をまったく守らず、欺かれやすい者たちを自分自身の気晴らしにすることに慣れている人物、また自分自身の才能をもっぱら有害なものへと変える、つまり危険人物であるがゆえに、私は彼を帰還させます。アカデミー会員クルリャンドツォフは、重い胆石症に罹ったので、私に同行できず、彼自身の場所に戻し、その道中、彼を助けるために医学修士、九等文官ブリュキンを同行させ、私はこの立派な芸術家を、手術を行わなくてはならないモスクワまで連れて行くよう彼に依頼しました。品行方正で賞賛に値する人物である彼ら 2 人を閣下のご慈悲に委ね、彼らを閣下のご庇護のもとに置かれますよう謹んでお願い申し上げます。彼らはすべての出来事の生き証人となるでしょう。これらについて記すことを私は恥ずかしく思っております。

商業とまさしくカムチャツカの課題にかんして、閣下、私が総本部に提出した報告の中に私の提案を見出し下さい。私は閣下に特別に説明書をお送りしたいのですが、実を申しあげますと時間がありません。閣下、私が述べた展望を感情の高ぶりからの夢想とはみなさず、私が十分冷静にあらゆる事情を熟慮していることをご理解くださるよう、謹んでお願い申し上げます。まさしく自然が、当地でのすばらしい商業の確立を可能にしております。私は日本へ急いでおりますので、今、たしかに目の前にあるこの利益について、帰還後、報告したほうがよいと考えております。私見では、長崎での交易以外に、1794 年にアレクサンドル島と命名されたクリル列島第 18 島[ウルップ島]に入植し、毛深いクリル人の力を借りて近隣との交易を行い、第 20 島[クナシリ島]では現地住民をいくつかしむことで、われわれの商館を建てるための土地を入手します。そのあかつきには日本人が自分たちの側からやって来て、われわれの商品を購入し、キビ[米]やその他、われわれが必要とする物品を持ち込むでしょう。私は全身全霊を捧げる覚悟をしましたので、政府が資金を与えさえしていただけるならば、ロシア国人が祖国への愛において他国民にひけを取ったことがなく、もしかしたら彼らを凌駕さえできる、とりわけロシア国人にとって幸運の日であるアレクサンドルの日にはそうだということを、実際に示してみたいと考えております。

閣下、どのように何が承認されるのか私は存じませんが、私はすでにペトロパヴロフスク港に

当地における商業全般の拠点を築きました。私をこれに駆り立てたいくつかの理由につきましても、私が会社総本部に宛てた報告書に記されております。

日本人の通訳官、[参議会]記録官[十四等文官]キセリョフを、私にとって彼がどんなに必要なのだとしても、私の帰還まで当地に留め置かねばなりません。彼が賜った官位や金時計への日本人たちの羨望、その他の些細なことが、彼に対する憎悪の感情を起こさせ、最終的にそれは抑えがたい嫌悪へと変わりました。彼には見せしめに罰が下る、と[日本人たちは]呪いをかけております。かの地では許されていないキリスト教信仰を受け容れた同胞を日本に連れてきたことで、私は日本を刺激させるのではないかと懸念し、不快事をすべて回避すべく、彼とは別れざるを得ませんでした。

日本語辞書および日本語の手引書<sup>84</sup>を本状に添付して閣下にお送りしますので、それらを陛下にお届けいただきますよう謹んでお願い申し上げます。この言葉にかんしては研究がこれほど詳細にはいまだなされていないことを恐れ多くも申し上げるのは、私の側から事実をひけらかしすぎていると思われまふ。ツンベルクによる最新の旅行記は、非常に多くの日本人が他の民の間に自分たちの言語が知れ渡るのを妨げている、さらにオランダ人が自分たちの考えを直接述べる能力を持たないように、自分たち自身でオランダ語を学んでさえいると伝えております。閣下、私の業績が未完成なのは承知しており、私はこれをそのような状態では刊行いたしません。これは私の情熱の成果にすぎません。たしかに、時がたてばこれらの情報も改善されるでしょう。ただ、少なくともイルクーツク日本語学校にとっては、学生たちが何か規則を習得するのを容易にするものとなるでしょう。辞書につきましては、閣下がすみやかに印刷命令を出していただきますようお願い申し上げます。ただし、これは私の自尊心からではなく、もっぱら交易を容易にするためにそうするのだとご理解ください。必要な言葉を知らずに、ロシア国人はどのように交易が行えるのでしょうか。実を申し上げますと、この言葉を探究する際、少なからぬ困難が立ちはだかつておりましたが、閣下にお送りしました私の最初の業績ができるかぎり改善されるよう、私は日本にて、この言葉にかんする知識をさらに吸収すべく努力する所存です。

私の旅行につきましても、私が陛下に宛てた上申書<sup>85</sup>から閣下ももちろんご存知かと思ひます。私が閣下宛ての文書を準備し、お送りすることが私にとってどれだけ望ましいとしても、航海中は日本語を学習し、当地では指揮にあたっており、秩序立った文書を作成できませんでした。そのうえ、私は赤道下で重い病気に耐え、この病気のために私には文書を清書する時間がありませ

<sup>84</sup>【編訳者補注：いずれも田中継根による日本語訳がある。ニコライ・レザーノフ『露日辞書・露日会話帳』、東北大学東北アジア研究センター叢書第2号、2001年、ニコライ・レザーノフ「日本語学習の手引き——アルファベット、初級文法、会話——」『地誌としての旅行記——「若宮丸」と「ナジェージダ号」の記録——』仙台市民国際交流事業実行委員会、2000年、86～104頁】

<sup>85</sup>【編訳者補注：1804年8月16日付文書(史料集第1集No.23)のことか】

んでした。一人の筆耕も与えられず、辞書も文法書も自分自身で書き直すような状態で私は派遣されました。自分自身の業績を称えるためではなく、ただ私の窮状を閣下にご理解いただくために、私は申し上げております。クルリヤンドツォフ氏の手になる風景画とデッサンを閣下に謹んでお送りいたします。私の日誌も日本から帰国後、お届けいたします。当地では、私が到着するまでにさまざまな情報を送付するよう指令も与えました。閣下にカムチャツカにかんする統計的な記述をご報告したいと思います。残念なことに、われわれのもとにはクラシェニンニコフ氏のものよりも新しい情報が何一つなく、しかも70年が過ぎて、ここではすべてが変わってしまいました。

博物学者のティレジウス、ラングズドルフ両氏の書簡を前者のデッサンらとともに閣下に謹んでお送りいたします。アルコールに漬けた生物のコレクションを私はカムチャツカに残しましたが、日本から帰国後、他に適当な方法が見つかりませんので、世界を一周して閣下にこれらをお届けいたします。ティレジウス氏と同様の理由で私が遠征隊に参加させたラングズドルフ氏による蝶および昆虫類の素晴らしいコレクションも、やはりそのようにいたします。私は彼らの才能についてあえて評価を下しませんが、その外見により許される範囲で各人について検討するならば、後者が出す明確な結論がより気に入りました。おそらくアカデミーは、ラングズドルフ氏の文書の中では他の文書のように既知の情報を見出したりしないでしょう。彼は一心不乱に働いております。今回の遠征では彼は回帰線から別の回帰線までの間、毎時間、気圧計を観測する作業を引き受け、彼により作成されたこの種のものとしては最初の表を、マルケサス諸島の現地語辞書と一緒にクラフト氏を介して閣下にお送りしました。海中で光る物体にかんする彼の注釈そして彼によっていたるところで行われた実験も、自然史におけるこの領域の研究を進展させます。鳥類の小さなコレクションといくつかの動物の剥製を当地より陸路にてお送りいたします。これらについての目録も添付させていただきます。われわれの航海は先を急いでおり、停泊地も少ないので、帝室官房のコレクションを増やす方法はありませんが、日本におけるラングズドルフ氏の作業がコレクションを一層興味深いものにすることを期待しております。この人物の進取の気性と行動力ゆえに、私はこの他の点においても彼を当てにしております。彼は母国語であるドイツ語の他に、ラテン語、フランス語、英語そしてポルトガル語を知っています。この多彩な才能を兼ね備えた彼は医者として開業しており、これが助けとなって日本人たちに好感を与えるのではないかと期待しております。彼らと交易が行われるのであれば、正式な代表者が宮廷から着任するまでの間、この地でロシアを確立させるために私は彼に数名を付けてかの地に残す予定です。万難を排して、書類の上ではなく、実際に交易が開始されるように、私は全力を尽くす所存です。

ともあれ、私にとって光栄な閣下のご厚情を賜り続けている間、閣下に自分自身を委ね、真の

尊敬と忠誠の念を抱く光榮を有します。

慈悲深き閣下の従順なる僕

[ニコライ・レザーノフ]

(6) РГИА, ф. 15, оп. 1, д. 2, л. 8–9 об.

(渡邊聞・小野寺歌子 訳)

### 31. N.P.レザーノフから N.P.ルミャンツェフ伯爵への書簡

〔1804 年 8 月 22 日ないしは 25 日〕

慈悲深きニコライ・ペトロヴィチ[・ルミャンツェフ]伯爵様

出航を急いだため、閣下に日本交易にかんする計画の全容を特別の報告書にて再度申し上げる責務を遂行する時間もございませんでした。それゆえ、すべての課題がその中で述べられております、私が会社総本部に宛てた報告書<sup>86</sup>の写しを閣下のご高覧のために恐れ多くもお送りいたします。私は、われわれの遠征によって切り開かれた航路の将来的な利益をできるかぎり申し上げるように努力しました。あとは閣下の愛国心が、株主全員の愛国心を喚起させるだけです。私は祖国への貢献を願っておりますし、私に力があるかぎり、この旅行に喜んでこの身を捧げるつもりです。私の命が何かのお役に立つのであれば、ご容赦なくお使いください。閣下のご英断に報いることは、私にとってかくも光榮なことであります。私があらゆる個人的な侮辱を超越していることを、閣下はそのうちご理解いただき、そのとき私の犠牲を正当にご評価ください。とはいえ、私は何一つ望んでおりません。君主の榮譽への寄与、これこそが私にとって唯一の褒美です。

皇帝陛下に謹んでお送りした 2 通の上申書からの写しを添付いたします。

記録官[十四等文官]に登用されたものの、俸禄を受け取っていない、私により残された日本人キセリョフにつきましては、恐れ多くも彼に年 200 ルーブルの俸給を決定し、この機会にイルクーツクへ赴かせました。閣下におかれましては、この決定を確認すべく、陛下のご許可をいただけないでしょうか。

皇太后様ならびに皇族の皆様に、恭順なる私の愛情をお伝えいただきますよう閣下に謹んでお願い申し上げます。皆様が私に賜ったご慈悲が、事業を遂行する決意を私に固めさせ、私を勇気づけます。神よ、われわれにとってかくも幸福な帝室の時代が続きますように。

われわれは停泊地に到着し、順風を待っております。

閣下からご慈悲を賜り続けている間、閣下に自分自身を委ね、深き尊敬と忠誠の念を抱く光榮

<sup>86</sup> 〔編訳者補注：1804 年 8 月 16 日付文書(史料 No.29)のことか〕

を有します。

(6) РГИА, ф. 15, оп. 1, д. 2, л. 7-7 об. 写し

(渡邊聞・小野寺歌子 訳)

### 32. N.P.レザーノフから商務大臣 N.P.ルミャンツェフへの書簡

[1804 年 8 月 25 日の日本出航以前]

慈悲深きニコライ・ペトロヴィチ[・ルミャンツェフ]伯爵様

ブラジルから閣下のもとへ、道中で私の身に起こったさまざまな遺憾な出来事についてお伝えいたしました。このたび本状に添付いたしました、私の恭順なる上申書の写しから、私は自分自身に対する個人的な侮辱を、この侮辱のために国益を損ねることよりも重く受け止めていないことを、閣下におかれましてはご納得いただけましたと思います。よって、遠征隊の任務につきまして閣下にお時間を取らせていただきます。われわれは1月<sup>87</sup>にブラジルを出発し、3月3日にホーン岬を回りました。われわれの船に損傷を与えた数多くの嵐に耐え、カムチャツカに直行する航路を進み、メンドジナ[マルキーズ]諸島の一島ヌカチヴァ[ヌクヒヴァ]に9日間だけ滞在し、7月4日に到着しました。われわれが航海を急いだように、私がわれわれの旅行にかんする記述を閣下に宛ててカムチャツカまで急いで送るべきだったと、閣下はおっしゃるかもしれませんが、イヴァン・フォードロヴィチ[・クルーゼンシテルン]は、彼が提出した、われわれの航海日誌からの抜粋を私の前で読み上げました。閣下にとって二度手間とならないように、私は商業にかんする記述に取り掛かったほうがよいと考えました。

当地に到着後、われわれは当地の物価が異常に高いことを知りました。株主諸氏の信用を使って私はこの物価を引き下げました。閣下、閣下の庇護下にあるこの会社が有益な第一歩を踏み出しましたことをお祝い申し上げます。私はオホーツクにおける物価の下落が実感できるのを期待しております。この物価は、カムチャツカの商館にとっていわば商業の温度計となるでしょう。この商館は日本と交易を行い、それとともに、もはや物価の上昇を許さないでしょう。この地方の状態を緩和する基盤を当地に築いたのち、これから日本へと向かいます。秋は暴風に遭う恐れがありますが、残念なことに、通り抜けなくてはなりません。私は無駄な越冬に気がとがめ、暴風以上に苦悩させられます。われわれは皆、当地の秋分も体験しなくてはならないと承知しておりますが、われわれはすでに十二分にこの現象について観察しており、狼が怖いのなら森へ行くなというロシアの諺に従います。私の使節団が成功したあかつきにはすみやかに交易を開始し、

---

<sup>87</sup> 日は記されていない。

それを継続させるべきです。しかしながら、当地にはあらゆるものが豊富にあり、したがって問題は交易にあるのではなく、毛皮事業のための人員不足にあります。これとともに、私はイルクーツク支部に対して当地へロシア革を2,000枚、またオットセイ皮がおよそ30万枚保管されているオホーツク支部に対しては当地へこれを5万枚送るように命令しました。これらの買い手がついた場合、カディヤクではなく再度、日本に行くためです。買い手がつかなかった場合、これらの品は広東に運ばれるでしょう。イルクーツクの責任者から事前に指令がまったく出されなかったのは遺憾です。日本との交易は、少なくともシベリア全土の改造と同じだけの有望な将来を約束しています。私は何一つ援助を受けずに交易の新たな道を切り開き、当地[ペトロパヴロフスク]に確固たる足掛かりを築き、またペトロパヴロフスク港には商館を設置いたします。この目的で、私はすでにオホーツク支部に対し、自由雇用の者20名と契約して当地へ送り、また当地で不可欠な有角獣の家畜と馬も送るように命令いたしました。当地に会社の貯蔵庫ないしは倉庫を整備いたします。これは、アメリカから毛皮を運んできた船が当地で必要な物品を受け取り、年内に帰れるようにするためです。オホーツク支部は、アメリカにとって必要な物品を当地へ輸送し、キャフタでの交易用に[当地から]毛皮を運び出します。この港は、あらゆる地方にとって好都合かつ中心に位置し、日本との交易においても非常に好都合な立地です。閣下におかれましては、政府がこの地方に関心を持つよう努力していただきたいと思います。この地方には特別に注目するだけの価値があります。私が陛下に宛てた上申書において記述したこの地方の事情はきわめて正当です。当地では肥料をまったく施さなくとも穀物が播種量の8倍収穫でき、また大麦は14倍実ることがあります。しかし、人手不足が耕作を停滞させております。援助の手を差し伸べなければ、最後の入植者たちも死に絶えてしまうに違いありません。当地には塩が軍事関係者用に1か月分残っているだけで、貧しいカムチャダール人は喜んで塩を使いたいのですが、かなり前から塩を入手しておりません。私は何らかの方法で製塩用フライパンを鍛造し、[海水を]煮沸して塩が採れるように、会社より鉄を提供しました。当地の長官である陸軍少将コシェレフは熱意あふれる人物ですが、援助がなくては彼の努力はすべて水泡に帰すでしょう。彼は製塩用フライパンの送付と製塩所の設置を提議しましたが、現在のところ決断は下されておられません。

閣下、この地方の物資の欠乏についてご説明申し上げ、閣下を煩わせましたことをどうかお許しください。この欠乏は交易にも大きな影響を及ぼします。とりわけ、人びとの友が帝座に就いておられる今日、良心を持つ者はみな、苦悩する者の代言人となるべきです。当地ですべての目撃者となりましたので、少なくとも力や能力が及ぶかぎり、全容についての詳細な調査を[商務]省にお届けいたします。まさしく自然が住民に幸福をもたらすあらゆる環境をかくも恵まれた状態で与えたのですから、それを利用し、当地の商業を全ロシアのために卓越したものにするこ

だけが残されているという自明の言葉で、本日は筆を置かせていただきます。

深き尊敬と献身の念を抱く光栄を有します。

慈悲深き伯爵閣下の従順なる僕

[ニコライ・レザーノフ]

(6) РГИА, ф. 15, оп. 1, д. 2, л. 6–6 об. 写し

(渡邊聞・小野寺歌子 訳)

### 33. 露米会社総本部よりルミャンツェフ伯爵への報告書

第 681 号

1804 年 9 月 13 日

露米会社総本部において、世界一周航海を行っている、聖エカチェリーナ島[サンタ・カタリナ島]の遠征隊より昨年 8 月 6 日に受信した文書が再度、審議に付されました。文書は以下のとおりです。

- (1) 侍従長、帯勲者ニコライ・ペトロヴィチ・レザーノフ氏からの書簡
- (2) 海軍大尉、帯勲者クルーゼンシテルン氏の報告書
- (3) 会社手代らの報告書
- (4) 遠征に参加中の数人からの書簡

これらの文書には以下の情報が含まれております。

1. 遠征隊は 2 隻の船で上述の島付近に、旧暦[ユリウス暦]1803 年 12 月 9 日、到着しました。至急便を送ったのち、本年 2 月 3 日まで、(すなわち到着から 9 週間)ネヴァ号の腐食した主樁および前樁を交換するためにこの地に引き留められました。この停泊によってホーン岬を回る好都合な時期を逃してしまいましたが、クルーゼンシテルン氏は(彼自身書いているように)回ることを決意し、きわめて切迫した事情がないのに喜望峰へと下って[東へと]進む気はありません。ホーン岬を回り、マルキーズ[マルケサス]諸島への直行航路を取るつもりです。
2. かくも長期間にわたり遠征隊が上述の島に引き留められましたので、使節団の任務を遂行するためにナジェーグダ号が日本に到着するのものは遅くなり、おそらくかなりの時間、滞在せねばならず、かの地での越冬を余儀なくされております。したがって、(会社が今年夏に予定しておりました)この船のカムチャツカ到着も、きたる 1805 年春となります。

3. レザーノフ氏が主張するには、ナジェージダ号(海軍大尉リシャンスキーにより、最も堅固かつ丈夫で、1800年に建造されたばかりのものとしてロンドンで購入された)が、建造されて9年がたつ古い船であることが十二等航海士カメンシコフにより判明しました。というのは、彼によって船の下部にこの年の焼印が発見されたからです(つまり、1795年に建造されたのです)。また、甲板を固定するつなぎ材は腐食していて、手の力で壊れるとのことですが！ この船の古さについては、テネリフェのフランス人たちも請合いました。彼らはこの船は戦利品として彼らが所有していたと断言しました。船と一緒に購入された2本のマストは砲弾を浴びており、クロンシュタットで交換されましたので、異教徒のものだった可能性が十分あります。(やはりリシャンスキー氏によって購入された)もう一隻の船ネヴァ号にかんしても、造船職人コリュキンによって提出された上申書にもとづき、レザーノフ氏は購入時にすでに多く行った修理に加えて、多くの箇所をカディヤク島にて修理、改善しなくてはならないと述べております。
4. レザーノフ氏は当本部取締役役に宛てた書簡の一通において、以下のとおり述べております。

(略) 4. ナジェージダ号が帰還する際、海軍大尉クルーゼンシテルンは17世紀にスペイン人によって太平洋上で発見され、その後消息不明となっているどこかの島々を探索する予定です。さらにわれわれは当地から無駄にフランス語のアサンシオン Ascencion[キリスト昇天]と同じ意味の、スペイン語で Ascencao[ポルトガル語 Ascensão のことか]と呼ばれる別の島[アサンション島]にも行きます。何らかの事情で一方が他方を妨害しないためにも、島の発見と商業の任務は同時にはできません。もっとも、今、高価な積荷を余計な危険にさらすのかどうかは、株主諸氏の意向次第なのですが(略)

5. 最後に、レザーノフ氏とクルーゼンシテルン氏は各々の書簡に、彼らの間で合意をしたうえで、往復書簡やその他のさまざまな書簡を添付しました。それらには、以下のとおり記されています。レザーノフ氏は今回の遠征隊全体およびその積荷や各種商品を直接統括する者として正式に任命され、[露]米会社を代表しているのみならず、陛下より氏が賜った(陛下ご直筆の署名が付された1803年7月10日付の)指示にもとづき本遠征の全権代表として任命されているので、陛下より彼に委ねられたこの官職を承認するようクルーゼンシテルンに求めました。さらに、クルーゼンシテルン氏にはすでにクロンシュタット錨地にて上述の指示を提示しております。なお、指示第1項では以下のとおり述べられております。

これら両船舶および会社に勤務している将校および下級勤務員は、貴殿の指揮下に置かれる。会社の全権代表に任命された貴殿は、会社の利益にもとづいて行動し、生じうる損害や損失から会社の利益を守られたし(略)

さらに、第2項には、

(略)部分的には海軍大尉のクルーゼンシテルン氏およびリシャンスキー氏が備えている技能や情報にかかっているがゆえに、貴殿の遠征従事中、船と海軍勤務員の指揮を彼らに任せ、彼らのうち前者に統括を託す。貴殿の側からは、クルーゼンシテルン氏と共同で、入港は必要不可欠な事情がある場合に限るよう監督しなくてはならない。乗組員をできるだけしかるべく維持するよう、また貴殿に課せられた目的をできるかぎりすみやかに達成できるよう全面的な支援に努められたし(略)

しかしクルーゼンシテルン氏は、以上の経緯から明らかなように、謙虚かつ友好的につき合うことで、レザーノフ氏を自分自身の上官として認める責務を他の者たちと一緒にうやむやにし、ヨーロッパの外にある最果ての地まで、対立する自分自身の計画を守ろうとしました。かの地は不服従な態度を取るにも好都合でした。そしてそれが起こったのです。というのは、聖エカチェリーナ島滞在中、レザーノフ氏は上述の陛下の指示(サンドヴィッチ諸島到着後、ネヴァ号をカディヤク島へ派遣し、この船の艦長に指示を与えるべしと命令している)を遂行すべく、思いがけず離れてしまったためのために海軍大尉[リシャンスキー]にカディヤク島の経営や経済活動にかんするきわめて懇懇な指示を送り、このときクルーゼンシテルン氏に特別の書簡で、彼自身もリシャンスキーに針路や航海にかんする海事の指令を与えるよう要請しました。このとき、リシャンスキーは指揮にかんしては彼に指令を出せないかのような口実をもってこの指令を受け取らず、レザーノフ氏に送り返しました。これを契機に、クルーゼンシテルン氏は3通の書簡をもってレザーノフ氏に対し、クルーゼンシテルンが唯一認めている会社からの指示により彼に直接与えられているかのような、遠征隊に対する彼の指揮権を、奪い、規律を乱し、彼クルーゼンシテルンをただ船上のみの指揮官とみなしているのは一体なぜなのか釈明を求めました。これに応答し(略)

(4) ОР РНБ, ф. 152, оп. 1, д. 379, л.126–129. 写しからの写し。[史料筆写者による注]文書は未完。

(渡邊聞・小野寺歌子 訳)

#### 34. F.I.シェメリンの日誌より<sup>88</sup>。長崎港で日本の役人が N.P.レザーノフ使節団を出迎えたこと

1804 年 9 月 26 日

日本の役人は舟の真ん中に立ち、我々を見てうやうやしくお辞儀した。彼の最初の質問は次のようなものだった。どういう船で、どこから来たのか？ どういう人が乗っているのか？ どこへ何をしに行くのか？

質問に対して我々の日本人の一人を介して、ロシアの軍艦がロシアから来航したこと、乗っているのはロシア人で、その中には日本の<sup>インペラートル</sup>皇帝への親書と贈り物を携えたロシア皇帝の全権大使も含まれていること、また船には数年前に不幸にも海難に遭い、ロシアの岸に打ち上げられ、今再び祖国に帰ってきた日本臣民も 4 人乗っていること、船が<sup>ナガサキ</sup>長崎を目指していることが伝えられた。

それに対して日本の役人は、長崎には將軍の特別な許可証がなければ何人たりとも入港できないし、それが許可されているのはオランダ人だけだと言った。

我々は長崎湾への入港許可をすでに日本の將軍から得ていること、それは今回 4 人の日本人を乗せているのと同様に、以前<sup>ミツタ</sup>光太夫とその仲間を日本に送り届けた時に松前で受けたものであることを彼に告げた<sup>89</sup>。

いよいよロシアの立派な洋服を着た全部で 4 人の我々の日本人が日本の舟に移った。そして日本の役人に対してもっとも卑屈な姿勢をとった。彼らは役人の前にひざまずき、腕を伸ばし、その状態で頭を床に置いた。役人と話している間、彼らは手を床から離さずに顔だけ挙げて、おそろしく卑下した態度で役人に答え、話した。彼らはこちらの団長の返答をほとんど訳さなかった。畏敬の念からか、それとも日本人にとって屈辱的だと感じたのか、またはこのような返答を詠し

<sup>88</sup> [訳者補注：航海日誌の作者フォードル・イヴァーノヴィチ・シェメリンは、露米会社の主任仲買人としてレザーノフと共に世界一周旅行に参加した。帰国後、露米会社の命により、『偉大な皇帝陛下の多大なる御庇護の元、露米会社の主任仲買人なるモスクワ商人フォードル・シェメリンによって記されたロシア人初の世界一周旅行記』(以下『シェメリン旅行記』)と題した旅行記を出版している。旅行記の出版年は、第 1 部が 1816 年、第 2 部が 1818 年、出版地はサンクトペテルブルグ。本史料集に所収されたものは、この出版済みの旅行記の草稿(以下「シェメリン(文書館)」)と思われるものである。『シェメリン旅行記』と「シェメリン(文書館)」の入手箇所のテキストを比較すると、内容はほぼ同一であるが、『シェメリン旅行記』のテキストのほうが整っており、読みやすい。

シェメリンはレザーノフから日本と交易可能と思われる品について調べるように命じられていた(本史料集 No.36 参照)ので、それらについての詳しい検討の他、日本からの差し入れの品についてなど、物に注目した記述が旅行記の大きな部分を占める。一方、彼の旅行記には、露日会談など、彼がその場に居合わせなかった出来事についても書かれている。このような箇所は、レザーノフの日記(邦訳は、大島幹雄訳『日本滞在日記』岩波文庫、2000 年)から書き写されたものであると思われる。シェメリンは旅行記としての体裁を整えるために、時にレザーノフ日記を参照し、一人称(私)を三人称(使節殿)に替えて、自らの旅行記に足りない部分を補ったのである]

<sup>89</sup> [訳者補注：レザーノフ使節団と共にフリゲート船ナジェージダ号に乗って日本に帰った日本人漂流民は、儀平、太十郎、津太夫、左平だった。日本人光太夫はアダム・ラクスマンの来日の際に日本に送り届けられている]

て彼ら自身があつかましい奴だと思われるのが怖かったのかもしれない。ともかくこの馬鹿な通訳どものせいで、役人が知りたがっていることに満足に答えられなかった。

(4)OP PHE, ф. 550, F. IV, 59/2, л. 26 об. –27 об. 手稿

(藤原潤子 訳)

### 35. 長崎で N.P.レザーノフが日本の役人に渡した文書

1804 年 9 月 26 日

#### 1

偉大なるロシア皇帝から偉大なる日本の<sup>インペラートル</sup>皇帝 天神公方陛下へ贈り物をお届けし、陛下の 4 人の臣下をお返しするために、侍従レザーノフは使節として派遣されて参りました。帝都サンクトペテルブルグを昨年 7 月 26 日に出帆し、今年 9 月 26 日にこちらに到着しました。艦を長崎港に入れるために水先案内人を派遣して下さいますよう、日本側に要望致します。

#### 2

偉大なるロシア皇帝の使節は役人と舟を出して錨地を指定していただいたことについて、偉大なる日本のお上に感謝致します。午後 7 時、フリゲート船は指定の場所に錨を下ろしました。しかし明日の早朝には長崎に入港できますよう、よろしくお取り計らい願います。

(7) Военский К. Русское посольство в Японию в начале XIX века // Русская старина, 1895, Октябрь, No. 10, с. 219.

(藤原潤子 訳)

### 36. 露米会社を代表して N.P.レザーノフが F.I.シェメリンに出した通達より

第 275 号

1804 年 9 月 26 日

ナジェージダ号、長崎の錨地にて

日露間の強固な通商関係樹立を日本の<sup>インペラートル</sup>皇帝に要望するよう皇帝陛下から命じられ、通商を始めるにあたって現在の状況を見渡した結果、以下のような私の意見(かつこれは私からの指令でもあるのだが)を、露米会社から通商に関して信任を受けている貴下に述べるべきだとの結論に至った。私と共に遠征する間、貴下は以下に列挙するすべての物品について、確かな情報を集めるこ

とに最大限の注意を払うように。その遠い国については、オランダ以外とは全く接触を持たないことの他は何も分らない。ケンフェルの旅行記はあるがすでに 100 年以上前のものであるし、1776 年のトゥンベルグの旅行記も似たりよったりである。すでにある情報だけではどうすることもできないので、今こそこの機会を利用するべきである。

日本から持ち出し可能で確実に利益が見込める物として、私は以下の品目を考えている。すなわち蜂蜜、米、樟腦、茶、木綿、中国製綿織物、絹、粉砂糖、氷砂糖、陶器、壁紙、角製品、漆器、傘、オパール、墨、葦の茎と都<sup>メアジ</sup>に生える竹の根、大豆、果物の砂糖漬け、塩漬け。

持ち出し品を挙げたので、次に我々が日本に供給できるものを挙げる：鯨油、アザラシ油、魚油、魚の塩漬け、セイウチの牙、マンモスの骨、鹿やヘラジカの毛皮、ロシア革、魚膠、毛皮、鉄「製品」、「日常用」布、麻布、亜麻布、ラシヤ、「様々な毛皮製品」、鏡などのガラス製品、ガラス食器、炭酸カリ。

この通達で言及された品目について日本での正確な値段を知るよう努めよ。そしてそれらが彼らの需要や慣習にそぐうか、我々の利益と折り合うか、上記以外に供給できる物があるかについても観察を忘れぬように。

自己犠牲の精神で任務を果たせば貴下は名誉を得、祖国に大きく貢献し、会社の信任に答えることにもなる。そして私も貴下を高く評価するであろう。

原本にはニコライ・レザーノフのサイン

(4)OP PHB, ф. 550, F. IV, 59/2, л. 130 об. –135. 手稿

(藤原潤子 訳)

### 37. 日本滞在中の使節 N.P.レザーノフから皇帝アレクサンドル一世に宛てた上申書

1804 年 10 月 15 日

長崎港 ナジェージダ号

慈愛深き皇帝陛下！

カムチャツカより私が陛下に上申書を謹んでお送りしたのち、われわれは 8 月 26 日、ペトロパヴロフスク港を出立し、さらに 27 日にアヴァチャ湾を出ました。30 日、クリル列島の緯度上で嵐に耐え、ようやく風に恵まれて日本帝国の海岸を目にすることができました。19 日に日本沿岸付近、グリニッジより北緯 31 度 7 分、西経[東経の誤り]145 度の位置で、これまで経験したことのないような嵐に遭遇しましたので、この嵐について陛下に手短にご報告申し上げたいと思います。嵐は朝方からしだいに強くなり、気圧計の水銀が下がりました。わが艦の艦長クルーゼンシ

テルン閣下は正午までにすべての帆を下ろし終え、最後に荒天用の支索帆だけを張りました。午後 3 時半、非常に激しい突風が吹いたため、大洋の巨大な波が大気と混じり合って水しぶきに変わり、それは弱まることなく続き、情け容赦なくすべてのものを引き裂きました。舵は固定されていました。ついに支索帆が破れ、一枚の帆も張れなくなりました。風の力は帆をぼろぼろにさえしました。船尾廊下と船尾が損傷し、水が船縁を越えて船室に入り込みました。霧のため主帆柱さえ見えませんでした。これまで一度も経験したことはありませんでしたが、気圧計の水銀が一番下の目盛りよりも下がり、3 時間見えなくなりました。艦長、士官、乗組員たちは果敢に働きました。やるべきことをすべて行いましたが、手のつけられない自然の力はその技能を凌駕していました。絶え間なく突風が吹き、われわれは岸へ流されていきました。われわれが運命を受け入れる覚悟をしていると、8 時ごろから暴風の風向きが突然変わり、われわれは岸から離され、夜半に風が弱まりました。しかし、われわれは【岸の？】<sup>90</sup>すぐ近くにいたので、翌日は岸を目にすることができました。さいわい、船の構造や索具類には大きな損傷はありませんでした。そして、日本本土の海岸と無数の島々の間を通り過ぎ、ついに 9 月 26 日、無事に長崎の近くまでたどりついたのです。日本政府はわれわれを友好的に受け入れました。陛下の士官には剣、私の警護兵には銃の携行が許されました。われわれは町が見える湾へ曳航されましたが、25 日後に江戸から急使がもどってくるまでは町へ近づけません。県知事たちは歓迎の印として、われわれに物資を無償で送り届けるよう命令しました。私自身は県知事たちとは会っていませんが、その好意に甘えて、ここからバタヴィアへ行く 2 隻のオランダ船で、陛下に宛てた私の上申書を送るように通訳を介して頼み、バタヴィアからはさまざまな船で運べるように写しも手渡しました。艦長や士官、乗組員たちは全員無事で元気にはしておりますが、親族に手紙を書くことができませんので、われわれが当地へ無事に到着したことを新聞にて知らせていただくか、あるいは陛下のご慈悲により別の手段で喜ばせていただくよう、陛下のご命令を謹んでお願い申し上げます。

皇帝陛下の忠実なる臣民

侍従長レザーノフ

(4) ОР РНБ, ф. 152, оп. 1, д. 379, л. 87-88. 写し

(前田ひろみ・小野寺歌子 訳)

---

<sup>90</sup> 【編訳者補注：写しを作成した者による注】

38. N.P.レザーノフがアレクサンドルー世宛に書いた手紙。1804 年 9 月 19 日の嵐について

1804 年 10 月 15 日

ナジェージダ号、長崎にて

9 月 19 日、日本近海北緯 31 度 7 分、東経 145 度地点で我々が遭遇した稀に見る大嵐について、皇帝陛下に手短に御報告致したいと思います。朝から徐々に風が冷たくなり、気圧計が下がってきました。艦長クルーゼンテレンは嵐の前にすべての帆を下ろし終え、荒天用の支索帆<sup>ステースル</sup>のみを張りました。午後 3 時半、大洋の巨大な波を空気のまじったしぶきに変えるようなものすごい強風が吹き、その勢いは衰えることなく、風は情け容赦もなく吹き続けました。梶は固定されました。しかしついに支索帆がもぎ取られ、一枚の帆もなくなり、甲板でも船尾でもすべてがへし折られ、水は舷を越えて船室に流れ込み、暗闇の中でメインマストさえ見えず、こんなことはこれまでの航海で一度もなかったことですが、気圧計が下がり切って 3 時間全く水銀が見えませんでした。空気とまじったしぶきが顔に当たるとひどく痛く、立っていることもできません。次の日見るとマストの望楼やロープ類の上にまで砂や貝殻が積もっていました。まさに海の底から波がうねっていたのです。このような状態で助かる望みも無く、我々は運命の瞬間、岸にたたきつけられる瞬間を静かに待っておりました。しかし神の御心は何とも不思議なめぐりあわせで我々が救われるのを良しとされたのです。夜 8 時、巨大な波が耳をつんざくような音で船尾に打ちつけ、1 分後にさらに大きな波が船尾の窓をたたき割り、我々は船室で一瞬にして腰まで水浸しになりました。水が柱を伝ってハッチに流れ込み、ろうそくの火も消える中、我々はからくも水が流れ込み始めていた下甲板への出口を閉めることができました。舟は右に左にひどく投げ出されましたが、それが幸いして水は甲板の排水溝からうまく流れ出てくれました。我々は窓のよろい戸を閉め、バールでしっかりとおさえました。ところがその危機的瞬間に、風がすごい勢いで突然 Ebn の方位へ吹き、我々を岸から引き離したのです。真夜中に嵐は静まる気配を見せはじめ、逆風が水のうねりを止めてくれました。この風が吹かなければマストは間違いなく波でへし折られていたでしょう。我々が岸からどれくらいのところにいたのか、私には見当もつきません。夜が明けてはじめて岸が見えました。艦長、士官、乗組員は皆、勇敢に働きました。艦自体はロープ類と同様それほど大きなダメージは受けていませんでした。このような不運に遭いながらも我々はジエメナ(ファン・ディエメン)<sup>リケイ</sup>海道を通り、琉球諸島を北でなく南に見ながら、アロースミスの地図に示されている通りの場所に薩摩の突端を見つけたのです。

(7) Военский К. Русское посольство в Японию в начале XIX века // Русская старина, 1895, Октябрь, No. 10, с. 218.

(藤原潤子 訳)

### 39. F.I.シェメリンの日誌より。N.P.レザーノフの使節と日本人との関係について

#### 1

1804年12月

5日は我々が使節団長崎入港の記念すべき日だった。朝7時、日本の大きな船が以前警護にあたっていた時と同様、艦の両側に配置された。皆、絹の着物を着ており、舷や船尾を覆っていた青の厚い木綿の幕は、その朝から色とりどりのしなやかな絹に変わった。新たに揚げられた我々が見たことないような素晴らしい絹の旗や、金糸をちりばめた色とりどりの日本の幟は高い棹の上で丸まったり半円を描いたりして船尾を飾り、まったくすばらしい光景だった。

使節殿のために用意された船は、64本の櫂を持つ日本語で<sup>シキフケ</sup>関船と呼ばれる船で、大きくて特別な作りになっており、他の舟の中でまるで巨人のようにそそり立っていた。それは黄金と瑠璃の羽を誇る孔雀のように美しく飾られていた。船体にぐるりと巡らした絹の太縄に下がる幕が、風にひるがえっていた。それらは白、赤、深紅、薔薇色、水色、麦藁色、青などの色をした、長さ3アルシンほどの真新しい縹子や和風柄の幟だった。並んで上方からつるされ、色とりどりに我々の目をやさしく楽しませた。

ふたりの<sup>オッセル・バンジウス</sup>役人が艦に着くや否や、閣下は家の下見に七等文官フォッセ、海軍中尉ロンベルグ、天文学者ゴルネル、自然科学者ランドルフを差し向けた。彼らが長崎に行っている間、我々は使節殿の荷物と自分たちの物を、日本側から派遣された船に積み込んだ。

12時、町に下見に行った者たちが帰って、なかなか住み心地の良さそうな家であること、使節殿が住むのに十分な部屋があり、見事に和風でまとめられていること、荷物を置く倉庫も広くて便利であることを使節殿に報告した。

閣下はこの報告に満足した様子で、荷物を積んだ船に先に町へ出発するよう言った。使節殿と我々は残って昼食のテーブルについた。昼食が終わったのは午後1時だった。日本人は朝からずっと船尾最上甲板に据えられた椅子に座って、使節殿が出発するのをもどかしげに待ち続けた。

準備が整い、艦のそばにつけられた<sup>シキフケ</sup>関船の舷から我々の艦に、見た目に美しくかつ安全そうな手すり付き木製タラップがかけられた。これは腕の良い指物師の手によるもので、この時のために日本人がわざわざあつらえたのである。使節殿は船尾甲板に出た。そこでは艦長の指揮下で兵士が隊列を組んでおり、太鼓の音に合わせて彼に敬礼した。第一陣の兵士たちが艦長と共に<sup>シキフケ</sup>関船に乗り込み、下士官がロシア帝国旗を先頭に掲げた。彼らは船の艦に乗せられた。続いて使節団員ふたりの手でマホガニーのケースに入った国書が運ばれた。それに使節殿が続き、さらにその従者、海軍士官たちが続き、そこに私も混じっていた。使節殿と我々は船の内部に通じる小さな

階段を下りた。船内にある立派な部屋の中央には、四本の柱を足にして日本最上の黒漆が塗られた長方形の天蓋が据えられていた。その下にはすでに、使節殿のための肘掛椅子が置かれ、黄色い柄の入った黒いふさふさとしたビロードの覆いが掛けられていた。船首と船尾に面した部屋の壁には、和風柄の様々な色の幟や、甲板で紐に通して船の周りに掛けられているのと同じ幕が掛かっていた。国書は天蓋の真下の机に置かれ、使節殿もそこに据えられた椅子に座った。我々と共にその場にいたのは、日本人下士官と通訳で合わせて 10 人ほどだった。使節殿と我々はお茶とみかんをごちそうになった。

上級役人<sup>バンジョス</sup>たちが艦を後にして自らの船に乗り込むと、出発の合図が出された。マストの支索に立った船員たちが「ウラー」と三回叫んだ。我々の艦の兵士がそれに応えた。

日本のガレー船のロシア皇帝旗を見て我々は感無量だった。それは誇り高いかの国の旗の間に高く掲げられ、はためき、吹き寄せる風に遊ぶ様子は楽しく誇らしげだった。平らかな世界を旅してきたロシアの鷲が、その飛行を妨げていたすべての障害から解き放たれ、今、静けさをたたえた閑寂な空を舞った。そして鷲はロシアが望む平和、友情、そしてふたつの隣国に利益をもたらすに違いない長崎を基点とした通商樹立を日本に告げようと急いでいるのだ。

## 2

1804 年 12 月 6 日<sup>91</sup>

(略)使節殿が言った。「見ず知らずの私に、<sup>グーベルナートル</sup>県知事様たちほど親切にして下さった方は今までありませんでした。いろいろとお世話になっている方に直接お会いできるのをうれしく思います」。県知事たちは礼を言った。

そのあと他の県知事が言った。「あなたの来日目的は存じておりますのに私が<sup>ダイミョ</sup>大名として<sup>イェド</sup>江戸から送られましたのは、あなたに直接お話をうかがいたいと思ったからです」。使節殿は至極御満悦で説明した。それを聞いて大名が<sup>オーバー</sup>しゃべり、通訳が伝えた。「全く許可した覚えのない通商につい

<sup>91</sup>【訳者補注：『シェメリン旅行記』では 1805 年 3 月 23 日。レザーノフの日記でも同様。「シェメリン(文書館)」でこのような日付の間違いが起こった理由は、『シェメリン旅行記』を見れば容易に想像がつく。シェメリンは月初め、または区切りがついて章が変わる時にのみ「〇月〇日」と書き、その他の場合には「〇日」という具合に、月を抜かして書いている。年号が入っている個所はさらに少なく、年始めと第 1 部、第 2 部の最初のみである。もしもページが本体から離れてしまえば、それが何年何月の記述であるのか正しく推測するのは、本人さえ難しい。「シェメリン(文書館)」もおそらく『シェメリン旅行記』と同様に、ほとんどの個所で年・月無しで「〇日」としか記されていないからだろう。資料が整理され、文書館に入るまでのどこかの段階で誰かが、たまたま前後にあったページから推測し、年号と月を書き加えた際に間違いが起こったと思われる。史料 No. 39 の 3 の「1804 年 12 月 24 日」、No.40 の「1804 年 12 月 24 日」、No.41 の「1804 年 12 月 27 日」についても同様。

ここでは「1805 年 3 月 23 日」であるはずの日誌が「1804 年 12 月 6 日」となっており、日にちさへ間違っている。このページはこの日の日誌の途中から始まっており、したがって元々日にちも書かれていなかったと推測される。そのため、偶然前後にあったページの日付からの推測で、全く違う日付が書き加えられてしまったのであろう]

てロシア皇帝陛下が感謝の意を表されていることに公方様は驚いておられます。それに、何人たりとも決して日本と文通はできないとラクスマンにあれほど言い含めたにもかかわらず、どうして公方様に手紙を書くようなことができたのでしょうか？ 第一の規則は一度破れましたが、これは <sup>インペラートル</sup> 皇 帝 様の彼への寛大なお心遣いによるものだったです」。

使節殿は微笑を浮かべながら彼らを見て言った。「私には理解できません。特別な名誉とされることがこのような侮辱とみなされるのは驚きです。ヨーロッパ中の皇帝や王が、偉大なる皇帝陛下との文通を光栄に思っています。それに公方様と同様 <sup>クボウ</sup> 皇 帝 <sup>インペラートル</sup> である偉大なるロシアの皇帝陛下に関することを、公方様がラクスマンに命令することなどできるのでしょうか？ このどちらが偉いか、ここで我々が決められることはありません」。使節殿は激しい口調で言った。

彼の言葉が翻訳されると、肥田豊後守がとんに調子を変えて言った。「使節殿は日本式の座り方でお疲れでしょうし、会談はひとまず終わりにして続きは明日にしましょう」。

使節殿は立ち上がりお辞儀をしたが、彼らはそれに応えなかった。

### 3

1804 年 12 月 24 日<sup>92</sup>

到着した使節殿に <sup>オーベル・トルク</sup> 通 訳 たちが伝えた。一、我々の將軍様はあなたに以下のように伝えるよう申されました。昔は他国から日本を訪れるのも、日本人が他国に行くのも自由であった。しかしここ二百年間、古い友人以外誰も日本を訪れてはならず、日本人が祖国から出ることも許されぬという掟がきつく守られている。ロシア皇帝から使節と贈り物が送られて来れば、日本の掟ではすぐさま同じようにこれに応えなければならない。しかしロシアに使節を派遣することはできない。なぜなら誰も日本から出ることは許されないからである。それゆえ、国書も贈り物も受領できない。これは日本国の役人の総意で決められたことである。

二、日本国では古くは朝鮮人、<sup>リケイツイ</sup> 琉球人、中国人、オランダ人とのみ、現在では後ろの二者とのみ通商しており、新たにそれ以外の国と通商する必要がない。

三、もとより日本に異国人が来ることは掟で禁じられており、その掟は守られるべきであったが、ロシア皇帝の善良なる御心に敬意を表し、帰路のための食糧を与え、艦を帰すことに同意する。ただし、二度とロシア人が日本に来ぬことを条件とする。他の国の船であれば六ヶ月も日本に停泊することは許されなかったはずであり、今回のことは日本側の寛大なる措置と受け止めるように。

これを聞いて使節殿は言った。「通商について言えば、ロシアがこれを必要としているわけでは

<sup>92</sup> [訳者補注：『シェメリン旅行記』では 1805 年 3 月 24 日]

ありません。多くの必要品を手に入れることができないでいる日本人に対してロシア皇帝が慈悲を施そうとされたのであり、それをお断りになるならより困窮することになるでしょう」。

すると<sup>オーバー・トルク</sup>通訳が言った。「通商するにしましても、日本にはロシアに輸出するほどの漆はありません」。使節殿が言った。「漆は我々にはほとんど必要ありません。それより贈り物のことですが、公方<sup>クボウ</sup>は我が皇帝が贈り物や使節団を欲していると思い違いされているのではありませんか？日本が誰にも出国を許さず、使節も派遣せず、他に類のない独特の習慣を持っていることは世界中が知っていることです。しかしながら贈り物は受け取っていただかなければなりません。これは偉大なる皇帝から友情のしるしに贈られたものなのですから。

(4) OP PHB, ф. 550, F. IV, 59/2, л. 65–68 об., 76–76 об., 79–80. 手稿

(藤原潤子 訳)

#### 40. F.I.シェメリンの日誌より。N.P.レザーノフの日本側への要求とそれに対する返答

1804 年 12 月 24 日<sup>93</sup>

第一に、保護証を与えること。嵐や風によってロシア人が思いがけず海岸に漂着することがあれば、友好国の国民としてこれに遇し、すでに公示されているように<sup>ナシカサキ</sup>長崎に送るのではなく祖国に帰すこと。その際、必要なものはすべてお金で買えるようにすること。

「ロシア人を友人として遇するようにとの公示はすでに出っていますが、再確認しておきます」と彼らは言った。

使節殿は言った。「それは結構なことです。しかし日本の両海岸沿いの住民にも知らせていただきたい。我々は朝鮮の海を通ることになるでしょうから」。これを聞いて彼らは顔を見合わせ、すぐに「重臣たちがすべて間違いなく解決してくれるはずです」と答えた。

第二に、今後ロシア沿岸で日本人漂流民を救助するようなことがあれば、彼らをどこに連れて行けば良いのか？

<sup>オーバー・トルク</sup>通訳たちは一旦もどってからまた来て、「協議はすでに終わっていました」と使節殿に言った。彼らは明日返事を持ってくると約束した。

(4) OP PHB, ф. 550, F. IV, 59/2, л. 81. 手稿

(藤原潤子 訳)

<sup>93</sup> 【訳者補注：『シェメリン旅行記』では 1805 年 3 月 24 日】

41. F.I. シェメリンの日誌より。N.P. レザーノフ使節団が連れてきた日本人に対する長崎港運上<sup>タモージニヤ</sup>所の日本の役人について

1804 年 12 月 27 日<sup>94</sup>

(略)それから役人たちは外に出た。そこには我々が連れてきた日本人の所持品が置かれていた。すべては検分され、書きとめられた。上質のラシャやその他の生地で作られた洋服、きちんと整えられたリンネル、絹や綿のスカーフの他にかなりのお金を持っている者もいた。儀平は合わせて 370 枚にもなる *storonnye*<sup>95</sup> 新造ルーブル銀貨とスペイン・ピアストル、さらにチェルボーネツ金貨を 12 枚持っていた。かわいそうな病気の太<sup>タンジュン</sup>十郎からは銀貨を 160 とやはり 12 チェルボーネツが見つかった。年寄りの津<sup>スグニ</sup>太夫は銀貨を 33 枚持っていたが、金貨と時計は見せなかった。この時計はサンクトペテルブルグで皇帝陛下から賜った物のひとつだが、検分の際には誰の所持品からも見つからなかった。4 人目の左<sup>ソフニ</sup>平の所持金は一番少なかった。10 ピアストルだけ見せて残りは隠したに違いない。

(4) OP PHB, ф. 550, F. IV, 59/2, л. 84 об. –85. 手稿

(藤原潤子 訳)

42. F.I. シェメリンの日誌より。光<sup>コウダ</sup>太夫の運命について

1805 年 1 月 4 日

日本の役人と共に我々の艦にやってきた日本人の何人かが言った。「彼らと同じようにロシアから帰ってきた日本人光太夫は、日本に足を踏み入れるや否や故郷に住む自由を奪われ、親戚に会うこともありませんでした。彼は民や身内との接触を禁じられ、今は江戸<sup>エド</sup>に幽閉されています。そんなありさまでもう 12 年になります」。

(4) OP PHB, ф. 550, F. IV, 59/2, л. 96–96 об. 手稿

(藤原潤子 訳)

<sup>94</sup> 【訳者補注：『シェメリン旅行記』では 1805 年 3 月 27 日】

<sup>95</sup> 【訳者補注：意味不明】

43. N.P.レザーノフの<sup>グーベルナートル</sup>長崎県知事への手紙

【日付不明】

県知事様方へ！

我が偉大なる皇帝陛下の親書をお読みになられて県知事様方は先刻ご承知のことと存じますが、皇帝陛下は私に<sup>テンジンクボウ</sup>天神公方様の臣民をお返しするよう命じられました。私個人としましてはこれを果たしたいと強く願ったのですが、思いがけない事態により変更を余儀なくされましたので説明させていただきます。

私が伴ってきた日本人は自らの主君への忠誠と祖国への愛ゆえに帰国を望み、あらゆる困難と危険な長旅に耐えてついに帰り着きました。しかし運命が未だ決せられぬことに絶望し、そのために病に冒されてしまいました。うち一人は昨日、死んでこの苦しみを終らせた方がましだと剃刀をつかんで喉に突っ込みました。幸い他の者がこれを取り出し、致命的な傷ではなかったので一命をとりとめることができました。

私は他の日本人たちもこのようなことを起こすのではないかと危惧しております。ですから彼らを私の元からお引取りいただきますよう何卒お願い申し上げます。その際、我が偉大なる慈悲深き皇帝陛下から名誉を賜った者としてこの者たちを遇していただけますよう、また彼らの所持金、物品も共にお引取り下さいますよう望みます。彼らの引渡しについて私までお知らせ下さい。

(7) Военский К. Русское посольство в Японию в начале XIX века // Русская старина, 1895, октябрь, No. 10, с. 229.

(藤原潤子 訳)

44. 遣日特命使節、侍従長である帯勲者レザーノフ氏が、両帝国間の交易を開設する際に拠るべき原則について江戸にて日本国の公使たちと交渉することになった場合のための公使覚書

【日付不明】

1. 日本領の北方にある寄港地を求めるべし。
2. 寄港可能な船の数を増やすよう求めるべし。
3. ヨーロッパから到着したロシア国商人の船に供給される積荷について交渉し、銅や樟脳を受領できるよう全力を尽くすべし。
4. 隣接し、友好関係にある大国間における、両帝国の臣民にとって互いに利益をもたらす商業の実現をロシア皇帝が非常に強く望んでいる証として、ある程度の量のキビ[米]が定期的に

購入されるであろうと述べ、今後は当地で豊富な食糧であるキビにいつも穏当な値をつけるよう要望すべし。

5. 当地にあるすべての食糧の価格を提示し、すべての商品の見本を提供するよう求めるべし。
6. 国庫に入るべきで、かつ商業従事者にとって負担とはならない税を設定すべし。
7. 商業従事者に土地を割り当て、倉庫を建築し、この利用料金を決定すべし。
8. ロシア国の商人は日本政府の法律に従う。ただし、ロシア人の長官あるいは代表者 Ober Goupt およびその他のロシア国人に対し、県知事諸氏に届け出のうえ町への出入りを許可すべし。
9. 私がロシア国の商人に事前に通知できるように、ロシア国人と交易を行う手順を提示するよう、書面にて求めるべし。
10. 商業は自由に行われるべきなので、当地に運ばれた商品のうち、物品の余剰により、あるいは価格が低いために当地で売却されなかった商品については、商業従事者が損失を被らないようにそれらの持ち帰りを許可すべし。
11. 交易においては、どのような商品を日本へ運ぶのか、また日本から持ち出すのかについて、けっして強制せず、自由を認めるべし。
12. 船舶が到着した際には、入港が少しも遅らされないよう、また食糧については要望がすべて手頃な値段で満たされるように求めるべし。当地にて越冬する船についても同様である。
13. 日本の法律では、<sup>ナシガサキ</sup>長崎港以外の海岸への停泊が外国船にはまったく認められていないことが、ロシア国人の間でよく知られている。しかし、神よ守りたまえ、事故により船が暴風で海岸に打ち上げられたり、救出を求めて海岸へ接近したりする場合もあるので、その責任を問わず、友好国側からあらゆる支援を行うべし。
14. ロシア国の商人が当地で交易を行う準備ができており、私の帰還だけを待っていることを、私が日本宮廷になるべく早く理解させるのがどんなに望ましいのだとしても、私はあらゆる用件を事実にもとづかせ、以下を伝えなくてはならない。すなわち、私は当地を出発し、早ければ 13 か月後にロシアに帰国し、帰国した年に船を艤装し、当地の商館のための人員と一連の商品を準備せねばならないが、それは秋におけるサンクトペテルブルグ港の凍結や秋前の荒天により、おそらく[年内の出港には]間に合わないだろう。したがって、ロシアから日本に向かう最初の船は 1807 年に出発し、どんなに早く航海シーズンが始まったとしても当地への到着は 1808 年となるのは間違いない。間に合った場合は、1807 年の到着も可能である。
15. 最初に到着する船は、積荷、そして将来の船の到着に向けて商品を用意するであろう長官あ

るいは代表者を残し、その一方でカムチャツカ用にキビとその他の商品を積み込む。これに際し、この者は商人たちが損失を被らず、船が順風をつかむように全面的に支援すべし。

16. 最初の船が、神よ守りたまえ、到着しない場合、日本政府はこの船が災難に遭ったに違いないと判断すべきであり、到着しない責任を問わず、二番目の船を最初の船と同様に受け入れるべし。
17. ヨーロッパの戦況が交易を中断させた場合も、このような障害はやむをえないものと認識し、その責任を問うべからず。
18. 来航する船舶の増加は、交易からの利益次第となるだろう。
19. 交易を開設後、交易がロシア国人に損失を負わせ続けた場合、長官あるいは代表者、そしてロシア国人全員に対して日本からの退去を認め、それが友好を傷つけたとみなすべからず。慈悲深きわが君主がつねに、そして永久に友好を約束している。
20. 日本帝国のために切り開かれたロシア国人の商業の全領域を、永遠にロシア国人にのみ提供すべし。

(1) АВПРИ, ф. С.-Петербургский Главный архив, I-7, 1802 г., оп. 6, д. 1, л. 10-10 об, 26-27; Архив РГО, разряд. 99 (Ж. VIII. 1), оп. 1, N 135, л. 15 об. -16 об.<sup>96</sup>

(木寺律子・畠山禎 訳)

#### 45. I.T.カラシニコフ「あるイルクーツク住民の回想」より<sup>97</sup>

[1862 年頃]

(略)1805 年、イルクーツクにおいて、付属郡学校、教区学校を持つギムナジアが開校した。

(略)学問の他にラテン語、フランス語、ドイツ語のヨーロッパ諸言語、中国語と日本語のアジア諸言語が教授された。語学教師の中でもドイツ語教師であるルーテル派牧師イヴァン・ユリエヴィチ・ベッケル、アジア言語教師である生粋の日本人ニコライ・ペトロヴィチ・コロトウイギン<sup>98</sup>が

<sup>96</sup>【編訳者補注：ロシア地理学協会古文書室 Архив РГО 所蔵文書の文末には、「1811 年 11 月 11 日ロシア語訳」と翻訳された日付が入れられている】

<sup>97</sup>【監修者・編訳者補注：I.T.カラシニコフ(1797～1863 年)はイルクーツク出身の作家、官吏である。代表作「あるイルクーツク住民の回想」は 1862 年に執筆され、死後、『ロシアの往時 Russkaia starina』1905 年、第 7～9 号で発表された。したがって、この史料は同時代史料ではないが、参考になる情報を含むため収録した。回想の中でカラシニコフは、自身が学んだイルクーツクのギムナジアについて記述しており、抜粋部分はその一部である。カラシニコフの手稿は、ロシア国民図書館手稿部に所蔵されており、今回の刊行はこの手稿にもとづいている。『ロシアの往時』では第 8 号、393～394 頁に相当する】

<sup>98</sup>【監修者補注：コロトウイギンは、1783 年にロシアに漂着した伊勢国神昌丸の乗組員だった新蔵である。船頭の大黒屋光太夫らは帰国したが、新蔵はロシアに帰化し、イルクーツクで日本語教師になった。1810 年没】

とくにすばらしかった。

日本語教師コロトゥイギンは嵐により日本からカムチャツカに流された。その後、イルクーツクに移され、正教に入信し、ロシアの姓を名乗った。ロシア語を習得し、子どもがいた<sup>99</sup>。子どもたちはギムナジアで学んだ。つまり、幸せな家庭に恵まれ、非常に善良な人だった。

このように、ときには偶然が人びとの運命を思いがけず定めることがあるのだ！

(4) OP PHB, ф. F. IV, 814/2, л. 67-70.

(斎藤由佳・小野寺歌子 訳)

#### 46. シベリア総督イヴァン・オシポヴィチ・セリフォントフより商務大臣ニコライ・ペトロヴィチ・ルミャンツェフ伯爵宛の文書。イルクーツク国民学校日本語生徒の処遇について

第756号

1805年2月13日

イルクーツクにおいて

伯爵ニコライ・ペトロヴィチ閣下

イルクーツク在勤時、当地の国民学校<sup>100</sup>に付設された日本語教室を調査したところ、長年在籍する生徒は成人したものの、あて先はどこにもなく受け取るお金が少ないため生活に大きな困難を被り、勤務についても自分の置かれた状況を見て、何の目標も抱いていないということを知りました。これが原因で私は、生徒達の内、誰がどんな方向に進みたいと思っているのか知りたいと思っていましたところ、イルクーツク国民学校長の六等文官克蘭ツは、日本語教師コロトゥイギンが彼に出した報告を紹介してくれました。そこには日本語教室に在籍する生徒のうち6人が希望を述べていました。すなわちアンドレイ・アムヴロソフは聖職者、プロコーピー・コスィギンは国民学校、レフ・コクリンは文官職、ヤーコフ・パルニャコフは郵便局、イヴァン・ミロノフは現在の身分のまま日本語学習を続けたいが、生活費が高いため給付金を上げて欲しいと述べていました。

1791年9月13日にイルクーツク及びコリヴァン総督ピーリ宛の勅令第9項には、「(アレウト列島から連れ来られた)日本人のうち二人が洗礼を受けたため帰国することができないので、日本との交易が樹立される暁にはきわめて必要になる日本語の教育に彼らを使う。そのため、これら

<sup>99</sup> 【編訳者補注：『ロシアの往時』では、「ロシア語を習得し、家屋を購入し、ロシア人女性と結婚し、子どもがいた」となっている】

<sup>100</sup> 【編訳者補注：narodnye uchilishcha, narodnye shkoly をこのように訳した。1917年のロシア革命までロシアに存在した初等教育の一般的な名称で、1786～1804年の公式名称には malye i glavnye(小学・主要)がつく(Большой энциклопедический словарь, Москва, 1997, с.784)】

の日本人に相応の給料を与えてイルクーツク国民学校に置き、最初は現地の神学校から特別に選ばれた5～6人の男子を日本語学習のために彼らに委ね、その生徒たちが時とともに、我々が望む日本国との関係が樹立されたときに通訳として役に立つことができ、とても必要な日本語知識を広めることができるよう、貴殿の管轄下におく」と命じられています。

この勅令を実行すべく、総督の命令により、最初はイルクーツク神学校から派遣された3人の生徒でイルクーツク国民学校に日本語教室を設立しました。その後、元老院の1796年4月7日付けの命令書により神学校生徒3人が加えられましたが、そのうちの一人は日本語の学習に馴染めず、本人の希望もあって1799年に退学させて元の学校に戻し、彼の代わりに教師コロトゥイギンの息子ミハイロを入学させましたので、彼を合わせて現在生徒は6人です。彼らは、社会保護局より生活費を受領していますが、額は学習成績によって変動します。

今のところはまだ実現していない日本との通商関係樹立に備えて日本語学習は組織されましたので、レザーノフ侍従の周知の使節団の好ましい結果によってもこの関係が果たしてどうなるのかわかりませんが、私はコロトゥイギン教師に二人の生徒だけを残し、他の生徒は彼らの希望通りに勤務させることで十分だと思います<sup>101</sup>。これらのことは、直接閣下の注意深い検討に多くを依拠しているということについて、閣下にお知らせする光栄を有しますとともに、閣下からの御回答をお待ちしております。

敬具

慈悲深き閣下

恐惶謹言

イヴァン・サリフォントフ

(6) РГИА, ф. 13, оп. 1, д. 191, л. 1–2 об. [史料筆写者による注]文書の最初に、「1805年3月31日、皇帝陛下に報告された。日本語コースの生徒は商務省の管轄下に置かれる」とのメモがある。

(オイドフ・バトバヤル、寺山 恭輔 訳)

#### 47. F.I.シェメリンから使節 N.P.レザーノフへの対日輸出入に関する情報収集命令遂行報告

1805年3月10日

閣下の通達は9月26日、長崎の停泊地に初めて錨を下ろした日にナジェージダ号で受領致しま

<sup>101</sup> [編訳者補注：将来の進路について尋ねられた日本語生徒のうち本文書の通り、5人が回答している。学生の補充の経緯から、残りの一人は教師コロトゥイギンの息子ミハイロであり、彼が日本語学習の継続を希望するイヴァン・ミロノフとともにセリフォントフが日本語学校に残すことを想定したのではなかろうか]

した。そこで閣下は私に先々露日間で交易可能であろうと思われる物品を明らかにし、最大限の注意を払ってそれらに関する信用に足る情報を集めるよう指示されました。長崎での思うに任せぬ状況の中で完全ではありませんが、できる限りの範囲で情報をつかみ、閣下の命令を実行するよう努めました。

まず、ロシアの工場・製造所で生産される物及びシベリアにおける産出物のことから始めさせていただきます。この大地、森、そしてカムチャツカとクリル列島の岸を洗う海を念頭に置いて閣下の御命令に従い思案しましたところ、新たに開かれる交易で輸出に適すると考えられます物は、(略)<sup>102</sup>

これらの日本への輸出品目に加えて、閣下は以下の点についても調査するよう命じられました。  
(略)<sup>103</sup>

露米会社手代、モスクワ商人フョードル・シェメリン

(4) OP PHB, ф. 550, F. IV, 59/2, л. 135 об. –151. 手稿

(藤原潤子 訳)

#### 48. 皇帝の命を受けた長崎県知事から N.P.レザーノフへの通告

<sup>ブニダフ</sup>  
文化2年3月7日[1805年3月25日]

日本、長崎

10年前の1792年、ロシア船が松前に到来し、このときわれわれは彼らに対し以下を通告した。友好関係を結び、交易を行うことはできない。日本語で書かれた文書についても、その筆跡は日本の書簡によく似ているが、理解しがたい。松前は外務について宮廷に通知ができる場所ではないという特別の事情により、日本に[日本人を]送還してはならない。誰か日本人がロシアにいて、日本へ送還したいのであれば、またロシア国人が他の用件について要求したいのであれば、それを松前ではけっして行ってはならない。しかしながら、これを再度行いたいのであれば、<sup>ナシダサキ</sup>長崎に行かなくてはならない。長崎は外務を遂行する場所に定められているからである。それゆえ、ロシア船に長崎への入港を許可する<sup>パスポート</sup>証明書[信牌]が与えられたのである、と。上述の諸事情はすでに説明されている。それにもかかわらず、今、ふたたびロシアより日本語で記された書簡が運ばれてきた。このことから、ロシアは今まで通告をまったく理解しておらず、それが認識の違いや土地の儀礼に通じていないことから発生したと判明した。このため、再度、日本皇帝の命により、

<sup>102</sup> 以下、ロシア側から日本へ輸出可能と思われる物品が表裏11枚の紙に挙げられている。

<sup>103</sup> 以下、表裏14枚に、日本からロシアに輸入できるとと思われる物品が挙げられている。

上述の通告が繰り返される。

船の必需品一切と薪水が提供される。

出航準備が完了後、船は当地からすみやかに出航し、再度、接岸したり、日本列島付近で停泊したりしてはならない。

(3) Архив РГО, разряд. 99 (Ж. VIII. 1), оп. 1, N 135, л. 5.

(木寺律子・小野寺歌子 訳)

#### 49. 日本皇帝の使者からロシア使節レザーノフへの挨拶

<sup>フニヴァ</sup>  
文化2年3月9日[1805年3月27日]

日本、長崎

当地の海上に到着後、貴殿は大変ご苦勞なされたに違いない。けれども、滞在がかくも長く続いたのは、大いなる好意から請願がなされ、それゆえ本件が十分に考慮され、熟慮されたからである。

上級参事官コスチンが翻訳しました。

(3) Архив РГО, разряд. 99 (Ж. VIII. 1), оп. 1, N 135, л. 5-5 об.

(木寺律子・小野寺歌子 訳)

#### 50. 商務大臣・伯爵 N.P.ルミャンツェフよりシベリア総督 I.O.セリフォントフ宛の返信。イルクーツク国民学校の日本語生徒 6 人について

第 794 号

1805 年 4 月 5 日

イルクーツク国民学校の日本語生徒に関する 2 月 13 日付けの閣下の文書について皇帝陛下に報告しました。皇帝陛下は、1791 年 9 月 13 日付けの前総督ピーリ宛の勅令に示された目的にしたがい、検討がすむまで、日本語生徒を他所へ移さずに私の管轄に残すよう命じられました。

日本語をよく学んだのが 6 人全員かそれとも一部か、日本語以外どんな科目をとっているのか、生活費をいくらもらっているかについて知ることが必要だとの皇帝陛下の思召しですので、閣下にはこの件について私に報告していただくようお願いします。日本語を十分勉強していないものは今後、あらかじめ定められたこの言語を今まで以上に熱心に勉強すべきです。

敬具

「ニコライ・ルミャンツェフ」

(6) РГИА, ф. 13, оп. 1, д. 191, л. 3.

(オイドフ・バトバヤル、寺山 恭輔 訳)

51. N.P.レザーノフの報告書で検討されている諸問題に対する露米会社本部による回答

第 282 号

1805 年 4 月 29 日

(略)

カムチャツカに関する考察を述べた第 8 項目に対して

十分な人手がなくては大きな目的を達成する事ができないというカムチャツカに関する貴殿の意見は正当なものであり、またもっともなものであります。したがって、政府にこの問題についてそれとなく仄めかすように振舞ったことがより正当です。というのも、政府がただ自分の利益にのみ関心をもっていると、実際にカムチャツカでインディアンと通商を確立するのはまさに困難となるだろうからです。

しかし、この地方に関してあらゆる必要なものを一つの会社が援助すること、しかもそれを急いでやることはその能力の限界を越えるものです。

貴殿の日本での成功が実りあるものとなることだけを祈っております。そうすればきっと、長い間忘れられたこの地方全体に我が政府の目を向けさせる大きな契機となるでしょう。

ナジェージダ号のために新鮮な食料を発送することに関する第 9 項目に対して

ナジェージダ号に食料を発送せよという貴殿のイルクーツク及びオホーツク支所宛の指令は、取締役デラロフによって確認され、自分たちの船のために予定されていた 1 年分の調達品を貴殿に向けて発送します。その内訳は、バター 100 プード、穀類 100 プード、ライ麦パン 400 プード、小麦粉 300 プード、塩漬けの家畜類の肉 70、その他貴殿が必要とするものすべてで、ヤクーツクからオホーツクには至急送られます。これらすべてのものを貴殿に送るための自社の船を、我々はオホーツクに 1 隻も所有しておりませんが、国の船に会社の積荷を受け入れてもらうことは、貴殿もご存知のように勅令によって禁じられております。

したがって、今回貴殿の特別な要望にしたがって、イルクーツクの最高司令官がオホーツクで官船を建造するよう命じられましたが、その船が貴殿を見つけ出し、貴殿に上記の物資を届けることができるのか、現在知ることはできません。

取締役デラロフがオホーツクに滞在中、貴殿の到着や要求に関する情報を何一つ受け取ることが出来なかったのは非常に残念です。もちろん彼は上記の事柄に関して現地で更なる指令を残すことも可能だったのですから。貴殿が日本との通商のために要求した物品に関してですが、その内ロシア革はオホーツクに集まるものだけ、もちろん食料と共に貴殿に発送いたします。なめし皮は果たしてオホーツクに 1000 枚もあるのでしょうか？ これはギジガから運び込まれているのですが、そこから会社の品物を国の船で輸送することもまた禁じられているからで、すでに 2 年間そこから品物は入っていません。しかしオホーツクで探し出せるものはすべて貴殿にお送りいたします。オホーツクにはオットセイの毛皮が 10 万頭分以上ありますが、これらはロシア国内販売で、国内に運ぶように既に指令が出ており、馬も雇われている上、それ自体の重さや他の貴重品の重さを考えると、国の船に積み込むことは困難です。したがって、2 隻の会社の船を使って現在カムチャツカで越冬をしている人々にこれらの品物を送るか、もしくは遠征隊が要求する場合にはこれらの動物の最上の毛皮を送るようにと本部が指令を与えてあるウナラシュカ島、パーヴェル島、ゲオルギー島の島々からそれらの船を使って日本へ再び行くほうが好都合であると考え、本部はこれらの動物の毛皮を貴殿には送らないことにしました。

ところで本部は、貴殿に以下のことをお伝えすることを義務と考えます。ナジェーグダ号は会社のもではなく、皇帝陛下のものであり、本部はこの船に関しては、世界一周に戻るのか、どこかに留まるのか、いかなる指令も与えることは出来ません。閣下には、もし最高決定機関が船に帰路に着くように命じ、貴殿がアメリカを視察するために留まる決定をされるならば、広東または他の場所での実験的な通商のために、貴殿の裁量にしたがって、実験のために必要な商品を選び、貴殿の指示にしたがってそれら进行处理することを考えるよう誰かに委任してください。というのも、この遠征隊の派遣とこれらの商品は、実験的な通商のためのものだったからです。

シエメリンが日本に残り、カムチャツカの商館に教養ある経営者が必要であるとの第 10 項目について

貴殿が提案したように、優秀で、通商の分野に精通している人物である遠征隊の手代長[シエメリン]と、代理人[外交員]としてラングズドルフ氏を日本に残すというのは非常に良いと思います。しかし、カムチャツカ商館のために経営者、しかも教養を備えた経営者となる人物を探し出す事

に関して、本部は保留します。何故ならそのような人物を探し出すことが如何に大変なことかは貴殿自身もよくおわかりのはずです。教養のある人物は大勢おります。しかしその経営知識については経験に裏打ちされた証が必要とされます。そのような人々は、ここカムチャツカ、しかも仕事はかなりある当地での幸福を果たして望むでしょうか？ まさにそのような人物はここでは非常に稀です。教養のある経営という評価を得るには、さらに通商の知識が必要ですが、これらすべての素質に加えて善良な心を持つ人物となると、高い報酬或いは相当の利点だけが関心を惹くことができるでしょう。しかしながら本部は、これに相応しい人物の探索について配慮しつつ、断念したわけではありません。

新たに世界周航船を派遣することについての第 11 項目について

当地で 500 トンの船を建造し、それを世界周航に派遣するという貴殿が提案する、再度の試みについては、あらゆる面から公正に判断し、今般派遣された遠征隊から期待される利点について、最初に検討すべきです。我々は会社の経営を任されたものとして、その利益に一身を捧げており、まだ完全ではないものの、現在の遠征に関しては若干の情報を得ておりますが、会社が取引する上で必要なもの、及びその必需品全貨物のうち目的地に果たして半分も着くのだろうか、ということを知っています。この状況の詳細に関しては、我々のもとに詳しい情報が入るまで口をつぐまねばなりません。

ここから判断するに、直接的ないかなる動機もまったく見出さないままに、この種の探索に対して再び会社の資金を注ぎ込むべきでしょうか。もしこの動機が明らかになるならば、儲けをお互いに分けるのではなく、会社の資本を増やすためにあらかじめ会社のすべての身分の人たちと合意しておくべきです。しかし、合意に達するのは困難だと思われます。何故なら多くの株主たちは自分の資金を増やすために投資しており、それ以外の目的にはまったく興味がなく、すでに 1802 年と 1803 年分について約束された利益を、人により様々ですが株券、もしくは現金で渡すよう要求しております。そして利益を株券で受け取りたい人が多いのですが、それらすべてに対して 70 万ルーブル以上のお金で支払わねばなりません。またこの資金は航海における大量の獲得物から捻出されることになります。今後も同様の事態が想定されます。したがって、会社のあらゆる活動は、できるだけ目的と合致させつつ、その能力に応じて企てるべきです。

## 第 12 項 クリルの部隊に関して

今回貴殿より報告のあったアレクサンドル島における統制の取れていないクリルの部隊に関する情報は、既に以前から取締役たちには知られていたことですが、このことに関しては彼らも心配しています。船乗りらの間での不和が原因で、既に 1799 年にこの島を見るべく向かったアトハの手代ロドゥイギンが追放されました。昨年同じアトハ支部にコンスタンティン号で派遣された 1 人の船乗りに対して、再びこの島にしばらく留まるように指令が出されましたが、このことは契約上、彼の義務です。しかし、もし閣下が自ら独自の指令によって、これに注意を向けてくださるのであれば、もちろんこの地方は別の様相を呈すことでしょうし、この島での毛皮事業は発展するでしょう。それ故本部は、この場所も忘れずに監督を行うよう貴殿に慎んでお願い申し上げます。

## 第 13 項 送付された決算と仲買人ヴィホトツェフに関して

カムチャツカに持ち込まれた物品と、そのうち駄目になってしまったものに関する決算書だけをいくつか、手代のシェメリンが本部に送付しました。カムチャツカの仲買人に関する貴殿の考察が注目されます。貴殿とともに到着した商品の値段がオホーツクの値段よりも低ければ、仲介人がその商品から利益を得ることは当然できないように思います。また本部は、貴殿が再度カムチャツカを訪問する際に、現地で多くの不愉快な目にあった会社の現状をよりよく知ることができることを、非常に期待しています。もし言葉でではなく、出来事の本質から、真実を探求することができるのであれば、偏見のない貴殿の見解は、将来の総本部にとって信頼しうる教えとなるでしょう。

更に、届けられた日本語の辞書とその手引書はモロッコ革の装丁を施され、皇帝陛下に謹呈するためにニコライ・ニコラエヴィッチ閣下に差し出されたことを、本部は貴殿に慎んで報告いたします。クルーゼンシテルン氏の家族に毎年 2,000 ルーブルが支給する件は実行されつつありますが、本文書にはこの件に関する大きな反響を添付しております。

総本部は閣下に対して、以上のように回答しますが、もし現在会社が原因で実行することが困難または不都合な場合は、貴殿には地方の状況を観察して、貴殿が構想されている何らかの計画を始める可能性を見出し、もちろんそれが実現することを止めないでほしいという考え、希望に変わりはありません。

会社は、貴殿によって会社の利益のためになされるあらゆることに非常に満足し、嬉しく思う

ことでしょう。そのことを期待し、至高なる神には、貴殿によってなされるあらゆる功績に対する祝福をお願いするものです。

(6) РГИА, ф. 15, оп. 1, д. 2, л. 64–67.

(渡邊聞・寺山恭輔 訳)

## 52. 露米会社総本部より手代フョードル・シェメリン宛の指令

1805 年 4 月 29 日

サンクトペテルブルグ

皇帝陛下の庇護下にある露米会社本部より

世界一周の遠征に出発しカムチャツカ、あるいは日本にいる手代長シェメリン氏宛

### 指令

各種文書を添付してペトロパヴロフスク港から送られてきた貴殿の報告書を本部は受理し、それらの内容に非常に満足しています。この報告書の内容に関し貴殿に心から感謝の意を述べるとともに、会社に報告書を送る機会があれば、丹念な記述を今後も続けられるよう貴殿に期待します。[レザーノフ]閣下が会社に対して通告しているように、彼は貴殿を長崎<sup>ナガサキ</sup> Nangasaki に残すつもりでありますので、もしも日本での成功が今後の目的にとって好ましい条件をもたらすものならば、この計画が実現するよう強く期待しますが、カムチャツカには貴殿はおられなくなるような場合は、役に立たないと思いますので、通知を貴殿にまで届けないことに決めました。我々はただ貴殿に対して、貴殿の日本滞在中には、祖国と会社にとって利益となりうるようなことは一つ残らずやり遂げるように、と述べるだけで満足しておりますが、このことについて総本部は、貴殿に厚い希望を託しており、貴殿には幸運なる成功を祈っております。

(6) РГИА, ф. 15, оп. 1, д. 2, л. 95.

(渡邊聞・寺山恭輔 訳)

53-1. シベリア総督I.O.セリフォントフから商務大臣N.P.ルミャンツェフ伯爵への通信。クリル列島で発見されペトロパヴロフスク港に到着した6人の日本人について

第2119号

1805年5月10日

イルクーツク

慈悲深きニコライ・ペトロヴィチ[・ルミャンツェフ]伯爵様

カムチャツカ地方の支配人である陸軍少将コシェレフが、昨年1804年10月30日付で私に以下のとおり報告しました。ペトロパヴロフスク港の司祭ヴェレシヤギンがクリル列島からの帰途、クリルスカヤ・ロパトカ[岬]付近の陸地で6人の日本人を発見しました。日本人たちはクリル語を介してのロシア国人による歓待と援助を受けて信頼し、ペトロパヴロフスク港に送り届けられました。この地で、侍従長レザーノフにより残された、日本語の会話能力がある十四等文官キセリョフの通訳により、日本人の一人である航海士サカイ・ツグエモンは事情を以下のように語りました。1804年1月19日、彼に任せられた「キゼマル」という名の船で、商人ツィダユの命により塩蔵魚を積んでナンプ市から日本の首都へと出航しました。しかし航行中の同月25日、暴風雨に遭い、船は舵と帆柱を失い、強い西風によって7か月間海上を漂流しました。その間、壊血病が原因で8人の日本人が死亡しました。その後8月15日、同船はクリルスカヤ・ロパトカへと漂着しました。この地で彼らは強風下、投錨し、暴風雨により船が大破して犠牲者が出るのを回避すべく、船載艇でクリルスカヤ・ロパトカの海岸に着の身着のままで脱出しました。翌日、船が大破してしまったのを見た彼らは、このような不幸が自分たちを襲ったのは日本の島、<sup>マトマイ</sup>松前付近であろうと考え、自分たちの船載艇で故郷に帰ろうとしました。しかし、そうではなく、海岸付近をバイダーラで移動する司祭と出会いました。司祭は彼らが出した合図で接岸し、彼らがロシア領のクリルスカヤ・ロパトカにいることを納得させました。彼らは、自分たちが祖国から遠く離れてしまったと認識し、その近くにあるペトロパヴロフスク港に向かうことに同意しました。同港において、彼らは露米会社からあらゆる必需品を支給されております。以上、本日、皇帝陛下に謹んでご報告申し上げるとともに、私の責務として閣下にご通知いたします。

真の尊敬と忠誠の念を抱き続けます。

慈悲深き閣下

伯爵閣下の恭順なる僕

イヴァン・セリフォントフ

(6) РГИА, ф. 13, оп. 2, д. 1069, л. 1-1 об.

(島山禎・小野寺歌子)

53-2. シベリア総督I.O.セリフォントフから商務大臣N.P.ルミャンツェフ伯爵への通信

第 3790 号

1805 年 8 月 14 日

イルクーツク

慈悲深きニコライ・ペトロヴィチ[・ルミャンツェフ]伯爵様

閣下より私に宛てた 6 月 21 日付第 1627 号文書を拝受いたしました。ただちに、私はカムチャツカ地方の支配人、陸軍少将コシェレフに書簡を送り、彼が閣下のご要望の内容にしたがい、クリル列島からカムチャツカに移送されて滞在中の日本人から調書を取り、日本にかんする重要な情報を、十四等文官キセリョフを用いて私に届けるように命じました。情報を受信後、すみやかに閣下にご報告いたします。

真の尊敬と忠誠の念を抱く光栄を有します。

慈悲深き閣下

伯爵閣下の恭順なる僕

イヴァン・セリフォントフ

(6) РГИА, ф. 13, оп. 2, д. 1069, л.4.

(畠山禎・小野寺歌子)

53-3. シベリア総督I.B.ペステリから商務大臣N.P.ルミャンツェフ伯爵への通信

第 501 号

1806 年 10 月 26 日

イルクーツク

慈悲深きニコライ・ペトロヴィチ[・ルミャンツェフ]伯爵様

閣下が私の前任者[セリフォントフ]に宛てたさる 1805 年 6 月 21 日付第 1627 号文書を受けて、前任者からの指令に対しカムチャツカ地方の支配人、陸軍少将コシェレフ氏が現在つぎのとおり報告しております。ペトロパヴロフスク港に滞在し、露米会社のもとで扶養されていた 6 人の日本人が 6 月 30 日深夜、同港から脱走しましたので、海岸付近と入江を全力で捜索いたしましたが発見できませんでした。彼らから日本にかんする調書を取るという閣下のご要望を、彼は果たせませんでした。しかし、彼らと同じ住居で暮らしておりました十四等文官キセリョフは、日本語の知識を使って、おそらく日本の情勢について彼らから何らかの情報を得ていると思われます。キセリョフはイルクーツクへと出発いたしました。以上、慈悲深き閣下にご通知申し上げます。

キセリョフがイルクーツクに到着次第、彼から日本にかんする上述の調書を必ず取り、閣下に提出いたします。

ともあれ、真の尊敬と忠誠の念を抱く光栄を有します。

慈悲深き閣下

伯爵閣下の恭順なる僕

イヴァン・ペステリ

(6) РГИА, ф. 13, оп. 2, д. 1069, л.5-5 об.

(畠山禎・小野寺歌子)

54. シベリア総督 I.O.セリフォントフより商務大臣・伯爵 N.P.ルミャンツェフ宛の通信。イルクーツク国民学校の日本語生徒について

第 2855 号

1805 年 6 月 3 日

イルクーツク

伯爵ニコライ・ペトロヴィチ[・ルミャンツェフ]閣下

4 月 5 日付の閣下の文書第 794 号にしたがって、我が親愛なる閣下に注意深く検討していただくよう以下のものを提出することを光栄に存じます。

1. 日本語生徒の成績及び日本語以外にとっている科目を説明しているリストを添付したイルクーツク国民学校長の報告。2. 社会保護局がこの生徒たちに与えている給付金についての報告の写し。私は校長に対して、彼の特別の監督のもとでこれらの生徒がより熱意をもって日本語学習を続けるよう、再確認したことを閣下にお知らせすることを義務と考えます。

敬具

閣下の恭順な僕

イワン・セリフォントフ

(6) РГИА, ф. 13, оп. 1, д. 191, л. 4.

(オイドフ・バトバヤル、寺山恭輔 訳)

55. イルクーツク社会保護局よりシベリア総督宛の報告

第 186 号

1805 年 6 月 1 日

イルクーツク国民学校に在籍している日本語生徒に関しての総督閣下からの 5 月 31 日付けの提案第 2797 号の実行について、社会保護局は以下のとおり報告いたします。

上記日本語生徒の生活費として、1796 年 4 月 7 日付け元老院の命令書にしたがい、6 人にたいして年間 324 ルーブルを県の収入から支出することになっております。これらの生徒が日本語教室に入ってから以来、すなわち 1792 年 3 月 1 日より、彼らへの割り当てにしたがった金額を彼らへの給付金として社会保護局の基金から年間 24 ルーブルから 42 ルーブル与えていました。1800 年には[資金の]支出によって、県の収入から上記の全期間を通じて日本語生徒各人に年間 54 ルーブルの金額を、社会保護局より彼らに完全に支払いました。したがって、決定以来今まで彼らは県の収入より、彼らに対して社会保護局へ支出されている年間 54 ルーブルの給付金を得ています。

原本と相違なし：書記イヴァン・ティハノフ。

(6) РГИА, ф. 13, оп. 1, д. 191, л. 5. 写し

(オイドフ・バトバヤル、寺山恭輔 訳)

56. イルクーツク国民学校校長 E. クランツよりシベリア総督 I.O. セリフォントフへの報告。同校の日本語生徒の学習について

第 24 号

1805 年 6 月 1 日

二等文官、元老院議員、シベリア総督、イヴァン・オシポヴィチ閣下

イルクーツク国民学校校長六等文官クランツより

報告

私が 5 月 31 日に受領しました閣下の命令書には、日本語生徒 6 人全員が日本語をよく学んだのかそれとも一部の生徒だけか、彼らは日本語以外どんな科目をとっているか、給付金はいくらもらっているかなどについて問いただしておられますが、ここに、生徒の誰が日本語学習でいかなる成績をあげているのか、自由時間に何を学んでいるのか、給付金をいくら貰っているのかについて示すリストを添付して提出することを光栄に存じます。日本語生徒はその費やした時間や才能からして、この言語についてもっと成果を挙げてもよかったはずですが、日本語辞典以外の

日本語の書物もなく、教師が口にする会話によってのみこれまで学んできましたので、今後についても日本語書物がまったく不足しているため、生徒たちが通訳という仕事を習得することは克服し難い困難にあう、ということを閣下に説明するのは私の義務と思われます。

校長・六等文官エゴール・克蘭ツ

(6) РГИА, ф. 13, оп. 1, д. 191, л. 6-6 об.

(オイドフ・バトバヤル、寺山恭輔 訳)

#### 57. イルクーツク国民学校で 1805 年に日本語を学ぶ生徒の名簿

1. アンドレイ・アムヴロソフ、幫堂者ヴァシリー・アムヴロソフの息子、27 歳。1785 年 3 月 2 日イルクーツク神学校入学。同校で読み書き及びラテン語文法を学び、1792 年 5 月 1 日、日本語学習のためイルクーツク国民学校に入学。自由時間に楽譜を読みながら歌うこと notnoe penie<sup>104</sup>をならっている。給付金は年間 54 ルーブル。独身。
2. イヴァン・ミロノフ、祭司ミハイルの息子、25 歳。1788 年 3 月 1 日イルクーツク神学校入学。同校で読み書き及びラテン語文法を学び、1792 年 5 月 1 日、日本語学習のためイルクーツク国民学校に入学。自由時間に職人仕事を習い、今も続けている。給付金は年間 54 ルーブル。独身。
3. ポロコペイ・コスイギン、祭司フォードルの息子、25 歳。1791 年 8 月 17 日イルクーツク神学校入学。同校で読み書き及びラテン語、修辞学を学び、1796 年 8 月 1 日、日本語学習のためイルクーツク国民学校入学。低学年のロシア語文法、図画を学び、一年生の教師の助手をしている。給付金は年間 54 ルーブル。妻帯。
4. ヤーコフ・パルニャコフ、祭司フォードルの息子、25 歳。1791 年 8 月 1 日イルクーツク神学校入学。同校で読み書き、ラテン語、修辞学を学び、1796 年 8 月 1 日、日本語学習のためイルクーツク国民学校入学。自由時間に楽譜を読みながら歌うことをならっている。給付金は年間 54 ルーブル。独身。
5. レフ・ココウリン、祭司ディオニシーの息子、23 歳。1791 年 8 月 17 日イルクーツク神学校入学。同校で読み書き、ラテン語、修辞学を学び、1796 年 8 月 1 日、日本語学習のためイルクーツク国民学校入学。日本語以外に自由時間には命令にしたがって訓練している。給

<sup>104</sup> 【編訳者補注：ちょうど 19 世紀初めのこの時期は、教会で歌う賛美歌を記した楽譜が 18 世紀末から神学校に配布され、それを読んで歌うことが広まり始めたころにあたる】

付金は年間 54 ルーブル。独身。

6. ミハイロ・コロトウイギン、日本語教師、通訳、九等文官ニコライ・コロトウイギンの息子。  
11 歳。1799 年 8 月 1 日イルクーツク国民学校入学。低学年を通過し、現在 4 年生、日本語  
は 1800 年 8 月 1 日から習い始めた。日本語での読み書きを習い、話し始めている。給付金  
は年間 54 ルーブル。独身。

[史料筆写者による注]リストの「日本語をよく学んだかどうか」という欄で、アムヴロソフ、ミロ  
ノフ、コスィギン、パルニャコフ、ココウリンに対して「日本語に十分な成果をあげている」と  
書かれている。

イルクーツク県国民学校長六等文官 エゴール・克蘭ツ

(6) РГИА, ф. 13, оп. 1, д. 191, л. 7-8.

(オイドフ・バトバヤル、寺山 恭輔 訳)

#### 58. 遣日ロシア使節 N.P.レザーノフの皇帝アレクサンドル一世への報告。使節団に対する日本政 権の対応について

1805 年 6 月 8 日

慈愛深き陛下！

私は皇帝陛下への最後の報告を、1804 年 10 月 15 日、ナンガサキ[長崎]港からバタヴィアに向  
けて出港したオランダの船隊に託し送らせていただきました。私はこの報告をヨーロッパに向け  
て送るために写しを作り、様々な船に託して送付しましたが、戦争という事態のため皇帝陛下の  
お手元に届かなかったことはおおいに考えられます。加えて、私の報告自体、大変短いものでし  
た。なぜなら原本をあらかじめ<sup>グーベルナートル</sup>県知事に届け、それが私に戻され日本の役人の前で封印をし、  
その後彼等が発送するためにそれを受け取るという手順を踏まねば、疑い深い日本政府は手紙を  
書かせてくれなかったからです。そのため、カムチャツカ出港時以降起こったことすべてを陛下  
に御報告することを私の責務だと心得ます。

我々は[8 月]26 日にペトロパヴロフスク港を出港し、27 日にはアヴァチャ湾から出ました。風  
に恵まれ外洋をつつがなく航行しました。しかし秋分の頃出発しましたが、多くの災難を被りま  
した。我々の艦はここで修理していませんでしたが、出港直後、ホーン岬を回るときに被ったよ  
り大きい漏れ口が見つかりました。半時間に 4 インチずつ水かさが増し、ポンプを休みなく動か

しました。クリル列島に沿った北緯 45 度 46 分、西経 203 度 52 分[東経 156 度 8 分のこと]の地点ですさまじいしけに遭いました。ついに 9 月 15 日、風に恵まれ我々は喜ばしくも偉大なる島ニポン[日本]の岸の近くまで来て、日本の海上で陛下の戴冠日を祝い誇りに思いました。我々はファン・ディーメン[大隈]海峡に進路をとっておりました。我々が指針としていた最良の地図でも不正確でした。これらの地図は航海術も必要な器具もまだ完成されていなかった頃のオランダ人の航海に基いて作られましたので、日本の東海岸がかなり誤って表記されており、それに向けて進路をとっていた我々のはるか西にそれを見つけることになりました。9 月 19 日、北緯 31 度 7 分、西経 227 度 54 分の地点で、朝からもう一つのすさまじいしけに遭いましたが、それは結局午後 4 時にはいわゆるティフォン[台風]、すなわち真夜中まで弱まることなく続いた最強の暴風になりました。この暴風があまりにもひどく吹き荒れたので、支索帆の一つも張れず帆も上げずに走ったばかりでなく、しっかりたたんで固定した帆が情け容赦なくずたずたに引き裂かれてしまいました。いかなる航海でもかつてなかったことですが、気圧計が目盛以下に下がってしまい、3 時間に渡って水銀が見えなくなったため計測できませんでした。大波はすでに見えず、大気と混じりあった細かなしぶきのみが見え、それがマストさえ見えなくする霧を作り、顔に当り痛くて立ってられない程でした。海底さえ揺れたので、翌日檣楼<sup>しょうろう</sup>[マストトップ]と索具類に砂と貝殻がついているほどでした。

このような状況の中で、救いも見出せず、我々はすでに覚悟し、我々が運ばれゆく岸にぶつかる瞬間を待つのみでした。しかし神の御心により、奇跡的に、我々神の僕は救われました。夜 8 時に大波がすさまじい勢いで船尾をたたき、多くの者の耳をつんざきました。1 分後さらにもう一つの、前のよりもっと大きい大波が船尾台をもぎ取り、上から欄干を引きちぎり、船尾から窓をたたき落とし、我々はあっという間に船室で腰まで水に浸かりました。水はハッチに滝のごとく流れ込み、ろうそくの火を消し、我々はすでに浸水し始めていた下甲板への通路をふさぐことにすんでのところで間に合いました。艦が左右に激しく揺らされたため、排水口[船の甲板舷側の]へと水が流れ込むことで艦は軽くなり、我々はよろい戸で窓を押え、大波に抗して腕でそれを押しとどめ、木製のもてこ<sup>105</sup>をつっかい棒にしていたんは支えることができたのですが、まさにその最も大事な時に、突然、風がすごい勢いで 12 ポイント[羅針盤、南東微東]の方角へ向きを変えたため我々は岸から引き離されました。

真夜中から風は弱まり始め、毒にも薬にもなるその力が、必ずやマストを奪ったであろう波を止めました。我々が岸から遠いところにかどうかはつきり言えませんが、朝になってやっと我々は岸を目にしました。まさにこの日に、ナンガサキでは地震とティフォン[台風]がありまし

---

<sup>105</sup> [編訳者補注：原文は **angipug** となっているが、**anshpug** のことと思われる]

たが、オランダ商館では大変太い木が根こそぎにされ、港の艦は錨をもぎ取られましたので、ティフォンはこれまで住民が記憶にないような大きなものでした。このように装備が整っていない状態で、我々はアロスミットの地図にあるように北ではなく南にリケイ [琉球]諸島を見ながら、ファン・ディーメン海峡を通り、サツマ地方の先端をここで見ました。その後トク列島[地理的に大隈海峡から長崎までの航路に横たわるのは<sup>こしきじま</sup>甑島列島なのでここを指すのか?]を通り、ついに 9 月 26 日朝、ナンガサキに近づきました。

我々は漁民達を乗せた 1 隻の舟に会いました。我々の日本人が話すと彼らはびっくりしました。彼らは近寄って船に乗り込み、彼らの政府は既に 4 日間、我々の艦の接近を灯火を見て知っており、我々はお迎えに役人が送られて来るのを待たなくてはならないと言いました。半時間後我々が砲を撃つと、まもなく士官の乗った日本の船が現われました。彼らは本艦には来ずに我々に口頭質問し、我々に与えられた入港許可の文書[信牌]をよく調べ、我々の水先案内をしましたが、ナンガサキ湾の入り口に着くと、我々を外洋に残し、ナンガサキから<sup>グーベルナートル</sup>県知事の全権が来るまでそこで投錨するように、また砲を決して撃たないようにと言いました。ついでに、ほとんど 12 年間彼らはロシア船を待ち、4 年間続けて我々の受け入れ準備をしていたと言いました。午後 9 時、松明を乗せた多くの船が近づいて来るのが見えました。これは我々のための船の護衛で、その中に色とりどりの灯火を乗せた大きな船が 1 隻あり、太鼓をたたいて我々の艦に横付けしました。通訳達は後甲板に来て、衛兵 voennyi piket と、私のそばの階段にヘルメットを被って立っている 2 人の<sup>てきだん</sup>擲弾兵に驚きました。私についていろいろ質問した彼らは、私のところに来させて欲しいと自分から頼んで来た者で、県知事の全権として入ることを願い出て許してもらったのです。私は彼らに会えてうれしいと述べました。非常に礼儀正しく入ってきて、彼らは私の到着について質問してきました。私が彼等の儀礼に従うつもりか尋ねてきましたので、私は次のように答えました。「我が君主の偉大さをけがすようなものでなければ、我々に友好的な大国のすべての儀礼を実行するのは、私にとって大変嬉しい事です」。最後に彼らは日本人達を呼び寄せ、質問し答えを書き留め、信牌を見たあと、本艦の近くで自分たちの搭載ボートの上で既に 1 時間程待ち、通訳達からの指図<sup>さしづめ</sup>がなければあえて入ろうとしないオランダ人達を乗船させる許可を求めました。私が彼らを通すよう命令すると、直ぐにオランダ商館長ドゥーフが秘書と艦長を連れて入ってきました。彼が私に挨拶を終えるのも待たず、通訳長が「商館長ドゥーフ、偉大なる紳士にご挨拶いたします」[原文はオランダ語]、と叫ぶと、ドゥーフとオランダ人全員腰の高さまで体を曲げ、膝をつき、顔を横に向け立ちあがる許可がでるまで一時その姿勢でいました。通訳はこの時、役人 bandzhas 達の前の床に横たわり、この儀式が終わると私に向けて話しかけました。「使節殿、あなたには我々の習慣が奇妙なものに見えることでしょう。しかし、どの国にもそれぞれの習慣

があります。我々は昔からオランダ人と友好関係にあり、ご覧の通り、これが彼等の我々にたいする好意の証しです。あなたは彼らを見習うつもりはありますか?」。私は答えました。「いいえ、私は非常に日本人を尊敬していますので、些細なことから始めようとは思いません。あなた方の習慣につきましては、昔からオランダ人とそのようにやっていたのであれば、私にとって少しも驚くことではありません。しかし、私達の所で習慣は異なっておりますし、しかも揺るぎなく保たれています。」「あなたの剣だけはそのままいいですが、火薬、小銃、サーベルを差し出すことに同意しますか?」「喜んで。ただし士官のサーベルと私の護衛が持つ小銃と短剣以外なら。」彼らはこれには同意せず、使節に与えられた一つの剣を除きオランダ人もそのような権利を持っていないと言いました。しかし私は、オランダ使節は商業界からの代表だけれども、私は皇帝の使節であり、私自身が剣を取り上げられたも同然であり、私の身分からすれば咎めるべきことだと返答しました。我々が目撃者となった辱めに悔しい思いを抱いていたオランダ人達は、同意するよう私を説得し始めました。「断る」、私は彼らにきっぱりと「あなた方自身が私の要求が正当なものであると分かるだろう、と私は確信している」と言いました。彼らは3日後に返事を持ってくると約束しましたが、このように海が荒れている時期に艦が外洋で持ちこたえられるような状態ではないので、翌日、私を必ず入港させてくれること、また新鮮な食糧を届けてくれるよう彼らに頼みました。

翌日、県知事は私に食料品を送ってきました。午後、我々は艦隊がこちらへ向かってくるのを見ました。様々な旗や紋章で飾った大きな船が本艦に横付けしました。通訳は、県知事の名代を出迎えるべく私が出てくるように求めました。県知事本人ならば礼儀正しさを示して出迎えたであろうが、それはひとえにこの地方の統治を彼に委ねた日本の君主に対する私の敬意からくるものであり、それほど私の地位は高いので、できないと私は述べました。彼らはこの返答を持って去り、やがて前日の役人を連れて戻り、椅子を並べ、私に脇の私の場所を示しました。私は彼らの労に感謝しましたが、私の椅子には誰も座ることができないと言いました。やがて彼らが入ってきて席を占め、私の到着を祝福し、県知事が士官全員に剣を、護衛に小銃を携帯することを許したと言いました。私はかくも教養のある高官から他の答えは予期できなかったと答えました。彼らは日本人の引渡しを求めましたが、私は私自ら県知事に彼らを渡すと答えました。

やがて、オランダ人達が来ました。挨拶の儀式はこの前よりさらに厳しく執り行われました。ドゥーフは既に帯剣していましたが、この日、この剣のために彼は少なからぬ散財をしなければなりません。なせなら、すべての事に対して金[原文ではターレル貨]が取られるからです。通訳は様々な質問をし、書き留めました。彼らは非常に好奇心が強く、オランダの医者達の助けで十分に啓蒙されています。というのも彼らからいつも本や様々な情報、地図を受け取り、医学

さえ学んでいるからです。ようやく我々から火薬、それに必要のない者から小銃と剣を取り上げ、晩に 70 ほどの舟が我々をパペンベルフ[高銚湾]へ向って曳航し、ここで我々に投錨するよう命じました。この場所は外海より少しは安全でしたが、彼らが答えるには、島の向こうに碇泊中の中国のジャンク船がもう直ぐ海に出るので、その時に我々をパペンベルフに入港させる、彼らの法律によれば 2 つの外国民族は同じ場所にいることはできないからということでした。しかし実際は彼らはまだ我々に町の位置を明かしていいものか決心がつかず、イエド[江戸]から最初の県知事に代わって戻ってくるはずのもう一人の県知事の到着を待っているのです。彼らはいつも口実を探し出し、馬鹿げた習慣を正当化できない時には、笑いながらこれが日本のやり方だと言うのでした。食糧は無償で県知事からもオランダ商館長からも送られましたが、ホーヘンドルフ大臣の手紙によるとオランダ商館長は、先を争うように我々のために骨折りをしてくれましたが、彼にそうさせたのは、我々はもうこれ以上会う事を許されないだろう、と疑っていたからでした。そして実際、我々はあのまま完全に別れて会うことはありませんでした。日本に着いてからというものの、オランダ人はたった 2 晩我々のところに來ただけで、全ての会話は日本人に遮られ、こうして我々はこの地について、また、この地の儀礼に必要な情報を得る手段を失いました。県知事との面会はイエドからの急使を受け取るまで拒否され、私は黄金の布 para に包んだ国書の写しを彼に宛てて送付しました。この写しを役人がうやうやしく頭上に持ち上げながら私から受け取りましたが、粗末な訳がまったく違った内容になっていたのです、翌日彼らは説明を求め、再度訳し直しました。

一方で我々は近づきになり、私が彼らと日本語で話すと、彼らは驚き、私の不正確な言い回しを直し、私にいくつかのロシア語を言ってみようと思いました。それは彼らが 2 日間、八方手を尽くして vo sto ruk すぐれた収集を行ったものです。彼らは貿易に関するデリケートな質問を私にしましたが、私は彼らと国事について話すのは私の地位からして相応しくなく、地位の低い人と県知事と話すようには話せないと言って、常にその話題を避けました。

彼らは私からどんな贈り物も受け取ろうとしませんでした。私は何を買うことも許されず、艦からは誰も下船させてくれず、500 人程の護衛が舟で我々を取り巻いていました。彼らはこの不快な状態は私にとってすぐ終わるだろうこと、急使を待っているといって納得させようとしたしましたが、交易に関してはそれは決して許可されたことがないし、[外国船は]来ないように命じられており、ロシア船には県知事達との交渉のために一回來ることだけ命じられ、実際にラクスマンの信牌には欺瞞的に述べられているのだと述べました。一日中彼らは新たな礼儀正しさを示し、私の勲章、侍従の鍵[侍従職標章、政府の腰につけた金製の鍵]を観察し、十字架像を見るのに飽きることはありませんでした。何よりも彼らは私の星が気に入りました。彼らは青いリボンを身につ

けたエカチェリーナ大帝の肖像を持っていると言い、この記章は優れた者に与えられることを知っているとしました。陛下が外国の高官にもこれらをお授けになるだろうか、また、もし貿易関係が結ばれたら県知事はこれらを受かることができるだろうかと質問してきました。私はこの質問、なによりも彼等の隷属の身のつらさを感じさせたその微妙なニュアンスに驚き、ロシア君主の寛大さとお慈悲は、彼の臣民に奉仕する人だけではなく例外なくすべての人々に向けられるが、より優先的には人類全体のことに気を配る人に向けられると答えました。我々は、どうやら互いに理解し合い、興味深い会話の展望が開けました。互いの誠実さを確立することだけが必要でした。

港では舟が絶え間なく増えました。10月4日には、50以上の帆船からなる艦隊も来ました。チンゴディン キノサマ[筑前黒田さま]という領主が来たと言われましたが、これは安全のため、というのも彼らはヨーロッパの船を非常に恐れているからです。我々の護衛は彼らには不十分に思えたようですが、一方で彼らはこれは見張りではなく、大帝国の使節への敬意[を示すもの]であり、町では私にもっと多くの護衛がつくだろうと断言しました。我々は様々な場所に彼らが要塞と呼ぶものを見ました。風が吹いて、これはフィゼン[肥前]の王子の紋章入りの白い幕だけであることがわかりましたが、それらは彼らの舟が多数浮かんでいましたので、我々が滞在していた間ずっと、多くの灯火で飾られていました。彼らはこのような照明によって、彼らの人数の多さを尊重することと警戒心を我々に吹き込むことを考えていたのです。

艦の劣悪な状態と隙間風で私の病が悪化していきました。そうこうしているうちに、もう一人の県知事 フィダブエンゴ カミサマ[肥田豊後守]がナルシイナバヌカミサマ[成瀬因幡守]の交代に来ましたが、彼らは2人とも我々の上陸に備えて残りました。彼らは使者を送ってよこし健康状態を尋ね、自分達の医者を私に勧めました。10月5日、中国のジャンクが出た後、我々はパペンベルフ(高鈴湾)に曳航されましたが、皇帝の哨舎あるいは兵舎に着かないうちに、町から4マイル程のところで投錨するよう命令されました。碇泊中の2隻のオランダ船がまもなく出航したら、我々をもっと近くへ前進させるが、それまではかくも偉大な皇帝の艦を、商船と並べて碇泊させるのは失礼なので、敬意から、そのようなことはできないと彼らは言いました。我々はオランダ人達との文通を禁止されていました。彼等の艦が夜明けの大砲を打った時、私も一日2発打つことを要求し、そうでないと軍旗が侮辱されると説明しましたが、彼らはオランダ人に大砲を打つことの禁止を決定しました。ところで、夜明けには本艦では太鼓を毎日たたきました。私は散歩のための小さな場所と、濡れてだめになりつつある使節団の荷物を降ろす家を陸のどこかに与えて欲しいと頼みました。彼らが約束して長い時間がたっていましたが、突然、昼も夜も働いてキバチ(木鉢)村の近くに長さ25サージェン程、幅10サージェン程の土地を区切り、あずま

屋を組み、竹の裏には衛兵詰所を建てました。そして 17 日に役人が来て、私はたいそうな敬意と礼節をもって陸に迎えられて、ごちそうされましたが、兵士を乗せた 20 隻ほどの船が私を[本艦に]護送したのです。

囲われたその場所は埃っぽくて、私の病気は癒されず、私はそこを使いたくありませんでした。すぐに我々は町に通されるだろう、町では既に会見のために通りがきれいにされ、周辺の領主たちが集まり始めている、と言って彼らは宥めようとしていました。

数日後、我々は日本人全員が冷淡になったことに気付き、いつ我々は上陸できるのか私が尋ねると、川の氾濫のため急使がまだ到着しておらず、少なくとも 30 日は待たないとだめだろうと言われました。その後再び過度の礼節さが見られるようになりましたが、要するに彼らは毎日様々な命令を宮廷から受けており、自分たちに対する寛恕を求めてその命令にしたがって行動している、ということがよく見て取れました。

オランダ艦は 10 月 27 日に出航し、翌日、県知事達は再び非常に丁寧に、我々を皇帝の哨所の向こうに曳航するよう命じ、我々はそこで投錨し、我々の眼前に町が開けました。我々は武装解除しました。私の病はあまりに悪化したので、とうとう県知事達は陸に家を提供すると約束し、それを仕上げるよう命令し、12 月 5 日、私は盛大に陸に迎えられました。湾全体が舟で覆われ、岸の両側に軍隊が配置されていました。私が乗った船は巨大でフィゼンの王子の所有するものでした。甲板は 2 個あり、下の甲板は白い紋章入りの薄紫色の絹の帷(とばり)で飾られ、上の甲板は色とりどりの織物で飾られていました。中央は金めっきを施され、天井も壁もうるし塗りでした。私は小銃を持たせた擲弾兵を上甲板に立たせ、国家元首旗の一つを掲げ、ロシア帝国の紋章を日本人に紹介しました。家で私は多くの役人に出迎えられました。この家には紙の間仕切りとついたてで作られた九つの部屋がありました。それらは十分きれいに片付いていましたが、風と厳しい寒さは耐え難いものでした。敷地内には 4 つ、最初の門の向こうにさらに 2 つの倉庫がありました。シャルルロワの歴史書によると、この場所こそ 1640 年にポルトガルの使節が応接され、日本の野蛮性の犠牲になったまさにその場所でした。私は微笑みながらこのことを彼らに気付かせようとしていましたが、彼らは認めようとせず、顔を赤らめていました。この場所は三方を湾に囲まれ、10 フィート程の高さの竹製の柵が巡らされ、門は両側から錠で海に向かって閉められていました。屋敷に向かって入り江は 50 サージェンほどのところで、船がこの近くまで来られないように 2 列の柵で囲われ、両端には 2 隻の大きな軍艦が見張りのために碇泊していました。門の外からかける鍵は海岸の役人が持ち、内からかける鍵は陸上の護衛に委ねられました。その他の門は小路にあり、そこには 2 つの衛兵詰所があり、タイタオグミと呼ばれる 18 人の士官がいました。脇には見張りの警察所 *karaul'naia politseiskaia* とさらに向こうには、オムラ[大村]王子の

軍隊から派遣された 50 人からなる衛兵詰所があり、彼らは毎日交代しました。我々の行動はすべて書き留められ、すべての詰所の記録は毎日特別の役人が点検し、夜には町から派遣されてきた巡察隊が来ました。加えて、屋敷内での我々一人一人の行動が見えるよう、山に見張り小屋が複数設置されました。デシマ[出島]の島は湾を隔てて 300 サージェン程の所にありましたが、日本人は我々が望遠鏡で合図をして会話しないように、高い柵でオランダ人の館を休まず囲んでいました。一方、品物と索類の荷降ろしは日本の船と人々によって休みなく行われていました。

12 月 11 日、彼らは本艦をもっと町に近いところに移しましたが、これはすでに 5 番目の碇泊地となりました。一方、我々は船を離れたまさにその日から、監禁状態で暮しました。彼らは我々が必要とする食料を文句もいわず供給し、艦には、私の要求で食料と檣樓架木用材木、手漕ぎ舟その他の必需品を提供してくれ、船室の外張り用にも銅板 400 枚をくれました。時はやがて 3 月になり、私はイエド[江戸]に行かないということ、全権代表がここにくるが、貿易について双方が満足するようにすべてを決めるので一層よいことだと彼らは私に言いました。私は万一の場合に備え、急いで艦を武装するよう命じました。彼等は一層親切になりました。ついにトヤマキンジロウサマ[遠山景晋]という名の待ちに待った位の高い役人が到着しました。3 月 23 日に最初の謁見が予定されました。役人の出迎えのための多くの他の船をしたがえた盛装した御用船が派遣され、我々はナンガサキに向けて出発しました。町の全ての通りは麻布で覆われ、誰一人見当たりませんでした。私はノリモノ[駕籠]で運ばれ、私の士官達は徒歩でした。ダイミオと 2 人の県知事からなる評議会がある県知事所[政府の館]では、多くの通訳が我々を出迎えました。役人が列になって座っているいくつかの部屋を通り、ついに彼らのいる最後の部屋に入りました。私は彼らと面と向って座り、彼らは挨拶をし、やがて、こう告げました。いかなるロシア人も日本とは、日本的な性格をもったものであっても、手紙のやり取りは一切行わないよう、そしてただ交渉のために一隻の船の入港のみを許すという帝の御意志がラクスマンに宣言されたのに、陛下が彼に手紙を書くのをよしとされたことに彼らの君主は非常に驚いており、彼は使節団を受け入れることはできず、貿易を望まず、私が去るようにと、言い渡しました。

通訳達はこのような拒絶を予想しておらず、喫驚仰天しました。彼らが私に訳し終えるやいなや、私は顔色を変え、自分を押えることができませんでした。私は、クボウ[將軍]陛下に思いがけない崇敬の念を表わした我が君主に、誰が手紙を書くことを禁じ得るのか、とこの傍若無人さに驚いている、と述べました。彼も二人とも皇帝であるが、どちらの方がより偉大なのかはここで我々が決めることではない。しかし彼らとの貿易を我々は必要とせず、これは我が君主の日本に対する慈悲であり、その慈悲とは彼等の不足を緩和させようという、共通の人間愛から出てきたものである。しかし彼らはロシア人を、ポルトガル人のように考えていないだろうか？ 通訳達

は彼らに伝えていましたが、私は注意して耳を傾けながら、日本語で補足しました。彼らは視線を地面に落とし、ついに県知事フィダブエンゴノカミサマが答えました。使節殿に、本日彼は驚かれたので、会談を翌日まで延ばしたほうがいいのではないかと伝えなさい。私は多いに結構と述べ、彼等の所から退出しました。彼らは茶、タバコ、お菓子でもてなしたいと遣いをよこして来ました。私は断りましたが、通訳達はため息をつきながら、この後どんな不幸な結果が待っているのかと話し、私の士官達に私が返答を穏当なものにするよう私の説得を頼みました。実をいいますと、私自身、自分の行き過ぎを感じておりましたが、これは逆によい結果を生むことになりました。

翌日、謁見は、もはや、より愛想のいいものになっていました。彼らの皇帝は使節団と贈り物を受け取らないが、その理由はただ、日本の習慣では同じようにお返しをせねばならないが、すでに約 200 年日本人は出国してはならず、いかなる新しい民族と貿易を始めることも国法によって禁止されているため、これが不可能であるためである、皇帝は日本人を感謝を込めて受け取る、一般的な規則があり、いかなる外国船も日本の港に入ったことはなく、日本の沿岸には誰も近づくことが許されていないので、ロシアの船はこの点に関して自分に原因があるとみなしてはならない、と彼らは説明しました。我々は彼等の法律を知っており、陛下はお返しの使節団を要求しているわけではないと答え、今後日本人が遭難したらどこに彼らを連れていけばよいのか、また今も我々は、自分たちの金で食料の予備を必要としているのだが、嵐のため我々が他の港に避難するはめに陥った時、我々は友好的な援助が得られるのか、ということについて尋ねました。これについて彼らは明日議論しましょうと言いました。

3 度目の謁見で彼らは、私の質問に書面で応えると述べ、その間に、皇帝陛下への敬意の証しとして、彼らの皇帝は 2 か月分の食糧を供給するよう命じ、私が必ず 2000 袋の塩を買いたいと所望していたところ、無償で渡すよう命じられ、加えて 2000 の真綿が私と役人に贈られ、ロシアに流れ着いた日本人たちへの親切なもてなしにたいする感謝の印として、6 か月半全期間の乗組員の扶養費、様々な船の必需品の支給をクボウ陛下の負担で行うことになりました。皇帝陛下の贈り物をこの地に留め、私の贈り物を受け取ってくれば、彼らのより大きな敬意の証しとなるだろうと私は彼らに頼みましたが、ロシア君主の偉大さはよく理解しているが、自分たちで決めることはできず、私はイエドからの返事を待たねばならないであろうが、これは恐らく私から時間を奪うであろうし、彼等の法律には、外国の船は帰らせないと書かれており、事は大変慎重な扱いを要するものなので、私の問いかけが届いても彼らははっきりさせる勇気がないだろう、との回答を得ました。最後に、彼らはこのような悲しい結末を予想だにしていなかったと遺憾の念を表明し、私が朝鮮海を航海するつもりだと聞いて、暗礁が多いのでこの航路を避けるよう忠

告してくれました。私はその方が近いし、ロシアの航海者にとってそのような困難はなんら考慮に値しないと答えました。私は出航したい時に出国することを許され、もしそれが数カ月先のことになるならば、食料品の支給はいつも無償だと言われました。私は彼らに礼をいいました。ついに彼らはメガサキ[梅ガ崎]に、我々の監禁の場所はこう呼ばれているのですが、国書の写しとその文書の訳文を送ってよこしました。後者には岸に近づくこと、これからずっと日本に来ることを禁じ、皇帝陛下にもしそのお気持ちがあるのならば、今後日本人はオランダ人に託すよう書かれていました。最後の日々は、我々に献身的な士官達を通して、我々の衛兵詰所に様々な人々が私と別れにやって来ました。彼らはロシア人を決して忘れないと請け合い、毎日イェドとミアコ[京都]からの大きな扇子の束を、私の名と我々の到来の日付を書いてくれるように、これを宝物として大切にすると私に持ってきました。私がロシア語、オランダ語、日本語で様々な格言を書いてやると、彼らは大変満足しました。私の士官たちも、彼等の願いに応じて、この仕事を喜んでやっていました。

貿易を拒絶したことは民衆の間に我々寄りの大きな影響を及ぼしました。ミアコから来た商人の投機師は、通訳を通してすでに私に自分の条件を出してきました。役人、士官、人夫は気前のいい褒美を期待していましたが、彼らには小さながらくたでさえ禁止されていました。予期せぬ拒絶によって彼ら全員は、我々以上に嘆きました。彼等は不満と我々への愛着から、より率直になりました。

監禁生活中、私は自分の日本語辞書を手直しし、3000語まで集め、どんどん彼等の言葉を学び、私の日本語の知識に弱いところが少しでもあれば、精確に修正を施しましたが、その際には役人たちから多くの情報を得て、最後には我々が拒絶された秘密の全貌について知ることができました。

ラクスマンが来日した時、高官デヴァサマ[出羽さま]が現皇帝イェナリコ\*の寵臣でした。彼は比類まれなる知性の持ち主で、弁が立ち、洞察力に優れていました。進取の気性に富んだ彼の心は、専制主義の重圧を感じており、名を上げて、ロシアを媒介に統治を改革することを望み、宗教上のダイリの中に権力の一つの幻影を見出して彼には敬意を抱かず、ロシア帝国の申し出を利用するよう皇帝を説得し、この隣国との同盟の利点は非常に明らかに示してみせたので、彼の敵対者達自身も彼の強力な説得に譲歩せざるを得ず、皇帝は非常にきっぱりと賛同の意を表明しました。

毎年ナンガサキではロシア人の到来を待っていました。当時ヨーロッパが戦争状態のため、オランダ人達の貿易が止ってしまい、彼らはかろうじて1隻の船を送ることができただけでしたし、フランス革命の時は、彼らはオランダの旗を掲げて来航したアメリカの船を雇うほどでしたので

なおさらでした。

7年間、人々は我々の日本への来航を楽しみに待っていましたが、8年目にデヴァサマが亡くなりました。彼に敵対する勢力が直ぐに現われ、本当の目的を理解せずに、彼の行なったことすべてを批判しました。その中の一人、ウネマサマという名の人物は比類なき利己主義者ですが、日本中が彼には我慢ならないものの、彼を恐れるほどまで強い権力を持つようになりました。二番目に位の高い大臣で、ロシア人の友であるエゾサマ[蝦夷さま]という人物は、しかるべき度胸がなく、煮えきらぬままでした。しかしまだ、デヴァサマに近い3人目のフィダファゴサマ[飛驒肥後さま]が残っており、一人で彼の全ての計画を支持していました。船の来航は、直ぐに皇帝に我々を受け入れる決心をさせ、狡猾なウネマサマも同意しましたが、ダイリに無断で新たなキリスト教民族を入国させることで不快な結果が生じないように、彼に一報することを提言しました。これは承認されましたが、ウネマサマの親戚がミヤコの長官で、「この件は大変重大で、自分としては帝国にとっての説明されているすべての利益を望んではいるが、すべての王子をイエドに召集し、この件が全員で熟慮検討され、しっかりした基盤のもとにおかれることを要求する」との返事を、ダイリに請願して得ました。200人程の領主と高官がこの帝都に集まりました。ウネマサマはロシアに対抗するよう働きかけましたが、皇帝のロシア寄りはありませんでした。国家の役人はどのような結果に終わるのか、どちらにつくべきか、分かりませんでした。この問題全体の要点を、ダイリに送付することが決められました。ラクスマンに対し、当時彼には何も知らされず、彼の意見を聞くことなく許可証が与えられたことを知ったとたん、規則に反して適時にダイリに報告しなかったクボウ自身が、彼を侮辱したことについて満足のいく回答をするようとの要求を、役人評議会に送って来ました。国家の役人は内紛の兆しを見て、皇帝にダイリの受けた侮辱は甚だ大きいことを示したところ、クボウは流血の事態を避けるため、意に反して我々との貿易を拒絶することに同意し、ダイリの怒りに対する生贄としてフィダフィゴサマを差し出し、彼は全ての官位を剥奪され、ファツィジオ[八丈島]への流刑に処せられました。かくも狡猾なやり方でウネマサマは形成逆転を果たせましたが、このような秘密の背後で、「民衆の不満は非常に大きく、我々との貿易及び使節団の受け入れ拒否は、必ずや重大な結果を招くに違いなく、この決定はまだ変更を被るだろう」という話も、私は聞かされました。

日本の政府に関しましては、大変専制的で、誰も生命や自分の財産を保証されていません。領主だけでなく、様々な場所に就かせられている県知事も役人も毎年交替し、彼等の家族はイエドにいます。

彼等のつつましさがいかに大きくても、食料がいかに安かろうとも、貿易をしていないことでそれらを買うことができません。豊穡な自然の恵みも裕福な者を慰めるのみで、彼らはクボウ自

身もそうですが、自分の財宝を米の量だけで決めているのです。

彼等の手工細工は見事で、加工は上等ですが、これらすべてが貿易がないために活発ではありません。下層民はぶつぶつ不平を言っており、最初の機会が来れば、喜んで自分の枷を払いのけるでしょう。多くの役人が、私と士官たちに一度ならず冗談で「我々をカムチャツカに連れて行って欲しい」と、言いました。キリスト教は彼らにとって決してそれほど恐ろしくありません。なぜなら全期間を通じてそれについて一言も我々に話がなかったからです。彼らは民衆の目を覚ますのではないかと、外国人が居座ることを恐れ、そのためにもっとも厳しいやり方であらゆる情報を遮断しているのです。

通訳達は、うんざり暮らしており、自分たちの生活をどう向上させればいいのか分からないと、率直に私に告白しました。彼らは、「遅かれ早かれ、デヴァサマの忠告が大きな勢力を得て取り入れられるだろう」、「現在内閣を統括しているこの悪党」、彼らは狡猾なウネマサマをこのように呼んでいましたが、「この悪党は60才を過ぎ、悪意が彼の力を既にかかなり消耗させたので、この先長くなく、彼が死ねば、またロシア人との貿易を望む声が高まり、我々にとって貿易はより一層有利なものになる可能性もある」と請け合いました。彼らはオランダ人を通して私に手紙を書き、起こっていることすべてを知らせると約束し、様々な計画を提案してきました。例えば、ウネマサマがいなくなれば、彼らの手紙に従って、ロシア船が大胆にも嵐からの避難を装って、彼等の港に立ち寄ることにすれば、我々をぬかりなく温かく応接することを請け合えるし、我々もまたオランダの勤務員の一人として自分たちの役人を送ることもでき、その役人は1年間デジマに住んで、彼らを通してすべての詳細を知ることができるというものです。彼らは「オランダ人がこれに同意し、通訳達が命令したことをするはずだという保証を我々から受け取ったら、マトマイにあなた自身が交渉に来てください。現地では、我々なしにもう事は運ばなくなっているでしょう。誰に籤が当ろうと、全員ロシアに仕える用意がある、とおわかりになるでしょう。来年、我々の内の誰がイエドに行こうと、より多くの知恵をあなた方のために準備することを誓いますし、また、ダイミオと両県知事は大いにあなた方の味方であることを請け合いますが、これらの善良で正直な人々が、ロシア人に対する好意的態度のため、我々の政府に疑わしく思われないか心配している程です。」と言いました。

オランダ人は貿易を船2隻、計30万ターレルに制限されているので、以前ほど利益を挙げていませんが、それでもやはり、彼らにとって、利益は大きいものです。日本で現在20ターレルで売られている銅は、昔からの契約条件により、1ピクリすなわち125オランダ・ポンドあたり12ターレルで入手しています。オランダ人達は、羅紗、更紗、印花布、裏地用毛織物と様々な毛織物、そして、多くの山羊革、なめし革、シャグレーン皮革 shogrin、砂糖、薬味、鉛、錫、鉄、水銀、

赤色硫化水銀(辰砂<sup>しんしや</sup>)、ミイラ褐色[赤褐色の鉱物性絵具の名]、レンズ状石灰板 *rakovyia zhernovki*、大黃[ダイオウの根茎から採った下剤、*rabarbar*=エストニア語]、阿仙薬(カテキュー)、サルトリイバラ、アンモニア水(塩化アンモニウム)、ビャクダン、藍、紺青、コショウ、ガラス器、鏡、枝付燭台、時計、龍腦、その他多くの品を持ってきます。日本からは米、銅、樟腦、蠟、大豆、器、布、漆塗りやその他の物を持ち出します。外国人にとって厳しい日本の習慣が変わるかもしれないので、オランダ人はロシアが貿易すれば大変嬉しいでしょう。彼らは侮辱的な扱いを受けている上、過度の出費を強いられています。フランス革命時、彼等の貿易が途絶えた時、彼らは出費を抑えるため、毎年送っている使節団を5年に1回にしたいと請願し受け入れられました。しかし、彼らは今になって再び、毎年送りたいと頼んでいます。というのも、日本の政府は、ただ自分たちで行かないだけの自由を与えたのだと応じ、贈り物については沈黙しており、その時以来今日まで、オランダ使節として、贈り物を持った通訳を派遣しています。この贈り物の方が彼らにとっては高くつきますが、彼らの貿易がまったく台無しにならないように、日本人に気前良く支払わねばならないのです。迫害もまた度を越しています。オランダ商館長ドゥーフ自身が私に語ったところによりますと、デジマから出る都度、前もって許可をもらわねばならず、この許可を慈悲と見なさねばならないのです。彼一人の場合は一日当り 16 ターレルですが、船長達と郊外に出る時は、彼が頼んでもいないのに与えられる敬意、というより護衛に対して、一日当り 400 ターレル払わなければなりません。この人物は我々に食糧を供給してくれ、皇帝陛下に献身的であったことをここで申し上げるべきかと存じます。そして帝王の恩寵として彼に指輪[宝石の入ったもの]を下賜されるよう謹んでお願い申し上げます。

陛下の謝意を彼は特別の幸福とみなすに違いありません。何も買えないのに、彼は私にいくつかのものを供給してくれましたが、その中から宝石箱を陛下に謹んで進呈いたします。加えて彼は、私が陛下の親愛なる母上であられる女帝陛下の委任にしたがって頼みました様々な珍しい日本とバタヴィアの植物の種、科学アカデミーのためには、日本の植物誌と教科書をアムステルダムに送ってくれると約束してくれました。私は皇后陛下には日本の夏の家の模型を、女王陛下エリザヴェータ・アレクセーエヴナ<sup>106</sup>にはたんすを、謹んで懇願し、恐れ多くも進呈したいと思います。陛下、私はこれ以上のものを手に入れることはできませんでしたので、どうか品物の品質ではなく、込められた真心をご覧下さい。

続きましては、日本人について陛下に御報告申し上げますが、この世にこれほど疑い深い政府はありません。通訳は決して一人で来ることはできず、いつも2人で、彼らには2人の監視人が付きます。役人も1人でいることはなく、いつも2人で、加えてその監視にまた2人いて、役人の

---

<sup>106</sup> [編訳者補注：アレクサンドル一世の妻]

誰かと今日話しても、返答を持って来るのは別の役人です。彼らはヨーロッパ人を極度に恐れています、自分たちの力の弱さを感じ取っているからかもしれません。彼等の軍隊にはなんの規律もなく、大砲は17世紀にポルトガル人から得て砲架もなくナンガサキに置いてあるいくつかを除き、日本には全くありません。銃は火縄付きのものです、彼らは弓をよく使っています。彼等の船は外洋では持ちこたえられませんし、その構造は劣悪です。それは一本マストで真中に帆が一つだけです。彼らは人口が多いため、実際人を大切にしていますが、そのためなおさら、人々は抑圧を感じています。彼らがいつか戦争をすれば、彼ら同様、規律のない中国人とか、朝鮮人とでしょう。しかしかつてポルトガル人が負けたとするなら、それは彼ら自身にその理由があります。というのもイエズス会師達は、キリスト教の狂信主義を日本人に鼓舞し、洗礼を受けた日本人に苦痛をもたらし、彼らは自分たちの防衛には十分に強かったのに防衛しようとはせず、殉教者の栄冠を得ることを期待して、自分たちの処刑を喜んだからです。私は陛下に確信を持ってあえて申し上げますが、この両民族を見ると日本人の方がこの場合より分別があると思いますので、今日ではこのようなことは有り得ません。

一つの弱みは、彼らが全くの快樂主義者であり、肉欲は彼等の楽しみのすべてであることです。彼らは自分自身の衰弱を見ようとせず、生を満喫しようと急いでおり、もし彼等の間で非常に自殺が多いというのであれば、プライドの高さからというより、存分に満喫する可能性がないと見るような人生への愛から自殺は生じるのです。政府の政策は不名誉な家々[娼家]を後援しており、肉欲を満足させることで彼等の類をみない隷属状態の悲しみを和らげるため、ここで彼らの錯覚を補強していますが、一方で、あらゆる側面における法律の厳格さによって自分の身の安全を保障し、疑い深さから啓蒙へのすべての方法を遠ざけていますが、これが民衆の心をいらだたせ、徐々にではありますが啓蒙は広まってきています。自分の巨体全体を一気に燃えあがらすには、熟慮した進取の気性によって光の火花一つを投げるだけでいいのです。ラクスマンが送還したコーダイ[大黒屋光太夫]は、聞くところによりますと、今も監禁されているそうで、この知らせが我々の日本人に届くと、彼らは激しい絶望に捕われ、一緒に連れて帰って欲しいと私に頼みました。しかし拒否されると、彼等の内の一人、タジュロという者が、自分の喉をかき切ろうとそこにかみそりを突き刺し、あやうくかみそりは彼から取り上げましたが、出血多量でひどく弱りました。他の者も彼にならおうとしましたので、彼等を引き渡して、私はほっとしました。彼等の金と物は取り上げられ、私が聞いたところでは、その後、帰還したことにより国内に大きな不満の種を与えた罪人として、彼等は監視下に置かれたということです。このような振舞いはなんと大きな印象を与えることでしょうか！

日本との貿易は我々にとって非常に利益をもたらすでしょう。アジア中で一番優れた米と銅が

日本製品の要です。最上の米がここでは1 プード1 ターレルもしません。我々はカムチャツカに多くの物を供給できるでしょう。カムチャツカでは今年、7 プード<sup>107</sup>のライ麦粉1 チェトベルチ<sup>108</sup>に国は32 ルーブル近く支出しましたが、軍務についているものを除くと、住人はまったくもらえません。品質が蜜蝋に少しも劣らぬ木蝋も200 パーセントの利潤を上げるでしょう。緑青、絹布、綿布は大きな利益をもたらすでしょう。銅製容器と漆塗り製品も優れています。我々の方からはロシア革、ヤギ革、厚手の印花布、棒編織、羅紗、そしてバラスト代わりに鉄を持ち込むことができるでしょう。鉄は米と交換に1 プード当り5ルーブルかそれ以上の値段でさばけるでしょう。彼等はシャグレーン皮革を刀の柄に使うのですが、これは彼等の贅沢のすべてです。なぜなら帯刀しない者はおらず、軍人[サムライ]は2本ずつ携えており、そのためシャグレーン皮革にかかる出費は大変なものだからです。ことのついでに刀についてここで述べさせていただくと、士官がもつ刃は見事なものです、しならず、従って、破損しやすいと思われまゝ。小役人と庶民が持つものは、我々の普通の物と比べ物にならないくらい劣っています。我々の無色のガラス製容器、磁器を彼らは大変気に入っていますが、日本にある磁器は、ファイアンス焼き[錫釉陶器]に似ているからです。毛皮は、北方では間違いなく売れるでしょう。5月1日にマトマイ島で、我々はまだ雪に覆われている山を見ましたし、はるかに暖かいナンガサキでも、冬には羊の毛皮の綿入れとキタリスの毛皮を目にしました。これらを彼らは中国人からたまに、しかもわずかな量だけ手に入れているのです。厚手の羅紗、麻布、つまり、すべてのロシアの手芸品は日本以上によく売れるところはないでしょうし、すべての民が望んでいるのですから、貿易を始めるのもそれ程難しくないでしょう。すでに迫害が定着してしまったナンガサキ以外に、北方から遥かに有利に貿易を確立できるでしょう。ロシアにのみ自然そのものがその手段を提供しているのです。鹿皮とスエードは大いに彼等の気に入っています。これらはギジガ[マガダン北西部、オホーツク海に面した町]のみが供給しており、彼等の主要食物である魚は、彼等のすぐそばで漁を行えるでしょう。

慈悲深き皇帝陛下、私はこの目的のため、彼等の厳しい命令にも関わらず、日本の北方地域を覗いてみたいと考えました。我々は朝鮮海を航行し、日本の西岸全域を測量し、この地域を確認する中で、地理学は陛下の安泰な治世に感謝せねばならない[としました]。なぜなら、最新の地図に示されているより、ところによっては海岸を30<sup>109</sup>西のほうに見出したからです。我々はこの岸を視界に収めながら進路を取りました。サンガル[津軽]海峡に近づいたとき、ニポン島の岸边に横たわる大きな町のそばを通りました。そこから100名以上の人を乗せた4隻の舟が出てきまし

<sup>107</sup> 【編訳者補注：1 プードは16.38 キロなので約115 キロ】

<sup>108</sup> 【編訳者補注：容量の単位だが、時代とともにその量が変遷した】

<sup>109</sup> 【編訳者補注：原文に単位がなく、露里を意味するのであれば約32 キロということになる】

た。彼らは本艦の周囲を回りましたが、大砲を見て、あえて近づこうとはしませんでした。ついに我々はサンガル海峡を通り抜け、マトマイの西岸部を回り、この島の北端、ラペルーズ海峡に投錨しました。ここで我々は上陸しました。北部には日本人は一人もおらず、アイノの諸民族が住んでいます。あごひげがあるというだけで、彼らは毛深いクリル人と呼ばれています。昔から彼らは全身が毛に覆われていると言われてきましたが、これはまったくの嘘と分かりました。彼らは魚を捕り、昔のカムチャダル人のようにユルタに住み、日本人が彼らから魚を巻き上げるためにやってきます。夏に2人の役人が見張りに派遣され、彼らの妻はマトマイの町の湾に残ります。島の南部全域がマトマイと呼ばれ、北からアイノ人はこの同じ島をエゾと呼んでいます。

役人が我々の艦に来ましたが、ラクスマンと一緒にだったロシア人はおさげで、一方我々は頭の裾を丸く刈りこんでいたというただそれだけの理由で、我々がロシア人だと信じませんでした。最初の使節団の機会にロシア語をいくつか知っていたので、ロシア語によって納得しました。魚を商いする日本の商人は、毎年、獣を交換しにウルプ島に行っていると我々に述べ、それがロシアに属していると認めました。彼らはテンの上着を羅紗の胴着と古着に交換しにロシアに来ますが、まさにここに交易が可能であることの最初の証しがあります。彼らは鹿のロヴドゥーガすなわちスエードを彼らは大変気に入っています。彼等の主要食品である魚に関しては、彼等のすぐ近くで漁を行なえます。

翌日、我々は出航しました。私はウルプ島に行きたかったのですが、艦長がそこには港がなく、艦を大きな危険にさらす可能性があると私にいいました。そこで、時と状況を利用するために、私は陛下の名の下にサハリン東部と北端を測量し、そこで港を捜すよう命じましたが、その際、中国帝国の海岸にはけっして接岸しないよう、そしてこの大国に少しの疑念の余地も与えないようにとの必要な注意を怠りませんでした。

北にすでに陸地が見えました。マトマイで日本人はそれは日本の島カラフトの南部で、広さはマトマイの半分で、そこには獣と魚を捕りに行く、またその民族はマトマイとウルプ同様、アイノだと私に言いました。しかし、ロシア測地局 *rossiiskoe depo* から発行された最新の地図、また日本の地図によっても、カラフト島はマトマイとサハリンの間に標示されており、マトマイの沿岸に沿って我々が航海していた時、第1の海峡を見ず、北緯から判断してラペルーズ[宗谷]海峡にあたる第2の海峡に着き、加えて、我々はデ・ラングリ峰[利尻山]を目撃したことから、「この先ロシアの島サハリンがそこにあるはずなので、カラフトはこの先続いているのか」と日本人に尋ねたとき、彼らは「カラフトの北部は知らないし、そこには行かない、その海峡は浅く、その先にはロシアではなく満洲人に属しているサンダン島或いはサハリン島がある」と答えた事について我々は納得しました。これらの情報を集め、我々は急いで30マイル程の海峡を渡り、こ

れがサハリンであることを知り、南部から 17 世紀にオランダ人が測量したアニワ湾に入りました。この島は遥かに小さいと分かりました。ここの民はやはりアイノで非常に親切でした。ここで我々が見出したのは、日本の番屋 faktoriia、夏の間国から派遣される 2 人の役人、この役人のための相当な家、お堂、絞首台 viselitsa、そして両岸にある 16 の巨大な倉庫で、この倉庫のいくつかは、この湾に信じられないほど豊富にいる魚で既に一杯で、残りにも運び込まれているところでした。彼らは魚を樽で塩漬けにするのではなく、干物にして並べて置き、塩をまぶし、船にも同様に積み込みます。ここで 2 隻のそのような船が停泊しているのを見ました。私はその 1 隻を訪れ言葉を使い、オサカ Osaka[大坂]からの商人団がここに腰を下ろして 8 年目であるという情報を得ましたが、実際、建物は新しかったです。ここの民はごく善良で、湾には多くのアイノ人が住み、我々は数百人を見ましたが、日本人が既に彼等を隷属させています。夏中、彼らは魚をとって塩漬けにし、冬は狩猟をし、春になると日本人がそれらを巻き上げます。住民は数の上では優勢で、日本人も船乗りを含めてもせいぜい 40 人しかいないのにもかかわらず、日本人は彼等を支配しており、一人の日本人が 50 名を仕事に駆り立てます。日本人は我々を見て大変驚きました。私は彼らからジビキ[字引き]、すなわち漢字のイロハを手に入れました。これはナンガサキでは監視が厳しかったので、私に渡したがらず、ビロード 1 アルシンと交換することに彼らは同意していたにも関わらず、役人が交換を禁止したところ、この本からしり込みし、交換もできなかったものです。しかしながら、私は科学アカデミーのためにこれを獲得したことで大いに満足しました。

アニワに滞在中、入り口付近にトド siuch によって一面に覆われている岩礁を見ましたし、湾の一方ではサケ、もう一方では、漁網で岸に引きずってくるのではなく、海からたも網ですくい、舟に一杯入れるほど大量の巨大なニシンを獲っているのを見ました。ちょうど産卵期だった魚を追ってきた鯨の群れも見ました。鯨漁も見ましたが、これは獲物の数が多いこと、漁がめったにないほど安全なこと、また、ここにある無数の木材は建築用であるため、鯨脂が燃料に向いていること、に因ります。人夫のための食料として魚と野鳥が豊富にあることで、ここは世界中でも理想的な場所であるにちがいません。大きなアザラシ、すなわちワモンアザラシ(フイリアザラシ)も無尽蔵にいます。つまり、ここは海獣の宝庫<sup>110</sup>なのです。家畜はにわとりと犬以外見かけませんでした。5 月 6 日、我々はアニワを出港し、クリリオン岬を周り、西海岸はラペルーズが測量しているので、東海岸を視野におさめながら北に向って航海しました。アムール川まで行かず、北緯 47 度で我々はすばらしい港を見つけました。東側は開いていますが、必要に迫られた際は避難所になり得るでしょう。強い逆風のため、我々はこの港全体を踏査するのを阻まれました。ここの住民もアイノで、アニワのアイノと同じくらい親切で、日本人がまだここまで勢力を伸ば

---

<sup>110</sup> 【編訳者補注：原文は蟻塚 muraveinik とあるが、蟻塚のように密集している様子をさすものと思われる】

してきていないので、こちらの方が少しは裕福でした。彼らは多くの日本の物と漆器を持っていました。カムチャダール人の所と同様、彼らは馬の代わりに犬を使っており、我々は冬の犬ぞりを見ました。テルペニエ岬に向けて航海を続けていると、氷群に出会いました。長時間無駄に間切り帆走をしないために、カムチャツカに向かうよう私は命令しました。そしてクリル列島を航行している時しに遭い、第5、6番目の島の間を通過し、5月25日、無事にペトロパヴロフスク港に到着しました。

慈悲深き皇帝陛下、ここで私は2隻の船を見ました。輸送船フェオドシア号と露米会社船マリヤ号です。後者は昨年、カディヤクに向けて出航しましたが、粗悪な組み立てだったため、ポンプを全部使ってなんとか水を汲み出しながら、この港にたどり着き、ここで越冬したのです。3隻目の船コンスタンティン号は、オホーツクで昨年受けた命令にしたがい、5月15日、アトハ Atkha 島、ウナラスカ島、北方諸島へ毛皮を求めて出航し、ナジェージダ号に供給するため、7月にここに運んでくる予定です。ナジェージダ号には、塩をおろした後、測量を終わらせ、港を捜すためにサハリン島に行き、8月には再び、残りの荷を引渡し、コンスタンティン号から毛皮類を受け取り、広東経由でロシアに戻るべくここに帰るよう委ねました。私自身は、慈悲深き陛下、マリヤ号がいかにひどい状態であろうとも、これに乗ってカディヤクに向い、私の健康状態が持ちこたえるなら、さらに遠方を視察したいと思います。つまり、現在私は、ただ陛下のお役にしたいがために、わが身をこの辺境に投じたのであり、トド sivuchi と貝類を食する心構えができております。

陛下、私が再びサハリン島へ話を戻すのをお許し下さい。アニワ湾は直ちに、今すぐ入植する必要があると御報告申し上げなければなりません。すでに17世紀にここを訪れたオランダ人達の時代から、自然の豊かさは商業界に少しも知られておりませんが、彼らが一度も自分達の航海日誌を出版しなかったためなおさらです。もしこの自然の豊かさを彼らが忘却していないとしても、オランダ人達がやっとの思いで日本への通商団を派遣している今では、少なくともここに入植するほど強くはありません。今となってはもはや、この場所は我々の遠征隊に参加した外国の学者達を通して、世界で隠しおおせず、冒険心に富んだイギリス人や投機好きボストン人が必ずやこの地を訪れ、もちろんのこと入植するでしょう。ロシアにとってこの土地は必要なだけでなく、必要不可欠であります。今では日本を知っているのだから、あえて陛下に申し上げたいのは、日本との交易は、ここで必ずや実現して陛下に名声をもたらし、しかも莫大な利益をもたらすでしょうが、日本人自身は、専制から逃れ喜んで[当地へ]移住してくるだろうということです。私は日本の役人たちと文通の手筈を整えたので、彼等の内政状況を理解したうえで、なおさらうまく事にとりかかれるでしょう。

皇帝陛下、私は謹んでお願い申し上げますが、これを必要なこととお考えになられるなら、私の名によりこれを行なうよう御命令下さい。アニワでの捕鯨はとても都合よく、会社がこれを行なう必要があります。というのもシャーロット諸島から、ボストン人が広東に毛皮を大量に持ちこんでおり、年々値段が下がっておりますので毛皮はあまり堅実な取引ではないからです。しかし鯨脂はインド全域の必需品で、インドへの船旅は短くて済み、モンスーンの恩恵にあずかることができますので、ここで鯨脂を取引することは大変有利でしょう。サハリンには住民が十分住んでおり、確固たる熟慮された基盤を築き、その基盤を通して陛下のアムール川への偉大なる展望も早まり得るでしょう。いわんや、日本との交易は毛皮の捌け口を開き、中国の傲慢さを弱めるでしょう。ついでながら、カムチャツカの肥沃な土地より 8 度南にあり、穏やかな気候はシベリア全域にとって有益で、居住者を引きよせるでしょう。そして徐々にこの地域で東インド貿易の商品が結びついていけば、ペトロパヴロフスク港でその開祖に敬意を表して、いつの日か 100 年祭を祝うことはない、誰が保証できるのでしょうか？ 偉大な事業は始めはゆっくりと進むものですが、計画が間違えば、その進展は驚くべきものになるものです。ボタニー湾<sup>111</sup>は古くから人が住んでいたわけではなく、新世界のようにどこからも隔離されていましたが、今ではここにも諸都市が勃興しています。サハリンに居留地を開く支出はたいしたものではなく、多大な見かえりを期待できますし、その実行には何の困難も伴いません。私は全ての詳細を申し上げて、陛下を煩わせることはできず、ここでは大枠のみを申し上げました。しかしながら、この壮大な計画は時間を要し、私はこれを清書するための紙さえ持つておらず、陛下のご意志を実現すべくカディヤクに向けて急ぎますので、現地で確認のための命令をお待ち申し上げます。

慈悲深き陛下、私にはカムチャツカを視察する時間もございませんが、耕作はまったくうまくいっておらず、私が視察して 1 年たった今日の現地の状況は、以前と同じく、国庫にとって莫大で役に立たない支出以外なにも期待できないと、御報告申し上げます。この地には経営の才のある人物による監督が必要です。そのような人物が不足していることについて、私の昨年の報告書で御説明申し上げました。カムチャダール人はほとんど絶滅しそうです。私は日本で塩を買うことに非常に多くの気を配りましたが、彼の地で苦勞の末に得た知り合いの助けで、2 千袋手に入ることができ、当地に運び込み、この地方に 1 年からそれ以上の食糧を確保でき、今や政府がこの地で製塩所の開設に少しずつ着手できることを喜んでいます。自分は食わずに、私はここへ豚、にわとり、それに野菜の種を持ってきました。しかしここで将来的にも成功するかどうかは請け合えません。

私は、カムチャツカ守備隊長フョードロフと副官コシレフと下級士官 8 名を彼等の持ち場に

---

<sup>111</sup> [編訳者補注：オーストラリアのシドニー近郊、18 世紀末に流刑植民地が設置された]

帰しました。

遣日使節団に割り当てられた物品に関しましては、商務大臣殿に一覧表を届け、詳細な支出明細書は七等文官フォッセに持たせて送りました。彼は陸軍少佐フリデリツィイ同様、物品と共にナジェーグダ号で帰途につかせましたが、彼らは尊敬すべき、陛下への忠誠心において信頼できる人々で、彼等の励みと熱意を陛下にお目にかけたいと存じます。

私の裁量のもとに割り当てられました 2 万ピアストルという多額の金額の内、2 年間の遠征期間中に使ったのは 482 ピアストルで、さらに天体測定機器と書籍購入に 1109 ピアストル使いました。手元に残った 18409 ピアストルを、私はこの地でクルーゼンシテルン氏に手渡しました。私欲なしに行なわれた遠征に今後も決して重大な支出がないように、私はあえてここで陛下にすべての額に関する説明を行ないました。会社の利潤を経済的に貯蓄していくことに関して、私がすべての貿易について節度を持つよう奨励したいといかに望もうとも、方法がありませんでした。

博物学者ティレジウスとラングズドルフによる自然史に関する収集物は十分興味をかき立てるものとなるでしょう。ラングズドルフはブラジルでのより珍しい昆虫の採集と日本での魚の収集で際立っていましたが、彼の名が学問界でさらに知られるようになることを願っています。カムチャツカに来るたびに、彼は病人を治療しますが、現在私と共にアメリカへ向います。私は彼にティレジウスと同等の給与を与えていますが、知識の点で、彼等のうちのどちらの方が優れているかはアカデミーが決めるでしょう。多くの学者仲間の一員であり、ここカムチャツカでゲッティンゲン大学が彼をメンバーに迎え入れた、との知らせを受けたラングズドルフをこの遠征に獲得できたことは光榮に存じます。

航海の期間中ずっと、下士官は従順でした。労働と物不足のため疲弊していましたが、愚痴をこぼさず耐えていましたし、入港すると休息の代わりに、荷おろし、バラスト積み、何度もひどい漏れを起こした艦の修理に動員されました。今や艦は修理され、安全にロシアまで行きつくでしょうが、到着したらもう 12 年間も奉えてきましたので、この艦をドックに入れ、消失した梁材を交換する必要があります。乗組員の骨折りは航海の成功に大いに手を貸しましたし、日本では彼らの慎み深い行動、私の命令に対する服従によって、日本人がロシア人について好意的な結論を抱くほどでした。

慈悲深き陛下、私はあえて彼等の功名心を満足させ、各人に小さなメダルを与えました。

最後に、私の至らぬ点を、最後の力もそれに使い尽くすつもりであります陛下に対する奉仕への熱意によって取り替えてくださるなら、私が自身をまったく幸せに思っておりますことを述べ、私の陛下へのご報告を終わらせていただきます。

(原文の注)

\* 日本の皇帝の名は外国人にとって大きな謎です。日本人でさえ少数の者しか知りません。しかし私は、これこそが我々への好意の証しとなっていると思うのですが、多くの情報源から少し覚えることができました(poduchil)。またトゥンベルグが書いてありますが、我々が有しているのは...<sup>112</sup>

(6) РГИА, ф. 1264, оп. 1, д. 577, л. 90–149 об.; ОР РНБ, ф. 152, оп. 1, д. 379, л. 89–110. 写し

(斎藤由佳・寺山恭輔 訳)

#### 59. N.P.レザーノフによる露米会社本部宛の報告書

第 369 号

1805 年 6 月 8 日

ペトロパヴロフスク港

カムチャツカにて

親愛なる皆様へ

去る 5 月 25 日に日本から帰国し、私は急いでフェオドーシア号を使って私の報告書を謹んで送らせていただきますが、周囲の状況が必要とするほど、事細かに説明する時間を持ち合わせておりません。

我々に対し日本では通商を拒絶されましたが、今後の希望は依然としてかなりあります。我々の眼前には貿易を北方から始めるあらゆる方法があります。日本を出航後、我々は朝鮮海を通り、マトマイの北端に行きましたが、そこにはクリル人が住んでいます。日本人はどこでも弱いものの人口は多いのですが、この地に彼らはまったくおりません。そこから我々は約 30 マイル、マトマイと隔てているラペルーズ海峡を通してサハリンに向かい、アニワ湾に入りました。我々はそこでこの地に住んで既に 8 年めになる日本人たちを発見しました。そこには 2 人の将校が住み、家やお堂、16 棟の巨大な蔵がありました。その蔵は魚で一杯ですが、それらの魚はここでもマトマイでも貧しい住民が手作業で塩漬けにするものです。これらの人々は非常に善良で、アニワで我々は彼らを数百人目撃しました。この地に 2 隻の商船があったので、彼らと日本語で話をした

---

<sup>112</sup> これは N.P.レザーノフの未完の注だが、彼の文書の写字者が最後まで書かなかった可能性もある。ーマリヤ・マルイシェヴァ、ヴラディミール・ポズナンスキーによる注。

ところ、彼らはオオサカから来て魚を取引する一方で、冬に住民が猟でとるキツネ、ラッコ、テンの毛皮も巻き上げていく、ということを知りました。住民には小間物類や、駱駝毛の上着 armiaiki を持ち込んでいますが、そのうちの 1 点を交換して得たので、この機会にお送りいたします。この湾には魚、アザラシ、トド、クジラが想像を絶するほどたくさんいます。クジラ漁はきわめて有利で、樽用の木材も海岸に沿ってずっと豊富にありますので、クジラ猟に特に皆様の注目を喚起したいと思います。

我々は日本から銅、樟脳、白さや品質面で蜜蝋にも劣らない木蝋、織物、茶、銅器、漆器類、そして何よりもアジアで最も品質が良く、しかもきわめて安価な米を受け取ることができるかもしれません。一方で我々はここへ鉄、厚手のラシャ、棒織、ロシア製磁器、ガラス、ロシア革、スエード[シカの皮、ロヴドゥーガ]、リス、オコジョ、キツネ、更にオットセイの毛皮を持ち込むことがきわめて有利ですし、魚の取引も行えるでしょう。魚の交易にとってサハリンは必要です。我々はサハリンを測量したかったのですが、テルペニエ岬で流水が我々の行く手を遮ったため、我々は積荷の一部を降ろすために当地にきました。そして今、ここで我々は聖マリア号を見出したので、それに乗って私はカディヤクに向かいます。私からどのような命令が出されたのかについて、私からクルーゼンシテルン氏に対する書簡の写しを添付しますが、そこには全航海のためのすべての指示を含んでおります。なお彼には 6 日付で自分の航海に出発するように指示しました。私が派遣しましたフォッセ氏より、日本から運んできた見本として二つの盆に載せた銅、木蝋 3 個、樟脳、茶 1 箱をお受け取りください。

当地で私は破損したため越冬していたマリア号を見出したのですが、この船は船内の水を汲み出しやっとのことでここに辿り着いたのです。重度の性病を患い、傷を負った 2 名の毛皮事業者に関してですが、我々の乗組員に感染しないため、またアメリカへこのような贈物を届けるのはよくないので、私は彼らをオホーツクに帰還させました。私は本部に対しまして、事前に医務官の確認を受けたものを遠征に派遣すること、さもなければ彼らの派遣を決めた者の責任を問うことを、すべての事務所に確認するよう要請いたします。この件について私はオホーツクの事務所に、彼らを引き取るにかかる費用を添付して、非常に厳しく命令しました。

航海士のグリゴリエフは常に酒に酔っており、会社にとって無益な人物であります。将校らが彼に対する苦情を漏らしていましたが、私も当地で彼をそのような状態で目撃しました。彼に関して私に提出された書類を添付いたしますが、彼に船を任せることは会社にとって更なる損失になりますので、後方の司令部に注意を喚起します。彼を招集したことに関して、本部は上官に対して彼の減俸を提案することができます。この際に皆様方に指摘せねばならないことは、航海士として将校を求めるのではなく、より低い官位のものから抜擢するほうが良いということです。

ともあれこの例は会社にとって有益になることでしょう。

ナジェージダ号の将校らとの決着について、私はもうくちばしを突っ込むつもりはありません。もはや彼らと仲直りするいかなる手段もないからです。会社の手代たちが詳細に描写するでしょうが、私はそれなしにすでに十分失望しております。

当地の上官の報告に従い、私は海軍中尉ラトマノフに対して海軍大尉の地位を通達しました。我々は日本に行って来ましたが、彼は当直せず、したがって、褒賞、給与のために勤務する乗組員はいませんでした。この際将来のためにも、階級に関係なく当直するよう、申し合わせの前もって定めておくべきです。すべての海軍中尉にさらに褒賞を与えることも容易になるのではないのでしょうか。現在彼は仕事の合間に会社の利益のために働いてくれています。病気になった手代のために 1 シトーフの葡萄酒が必要になったために、彼を株主から除外してくれるようにと彼が私に提出した書類を私は皆様に昨年お送りいたしました。今般、当地に到着して私は彼からの書類を廃棄し、彼を規則のもとに引き入れようと思い彼には株を返還しましたので、これは無駄なことでした。彼らがシェメリンに道中何をするのかについては、神のみぞ知ることとを、全責任を持って保証いたします。彼らに商人という称号を与えることは、この世にこれ以上ないような罪です。

私はナジェージダ号のために資金を確保し、彼らに 18,409 と 11:18 ピアストルを渡しました。しかし、彼らはシェメリン氏のもとに保管してあるこれらの金にまで手をつけています。私はこの金額は、貿易を試してみるために使われるべきだと書面で指示したにもかかわらず、何の効果も挙げていないということを確認しておきます。

日本に関する詳細な情報は、私の航海日誌の中に含まれておりますが、その日誌は私がやっとのことで清書し、商務大臣閣下宛にお送りしました。閣下の寛容なるご好意を享受され、閣下より通商、商品の価格に関するすべての情報を皆様が受け取られるようお願いしております。

当地には秋に船が難破した 5 名の日本人がおります。現地当局は彼らに援助をしないので、会社の仲買人が彼らを会社の経費で賄っております。私はカディヤク島に彼らを連れて行き、現地で妻を娶らせ、この地域のために有益な市民にすればと考えたのですが、彼らに食料を与えたがらず、彼らを引き取ることも許してくれません。どうか彼らのため、そして将来に備えて、彼らに対する命令を請願の上獲得していただきますようお願いいたします。彼らは多大なる利益をもたらす可能性を秘めているのですが、当地では暇を持て余しており、会社の援助なしでは餓死してしまうような状態です。

私は日本より塩 1,300 プードを持ち帰り、この地方全体のために当地の幹部にこれを渡しました。貴下には、会社の必要のために貸付の形で、これを支出してくれるようにとの命令を請願し

て獲得することが必要です。私は今回、ナジェージダ号のために 50 プードの[小麦]粉を要請しましたが、私が受け取った回答の原本を添付いたします。価格が下落したことや昨年大隊に贈呈されたことについて、既に忘れられています。ナジェージダ号が 150 プードを要求した乾パンが我々のもとに来るのか私にはわかりません。その支給に関して私も、当地の幹部に[小麦]粉を貸し付け、兵士にパンを焼くことを命じるように要請しました。というのも、ここには他に住民がいないからですが、パンを焼く費用は会社が負担することになるでしょう。同様に[小麦]粉はオホーツクより第一便の輸送によって返還されるでしょう。このことについては、私が現地の支所に指示しました。

現在カディヤクには多くの船がありますが、その船の大半は老朽化しているように思えますので、聖パーヴェル号ともう 1 隻の船は、もしそれらが役に立たないのであれば、ここに戻すべきであります。これらの船は木材を積んでカディヤクからこの地に来ることが可能ですし、ここではニジネカムチャツク[現在のウスチカムチャツク]からも 2、3 回木材を運び込み、船を作ることが可能です。

カディヤクに輸送するために、私はかなりの数の砲弾、榴散弾及び火薬 80 プードと共に 3 フント砲 4 門をナジェージダ号から取りはずしました。明日には当地から出発しようと思いますので、取り急ぎこれらの私の報告書をお送りし、皆様に敬意を表しつつ筆を置くことに致します。

頓首

恐惶謹言

ニコライ・レザーノフ

露米会社取締役各位

(6) РГИА, ф. 15, оп. 1, д. 2, л. 117–119 об.

(渡邊 開・寺山恭輔 訳)

## 60. N.P.レザーノフによる露米会社本部宛の報告書

第 368 号

1805 年 6 月 10 日

親愛なる皆様へ

本来なら今頃、私は海上にいるはずでしたが、マリア号の船尾部分に見つかった漏れ口のため、荷下ろしをせねばならず 3 日たち、時間を取られてしまいましたが、明日には出航できると期待

しています。

私は皆様に対しまして、遠征を継続する計画について私がクルーゼンシテルン氏に渡した指令の写しをお送りいたしました。彼は出航しようとしませんが、私は自分の本意ではないのですが、出航が遅れているすべての原因を、それが私の責任に帰せられぬよう、皆様に説明すべきであると思っています。

日本から出発すると、私はウルップ島と我々の入植地を視察するよう指示しました。これに対して彼は、この船の大きさでは実行できないと私に口頭で答えましたので、私はそれに同意し、マトマイとサハリンの視察を目標にしました。我々の前に現われた流氷を見て、私はカムチャツカに向かったらどうかと助言しました。彼はこれに対して流氷が航行を妨げていると答えましたが、実のところ彼は、カムチャツカに行きたくなかったのだと思いますが、それはブラジルの諸文書に従って彼は船の指揮からはずされず、功績を示す手段を奪われなかったもので、測量したいと主張したのだと私は懸念しております。私はなんとかして彼を説得し、最終的にここにその写しを添付しました指示を彼に出しましたが、どのように受け取られようと、この遠征を終わらせるようにとの命令を彼に出した、ということを保証いたします。私の論拠はきわめてしっかりしておりますが、最後の彼の返答もここに添付いたします。

この港に到着するまで事態は平穏でした。しかし当地で郵便物を受け取った後、再び皆の振舞いは変わりました。25日<sup>113</sup>以降、彼は私の命令を受け取らず6日から8日もぐずぐずしておりましたが、ようやく6日になって彼は私のところへ来ました。私が彼に指示<sup>114</sup>を与えると、彼は港から出て行きました。とはいえ、ニジネカムチャツクにはまだ郵便物があるとの情報を耳にしました。彼らが自分たちの庇護者からの増援部隊を待っているように見えます。私は艦長を目にしますが、金を受け取ったという署名を求められたことに対して私に激怒した彼は、私のもとから立ち去り、6日以降は姿を見せていません。7日に私は海岸で将校に会って、なぜ出航しないのか尋ねたところ、バラストをいくらか積み込むことでトリム[首尾喫水差]を修正しようとしているとの答えが返ってきましたが、これは口実に過ぎません。同日、カッター船 barkas を一隻載せただけで、作業が終了したからです。8日には、釜類を溶接する必要があるといって、突然彼らは海岸に調理器具一式を運んできました。どうやら郵便物を待つことを決心したようなので、今となっては、いつ彼らが出航するのか私にはわかりません。皆様、このように我々の事業の遂行は、まさにペテルブルグの庇護者の成果なのであります。艦長は勅令に従わず、自分の港にいるにもかかわらず、いかなることも私に通知を致しませんので、私にとって無秩序のもとで成功を

<sup>113</sup> 【編訳者補注：日本からペトロバヴロフスク港に帰港したのが5月24日だった】

<sup>114</sup> 【編訳者補注：1805年6月6日、レザーノフがクルーゼンシテルンに出した指示の邦訳は、史料集第1集No. 35を参照のこと】

収めることがいかなる困難を伴うものであるのか、ご判断いただけるでしょうが、赦免[レザーノフによる]に対して粗野な振る舞いで報いるということからも、品性[クルーゼンシテルンの]は皆様方に理解していただけるでしょう。皆様への深い尊敬と献身を慎んで申し上げます。

頓首

恐惶謹言

ニコライ・レザーノフ

(6) РГИА, ф. 15, оп. 1, д. 2, л. 123–123.

(渡邊聞、オイドフ・バトバヤル、寺山 恭輔 訳)

#### 61. 露米会社手代フョードル・シメリンによる露米会社本部宛の報告書

1805 年 7 月 14 日

カムチャツカ・ペトロパヴロフスク港

皇帝陛下の庇護下にある露米会社本部へ

世界周航に派遣された遠征隊

手代フョードル・シメリンより

報告

聖使徒ペトロとパウロの港[ペトロパヴロフスク港]より私が送った 1804 年 8 月 22 日付の報告書には、現在乗船し、日本に出航するところだと述べたのですが、逆風のため我々の計画は延期せざるを得ませんでした。25 日の朝になってやっと、ニコライ・ペトロヴィチ閣下が乗船しましたが、カムチャツカ地方長官コシェレフ閣下が佐官、尉官とともに彼を随伴してきました。航海の無事を神から祝福され、礼砲が撃たれる中 9 時に我々は錨を上げ、マストを張って出航いたしました。コシェレフ閣下は船から下り、埠頭に戻っておられました。ペトロパヴロフスク号はナジェージダ号に対して 13 発の礼砲を撃ち、同数の礼砲でナジェージダ号も応えました。風は弱く、しばらくすると止んでしまいました。ナジェージダ号は曳船に曳航されることになったのですが、風と向い風によって結局錨を下ろさざるを得ませんでした。8 月 26 日の午後 7 時に喜ばしくも我々はアヴァチャ湾から出て、予定通りの航海へと向かいました。

我々の航海は上手くいっていましたが、この間に 3 回の激しい嵐に見舞われました。9 月 20 日の最後の猛烈なティフォン[台風]は、上官のみならず船員を含めすべての者を絶望の淵に叩き落としました。皆が死を覚悟し、もはや助かる見込みはないと思い始めたとき、突如として風が弱まり

始め、我々は奇跡的に救われました。この恐るべきティフォンの猛威についての詳細な状況は、私の日誌の中に記されております。

偉大なる皇帝陛下の戴冠記念日 9 月 15 日を、我々は北緯 31 度 21 分、経度 226 度の地点で祝い、閣下はロシア人にとって至福のこの日に、下士官及び水兵 *matros* にその熱心な勤務と労働に対する褒賞として、彼らの胸に吊り下げられたウラディーミル大綬に小さな銀メダルを授けることで祝ったのでした。カムチャツカの大隊から選ばれた 8 名の兵士もこのメダルを受領するという幸運にあいました。この日全部で 63 個のメダルが贈られました。授与は船尾甲板において行われ、メダルは大皿に乗せられた金欄に乗せて運ばれてきました。授与の前に閣下はお言葉を述べられましたが、その内容は、私の日誌の中に写しの形で収めてあります。午餐の席において皇帝陛下のご健康を願って 11 発の礼砲が撃たれ、その後すべての乗組員の健康を願って 9 発の礼砲が撃たれました。

9 月 26 日、海の暦では 27 日の午後 5 時、我々は無事にナンガサキ湾に到着しましたが、その中に入らないうちに、日本の役所によって外海で投錨せざるを得ませんでした。その後で我々は、30 隻かそれ以上の日本の警備船によって取り囲まれました。晩になると明かりを灯した船に乗ってナンガサキから位の高い役人 2 人が、我々の船に関する質問を携えてやってきました。すなわち、この船はどこに属しているのか、どのような目的でいかにしてここに来たのか等々でした。この晩、我々の使節のもとへ日本人の役人らと共に統領 *obergoft* [*oberhaupt*] の称号を持つオランダ人商館長ドゥーフが、船長、火縄銃士、秘書を伴ってやって来ました。このドゥーフと使節との会話は、日誌に描写されております。日本の役人たちは、火薬と武器を彼らに渡すように要求し、そうしなければ我々を湾内に入れなかったと言いました。

27 日、船にやって来た日本人の役人たちに、火薬、武器、サーベル及び不要な剣を渡しました。使節は彼自身と従者たちに 1 本ずつの剣、彼に仕えている兵士たちにも小銃を残すことを決めました。同日、再度使節のもとにオランダ人統領が、東インドの多くの土地をまわり、現在当地に滞在中の旅行者パプスト男爵、それに 2 名の船長ビリメル *bil'mer*、ムシケティール *mushketir*<sup>115</sup>、前回と同じ秘書とともにやってきました。我々から火薬、武器を取り上げると、すぐに待機していた 52 隻の日本の舟には、我々の船を湾内へと曳航するよう命じられ、12 から 13 露里ほど曳航された我々は、広大でかつ三方を囲まれた湾に連れてこられました。オランダ人がパペンベルクと呼ぶ島からそう遠くないところだけは海に向かって開けている湾です。我々はここにこれ以上留まっていたくはなかったので、使節は我々の船をより安全な場所に連れて行くように要請しましたが、日本人は出来ないという口実をいくつも並べ立て、我々をこの場所に 10

---

<sup>115</sup> 【編訳者補注：2 人の船長の名前はなぜか小文字で記されている】

月 4 日まで留ませたのでした。しかし同日、我々はパペンベルク島の裏側に曳航されました。この時我々の船を曳航したのは 80 隻ほどの舟でした。パペンベルクの裏側へ方向を変え始めるや否や、5〜6 露里も離れていない遠方にナンガサキの町並みを眺めることが出来、我々は大変満足でした。日本人たちは我々をパペンベルクから 1 露里のところに連れて行き、そこで投錨するよう命じました。そこから我々には町は見えたのですが、建物は遠すぎて一塊に重なり合い、望遠鏡を使っても、どのようなものがあるのかよく見えませんでした。日本の商品を積んだ 2 隻のオランダ船が出航した 10 月 29 日まで、我々はこの地に停泊を余儀なくされました。ナンガサキの<sup>グーベルナートル</sup>県知事は、これら 2 隻のオランダ船とロシア帝国の船がいっしょに並んで停泊するのは許されないと判断したのです。しかし実際のところ、お互いに近くに停泊している我々が何らかの方法でオランダ人と会う方法を見つけたり、何らかの合図でお互いに会話することを懸念していたのです。28 日にオランダ船はバタヴィアに向けて出航し、29 日に我々の船は再び曳船に曳航されました。この日我々は、ナンガサキ港にいよいよ入ることになるものと期待していたのですが、裏切られました。日本人たちは我々を町までわずか 2 露里のところにまで連れて来て、再び停泊させました。役人たちは使節に、県知事は首都から指令を受け取るまでは、ロシアの使節に今までしてきたこと以上のことを出来ないし、あえてすることもないと宣言したのです。使節は、嵐によって出来た大きな損傷箇所のあるこの船を修理するのに必要なしかるべき場所を県知事に要求しましたが、修理は舟が軽く積荷から解放されない限りできないと説明して、ロシア皇帝からクボ・サマに贈られた贈り物やその他の貴重品を保管できる倉庫を要請しました。しかしこれらすべての要請や提案は徒労に終わりました。そうこうしているうちにニコライ・ペトロヴィチは健康を害し、彼の病は日に日に酷くなっていき、このことは県知事の知るところとなりました。11 月 12 日、日本人の通詞が船を訪れ、県知事は使節が病気であることを聞き、非常に哀れみ、まもなく訪れる冬が船内で過ごす彼の健康にさらに好ましくない結果をもたらすのではないかと心配し、彼のために町内に一軒の家を準備するように命じましたが、それがもうじき完了すると使節に伝えました。我々は 12 月 5 日までこれを待ち、同日、閣下は盛大に上陸を果たされました。式典は素晴らしいものでしたが、ここでその詳細を書くべきでないでしょうし、私の日誌に記述しております。家には 5 部屋あり、日本風に非常にきれいに整頓され、蔵も十分あり、閣下はご自分でこの家とその快適さをご覧になり非常に満足され、県知事にお礼を伝えるよう命じられたのでした。この家は町中ではなく、郊外にあり、町の郊外の集落からは 2 露里の距離があります。この場所はメガサキと呼ばれ、後から我々が知ったのは、ポルトガルの使節たちが最後の日に監禁され、後に絞首刑に処せられたり、火刑に処せられたりした、まさにその場所だったということです。屋敷は周囲を葦でできた高い垣で囲まれており、竹で出来た 2 つの門が設置されまし

た。1 つは湾内に向いており、もう 1 つは多くの将校が待機する詰め所のある路地の入り口にあります。初日、式典が終了すると、日本人の役人らは屋敷から出て行き、両方の門はしっかりと施錠され、我々はここに幽閉されてしまいました。翌 12 月 6 日、我々は船の荷物を倉庫に運びました。日本の役人らがこれを指導し、日本人だけで 2 日で船のすべての積荷が港に荷揚げされました。12 月 10 日、県知事から派遣された役人を通じて、閣下は我々の船を湾内に入れるようにという皇帝の命令について、そして県知事がイエドからの更なる指令を待っていること以上に何も無い、ということを知ったのでした。我々はこのような軟禁状態の中で、時折イエドからの急使の到着を延期する県知事や役人たちによる毎日の欺瞞、案内がいつ終わるのか見当もつきませんでした。我々にはメガサキの牢獄における長期の幽閉が何を意味するのか、なぜイエドの宮廷は我々にあれこれ伝える決定を遅らせているのか知りませんでした。2 月初旬、通詞らが来訪し県知事の名において、彼らの皇帝はロシア使節団に対して、国の顧問の中から 1 名に全権を付与してナンガサキに行くよう命じた、伝えてきました。2 月 28 日、通詞主任と数名の通詞が使節を訪れ、イエドから当地にダイミオ[大名]もしくは全権が来るため、使節はもはや首都には行かないということ、ロシア使節団に対する供給に関しては当地で県知事たちがすべて解決するように命じられた、ということに留意するよう伝えました。その後通詞らは使節に対して、「使節としての任務をもうじき完了するだろうが、当地に長期間とどまるのはあなた方にとって意味がないので、1 か月後に我々のこの港から去るべきではないか」と宣告しました。閣下がこのような伝達にいかにも悲しまれようと、何もすることができず、我々の船は修理中で、充填材で補修されていたので、ニコライ・ペトロヴィチは艦長クルーゼンシテルン氏を呼び、ナジェージュダ号を武装し、少しずつ出航の準備を始めるよう命じました。3 月 17 日、ナンガサキにダイミオが到着しました。22 日、県知事は通詞を派遣して、ダイミオがナンガサキに到着したこと、使節が明日彼らの屋敷を訪問するよう県知事たちが頼んでおり、そのために明日朝 8 時に飾りを施した船をここに送ることと、彼を出迎え町まで随伴するために、彼のもとに 2 人の役人 *banzhos* が来るということ、以上を伝えさせました。その間彼らは、使節がいかに接受されるのか、使節は県知事の屋敷でどのように振舞うべきかといった礼儀に関して多くのことを話しました。そして最後に、日本の慣例をそこなうことなく、ロシア使節の礼儀正しき、品格を求めるという取り決めがなされました。翌朝、華やかな船が遣され、使節は使節団の二人の従者を引き連れて町に向かいしました。町の埠頭に到着すると、使節は豪華なノリモノ[乗物]に乗って街中を運ばれましたが、彼の将校たちは歩いて進みました。使節はダイミオと県知事たちが座っている部屋に入り、事前の取り決めに従って彼は彼らの対面に座りました。使節に対する挨拶の後で、以下のような質問がダイミオよりなされました。彼らの皇帝は決して許可したこともない通商に対して、ロシアの君主が感謝してい

ること、しかも、日本とは誰も決して文通することはならぬとまさにラクスマンに吹き込み、確認したのに、彼らの皇帝がラクスマンに対して慈悲を示されたという理由だけで、畏れ多くもクボウ閣下に書簡を書いてよこして、最も最初の条件を破ってしまったということに驚いている、という内容です。我々の使節の返答については、ダイミオと県知事たちの言葉のみならず、一言一句私の日誌の中に収めてありますので、この短い私の報告の中で描写はしません。これに対する閣下のしかるべき返答の後、高官たちは、彼らの最初の提案に使節が落胆しているのに気づき、本日はこれ以上説明を加えることで話を広げることを望まず、県知事の一人が「使節に日本の座り方は辛そうなので、会談はまた明日ということにしましょう」と述べました。こうして使節は立ち上がると、彼らに別れの挨拶をして退出しました。24日の朝、再び同じ船が遣され、同様の儀式を経て、使節は県知事の屋敷に案内されました。使節が部屋に入るや否や、県知事の第一書記が現われ、ダイミオと県知事の名のもとに彼に挨拶をし、君主の話題が出たとしても、本日はお互いにいかなる社交辞令も必要ないと述べました。これに対し使節は、問題に速やかに取り掛かるにはそのほうが都合が良くないと答え、部屋に入っても取り決めによった挨拶をすることなく自分の席につきました。長く深い沈黙の後、ついに県知事は何かを頼んだところ、役人の1人が大きな巻紙を捧げながら彼のもとに擦り寄りました。県知事は、「まさにこれがイェドからロシア使節への回答である。私がこれを読み上げる」と述べました。彼はその全文を読み上げると、使節のそばに座りこのとき平伏していた通詞主任らに、それを渡しました。彼らは恭しくそれらを読み上げ、使節に対し、これは内容が深く、すぐには訳すことができないと述べました。その間、少し小さな同様の巻紙が別の県知事に渡されると、彼は、「まさにこれが、君主の命令を実現するための使節に対する我々の回答である」、と述べました。この巻紙についても同様の儀式が行われました。通詞主任たちは、皆の前では読めないふりをし別室で内容を述べるからといって、使節に別室に行くよう頼みましたが、実際には、彼らの宮廷のアジア的な傲慢さを助長することだけが重要でした。このような彼らの友好すべてを我慢強く耐えねばなりません。使節が出ると、通詞主任が彼に訳しました。彼らの君主は使節に対して次のように述べるよう命じられました。「第一に、はるか昔、あらゆる民族が日本に入ってきていたし、日本人もまた祖国から自由に出ることが出来た。しかし、この2世紀の間、古くからの友人を除き何者も日本に新たに來ることは許されず、日本人も決して祖国から出ることは許されないという絶対的な規則が守られている。ロシアの君主は贈り物と共に使節を派遣してきたが、日本の法に拠れば、即刻同様に応答することが求められている。日本人は誰も出国することは許されないし、国書も贈り物も受け取らないので、ロシアに使節を送ることはできない。このことに関しては招集された日本帝国の役人すべてが肯定的に定めた。第二に、日本帝国ははるか昔より、朝鮮人、琉球人、中国人及びオランダ人との

み交易し、現在は最後の 2 国とのみ交易しているが、新たな交易の必要はない。第三に、他の民は日本に入国することを禁じられているので、法に則って対処すべきだが、他の民族であったならば船は日本に 6 か月留まることを許されなかったところ、これを容赦して受け入れ、ロシア君主の良き考えに敬意を払い、わが国に来た船を帰還させ、今後二度とロシア人が日本にやって来ないように、帰路のための食料も与える」。

これを聞いた使節は、通商について、ロシアにそれは必要ないと述べました。「ロシア皇帝は、必要な多くのものを得ることができない日本人に自分の慈悲を示したかったのであり、もしこれを拒否するのなら、日本人にとってよりひどくなる。しかし贈り物に関しては、クボウ閣下が、我が君主が返礼の品か使節団を要求していると考えているなら取り越し苦労である。日本は海外へ出ることを誰にも許さず、使節団も送らず、唯一の自分たちの風習を維持しているということは世界中に知れ渡っている。ただ、友好を約束している偉大な君主より送られた贈り物は受け取るべきではないだろうか」。通詞らは言いました。「一方が強く手で引っ張り、他方にそのような力がなく、力の強いほうに引っ張られ、当然のことに結び目ができないような時に、友好の結び目をつくることができるのかどうか、おっしゃってください」。そうこうしていると、高官が彼らを大声で呼び寄せ、ほどなく使節もそこへくるよう頼まれました。ダイミオはまたも文章を読み上げ、通詞主任にそれを渡しました。彼らは再び通訳するため部屋を出るよう使節に頼みました。彼らの皇帝は、我々が出発するように米、塩を下賜されると彼らは宣告しました。使節は、我々は生きていけない、私の皇帝はこれらの高官らに対しても贈り物を下賜され、彼らはそれらを私から受け取ることになるだろう、と述べました。ところが彼らは、「駄目です。彼らは受け取することを禁止されています」と述べました。「それならば、我々の扶養にかかる経費を私が支払い、自分の金で食料を買いたい」。すると彼らは「それらは認められません。貴下は贈り物としてそれ以外のものも受け取らねばなりません」と述べました。この問題については、激しい議論が続き、結局、食料は彼らから贈り物として受け取るという結論に落ち着きました。この日、ダイミオと県知事らは通商について議論し、使節はもちろん興味深い知らせを持って帰宅するものと我々は考えていましたが、しかし、すべての事柄は事前にイエドで決定されているので、このダイミオは、両帝国の通商の利益に関する議題を話し合う全権を持ってこの地にやって来たのではなく、自国の宮廷の政府の命令を使節に宣告するためだけに派遣されたということを知ったとき、恩知らずの日本に対して友好関係を提案しているロシアの君主に対する、日本宮廷のこの無礼な態度と不正によって、我々は言い様のない悲しみを感じました。

他の国であれば容易に達成できるような目的を、努力して勝ち取るために、自分の知性や能力を発揮する手段を持てないので、当地で国務に携わるいかなる大臣も成功を収めることはできな

いでしょう。クボウは自分自身だけに似た、誰にも属さない世界で唯一の君主です。彼は誰かと並び立つことを望まず、何かの義務を負ったり、彼が他の人に対して行った好ましい、或いは好ましくないことが残ったりしないように、他の民族とのあらゆる交わりから逃げており、クボウは慈悲を垂れるのが常であるため、我々を6ヶ月もの間竹垣の中に幽閉して拘束しながら、我々には彼の特別の慈悲に感謝するように命じているのです。

私たち以外の誰かがこのような悲嘆に同情を感じているとは誰も思っていませんでしたが、我々の驚いたことに、初期の衛兵詰所の将校らは使節に自分たちの遺憾の意を表明し、皆は一致して自国政府の不公平さにぶつぶつ文句を言いました。彼らは使節に対して、このことに関して遺憾の意を表しているのは自分たちだけではなく、ナンガサキとイエドからやって来た商人たちもまた私たちと通商することを拒絶したと聞いて、大変落胆しており、すべての町民でさえ不満であると述べました。要するに、不満が全面的に広がっています。民衆は我々に対する拒絶を、オランダ人と自分たちの通詞の陰謀と根回しのせいに帰し、彼らを罵っていました。通詞たちをオランダ人たちの卑劣な奴隷だなどと呼んだのです。彼らが我々に保存食や新鮮な食料品を供給してくれるのかという通詞主任に対する使節の問題については、疑いもなく、皆さんは全部受け取るでしょう、皆さんは友好的な土地にいるのですからと彼らは言っていました。さらに彼らは我々の荷物を再搬入する際には、我々のもとに船と人が助けにくることを約束してくれました。

27日、県知事から派遣された役人たちに、我々が連れてきた日本人を直接引き渡しました。28日、我々の荷を元の船に積み込むために、人夫を乗せた日本の大型船が遣されました。荷と食料の再搬入は4月4日まで続けました。同日、私は上官の許可を得てメガサキの牢獄を出て船に乗り込みました。4月5日、饗応と儀式が催され、閣下は船に案内されました。そして4月6日の朝、順風の中、我々は出航しました。

団長は艦長のクルーゼンテルン氏に対し、帰路には朝鮮海を通るように指示しました。我々はそこを通過して、21日にはサンガル[津軽]海峡に達し、マトマイ島で、マトマイの町の建物を目にしました。我々の針路はマトマイの西岸沿いを通るものでした。我々はこの島を見ながらその北端まで進みました。最後のノンツェブ<sup>のしきつぷ</sup>[野寒布]岬にある入江に4月29日、我々は投錨し2昼夜そこに停泊しました。我々はそこで生活しているクリル人、彼らの暮らし振りその他を目撃しました。5月2日、この入江を離れ、同日ラペルーズ海峡を渡りました。日没の頃、カラフト島またはサハリン島の南岸に接近し、アニワ湾に入りましたが、そこで塩漬けの魚を求めてマトマイからこの地へ往復している2隻の日本の船を目撃しました。4日、錨を上げ、サハリンを眺めながら、パシアンズ patience 湾すなわちテルペニエ terpenie[辛抱]湾を通過して進みました。濃霧と向かい風のため我々はサハリンの海岸から沖に流されました。我々は再びサハリンの海岸に近

づこうとしましたが、北緯 49 度 14 分に位置するバシアンズ岬に到達することは出来ず、我々の目論見を邪魔する手のつけられない流氷に遭遇しました。団長は再びサハリンに接岸することが不可能だとみなし、流氷で徒に時間を浪費せず、必要なことに使おうと、直接カムチャツカに進路を取るように命じました。5 月 16 日、我々は嵐に耐えねばなりませんでした。17 日、夜明けと共に突如としてクリル列島の海岸が目に入りました。20 日、我々は第 5 島と第 6 島の間の海峡を抜け、24 日には無事にカムチャツカのペトロパヴロフスク港に到着しました。我々はこの港で 2 隻の船を目撃しました。1 つは国の輸送船フェオドーシア号で、もう 1 つは会社所有のマリア号でした。マリア号は 1804 年にオホーツクからカディヤクに向かいましたが、ひどい水漏れのためにこれ以上進むことが出来ず、10 月 1 日にこの港に入り越冬せねばなりませんでした。この船の艦長は海軍中尉のマシン氏で、乗客として海軍中尉フヴォストフ、海軍少尉ダヴィドフ、将校位を持つ航海士グリゴリエフが乗っていました。ここには更に会社の別の船コンスタンティン号が越冬していましたが、5 月 15 日にこの港を離れ、毛皮を回収するためアトハと北方の島々に向かいました。

私の上官[レザーノフ]は、まだ日本滞在中から、カムチャツカ到着後はナジェージダ号を離れ、カムチャツカ地方を視察し、サンクトペテルブルグに帰還するという固い決意を抱いていました。彼はナジェージダ号を見るのも嫌になったようで、以前はカディヤクに非常に行ってみたいと希望していたのに、そのことをまったく考えなくなったようでした。彼は不愉快なことを経験してきたので、彼に少しも敬意を抱いていない人々に、これ以上自分自身を委ねようとは思わなかったのです。不幸にも耐え忍んだ精神的苦痛によって健康を損ね、すぐにでも彼はロシアに向かわねばなりませんでしたし、ナンガサキで確立された関係は、少なからず彼が首都に向かう必要性を高めたのですが、マリア号を見るや否や、彼は今までの計画を破棄し、自らの体力の消耗のことも忘れ、マリア号が小型で水漏れすることも恐れず、マリア号に住みつき、燃え盛る熱意をもってカディヤクに向かおうとしています。かくも突然の計画変更には私は驚き、同時に言いようのない悲しみをもたらしました。閣下は私に、私 1 人がナジェージダ号に残り、コンスタンティン号が北方の島々よりこの港に運んでくる積荷と共にカントン[広東]に向かい、そこからペテルブルグに戻るよう指示しました。

私は背筋が凍る思いでした。私の寿命を大幅に縮めたあのおぞましい体験を再びしたくなかったからです。あの時の出来事のほんの一部を思い出ただけで、私の心は激しく動揺しました。私は、恐怖に怯えた私の精神を勇気付けるには弱い、損なわれた自分の肉体的な力に、助けを求める気にもなりませんでした。ナジェージダ号に乗って旅することへの嫌悪感を閣下が抱くようになったのも、私の懸念と同様、まさに同じ理由からではないでしょうか。失望や悲しみは

果たして、公爵、平民と異なれば、人心に程度の異なる影響を与えているのでしょうか、果たして異なる力でこの精神を破滅させているのでしょうか、と私は閣下に申し上げました。私は、「閣下は自尊心と強い意志の盾によって守られておりますが、商人である私は、蔑まれ無防備です。私は会社の利益のために目指す成功に向けて、あらゆる障害に立ち向かおうとするでしょう。広東では外国語の知識が必要でしょうが、私にその知識はありません。我々の艦隊付士官に私への援助を仰ごうにも、クルーゼンシテルンによって派遣される会社のレヴェリ[エストニアのタリンの旧名]の皮革業者ではない私シエメリンを助けることなどないでしょう。この件から生じうるすべての失敗は、私の無能さの証として決算報告の中に書き記されることでしょう。つまりは、かの地で私は無駄で無益な人間となるのです。これに反抗することは、会社に実害を、私には不幸をもたらすだけで、彼らの言い分が私より信用されることになるでしょう。このような損害はやりきれないので、広東での貿易は、この件についての知識について何度も自薦しているクルーゼンシテルン氏一人に委ねるのがより好ましいです」、と述べました。

閣下は私の提案に強く心を動かされましたが、それでも私の意見に賛同されませんでした。広東に行くという義務を放棄すべきでないという彼の信念に対して、私は抗うことが出来ませんでした。彼は自らが祖国と会社に立証しようとしたときと同様の自身の熱意の一例を私に示してくれました。まさに彼は、「くたくたになった私の体を見てもよ、私の子供たちがどれほど大切かわかるか、でも私は毛皮事業のために彼らを置いてきたのだ。私はこの老朽化し水漏れするマリア号で自らの偉業の完遂に急ぎ、恐れずに、あえてアメリカその他への航海に出るつもりだ」と述べたのです。私が再びこの献身的行為にこの身を捧げたということを彼はご存知です。我々の会話は、様々な障害について、自己犠牲的な忍耐力について、そして幸運にもそれらを克服した時に訪れる甘美な満足感についてと多岐にわたり、苦しめないものには栄冠は訪れないという結論に落ち着きました。この言葉と共にニコライ・ペトロヴィチは涙を流しました。私にも同じ心の傷があったので、我々は共に涙し、神の御加護を祈り、予測される我々の偉業への準備を覚悟をもって終えたのでした。

一方で閣下は、クルーゼンシテルン氏に対し海岸線の調査のためにサハリンに向かい、調査後にペトロパヴロフスク港に戻り、そこでオットセイの毛皮を積み込み、私と共に広東に向かうよう命じられました。

我々がまだ昨年、ペトロパヴロフスク港に滞在していた時、艦長のクルーゼンシテルン氏が功績のあった水兵たちに規定分量のウォッカを分配したのですが、誰にどれだけの量が注がれたのかという情報を私は書記のチュガエフから受け取ったので、7月26日に紙に書いて閣下に報告いたしました。ここにその写しを添付いたします。また、日本から帰国した現在、クルーゼンシテ

ルン氏は約 15 ヴェドロの本物のフランス産ウォッカと約 7 ヴェドロのジュニパーベリー[杜松(ねず)の実]ウォッカを水兵たちに分配しました。これに関して書記のチュガエフが私に渡した覚書をここに添付します。水兵らに分け与えられたウォッカは、当地の長官陸軍中将コシエレフ氏の兄弟が買い付け、ここで小売販売しているものです。会社には損失を与える形で、彼はそれを安値で買い付けたのです。コニャックの原酒 gol'nyi kon'iak 一か月分、すなわち 1.8 シトーフ<sup>116</sup>を 3 ピアストルで購入し、1 シトーフを 8 ルーブルで売っています。会社にとって不当な損失であることはあまりに明らかなので、イヴァン・フォードロヴィッチのこのような行為について、本部自らが判断をくだされるでしょう。

クルーゼンシテルン氏は、ニコライ・ペトロヴィチの許可なく当地の警備司令官の職務を勤められている陸軍少尉コルマコフ氏に英国の塩漬け肉の樽を贈りました。

自分の職務と自分の書簡以外にも、サンクトペテルブルグに送られる書簡の清書にも協力しており、私は絶え間なく仕事に追われています。私が日本に行って不在だったために仲買人のヴィホトツォフ氏のところに封をして残していたフランス産ウォッカを、団長に対して計り直すことが出来ず、私の勘定を彼と精算することもできませんでした。アメリカに向かう毛皮事業者 80 人との彼の決済も、ナジェージダ号、マリア号に関する様々な要求、上官 nachal'nik による数多くの命令のため、彼にはそれに取り掛かるための時間もまったくありませんでした。ヴィホトツォフ氏と共に我々の仕事を片付けるための時間を確保すべく、私はナジェージダ号でサハリンに向かいませんでした。ナジェージダ号、マリア号、フェオドーシア号の出航準備はすでに整っています。彼らが港から出航したら、我々は自らの義務を果たし急使便をリレーして本部に報告いたします。ヴィホトツォフ氏の意見によりますと、この至急便は七等文官フォッセ氏の首都到着に先じるほどの速さで、我々の文書を本部に届ける可能性があるとのこと。私はこの機会に、我々の日本への到着、ナンガサキを出発するその日までの滞在を書き記した私の日誌を本部にお送りいたします。我々の日本までの航海とその帰路に記した日誌は、将来の急使便でお送りするつもりですが、今は清書をする時間がありませんでした。

我々がペトロバヴロフスク港に到着した 1805 年 5 月 24 日に、幸運にも本部より 2 つの指令を受け取りました。1804 年 4 月 11 日付の指令第 320 号と 1804 年 5 月 19 日付の指令第 429 号です。これらの指令の中で私に命じられたことを遂行する所存ですが、今のところこれらに応える時間がまったくありません。

私が広東で通商の仕事を行う際にいかに行動すべきか、艦長についてはナジェージダ号に閣下

---

<sup>116</sup> 【編訳者補注：原文では「2 チャルカナしの 2 シトーフ」と表現されている。1 チャルカは 10 分の 1 シトーフにあたり 0.123 リットル、1 シトーフは、10 分の 1 ヴェドロにあたり、1.23 リットルの分量】

がおられないので、どの程度まで私が権力を持たねばならないかについて、私に特別の指示を出して下さるようニコライ・ペトロヴィチに要請しました。対策を講じ、専横から身を守ることを要請したのです。彼はこう言いました。「私の指令など決して実行されないのに、私に何を書くことがあるでしょうか」「貴方は既に通達を得ており、それを指針とすることが出来るでしょう。しかし私はアメリカの入植者だし、君のことは神に委ねたので、これ以上何にも介入したくないのだ」。私は彼から、彼がアメリカに永遠に住みつき、二度とサンクトペテルブルグには戻らないうつもりはないという恐ろしい計画を耳にしたのでした。彼がこうする理由について、彼は自分は落胆しており、これ以上何も聞かないで欲しいと私に頼んだだけで、私には他に何も説明してくれませんでした。私は彼の目から滂沱として流れる涙だけの目撃者でした。彼の口からは、母親、子供たち、そして彼が親しくする人の名が出てきました。彼の同情と涙なくして、彼を見ることはできませんでしたし、彼の心がどれほど苦しんだのかを目の当たりにしました。私が彼から聞いたこと見たことを記録するように彼は命じましたが、私もこのことについてあえて黙っておくつもりはありませんでした。

このように決心して、彼はできるだけ早くカムチャツカを離れようと急ぎました。6月13日、マリア号はこの港より曳航され、6時に私の上官を船に案内いたしました。彼は私及び彼を見送る敬意を抱いていた人々にたくさんのキスをしました。ここで彼は陽気に振舞っていましたが、彼の額には明らかに悲しみが見て取れました。「さようなら@彼は何度もそう繰り返していましたが、すでに彼と別れスループ船にいた時、心臓がびっくりするようなこの言葉のこだまを我々は聞いたのでした。14日夜半、マリア号は順風の中、港を出て朝5時には見えなくなっていました。

クルーゼンシテルン氏はすでに6月6日に上官から指令を受け取り、都合のいい風が吹いていたにもかかわらず、出航せず、ナジェージダ号は停泊していました。ニコライ・ペトロヴィチはそれを待つことが出来ませんでした。マリア号はナジェージダ号のそばを通りすぎましたが、ナジェージダ号からは海軍中尉ゴロヴァチョフ以外誰一人として、自分たちの上官と別れの挨拶をすべくやってきて、最後の敬意を払おうとするものはいませんでした。もう一人ロンベルク氏もいましたが、彼は別れの挨拶のためではなく、ただマリア号に火薬の樽を届けただけでした。

この機会に私は2通の一覧表を添付いたします。1つめの文書Aは、1804年7月15日から我々が日本からペトロパヴロフスク港に到着した1805年5月28日までに船の乗組員のためにどれだけの食料品その他を消費したのかに関するものであり、もう1つの文書Bというものは、1803年7月7日のクロンシュタット停泊地を出てから、1804年7月15日のカムチャツカ到着までについてのものです。更に1804年7月16日及び26日付の上官宛の私の報告書からの写し、12等

級航海士カーメニシチコフ氏による報告書の写しも添付いたします。会社手代フョードル・シエメリンより。

(6) РГИА, ф. 15, оп. 1, д. 2, л. 155-161.

(渡邊聞・寺山恭輔 訳)

Архивные документы по истории японско-российских отношений  
(1795 – 1805)

Составители: В. С. Познанский<sup>117</sup>, М. П. Малышева<sup>118</sup>, А. А. Кириченко<sup>119</sup>.

2

*Мнение иркутских купцов о снаряжении судна для отправки потерпевших в 1795 г.  
кораблекрушение 15-ти японцев на их родину и о торговле с Японией*

[Конец 1796 г.]

Соответствуя Его Превосходительства Господина генерал-майора правителя Иркутского наместничества и разных орденов кавалера Лариона Тимофеевича пре[д]писанию, присланному к степенному г-ну градскому голове орденом, повелевающим ему к единомысленному положению, здешнее гражданство и гостей, по торговле здесь обретающихся, согласить ради общей пользы во исполнение Высочайшей Ея Императорского Величества воли, объявленной от Его Высокопревосходительства господина генерал-порутчика правящего должность Иркутского и Колыванского генерал-губернатора и разных орденов кавалера Ивана Осиповича [Селифонтова], Его Превосходительству о возвращении из Охотска пятнадцати человек японцев, найденных на одном из Алеутских островов, в их отечество на казенном или купеческом судне, на котором сами хозяева и другие купцы могут отправить свои товары для промены в Японии, Его Превосходительство при том ордере соизволил приложить копию с поданного от купца Киселева опыта ради подтверждения предполагаемым оным заведением до торгу в Японии компаниею относящихся.

А как мы, нижеподписавшиеся, в Охотске готовых не только к сей коммуникации способных, но и никаких судов не имеем, а потому взятца за отвоз японцев в их отечество не можем. Но единственно во изъявление верноподданнической нашей ко исполнению Высочайшей Ея Императорского Величества воли готовности полагаем со своей стороны

---

<sup>117</sup> Институт истории СО РАН.

<sup>118</sup> Институт истории СО РАН.

<sup>119</sup> Институт востоковедения РАН.

*Редакторы считают своим долгом поблагодарить С.А. Папкова (Институт истории СО РАН), помогавшего нам в подготовке сборника.*

приступить к посылке ради первоначального опыту в Японию товаров, предполагая основанием, ежели с казенной стороны отправлено будет для отвозу японцов казенное с принадлежащим укомплектованием и под управлением отправленного начальника судно и все судна отправление и люди содержатца будут казенным коштом. Тогда для опыта торговли с японцами имеем отправить, сколько найтти здесь можно будет способных для того, товаров с особым от нас посланным прикащиком и при нем служителями. И как доставка в Охотск товаров в разсуждении провозов становитца весьма дорого, да и сопряжена с разными затруднениями и случающимися нередко товарам повреждениями, в разсуждении на сие таковых издержек, ежели сколько послано будет в Японию товаров за провоз их на судне ни с людей при оных будущих вперед и обратно, нисколько от нас не требовать. Касательно же до опыта здешним купцом Стефаном Киселевым о упоминаемой с японцами торговле Его Превосходительству со включением обширных заведении поданного, которой и не оставили бы без особливаго внимания, есть ли торговля с японцами была уже прежде сего испытана, и существенно бы дойдено, на каких положениях долженствовал производитца с ними торг, и какия имянно им потребны российского произведения товары, и можно ли оныя находить здесь или же отколь доставать. Да и какия с японской стороны на обмен и нам будут даватца вещи и до какой важной суммы можно иметь там торг. Тогда по уважению выгод могли бы далее войти в рассмотрение того опыта, но как по неопытности все то есть неизвестно, и потому до настоящего практического опыта следовать по опыту купца Киселева признается, не знаяши качества потребных туда вещей и неимевши сведения о оборотах, ни правил о производившемся тамо торгу, потому плану в обширное заведение входить невозможно. А когда первоначальной оборот окажет обстоятельства, до тамошней торговли касающиеся, и усмотрены будут способы доставлять могущие пользу, тогда, а не прежде, без особенного расположения утвердить могущаго основание, не оставлено быть имеет для сегоже первобытного опыта с Япониею торговли сумму мы всяк, по состоянию своему, по воспоследовать имеющему от Его Превосходительства на сие позволение на покупку приличных в тамошней край товаров по общему всех нижеподписавшихся назначению, кому предпоручено будет внести без промедления денгами или способными товарами, имеем и обо всем нужном тогда до сего распоряжения одолжимся между собой сделать особое положение декабря 8-го ч[исла] 1796-го года. — На подлинном подписали:

Иркутские именитый гражданин Михайло Сибиряков, купцы: 1-й гильдии Николай Мыльников, 2-й гильдии Дмитрий Сизых, Петр Салдатов, Иван Дудоровской, Алексей Месников, Семен Старцов, Иван Мичурин, Алексей Сизых, Ефим Сухих, Иван Лычагов, Михайло Запихин, Андрей Литвинцев, Алексей Останин, Михайло Саватеев, Степан Дудоровской, Петр Трапезников, Александр Апрелков, Михайло Резанцев, Яков Протасов, Илья Сизых, Иван Зайцов, Яков Попов, Гаврило Березин, Андрей Саватеев, Прокопей Давыдов, Федор Дудоровской, Иван Сизых, Василий Медведников, Иван Шестунов, 2-й гильдии Степан Киселев, Иван Киселев, Иван же Киселев, мещанин Увар Сизых.

Засвидетельствовал Коллежской Секретарь Иван Корюков

*РГИА, ф. 1374, оп. 1, д. 236, л. 9–10; 87–88 об.*

( " . Малышева : ! . Познанский )

3

*Донесения вдовствующей Рылъскаго имянитаго гражданина и Американских компаний  
компаниона Шелехова жены Натальи Алексеевой*

5 ноября 1796 г.

Исполняя повеление Вашего Превосходительства от 16 октября под № 1701-м, данное здешнему г-ну городничему и приглашающее как иногородное, так и здешнее купечество, имеющее собственныя свои в Охотске суда, не расположатца ли кто принять на себя обязанность доставить японцов в их отечество и произвести опыт торговли с тем государством, имею честь Вашему Превосходительству донести: что я с детьми моими, имев известное вам участие в Американских компаниях – общих с товарищем моим Голиковым и особенно на Алеутских островах кампанейское судно, и следовательно небезважную коммерцию на Тихом море, охотно бы принялась за немедленное приуготовление к отправлению и в Японию для предполагаемых предметов судна, ежели б не теперешней раз имела оное в Охотске. Вашему Превосходительству известно, что находящийся в Охотске прибывший летом 1795-го года фрегат «Феникс», неотменно

должен быть возвращен в Америку с подкреплениями для заводимаго тамо хлебопашества и извещения начальствующаго тамошнею духовною миссиею Архимандрита о Высочайшей Ея Императорскаго Величества воле, посвящающей его во Епископа всей той стране; новое же начать строить время теперь не позволяет, а потому, согласно с ревностию моею ко благу общему и монаршей воле, не нахожу инаго средства, как просить Ваше Превосходительство вашего начальничьяго пособия, покровительства и в случая надобности ходатайства о следующем: во-первых, дабы для посылки в Нангазах дано было мне одно из Охотских казенных транспортных судов лучшее и годное к таковому путешествию со всем такелажем и прочими нужными припасами по примеру прошедшей в Японию отправляемой экспедиции, что по требованию моему нужным токмо окажется, с оценкою как всего того, так и самого судна и со взятъем ради вернаго возвращения обратно в казну в таком же состоянии, в каком получено будет в залог такого количества паев промысла в Американской компании, какое полагая каждой пай в две тысячи рублей, оценочную судна сумму может выполнить. Во-вторых, дабы дано было хотя бы до десяти человек казенных морских корабельных служителей, могущих управлять судном на двойную противу казенных порцию, поелику одним работным, каковыя для компании нанимаются из разнаго звания, и наиболее неопытных на море, судна вверить не только опасно, но и противно пользам толь немаловажнаго предприятия. Что же принадлежит до морехода, руководству коего должно вверить судно, то онаго употребляю я из пожалованных в Американскую компанию по Высочайшей Ея Императорскаго Величества воле четырех навигаторов, но разве в помощь его и на всякой нечаянной случай, не угодно ли будет дать из Охотских подштурманов, или штурманских учеников одного. Ежели угодно будет Вашему Превосходительству сию мою прозбу уважить и к содействию предполагаемаго дать вашу начальничью апробацию, то я решусь и достальное выполнить, а именно: отправлю на том судне всяких известных мне для японцов надобных товаров на такую сумму, на какую покойной муж мой с прошедшею экспедициею обще с купцом Рохлецовым посылал, приведа как сумму сих для опыту послатся должных товаров, так самое судно с такелажем, содержание людей и все прочее приготовление в известное, само по себе открытся должное предварительное исчисление, разделю весь сей капитал на акции, и сочиня в канторе моей акт, приглашу соединится со мною в сем предприятии желающих учавствовать в акциях из

купечествующих как здешних, так и иногородных. Затем, что принадлежит до особы, которой весь тот капитал и опыт торговли в Японии в день быть должен, то оную постараюсь я избрать со всеми способностями.

А как ко всему сему предприятию потребно время, то ежели благоугодно будет Вашему Превосходительству сей мой план милостиво апробовать, осчастливить меня извещением, дабы я благовременно могла себя приуготовить к выписке из Москвы нужных для Японии товаров и другия нужныя по дальности от Охотска распоряжения сделать и быть в состоянии непременно в марте и апреле месяцах учинить отправление транспортов товарам и прочим тягостям и жизненным припасам. Что же принадлежит до дачи казеннаго судна, то об оном повелением вашим снабдить кого следует и ранше, дабы судя по оному, могла я безошибочно также себя приуготовить наемом людей в добавок к казенным и сделать прочия распоряжения, могущия не в остановку, но в благовременную поспешность привести отправление всей сей преднамереваемой экспедиции, почему и ожидать имею благосклонной от Вашего Превосходительства резолюции.

Подлинное подписал приказанием вдовы Шелеховой поверенной ее коллежский секретарь Иван Зеленский.

*РГИА, ф. 1374, оп. 1, д. 236, л. 91–92 об. Копия.*

( " . Малышева : ! . Познанский )

4

*Мнение иногородних купцов, торгующих в Иркутске об организации экспедиции  
в Японию для установления торговых связей и отвозе японцев в их отечество*

[Декабрь 1796 г.]

В Иркутском губернском городе 1796 года декабря дня, мы, нижеподписавшиеся, Российския разных городов купечество, ревнуя премудрым Ея Императорскаго Величества попечениям в открытии новаго опыта торговли с Японским государством, охотно и всеусердно желаем быть в том участниками, что подписанием своим и

утверждаем. Предмет же нашего соглашения состоит в следующем: Первое, известно, что благорасположением к общей пользе и попечительностью Правителя здешнего наместничества господина генерал-майора и разных орденов кавалера, Иркутское общество согласилось составить к сему случаю опыт торговли компаниею, к которому и мы изъявляем желание соединиться посильною складкою акциев или частей на основании поданного от Иркутска купца Степана Киселева опыта, считая каждую акцию по двести рублей, а кто сколько из нас пожелает иметь в том участия, подпишет при сочинении акта или товарищеского условия сам или в том кого уполномочит. Второе, каковы причины в составлении сего опыта Компанией по отдаленности тамошнего края и неизвестности какими товарами будет торговать, к тому ж и сколько нужно при начале прочное основание соединенным не токмо капиталом, но и мыслями, оное в кратких словах за нужное почитаем для самих себя изъяснить, сколько ни благоприятны таковыя обстоятельства для Российскаго купечества и сколь ни великую подают они надежду к продолжению выгодной сей для России торговли, однако ж надобно признаться, что нижеследующия причины понуждают не без основания иногда опасаться неблагоприятныя для участвующих в оной последствии: 1-я, что Восточный Океан весьма отдален и потому мало сыскивается охотников к заведению судов: 2-я, что заведение оных соединено с великими трудностями и издержками, поелику кроме лесу всякия к мореходному делу потребности, как то: нужныя орудия, железа, якорей разных, снасти и прочия материалы и припасы, да и самыя к содержанию жизни человеческой необходимости, должно привозить в Охотск из Иркутска с великим затруднением, медленностию и дорогою за провоз платою, а особливо от Якутска на верховых лошадях с немалым затруднением: 3-я, что частыя опасности, коим суда от великих туманов и жестоких продолжительных бурь на море сем бывающих, иногда подвергаются, и медлительной оных оборот приводит нередко в безкорыстность: 4-я, что естли разныя Компании, торгую одинакими товарами, делают одна другой подрыв наперерыв один пред другим, причинять могут друг другу препятствия в возвышении цен и желая как возможно споря пред другими успеть довольным количеством, разменявшись, и возвратится в Охотск, от чего торговля в той стране пресечется совсем. 5-я, по причине смерти хозяина, торгующаго особо, придет в упадок от нетвердаго в производстве торговли распоряжения.

К подлинному условию записал в участники оной компании Верхнеудинского второй гильдии купца Александра Данилова Шевелева, по уведомительному на сие письму Иркутской купец Степан Киселев. На подлинном подписали: Калужской купец Осип Портнов, Якутской мещанин Данила Шапошников.

*РГИА, ф. 1374, оп. 1, д. 236, л. 89–90. Копия.*

(*" . Малышева : ! . Познанский*)

5

*Обращение бывшего Иркутского и Колыванского наместника, сенатора  
И.О. Селифонтова к генерал-прокурору А.Б. Куракину с просьбой о ходатайстве перед  
императором Павлом I о выделении средств на организацию экспедиции в Японию*

52

9 февраля 1797 г.

Сиятельнейший князь! Милостивый Государь!

Блаженныя и вечно достойныя памяти Государыня Императрица Екатерина Алексеевна данным мне в 28 день июля минувшаго 1796 года Высочайшим Указом повелеть изволила: вывезенных в Охотск пятнадцать человек японцов, найденных по разбитии судна их на одном из Алеутских островов, доставить в их отечество, дабы пользуясь сим случаем, можно приобрести обстоятельнейшее о Японии сведение и способствовать распространению в том крае Российской торговли, и чтоб по приезде моем в Иркутск учинить надлежащее распоряжение о возвращении помянутых японцов в отечество их на казенном или же на купеческом судне, как удобнее и выгоднее случится, дозволя на том самом судне отправиться и нескольким из купцов с подарками по тому точно примеру, как подобное отправление зделано было в Японию по Указу от 13 сентября 1791 года, данному предместнику моему господину генерал-порутчику и кавалеру Пилю, на основании коего и потребное число денег как на содержание японцов, так и на прочие по сей Экспедиции расходы заимствовать из доходов Иркутской губернии, с доставлением предварительно о всех таковых издержках надлежащаго исчисления к предместнику Вашего Сиятельства Графу Александру Николаевичу Самойлову, а об

исполнении сего и об успехе доносить Ея Императорскому Величеству.

Ко исполнению такового Высочайшаго повеления должен я был приступить по приезде моем в Иркутск. Но как, по Высочайшему повелению, приказано было мне быть при слушании дел в Правительствующем Сенате, касающихся о разстройстве и упущениях, выпедших по Иркутской казенной палате, которыя и остановили меня в Санкт Петербурге на долгое время, то, не упуская времени, писал я Иркутскому губернатору, г-ну генерал-майору и кавалеру Нагелю доставить мне сведение: 1-е, в какой годности состоят оставшияся судна от последней секретной морской экспедиции, имянуемые «Слава России» и «Черный Орел» и может ли которое либо из них быть удобно к отправлению в Японию. 2-е, какой они препорции и сколько каждое поднимает грузу. 3-е, имеющияся на них такелажи также годными ко употреблению и могут ли прослужить во весь предполагаемой вояж. 4-е, не имеется ли в Охотске из транспортных казенных судов годнаго к такому отправлению судна. 5-е, ежели ж, паче чаяния, ни на оставшияся от вышеозначенной экспедиции, ни на транспортныя суда нельзя положить надежды, чтобы которое из них могло быть способно ко отправлению, то не примет ли кто на себя из тамошних морских промышленников, так как они имеют свои морския суда, доставить японцов в отечество их на собственном своем судне, на котором могут сами того судна хозяева и другия купцы отправить свои товары для промену в Японию. И 6-е, буде бы и на сие никто не согласился, в таком уже случае нужно будет ко отправлению японцов построить новое судно, то где удобнее для онаго заготовить потребной лес.

На оное предписание помянутой Иркутской губернатор Нагель от 12 ноября минувшаго года донес мне, что из числа оставшихся от морской секретной экспедиции судов: первое «Слава России» состоит в гавани С[вяты]х апостол[ов] Петра и Павла и не прежде может приведено быть к Охотским берегам, как в будущее 1798 года лето: хотя сие судно и удобно ко отправлению в Японию, но требует большого груза и для управления разных морских служителей до шестидесяти человек: на оснаску онаго настоящего такелажу, канатов и в запас потребно до 1300-х пуд и часть оных заблаговременно должна быть отправлена в помянутую гавань, ибо в Охотске сих припасов недостаточно. Следовательно, сопряжено с излишними казенными издержками, и что оное при подобном же в 1792 году японцов отправлении в их отечество признано для тех же причин неудобным. 2-е судно «Черный Орел» не больше грузу может поднять

до 1700 пуд, но в разсуждении остроты по мелким местам между островом, где менее 10-ти футов воды, проходить не может. Почему и ко отправлению в неизвестныя места, кажется, быть неспособно. Транспортных судов хотя считается при Охотском порте пять, но из них 1-е брегантин, именуемое «С[вятыя] Екатерины, бывшее в 1792 и 1793 годах в Японии, отправлено прошедшаго лета в город Нижнекамчатск и до августа будущаго 1797 года в Охотск возвратится не может. Впрочем, судно сие хорошей конструкции и надежное, грузу поднять может до 5600 пуд. 2-е – бот, именуемой «С[вятаго] Алексея, Человека Божия», меньшее и ветхое. 3-е – брегантина, именуемая «Обновление храма России», по ветхости к отправлению в дальней вояж безнадёжно. 4-е – брегантин, именуемый «Святых Константина и Елены», 5-е – галиот «С[вяты]я Надежды». Оба порядочной конструкции и грузу поднять могут: первое до 5800, второе до 5500 пуд, хотя могут по нужде употреблены быть к сему отправлению, но потребно положить весь новый такелаж и двойной комплект новых же парусов. Так же и оныя суда в корпусах должно поправить. Что же принадлежит до постройки новаго судна, то нельзя так же надеяться, чтоб в Охотске был готовый лес, а выплавить на месте и построить судно не прежде успеть можно, как в июне месяце 1798 года. А в прочих местах, где бы, кроме Охотска, можно было построить судно, находящейся в Иркутске флота г-н капитан бригадирскаго ранга Фомин не мог доставить сведения, в разсуждении, что он далее Утскаго укрепления и по близости лежащей реки Алдамы нигде не был. О морских же промышленниках, которыя бы взялись отвести японцов в их отечество на своем судне, и о тех, кто бы согласился отправить товары свои для промену в Японии, по взятии от них сведения обнадежил ко мне доставить.

Вслед за сим оной же господин губернатор Нагель, по собрании как от Иркутскаго, так и от находящагося там иногороднаго купечества сведений, доносит, на каком положении каждой из них желает приступить ко отправлению в Японию судна, товаров и заведения с японцами торговли. Я, не распространяя оных, здесь представляю у сего во орегенале доставленные ко мне г-на губернатора Нагеля с поданных от каждого ко отправлению в Японию судна и на заведение коммерческой с японцами связи прожектов копии: под литерами А. – Иркутскаго второй гильдии купца Киселева. Б. – Иркутских купцов. В. – Иногороднаго купечества, находящагося в Иркутске. Г. – Вдовы Шелиховой, из коих Ваше Сиятельство прозорливо усмотреть изволите, что представленные от них прожекты

о заведении коммерции в Японии содержат в себе разнообразныя положения, и что никто из них не соглашается на собственном своем судне возвратить японцов в их отечество. Почему и надобно уже снарядить одно казенное судно из имеющихся в Охотском порте, и как ни одно из них в толь дальнее отправление без поправки обойтись не может, то на исправление онаго, всего такелажу и парусов должно употребить из казны деньги, о количестве коих, по содержанию Высочайшаго повеления, должен бы я, по приезде в Иркутск, зделав исчисление, представить Вашему Сиятельству. Равно и о потребном числе морских служителей с их начальником, так же и спросить от начальства для отправления в Японию такого начальника, который бы мог на твердой ноге войти с японцами в переговоры и условие о торговле; и чтоб знал состояние тамошняго края и имел бы довольное как о внутренней Российской, так и иностранной торговле познание. Но благоугодно ли будет Его Императорскому Величеству повелеть помянутых японцов возвратить в их отечество на казенном судне с издержанием из казны потребных на оное денег? Не изволите изпросить на сие Высочайшаго Его Величества подтверждения, удостоить на сие Вашим меня уведомлением.

Имею честь быть с истинным высокопочитанием и совершенною преданностию

Милостивый Государь,

Вашего Сиятельства покорнейший слуга

Иван Селифонтов

*РГИА, ф. 1374, оп. 1, д. 236, л. 1—4 об.; 79—82 об. На полях л. 1 запись: «Сделать выписку для доклада Его Величеству».*

( " . Малышева : ! . Познанский )

6—1

*Донесение правителя Иркутской губернии генерал майора Л.Т. Нагеля*

*Иркутскому генерал-губернатору И.О. Селифонову*

4 марта 1797 г.

Иркутск

Рапорт

Указом правительствующий Сенат от 6-го сентября прошлаго 1795-го года вследствие

имянного Ея Императорского Величества блаженные и вечной славы достойныя памяти Государыни Императрицы Екатерины Алексеевны Вторыя указа, данного господину действительному тайному советнику и разных орденов кавалеру графу Александр Николаевичу, изволил меня уведомить, что бывшим в 1792-м и 1793-м в японской экспедиции разным чинам и служителям Ея Императорское Величество определить изволила следующие награждения: бывшему начальником порутчику Адаму Лаксману чин коллежского асессора с жалованием по 450-ти рублей на год, до определения к месту тому сообразному и с выдачею ему неполученного жалованья, издержанных на чрезвычайныя расходы денег, тако ж за отданное им для казеннаго употребления сорочинское пшено и сабли, данные ему от японскаго владетеля, всего 7038 рублей и 6 1/2 копеек; штурмана прапорщичья ранга Василья Ловцова отставить от службы с чином порутчичьим и с получаемым им жалованьем выдав ему неполученное за время экспедиции жалованье 1066 рублей и 66 1/2 копеек; геодезии сержанту Егору Туголукову по знанию им японскаго языка чин коллежскаго переводчика с жалованьем по тому чину по штатам назначенным; геодезии сержанту Ивану Трапезникову чин прапорщичей с помещением его уездным землемером на одну из вакансий в Иркутской губернии; штурману Василью Олесову чин прапорщичей с жалованьем по оному; сержанту Василью Коху чин прапорщичей. Ботсманмата Тихона Сапожникова и квартирмейстера Семена Кошелева по болезням их отставить с повышением и с пенсиею получаемым ими ныне жалованьем; великоустюжскому купцу Власу Бабикову дать золотую медаль для ношения на шее красной с черными полосами ленте; надворному советнику Кирилу Лаксману три тысячи рублей единовременно. Сверх того оставленным при Иркутском народном училище двум японцам для обучения их языка со дня определения их производить жалованье противу других учителей, а семинаристам, выбранным для изучения онаго, назначить пристойное на пропитание содержание. Во исполнение сего правительствующаго Сената повеления от Иркутскаго губернскаго правления и что относилось ко мне, надлежащее исполнение учинено, но как предместник вашего высокопревосходительства представляя о сей экспедиции Ея Императорскому Величеству между прочим изъясняя о вывезенной тем Лаксманом из Японии пшене, коей принято в Охотске под казенной присмотр в 99-ти кулях по весу в каждом ис кулей по 4 пуда по 25-ти фунтов, а во всех 457 пуд 35 фунтов. О имеющихся

там же в хранении разных товарах, кои вожены были в Японию на подарки, о оставшейся от той экспедиции в хранении Иркутской казенной палаты сумме 6078-ти рублей 83 1/2 копейки, о вырученных в Охотске из продажи съятных припасов, оставшихся от той же экспедиции деньгах, куда все сие обратить будет указано. О астрономических инструментах и вещах, чтоб оставить их там впредь для могущих встретиться надобностей, испрашивал на все сие высочайшаго соизволения, но не видев я из помянутого указа правительствующаго Сената разрешения, принужден был от 14-го ноября 1795-го года относится к его сиятельству господину действительному тайному советнику и разных орденов кавалеру графу Александр Николаевичу с испрашиванием от него предписания как поступить с теми вещами и пшеною следует, которая (кроме пшены) ежели бы назначились в продажу, конечно, проданы быть могут в Охотске с казенною выгодною. Пшеница же привозимая купечеством в Охотск, хотя и продается дватцать рублей пуд, но расходуется небольшими частями, следовательно, ежели и вывезенную из Японии обратить от казны на продажу, едва ли может разойтись скоро. В разсуждении большей препорции, а от долговременнаго лежания по сырому и неспособному климату подвергнуться может повреждению, о чем уже охотской комендант пример майор Князь Мышецкой входил ко мне с представлением, изъясняя, что то пшено приходит в негодность не только в разсуждении тамошняго приморскаго воздуха, но по причине хранящагося в тех же провиантских магазинах (где и пшеница) провианта порозших негодных сум, от коих гнилость вредит сказанное пшено, да сверх того мыши растаскивают и ядят. Просил моего предписания, куда тое пшено употреблять или продать вольножелающим людям. Также и о хранящихся в Охотском областном казначействе оставшихся от той же экспедиции подарочных вещах: сукне стамеде, веиверете и сафьянах. Куда также оныя употребить, дабы от долговременнаго лежания не могло попортиться и цену свою в доброту потерять, просил разрешения. Я, не видев на вышесказанныя отношения никакой резолюции, а ожидая незамедлительнаго сюда вашего высокопревосходительства прибытия, за нужное почел учинить от себя охотскому коменданту подтверждения, чтоб до воспоследования повеления иметь все то в неперменном сбережении, ибо хозяйственное наблюдение, особливо пшены, не допустить до того, чтоб могла приттись в негодность, но ежели бы к ныне наступающей весне не получил он разрешения, рекомендовал самому ему осмотреть, в каком состоянии

находится, и ежели в котором куле заметит влажность – просушивать. Но как и сии предосторожности в тамошнем месте не могут долго доставлять всему тому желаемого сбережения, в таком случае долгом себе поставляю представить о сем в рассмотрение вашего высокопревосходительства, а о подарочных вещах прилагаю у сего ведомость.

Генерал-майор Людвиг Нагель

### ВЕДОМОСТЬ

поступившим для хранения в Охотское областное казначейство разным подарочным товарам и вещам оставшим за расходом и бывшим в японской экспедиции

Число вещей	
20-ар[шин] 14 вер[шков] 30 ар[шин] 2 72 ар[шин] 5 6 3 3 39 ар[шин]	Сукна зеленого  Сукна синяго Штуки Стамету зеленого в них одна темно-зеленого почетая Мерою 33 1/2 аршина, Вейверету синяго, Сафьянов, алых голубых желтых зеленых камлоту алаго,

Коллежской секретарь Иван Кртуков

*Архив СПбИИ РАН, ф. 36, оп. 1, д. 609, л. 32–35. Подлинник.*

(*" . Малышева /! . Познанский*)

*Его прев-ву Нагелю*

29 апреля 1797 г.

Иркутск

Милостивый государь мой, Людвиг Тимофеевич!

По представлению Вашего Превосходительства от 4-го марта имею я счастье всеподданейше докладывать Его Императорскому Величеству и получить высочайшее повеление отнестись к вам, дабы японское шпено роздано было состоящим в губернии вам порученной войскам взамен крупы: равно сукна и стамеды, есть ли оне не выше амуничных, то обратить на войсках, а в противном случае сукна с кожей, как и прочие вещи по временам при удобном случае и по частям пересланы быть должны ко мне.

Исполняя сим таковую высокомонаршую волю, пребываю впрочем с истинным и неподдельным почтением

Вашего превосходительства

государя моего

покорною слугою

[Иркутский генерал-губернатор

Иван Селифонтов]

*Архив СПбИИ РАН, ф. 36, оп. 1, д. 609, л. 36. Подлинник.*

( " . Малышева / ! . Познанский)

*Докладная записка генерал-прокурора князя А.Б. Куракина Павлу I на отношение  
тайного советника И.О. Селифонтова*

20 марта 1797 г.

О японской торговле

Бывший в должности Иркутского и Колыванского генерал-губернатора, что ныне сенатор тайный советник Селифонтов при отношении своем, в коем прописывая повеление покойной Государыни Императрицы в 28-й день июля 1796-го года последовавшее, вывезенных в Охотск пятнадцать японцов, спасенных по разбитии судна

на одном из Алеутских островов, доставить их в отечество и случай сей обратить как на обстоятельнейшее узвание Японии, так и на возстановление и утверждение могущей быть выгодною с сим народом торговли, употребля к тому или казенное судно из числа в Петропавловском порте находящихся и бывших в подобном вояже в 1791-м году, или согласить купечество свезть их на судне оному принадлежащем и предложить им отправить туда на первый раз сколько-нибудь товаров, препроводить ко мне при сем проекты тамошними гражданами по зделанном им предложению поданные на отправление товаров в Японию и составление коммерческого общества, в коих главнейшее требование пособий от короны состоит в том, дабы судно было казенное, снабженное знающим мореходную науку начальником, и десятью человеками матрозов. Прочее же все они берут на свое попечение, ибо в противном случае не могут они согласится предать себя и имущество толь не известному и опасному пути, заключая отношение свое тем, что находящееся в Петропавловском порте судно, имянуемое «Надежда», одно из лучших и удобнейших к сему отправлению, требует некоторых поправок и снабдения двойным такелажем и парусами, на что нужно будет немаловажная сумма. Но сколько оной, по случаю скорого отзыва его к настоящей должности, исполнения он зделать не успел.

Я, всеподданейше донеся о сем Вашему Императорскому Величеству, испрашиваю Высочайшаго повеления.

*РГИА, ф. 1374, оп. 1, д. 236, л. 93–93 об. Копия.*

( " . Малышева : ! . Познанский )

10

*Отношение Иркутского губернатора А.И. Толстого генерал-прокурору князю П.В. Лопухину об отправлении живущих в Иркутске японцев в их отечество*

18 января 1799 г.

Иркутск

Ваше Высокопревосходительство Милоствый Государь Петр Васильевич!

Из поступивших ко мне от господина генерала от инфантерии и кавалера фон

Трейдена дел, вошло ко мне производство, о вывезенных в прошлом 1795-м году в Охотск с Алеутских островов на судне покойного Рыльского имянитого гражданина Шелихова 15-ти человеках, из коих один, будучи в Якутске в ноябре месяце 796-го года умер, о которых имелись отношения от бывшего здесь губернатора Нагеля, к покойной государыне императрице от 24-го числа октября того ж 795-го и от 16-го марта 1796 году, и в тоже время к бывшему господину генерал-прокурору графу Самойлову и его светлости князю Александру Андреевичу Бесборотку с испрашиванием надлежащего об них разрешения.

И как на содержание их никакой суммы в ассигнации не было, то по высылке их сюда помянутой господин губернатор Нагель решился содержать их яко иностранных людей из суммы, ассигнуемой в распоряжение ево на пограничные расходы по делам с китайцами некоторой, и ныне все те японцы 14-ть человек довольствуются. По сим отношениям определенной тогда в должность генерала губернатора Иркутского, господин генерал-лейтенант (что ныне тайный советник сенатор) и кавалер Селифонтов тому же господину Иркутскому губернатору Нагелю объявил иманной Высочайший Указ, в 28 день июля 1796 году ему данной, о возвращении тех японцев в их отечество на казенном или купеческом судне, к исполнению коего требовал сведения как о казенных судах, состоящих при Охотском порте, так и о отобрании желанья от морских компаньонов, не примет ли кто на себя доставить тех японцев в отечество их на собственном своем судне, на котором могут хозяева и другия купцы отправить свои товары для промену в Японии.

Господин губернатор, собрав подлежащая о сем сведения и взяв от купечества отзыв, что согласны они принять на себя доставить тех японцев в их отечество, но с тем, чтоб дать им казенное судно, хотя доставил в том же 796-м году к помянутому господину генерал-лейтенанту Селифонтову с подробными по сему случаю объяснениями, однако U на сие никакого разрешения не последовало. А между тем государственная Коммерц-коллегия, как заключать должно по вошедшим к ней о тех японцах перепискам, в сообщении от 14 сентября 1797-го году от того же губернатора между прочим требовать изволила, «что при предположении отправить в Японию японцев некоторые из иркутского купечества намеревались учинить складку суммы для опыту торговли с Япониею: кто иманно хотели участие в том принять и какое количество денег каждой из

них намеревался положить и остаются ли они при том же намерении». Каковое сведение отправлено в государственную Коммерц-коллегию от господина генерал от инфантерии и кавалера фон Трейдена от 2-го ноября 1798-го году.

И как таковое в Японию посольство, по примеру бывшей в 792-м году экспедиции, для подобнаго ж туда японцов отвозу зависит от соизволения высочайшей власти: но я, со своей стороны, долгом поставляю поднести у сего вашему высокопревосходительству изъяснение, каким образом помянутыя японцы лишились своего отечества? Какое претерпевали в море странствование? И как вывезены в Россию? Из которого усмотреть изволите, что ис числа их двое приняли веру греческаго исповедания и третей, называемой Таминосукэ Доия также объявил усердное желание принять христианскую веру. Следовательно, по прежним примерам отнюдь уже не могут они возвратиться в свое отечество, то дабы как первыя двое не могли оставаться на казенном содержании далее, и последней может ли исполнить свое желание, и потом, в какой род жизни всех их троих причислить следует? Испрашиваю милостиваго от вашего высокопревосходительства разрешения, а между тем, поколь оставшиися японцы не будут отправлены в свое отечество, неужодно ли будет приказать довольствоваться их Иркутской казенной палате из суммы на непредвидимыя расходы ежегодно ассигнуемой, ибо отпускаемая в распоряжение мое по делам с китайцами по 1000 рублей в год, нужна на настоящия надобности или предоставить тем японцам довольствоваться собственными своими трудами на основании Указа Правительствующаго Сената 789-го года июня 13 дня состоящагося. В заключении сего с совершенным моим высокопочитанием и глубочайшею преданностию имею честь называться

Милостивейший Государь  
Вашего высокопревосходительства  
всепокорнейший слуга  
Алексей Толстой

*РГИА, ф. 1374, оп. 1, д. 236, л. 65–66.*

(*" . Малышева :! . Познанский)*

*Справка Иркутского губернатора А.И. Толстого о потерпевших на Алеутских островах  
кораблекрушение 15-ти жителях Шандайской губернии Японии*

18 февраля 1799 г.

Изъяснение о вывезенных в Охотск с Алеутских  
островов 15-ти человеках японцах

Все они Японского государства подданные Шандайской губернии, лежащей по сю сторону столичного города Эдо, называются: 1-й мореход, Джензошегаре Хебесудая\*, той же губернии пс крестьян рабочий 2-й Тацузо Сакурая\*\*, 3-й Саджисоборо Абей, 4-й Шезоо, 5-й Миносукэ, 6-й Иджигоро, города Муринохама, 7-й Гифе, 8-й Татжуроо, города Кодаге Хама 9-й Киджирооджи, 10-й Моджифе, города Сатавахама, 11-й Цундаю, 12-й Садаю. 13-й Таминосукэ, 14-й Сафе и 15-й Джинзабуро, отправлены были на губернаторском судне прошлаго 1793-го ноября 29-го дня\*\*\*, за наем Шандайской губернии из пристани, называемой Ипиномаки в столичной город Эдо, отстоящей от оной во 170 японских, а российских 979-ти верстах с сорочинским пшеном, которого погружено было в судно 2332 куля японской меры, по российскому весу 9328 пуд, для продовольствия пребывающего там ево семейства и находящейся при доме воинской команды, поколику древнее обыкновение японцев чтоб всякой губернатор, не заимствуя от своего государя ничего, довольствовал не только всю губернию собственными ее доходами, но из нее же содержал находящуюся в столице при доме ево воинскую команду, где каждой губернатор, имея дом, оставляет наивсегда там жену и все свое семейство, приезжая к ним чрез годичное время: отойдя те японцы от пристани 40, а российских без мала 113 верст, остановились на якорях за противными ветрами до 2-го декабря, располагаясь возвратится обратно, но при обратном следовании от случившагося шторма повредило руль и разодрало парус, почему принуждены они были срубить мачту, и 4-ю часть груза выбросать в море, а 5-го числа декабря земли им стало не видно: потом сильным волнением повредило лок, которой обыкновенно делается у них сбоку, с 7-го числа по 13-е стояли на штилю, но затем паки сильным ветром повредило корму и носило уже судно без всякого правежу до 2-го числа февраля 1794-го года. Во время сего и еще сброшено ими грузу, недостаток пресной воды награждался случившимися в то время великими дождями, а между тем, из оставшейся на судне райны зделали мачту. Поставя

руль, исправили небольшой парус, странствовали по морю разными ветрами, не зная, в каких местах находились, по причине той, что японския мореходы в плаваниях никакого не ведут счисления, 10-го числа мая 1794-го года увидели остров и небольшую пристань. Приблизясь ко оной, стали на якоря. Стояв тут до 30-го числа того ж мая выезжали в боте на берег за пресною водою, но людей ниже какого зверя не видели, того же числа, снявшись с якорей, хотя располагались следовать на другое место увидеть ково-либо из людей, но вдруг сильным штормом наполнило в судно воды столь много, что едва успели выехать на берег; оставя ево на якорях, 4-го числа июня по утишении ветра сели в бот свой, на котором выехали с судна, погребли на западную сторону подле берег и того ж числа увидели островных жителей, думая, что курильцы, живущия на Матмайском острове, в подданстве тамошняго губернатора, но узнали после, что алеуты, ибо по разговорам языка их не разумели. Пробыв тут до 16-го июня, где лишились одного своего Дженрогу, которой, находясь в болезни, 11-го числа умер, ибо всех их было 16-ть человек. Между тем, по данному сведению от алеут, прибыв тут российской промышленник, взял их на бот с собою в Российскую гавань, отколь ездили для осмотру оставшагося судна, но уже нашли ево до основания разбитым, взяли от него только два якоря, возвратились обратно. Между тем, прибыло судно компании покойнаго Шелихова под предводительством морехода грека Деларова. Он, содержа их на своем пропитании и одежде до 4-го апреля 1795-го года, отправились в город Охотск, куда прибыв 28-го июня, содержаны были до 12-го августа на евож кочте, а с того числа остались уже на казенном содержании.

Алексей Толстой

- \* Двдцдти чдтырех лет принял веру грдческдго исповеддния 18-го мддд 1796-го годд в Иркутске и наречен Петром Степановым Киселевым, воспрдемником иркутскдй купец Степан Федоров Киселев, матерью – иркутскдго купцд Андрдйдн Киселевд ждн вдовд Анна Васильевд.
- \*\* Двдцдти одндо годд принял веру грдческдго исповеддния 18 мддд 1796 годд в Иркутске, наречен Андрей Александров Кондратов, воспрдемникдми секунд-мдйор Кондратов, матерью вдовд Рыльскдго имдднитдго грдждднина Шелиховд ждн Натдльд Алексеевнд.

\*\*\* По японскому счислению 29-го числа 11-го месяца 7-го года царствования их императора.

*РГИА, ф. 1374, оп. 1, д. 236, л. 67–68.*

(*" . Малышева :! . Познанский)*

12

*Докладная записка генерал-прокурора П.В. Лопухина императору Павлу I об отправке японцев, живущих в Иркутске, в их отечество*

8 марта 1799 г.

Иркутской губернатор Толстой доносит, что из поступивших к нему дел от предместника его вошло к нему производство о вывезенных в прошлом 1795-м году в Охотск с Алеутских островов 15 человеках японцев, прибитых бурей к одному из сих островов. Бывший Иркутский губернатор Селифонтьев в 1796-м году 28 июня получил высочайшее повеление о возвращении тех японцев в их отечество на казенном или купеческом судне. Иркутские купцы согласились принять на себя доставку сих японцев, но с тем, чтоб дано было им казенное судно.

Между тем, как по сему случаю иркутские купцы намеревались учинить складку суммы для опыту торговли с Япониею, коммерц-коллегия требовала доставить к ней сведение, пребывают ли купцы сии в сем намерении и кто именно из них желает брать в сем участие. Таковое сведение еще в прошлом 1798-м году доставлено в Коммерц-коллегию, но никакого еще решительного постановления об отправлении их не последовало. В дополнение к сему губернатор, донеся, что во время пребывания сих японцев в России, двое из них приняли христианскую веру и крестились, а третий также объявил желание вступить в наш закон, испрашивает разрешения, может ли последний исполнить свое желание, и в какой род жизни всех их записать следует. А между тем, пока не последует их отправление, просит, чтоб или содержать их Иркутской казенной палате на сумму на непредвиденные расходы, ежегодно ассигнованную, ибо отпускаемая в его распоряжение по делам с китайцами по 1000 рублей сумма, употребляемая по сие время на их содержание, нужна ему на настоящие надобности. Или предоставить им

пользоваться своими трудами.

Имея щастие донести о сем Вашему Императорскому Величеству, испрашиваю по предмету сему в разрешение Губернатора Монаршаго Вашего повеления.

*РГИА, ф. 1374, оп. 1, д. 236, л. 69–70.*

( " . Малышева : ! . Познанский )

13–1

*Записка генерал-прокурора П.В. Лопухина президенту Коммерц-коллегии*

*П.А. Соймонову*

30 марта 1799 г.

Мил[остивый] Госу[дарь] мой Петр Александрович!

Иркутской гражданской губернатор дейст[вительный] Ста[тский] Совет[ник] Толстой по делу об отправлении в Японию 15 человек японцов, занесенных бурей в 1796-ом году к Алеутским островам, между прочим, извещает, что коммерц-коллегия требовала от тамошнего губернатора сведения, пребывают ли в своем намерении иркутские купцы, которые, соглашаясь взять на себя доставление сих японцов в их отечество, по случаю сего отправления хотели сделать складку суммы для опыту торговли с Япониею, и кто они именно. На что еще в прошлом 1798-ом году 2-го ноября последовал в коммерц-коллегию отзыв от бывшего Иркутскаго военного губернатора фон Трейдена.

Для дальнейшего производства по сему делу, имея нужду в сведении, что коммерц-коллегиею учинено в разрешении по сему отзыву, долгом поставляю просить Вас, М[илостивый] Г[осударь] мой, известить меня обо всем по предмету сему.

Впр[очем]

*РГИА, ф. 1374, оп. 1, д. 236, л. 71. Записка написана беглым, недостаточно разборчивым почерком. Слова сокращены, отсутствует в конце традиционное выражение учтивости.*

( " . Малышева : ! . Познанский )

*Записка президента Коммерц-коллегии П.А. Соймонова генерал-прокурору*

*П.В. Лопухину о производстве дела об отправке 15-ти японцев*

577

3 апреля 1799 г.

Милостивый государь князь Петр Васильевич!

Исполняя почтеннейшее требование вашей светлости, чтоб доставить Вам сведение относительно намерения Иркутских и иногородных купцов отправить 15 человек японцев, занесенных бурей к Алеутским островам, в их отечество и сделать опыт торговли с сею землею, имею честь препроводить у сего полную по предмету сему записку, из которой ваша Светлость усмотреть изволите, что дело сие по Всевысочайшему Государя Императора повелению препровождено к господину адмиралу графу Григорию Григорьевичу Кушелеву; но что по оному произошло, Коммерц-коллегии неизвестно. При сем должностно поставляю вашей Светлости донести, что Коллегия остановилась в дальнейшем дела сего производстве, ожидая разрешения на всеподданнейший доклад ея о учреждении Американской Компании, которая тогда иметь уже будет все тамошние промыслы в полном своем распоряжении; следовательно, как общеупомянутое отправление японцев, так и открытие торгова с сею землею удобнее и надежнее исполнить может.

С истинным почтением и совершенною преданностию имею честь быть навсегда вашей светлости

Милостиваго государя

Покорнейший и послушнейший Слуга

Петр Соймонов

Его Светл[ости] Кн[язю] Лопухину

*РГИА, ф. 1374, оп. 1, д. 236, л. 72. На полях с левой стороны запись: «Написать Гр. Кушелеву».*

(*" . Малышева : ! . Познанский*)

*Ответ Коммерц-коллегии на запрос от 30 марта 1799 г. генерал-прокурора П.В. Лопухина  
о движении дела по поводу отправки на родину 15-ти японцев*

3 апреля 1799 г.

Записка о предполагаемом отправлении Японцов в их отечество

Бывший генерал-прокурор, господин действительный тайный советник и кавалер Князь Алексей Борисович Куракин августа 11-го дня 1797 года препроводил ко мне между прочими об Американской Компании сведениями копии с четырех проектов Иркутских и иногородних купцов об отправлении вследствие Высочайшаго покойной Государыни Императрицы повеления вывезенных в Охотск 15 человек японцов, найденных по разбитии судна на одном из Алеутских островов, обратно в их Отечество и об открытии торговли с сею землею.

Из оных проектов первый Иркутскаго купца Киселева состоял в том, чтобы учредить Японскую Компанию, составя оную из Акции, полагая каждую в 200 руб[лей] и дать ему на первой раз казенное судно как для отвозу японцов, так и для погрузки назначенных туда товаров.

Второй проект Иркутских купцов и мещан 34 человек\* о снабдении их для сего равномерно казенным судном с нужными мореходами и начальником на казенном содержании, об отправлении на оном для опыта товаров, об оставлении учреждения предполагаемой купцом Киселевым Японской Компании до будущего успеха сей посылки и о нетребовании с них никакой за товары их в казну части. Третий проект иногородних купцов и мещан 3 человек\*\* о согласии их присоединиться к компании Иркутских купцов на основании положения, сделанного купцом Киселевым. Четвертый проект дворянки Шелиховой, чтоб дать ей казенное же судно со всем такелажем и припасами, оценя оное и взяв от нея для вернаго в казну возвращения подлежащее число паев в Американской Компании, каждой в 2000 руб[лей], о снабдении судна 10 человеками казенных морских служителей, с коими отправит она как японцов, так и нужные товары, приглася к сему предприятию и других участников.

Из сих проектов и отношения бывшего Иркутскаго гражданского губернатора господина тайнаго советника Селифонтова помянутый генерал-прокурор, сделав записку, Всеподданейше представлял Его Императорскому Величеству на благоусмотрение,

донося при том, что при Петропавловском порте находится казенное судно, именуемое «Надежда», одно из лучших и способнейших к сему отправлению при употреблении нужных только издержек. Вследствие сего доклада Государь Император Высочайше повелеть изволил: отношение о сем деле со всеми приложениями препроводить к господину генералу адъютанту, ныне адмиралу графу Григорию Григорьевичу Кушелеву, с тем, чтоб он его, Генерала Прокурора, уведомил о распоряжениях, какия по сему учинены будут. Почему оное дело 21 марта того же года и препровождено к графу Кушелеву.

В дополнение же к сему Коммерц-коллегия между разными сведениями, требуемыми ею от Иркутских губернаторов и наконец от господина генерала от инфантерии и кавалера фон Трейдена, изъявила ему надобность знать, остаются ли вышеупомянутые купцы в прежнем своем расположении относительно отправления японцов в их отечество и складки между собою для посылки туда товаров; на что от него 20 декабря прошедшаго году получено в Коллегию сообщение с приложением копии с поданного ему от Иркутскаго градскаго головы донесения и при оном копий же с четырех обязательств, взятых вновь от прежних подписателей, из коих в 1-м Иркутские купцы девять человек\*\*\* объявили, что как они вошли в Американскую Компанию участниками, то и должны сообразоваться с ея расположением и к прежнему предприятию сами приступить уже не могут; во 2-м купцы: Якутской Попов, Верхнеудинской Шевелев и Иркутской Шапошников с товарищами судна, находящагося на Алеутских островах, за промыслом и торговлею подписывающие десять тысяч рублей; Иркутские, 2-е [двое – М.М., В.П.] Киселевых и Андреянов изъявили к тому свою готовность, если дасть им казенное судно или если Американская Компания согласится отправить в Японию свое или купить постороннее, то они согласны быть в том по числу акций соучастниками. В 3-м купцы числом 20\*\*\*\* подтвердили во всем прежнее свое намерение.

Опрich сих сведений Коммерц-коллегия никаких других не имеет и ни к чему приступить не могла, поелику, как выше упомянуто, вследствие Высочайшаго повеления дело сие препровождено к господину адмиралу графу Кушелеву, и что по оному произошло, ей неизвестно.

\* Сибирякова, Мыльников, 4-х Сизых, Салдатов, Месникова, Старцова, Мичурина,

- Сухих, кова, Апрелькова, Резанцова, Протасова, Зайцова, Попова, Березин, Лычагова, Зицихина, Литвинцова, Астанина. 2-х Саватеевых, 3-х Дудоровских, Трапезниа, Давыдова, Медведникова, Шестунова, 3-х Киселевых, мещанина Сизых.
- \*\* Купцов, Верхнеудинского Шевелева, Калужского Портнова и якутского мещанина Шапошникова.
- \*\*\* Мыльников, Старцов, 3 Дудоровских, Литвинцов, Давыдов, Киселев и Останин.
- \*\*\*\* Баженов, Сибиряков, 4 Сизых, Месников, 2 Саватеевых, Протасов, Резанцов, Салдатов, Шестунов, Трапезников, Медведников, Апрельков, Березин, Киселев, Лычагов, Запихин.

*РГИА, ф. 1374, оп. 1, д. 236, л. 73–75 об.*

( " . Малышева : ! . Познанский )

14–1

*Записка генерал-прокурора П.Х. Обольянинова президенту Коммерц-коллегии князю Г.П. Гагарину о торговле иркутского купечества с Япониею*

8166

10 августа 1800 г.

Милостивый государь мой князь Гаврило Петрович!

Иркутский военный губернатор генерал от инфантерии Лещано уведомляет меня, что из числа 15-ти японцев, в 1795-м году с Алеутских островов в Охотск на судне купца Шелехова вывезенных, две приняли веру греческого исповедания, а другие десять человек, возвращаясь в свое государство, ожидают токмо разрешения Государственной Коммерц-коллегии на отправление Иркутскому купечеству в Японию торговых судов, с коими предполагается их отправить и о коих все сведения к Вашему Сиятельству доставлены от 2-го ноября 1798-го и 12-го марта сего 1800-го года, прося между тем разрешения, в какой род жизни причислить крестившихся японцев и чем содержать отправляющихся во ожидании предписания. Почему прошу Вас, Милостивый Государь мой, почтить меня уведомлением, что по предмету торговли Иркутского купечества с Япониею в государственной Коммерц-коллегии сделано и скоро ли дело сие получит

окончание?

С совершенным почтением есмь

Вашего Сиятельства  
милостивого государя моего  
покорнейший слуга  
Петр Обольянинов

Его Сия[тельств]ву князю Гагарину

*РГИА, ф. 13, оп. 2, д. 298, л. 1 б. – 1 б. об.*

(*" . Малышева : ! . Познанский*)

14–2

*Записка в канцелярию Коммерц-коллегии о доставлении обстоятельных сведений  
о вывезенных в 1795 г. судном Шелехова с Алеутских островов японцах*

№ 3087

11 сентября 1800 г.

В канцелярию Министра коммерции благоволено было доставить из канцелярии государственной Коммерц-коллегии обстоятельное сведение наипоспешнейшим образом: какое от кого и когда именно были отношения в оную коллегию как касательно отправления из числа вывезенных в 1795 году с Алеутских островов на судне купца Шелехова японцев десяти человек в их государство? Так и о двух из сих, принявших веру греческого исповедания? и что по оным и когда было коллегию учинено?

*РГИА, ф. 13, оп. 2, д. 298, л. 2.*

(*" . Малышева : ! . Познанский*)

*Записка президента Коммерц-коллегии князя Г.П. Гагарина генерал-прокурору Сената  
П.Х. Обольянинову о сведениях, касающихся вывезенных с Алеутских островов  
японцев в их отечество*

3100

12 сентября 1800 г.

Милостивый государь мой Петр Хрисанфович!

На почтеннейшее вашего высокопревосходительства отношение по случаю уведомления, полученного вами от Иркутского военного губернатора генерала от инфантерии Лещановича о предположении отправить вывезенных с Алеутских островов японцев в их отечество и открыть с тем государством торговлю, поспешая вас, милостивый государь мой, известить, что по справке с делами Коммерц-коллегии и бывшего президента оной Соймонова дело сие по Высочайшему Государя Императора повелению препровождено к господину адмиралу графу Кушелеву и что по оному произошло, Коммерц-коллегии неизвестно. Я для лучшего усмотрения вашего высокопревосходительства прилагаю у сего краткую по делу сему записку, каковая 3-го апреля 1799-го года послана была бывшему генералу прокурору князю Лопухину от бывшего президента Коммерц-коллегии Соймонова. В дополнение же оной нужным почитаю присовокупить, что я не получал по сему от Иркутского военного губернатора, якобы доставленных ко мне от 2-го ноября 1798-го года сведений; поелику в то время не управлял я еще и Коммерц-коллегиею. А хотя от 12-го марта сего года и было его ко мне письмо по поводу отношения моего к нему касательно изыскания удобных средств к приведению китайской торговли в лучшее состояние, но в оном упомянуто им было только мимоходом о пользе отправления тех японцев в их отечество и об открытии с тем государством торговли; на что я, ответствовав ему от 26-го апреля, изъяснил согласную мысль мою с его предположением, дав ему знать, что таковое отправление в Японию зависит от Российской Американской Компании, которая, как вашему высокопревосходительству небезызвестно, будучи снабдена высочайше Конфирмованными в 8-й день июля 1799-го года правилами и привилегиями, состоит под непосредственным высоко Монаршим Его Императорского Величества покровительством и Главное Правление оной, в Иркутске учрежденное на основании 12 §

правил, о всех своих распоряжениях, а равно и о происходящих по оным успехах прямо Государю Императору доносит.

! прочем имею честь быть с истинным почтением и совершенною преданностью всегда

Милостивый Государь мой!

Вашего Высокопревосходительства покорнейшею слугою

Князь Гаврил Гагарин

Его Высокопревосходительству П.Х. Оболянинову

*РГИА, ф. 1374, оп. 1, д. 236, л.107–108. Копия. На полях с левой стороны помета: «Отнести к графу Кушелеву»; РГИА, ф. 13, оп. 2, д. 298, л. 3–4.*

(*" . Малышева :! . Познанский)*

15–1

*Рассмотрение вопросов в Комитете Министров Российской империи*

20 февраля 1803 г.

В высочайшем присутствии Его Императорского Величества 1803-го года февраля 20-го дня министры с товарищами, исключая государственного канцлера и товарища его, собравшись в Комитет на половине Его Величества по полудни в 6 ½ часов занимались следующим:

... 4) Министр Коммерции читал две записки:

первую – о торговле с Японией, а вторую – о торговле в Кантоне, в которых, между прочим, для успешнейшего возобновления оного Министр Коммерции предлагает отправить чиновников как в Японию, так и в Кантон. – Обе сии записки с высочайшего утверждения Комитетом апробованы.

Государь Император из Комитета изволил выбыть в 9 ½ часов, и заседание кончилось.

Г[раф] Петр Завадовский

Г[раф] Николай Румянцев

Граф Алексей Васильев

Граф В. Кочубей

Товарищ министра Чичагов

*РГИА, ф. 1263, оп. 1, д. 2 (1803 г.), л. 34 об. Подлинник: АВПРИ, ф. С.-Петербургский  
Главный архив, Г-7, оп. 6, 1802 г., д. 1, п. 2, л. 12.*

(*" . Малышева : ! . Познанский)*

15-2

*Рассмотрение вопросов в Комитете Министров Российской империи*

27 марта 1803 г.

В высочайшем присутствии Его Императорского Величества 1803 года марта 27-го дня министры с товарищами, исключая государственного канцлера, собравшись в Комитет на половине Его величества по полудни в 7-мь часов, занимались следующим:

...II Министр Коммерции представлял:

Доклад касательно предназначаемого отправления вокруг света и при оном две инструкции: одну для чиновника, по упомянутому предназначения отправляющегося; а другую для чиновника, в японскую миссию употребляемого. Доклад утвержден высочайшим подписанием; в первой же инструкции Комитетом с высочайшего утверждения положено прибавить, чтобы посылаемый чиновник при обозрении Камчатки, ежели найдет там какие важные злоупотребления, старался оныя прекратить и привести в порядок всякия неисправности и неурядицы. На экстраординарные издержки положено назначить 25000 пиастров.

Государь Император из Комитета изволил выбыть в 9-ть часов, и заседание кончилось.

Г[раф] Петр Завадовский

Г[раф] Николай Румянцев

Граф Алексей Васильев

Сергей Вязмитинов

Граф В.Кочубей

Гавриил Державин

Товарищ министра Чичагов

РГИА, ф. 1263, оп. 1, д. 2 (1803 г.), л. 41–41 об. Подлинник.

( " . Малышева : ! . Познанский )

17–1

*Фрагмент чернового материала инструкции Главного правления*

*Российско Американской компании*<sup>120</sup>

[1803 г.]

... 3-е. Прилагаемая при сем под литерою Г. копия откроет вам весьма новое, важное и полезное для Российской Коммерции обстоятельство, состоящее в благоразумнейшем назначении к Японскому Двору знаменитого Посольства, коего начальником в качестве полномочного Посла Высочайше избран известный вам по ближайшему родству с фамилиею Шелиховых и именно зять покойного Григорья Ивановича, Его Пре[восходительст]во Двора Его Имп[ераторского] В[еличеств]а действительный Камергер, орденов С[вяты]я Анны Второй Степени кавалер и Мальтийского С[вята]го Иоанна Иерусалимского Большаго Креста Почетный Командор и Кавалер Николай Петрович Резанов, с которым на одном из помянутых кораблей «Надежде», принятом у Компании Государем Императором на свой счет с двухгодовым жалованьем и провизиею морскому Экипажу, так и со всеми другими запасами, отправляются четыре особы дворян посольства и 10-ти персон ученых, как то: инженер и профессора, астроном, минералог натуралист, доктор, живописец и другие полезные и необходимые для толь важнаго предприятия люди. Цель сего Посольства состоит в том, чтобы при доставлении нескольких японцов, 8 лет уже доставленных с острова Атхи потерпевших у онаго кораблекрушение, добиться вследствие известнаго чрез вас даннаго от Японскаго Двора посыланному с такими же несчастливими японцами г-ну Лаксману Листа, ближайшей связи и сношения в разсуждении учреждения взаимной той державы с Россииею Коммерции и обозрения всего того на пути сем, что может быть полезно и в других местах и в обеих Индиях для Российской торговли. Какое по сему знаменитому случаю

---

<sup>120</sup> А.А. Баранову – *Ред.*

состоялось Высочайшее определение, оное было бы для вас и любопытно, и занимательно, но как оное еще формально не открылось, то и не может онаго Правление теперь вам доставить за тем, что и само еще онаго не имеет. Есть ли вы означенную под литером Г. копию снесете с предъидущего под литерою В, то найдете для себя довольно ясный план делаемаго Его Пре[восходительст]ву Г[осподи]ну Резанову препоручения и со стороны сего Правления со властью в лице всей Компании учреждать, поправлять и улутчивать все то во вверенном вам краю, что может к большей пользе даже и в политическом будущем отношений служить, почему вы, будучи о сем теперь предваряемы, благоволите вследствие одного плана себя во всем и во всех частях приуготовить, так как и к принятию столь знаменитых, по предмету своему важных, а по обстоятельствам надежных для Компании гостей, доставив им по всей вашей возможности, как выше сказано, спокойное и обильное у вас пребывание, так чтоб по силам вашим могло оно соответствовать характеру их и достоинству Компании, в чем Главное Правление на вас, зная ваше усердие ко благу общему, в совершенном обеспечении и полагается. Ис того же самого плана усмотрите вы, как и выше в 2-м пункте сказано, что сие Посольство по совершении в Японии своего дела проедет в Камчатку, где также препоручается от Государя Императора помянутому Г-ну Резанову заметить тот край, и буде возможность позволит организовать оной в разсуждении отдаленности от пособиев бедности тамошняго народа и великаго во многом недостатка, и уже побывав в Камчатке, прибудет к вам, а прежде онаго посольства предварит вас корабль «Нева», о начальнике которого в выше приложенной Инструкции изъяснено, чтоб вы могли его или кого он назначит, употребить. Между тем, как другой корабль к вам ожидается в полезные для Компании поиски или иные какие упражнения, что вы и не упустите сделать, ежели в том надобность вам будет, поступаая не так, как приватный Компанейский Коммисонер, но так, как Коронный чиновник в звании Главнаго Правителя в части Северной Америки, каковым званием сам Государь нареци вас изволил, разстворяя сношения ваши в сих случаях тою деликатностию, каковая пристойна к людям амбициею имеющим, знающим службу, и многими опытами знания свои почерпнувшим и имеющим Штаб Офицерские чины. От обеих начальников помянутых кораблей Главное Правление не может теперь надеяться, чтоб произошли подобные Талину поступки, за которые сей, по получении от него в Адмиралтейской коллегии о бывшей между вас переписке, за оказанныя к вам

грубости и неповиновении, всемерно будет, по настоянию компании, достойным образом наказан. Возвращаясь же от вас означенное Японское Посольство, также наиболее по воле Государя Императора, последовавшей на выше приложенное под литерою А. всеподданейшее представление сего Правления должно будет идти обеими кораблями в Кантон, также по коммерческим видам, давно в намерении бывшем еще у покойного Шелихова, а потом и у состава нынешней Компании, тем наиболее, когда она воспламенена вашими в вышепомянутом к Ларионову извещении рассуждениями, сведениями о уловках, бывших у вас бостонцов и агличан, и вычислениями, сколько сии бродяги увлекают у Компании, и почти из-под глаз ваших, законно принадлежащих ей корыстей. Приметя собывшающейся в нынешнее счастливое время сей план и вообще возвышающуюся российскую во всяком роде промышленность, благоволите вы приуготовить себя на споспешествование оному вашими советами и деятельностью и при возвращении от вас экспедиции не оставьте снабдить ее для торговли в Кантоне и других местах края вашего промысловыми продуктами, сколько вы в силах найдете, и буде, сверх чаяния, не отправлен еще от вас до прибытия оных двух кораблей накопившейся прежней промысел, то из онаго часть по назначению сего правления в прилагаемом при сем особом реестре данные листу на них отправте, а достальное пошлите чрез Охотск, что также в означенном и сему к вам означено, уведомив о всем том и сие Правление как с теми же кораблями, так и чрез Охотск, а всего наиболее доставите сведения, ежели прилучится возможность о благополучном к вам прибытии той экспедиции для Всеподданейшаго донесения Его И[мператорско]му В[еличеству], яко Монарху, пекущемуся о благе общем, и во особливости интересующемуся в рассуждении Компании, получающей многие опыты Его благоволения. Весьма важную услугу зделали бы вы, ежели бы для сего предмета учредили ежегодные рейсы в Охотск с вашими донесениями и промысловыми сколько набираться будет грузами, дабы чрез то можно было частые иметь о вашем крае известия, и в состоянии быть подкреплять вас таковыми же из Охотска рейсами, доставляя и вам сведения. Должно вам сказать по истинне, что при теперешних случаях Правительство ожидает от вас исполнения сей статьи в надежде на расторопность вашу по делам минувшим. Остается вам самим признать сие предложение необходимым, когда представите себе в каком сомнении остается начальство, не получая от вас поныне почти три года никаких сведений, а вступающая

акционеры, не видя новых своих корыстей, для которых, и чтоб разделять и всю с вами славу, они наиболее вверили Компании свои капиталы, делающие кредит в счастливом сопровождении Компанейской торговли и впредь имеющим вступать акционерам.

4-е. Главное Правление еще прилагает вам две бумаги, а именно: копию с определения Компании о котиках, следовавшего под литерою Д. и другую, список всем по сей день вступившим в акционеры Компании особам для любопытства вашего под литерою Е. Ис первой вы усмотрите, что Компания чувствует делаемой ей в котиках подрыв, тем более ощущаемой, когда одного зверя кож на островах находится готовых около миллиона, а здесь и в Кяхте ис прежде вывезенных расходится такая малость, так что и сказать стыдно, да и по цене не более как по два рубля, вместо того, что года четыре назад уходили оные от 6-ти до 7-ми рублей. С прошлогодним транспортом г-н правитель Полевой известил вас и Ларионова о снятии людей с котовых островов и о доставлении оных к вам, наиболее в том предположении, чтоб тем островам дать отдохнуть, а упромышленные же котики распродать...

*РГИА, ф. 15, оп. 1, д. 1, л. 75–78 об.*

(М. Малышева / В. Познанский)

17–2

*Фрагмент чернового материала инструкции Главного правления*

*Российско-Американской компании И.Ф. Крузенштерну*<sup>121</sup>

[1803 г.]

...VII

По совершении посольского миссиею Высочайше возложенного на нее в Японии дела, в разсуждении находящегося на вашем корабле компанейского груза, наиболее назначенного для Камчатки, так и в разсуждении того, что о успехах посольской миссии должно депеши препроводить без замедления ея к Его Императорскому Величеству сколько можно кратчайшим путем и временем, так равно и о вашем в сей край кругом

<sup>121</sup> Опубл.: Болховитинов Н. Н. (Отв. Ред.) Российско-Американская компания и изучение Тихоокеанского севера, 1799–1815 гг.: Сборник документов. М., 1994, с. 54–60. – Ред.

света прибытии, то для сих притчин, так и для получения миссиею новых от Высочайшаго Двора может быть последующих столь же важных, как и предмет посольства ея в Японию препоручений, обязаны вы пуститься от Японии сперва к российскому полуострову Камчатки и прямо в Гавань Петропавловскую, где для сгружения компанейскаго груза, отправления миссионерных депешей и принятия новых могущих быть ей наставлений, пробыв нужное время, оттоле направится к острову Кадыяку для соединения с г-ном Лисянским.

## VIII

Ежели бы вояж ваш из Японии до Камчатки почему-либо замедлился и запоздался во времени, и вы увидите себя готовыми отплыть и от Камчатки не ранее октября месяца, то Правление советует вам остаться зимовать в Петропавловской Гавани, поелику в сии времена тамошнее море бывает очень бурно и опасно; но всего бы лутче желало оно, чтоб вы необходимую прозимовку взяли на Кадыяке, где во всю зиму найдете живые рыбные кормы, всякую дичину, а притом там, как дома, во всем бы безубыточно и беспечно продовольствовались вы со всею командою, а сверх того воспользовались бы и случаем обстоятельно узнать Кадыяк, его жителей, компанейския заведения и все прочее, достойное Вашего сведения. Однако ж на случай нечаянной вашей зимовки в Камчатке, Главное Правление учинит ныне же распоряжение, чтоб у господ компанейских прикащиков вы были со всем экипажем и с посольскою миссиею снабдены всеми потребностями по возможности.

## I}

Как г-н Лисянский ожидать вас на Кадыяке далее половины августа месяца 1805 года не может и не должен потому, что время сие будет самое лутчее к возвратному оттоле пути, а вы с вашим кораблем к тому времени и от Камчатки на Кадыяк не прибудете по непредвидимым каковым-либо случаям, то в разсуждении сего благоволите ему предварительно предписать, чтоб он промедлив тут до показанной половины августа месяца 1805 года, отправился бы обратно в то зборное место, которое вы ему назначите для соединения с вами и ограничите время, сколько тут пробывать он должен, и буде и тут вас во оное не сождет, то туда далее идти обязан. При отправлении же своем из Кадыяка

взял бы у г-на Баранова весь тамошний компанейский груз пушных товаров. А между тем, пока он пробыть должен на Кадьяке, чтоб не потерялось напрасно то время, и когда г-н Баранов будет иметь виды для осмотра и описания каких-либо там мест, и о том будет его просить, как о предмете нужном для отечества и компания, то благоволите ему предписать, чтоб он согласно обещанию своему предпринял таковые обсервационные вояжи, или бы поручил оные совершить надежнейшим из своих подчиненных, смотря по важности тех предметов на своем ли корабле или на одном из тамошних у Баранова состоящих судов.

}

Во время таковых обсервационных рейсов отнюдь бы не заходил в места, принадлежащая другим державам, и тем не подавал бы ни малейшего повода к неудовольствиям и жалобе; но ежели бы сверх чаяния и случилось в такие места зайти, кои уже принадлежат другим державам, то обходился бы в них как с иностранными людьми, так и с дикими народами со всевозможною ласкою, удаляя и наималейшее подозрение, о чем не оставьте его без извещения. Впрочем, и вам Главное Правление, рекомендуя сии же правила, надеется от обоих вам как от просвященных и благовоспитанных людей, что вы ни в каких случаях не оставите все ваши действия сопровождать со всяким благоразумием и кротостию, оставляя для соотчичей своих следы надежды и успехов в пользу будущего времени, и вообще честь и славу нации.

} I

Хотя выше сего и предположило Глав[ное] правление места, где вам с экспедициею иметь роздых, но не может оно настоять в том, чтобы непременно так исполнили, но предоставляя все случаи вашему опытному знанию и обстоятельствам, в каких путешествие ваше состоять будет и кои никак предвидеть теперь не можно, надеясь однако ж, что вы не будете уащать пристанищ без полезно и без совершенной надобности, тем наипаче, когда откроются вам и виды Высочайше назначенной в Японию посольской миссии, к сопровождению которой без потери выгодного времени должно вам всевозможнейше споспешествовать. Притом Главное Правление дает вам приметить, что когда экспедиция держа курс к Кадьяку...

*РГИА, ф. 15, оп. 1, д. 1, л. 152–153 об.*

(М. Малышева / В. Познанский)

17–3

*Фрагмент чернового материала инструкции Главного правления  
Российско Американской компании<sup>122</sup>*

[1803 г.]

... 6-е. Бывши в Японии, ежели случится там учинить каковую-либо расторжку, единственно для опыту и узнания о последствиях на будущее время, оную постарайтесь произвести с непосредственного распоряжения Его Превосходительства Резанова, всеусердно примечая все обстоятельства, при сем случае встретится вам могущия, которыя и записать на бумаге для представления в свое время сему Правлению. Равномерно примечать и узнавать, какия товары и вещи можно Компании японцам доставлять, наипаче те, кои с большею выгодною, так как и от них какие товары и вещи и на какой товар меною или на деньги получить можно, и где их сбывать, здесь ли в России, или где в других местах. Какие же товары для сей опытной торговли нарочно с вами отправлены, оные в данной вам фактуре особо означены. При сем случае Правление дает вам приметить, что как в компанейских заселениях весьма удобно получить довольно количество китоваго и других рыб сало, сушеную треску и другия рыбы, то все сии продукты можно ли и каким образом, и за какую цену збывать в Японии, в которой рыбная пища употребляется предпочтительно пред прочими. На сию часть особенно употребите внимание и по прибытии на Кадык предложите сии предметы на уважение Его Пре[восходительст]ву Николаю Петровичу и Кадыцкому Главному правителю.

*РГИА, ф. 15, оп. 1, д. 1, л. 173.*

(М. Малышева / В. Познанский)

---

<sup>122</sup> Ф.И. Шемелину ? – *Ред.*

*Реестр на отправляемую в кругосветное плавание экспедиции И.Ф. Крузенштерна и  
посольство Н.П. Резанова в Японию*

[1803 г.]

Реестр, сделанной из списков о числе экипажа в Экспедиции находящемся  
на корабле «Надежда»

1. Командир корабля, капитан-лейтенант Крузенштерн

Офицеры

Лейтенанты

2. Ратманов

3. Ромберх

4. Головачев

Мичманы

5. Левенштерн

6. Биллингаузен

Штурманы

7. Каменьщиков 12 класса

8. Сполохов, подштурман

Медицинския

9. Доктор Еспенберх

10. Лекарь Зибгам

Морских нижних служителей 47.

Посольской свиты

1. Чрезвычайный посланник и полномочный Министр, действительный камергер и

ковалер Резанов.

Ковалеры посольства

2. Надворный советник Фоссе
3. Майор Фридриций
4. Гвардии поручик граф Толстой
5. Профессор натуральной истории надворный советник Тилезиус.
6. Остроном Горн
7. Артист, академик Курляндов
8. Медицины кандидат, титулярный советник Брыкин

японцов некрещенных—4.

японской переводчик 14-го класса Киселев

Пассажиры

Кадеты, дети г-на Коцебу —2

Служителей при посольстве—3

Компании прикащик—Шемелин

Промышленных—7

---

Итого—83 че[ловека]

#### Корабля «Невы»

1. Командир корабля, капитан-лейтенант и ковалер Лисянский 1-й

Офицеры

лейтенанты

2. Арбузов
3. Повалишин
4. Коведяев

мичманы

5. Берх

штурманы

6. Калинин

7. Ученик, Мальцов

Медицинския

8. Доктор Лабайд

9. Подлекарь Мутовкин

10. Корабельной подмастерье Корюкин

11. Иеромонах Гедеон

12. Прикащик от компании Коробъицын

нижних морских служителей——42

промышленных——3

---

Итого	57 че[ловек]
-------	--------------

---

А всего	140 че[ловек]
---------	---------------

*РГИА, ф. 15, оп. 1, д. 1, л. 188–189.*

(М. Малышева / В. Познанский)

18–2

*Реестр на отправляемую в кругосветное плавание экспедиции И.Ф. Крузенштерна и  
посольство Н.П. Резанова в Японию*

[1803 г.]

РЕЭСТР японцам называемой губернии Сандайнокуни больных людей, а имянно:

1. Цудай Старой едет

2. Гифей Окудай едет

3. Сафей Доия едет  
4. Тажуро Окудай едет
- 

Крещенныя

7. Петр Киселев едет переводчиком  
8. Иван Киселев  
9. Андрей Кондратов  
10. Семен Киселев <sup>123</sup>.

*РГИА, ф. 15, оп. 1, д. 1, л. 204.*

(М. Малышева / В. Познанский)

18—3

*Реестр на отправляемую в кругосветное плавание экспедиции И. Ф. Крузенштерна и  
посольство Н. П. Резанова в Японию*

[1803 г.]

На «Надежде» свита посольства в Японию

1. Чрезвычайный посланник и полномочный министр, действительный камергер и  
ковалер Резанов

Кавалеры посольства

2. Надворный советник Фоссе, он же казначей  
3. Маиор Фридриций—инженер  
4. Гвардии Преображенского полку порутчик граф Толстой  
5. Профессор физики надворной советник Тилезиус  
6. Профессор астрономии Горн

Академии Художеств академик Курляндцов

---

<sup>123</sup> Фамилии и имена японцев под номерами 5 и 6 зачеркнуты, восстановить их не представляется возможным.

7. Титульный советник медицины. Кандидат Брыкин для натуральной истории

8. Чучелник

Японцы, некрещенные

9. Цудай

10. Гифей

11. Сафей

12. Тажуро

13. Переводчик 14 класса Петр Киселев

Пассажиры

14 – 15. Кадеты, дети Коцебу

Г[осподи]на Резанова служители:

16. Крепостной его человек

17. Волной повар

Итого на «Надежде» — 84 (в том числе нижних чинов)

На «Неве» всех 56 <sup>124</sup>

*РГИА, ф. 15, оп. 1, д. 1, л. 205–205 об.*

(М. Малышева / В. Познанский)

---

<sup>124</sup> Под номером 6 первоначально значилось: «Артист Курляндов», затем зачеркнуто и вписано мелким почерком под номером 6 два человека: «профессор астрономии Горн» и почерком крупнее – «академии Художеств академик Курляндов». Вся первоначальная нумерация с 7 по 17 переправлена на один номер. Поэтому вместо 18-ти человек в составе посольства значится 17. В итоговом списке на корабле «Надежда», напротив, подсчет исправлен в сторону увеличения: 83 переправлено на 84. Это отчетливо свидетельствует о тщательной подготовке состава миссии в Японию.

*Письмо отца Хвостова Н.П.Резанову*

27 Мая 1803 г.

Милостивый государь Николай Петрович!

Время наступает пути того, который вы в память потомства и в Славу вашему предпринять намерены: остаяющим здесь и участвующим благополучному возвращению онаго, остается молить всевышнего да подаст силы и здравия усовершенить делаемое вами. Я не имею нужды объяснять вам, милостивый государь, тех родительских чувств благодарности, с которыми мы с женою моею примем и навсегда к вам пребудем, когда вы находящегося сына нашего из Америки примете в Ваше покровительство и доставите ему способ возвратиться сюда на тех кораблях, кои сюда будут.

А чрез такой вояж не только доставите свидание наше с ним и его сделаете ответным офицером толико обширного морского пути, который на веки послужит в пользу службы его.

С истинным почитанием навсегда пребуду Ваш

Милостивый государь  
покорный слуга  
Александр Хвостов

*АВПРИ, ф. С.-Петербургский Главный архив, I-13, 1803-1812 гг., оп. 10, д. 14, л. 1.*

(А. Кириченко)

*Николаю Петровичу Резанову*

2096

20 июля 1803 г.

Его Императорское Величество высочайше указать соизволил, чтобы японцы при вашем превосходительстве отправленные получали содержание их из экстраординарной суммы вам вверенной и чтобы они вообще ни в чем не нуждались; равным образом, есть ли б вопреки предположения моего случилось, что вход в Нангасакскую гавань будет вам

воспрещен, поелику восточные народы и самыя договоры нарушают по причине часто маловажной, то и подарки с вами отправленные натурально своего назначения не достигнут, а в током случае дабы вещи, кои большого помещения требуют, как то зеркала и кристальная посуда незаменима выгодного на обратном пути круга, Государь Император повелел вашему превосходительству стараться сбыть их по выгодным ценам в Кантоне или где будет удобнее, а засим как деньги за сии вещи, так и другие в натуре по приезде возвратить.

*АВПРИ, ф. С.-Петербургский Главный архив, I-7, 1802 г., оп. 6, д. 1, л. 11, л. 82-82 об.*

(А. Кириченко)

28

Из записей неизвестного автора, пользовавшегося архивом Ф.Ф. Веселаго

при сборе материалов к биографии адмирала

И.Ф. Крузенштерна и о посольстве в Японии Н.П. Резанова

[Дата не установлена]

История Резанова слишком замечательна, чтобы пройти ее молчанием, даже при самой намеренной краткости. Он так много претерпел во время пути до Камчатки, что по приходе в Авачинскую губу, вышед на шканцы в первый раз после шестимесячного затворничества, во всей своей камергерской форме, он перекрестился и громко сказал: «Благодарю Бога, наконец я под защитою Законов своего отечества!». Съехав на берег, он тотчас же отправил гонца в Нижнекамчатск к коменданту, требуя вооруженной помощи и Аудитора для составления военной комиссии.

Комендант генерал-майор Кошелев, которой уже ожидал прибытия полномочного посла к Японскому двору, поторопился явиться с ротою, не забыл и Аудитора.

Крузенштерн, как умный и притом далеко незлобивый человек, тотчас увидел, к чему это поведет, а потому не замедлил рассказать коменданту историю ссоры и убедить его войти в посредство.

Комендант не отказал и успел помирить всех, и тем спасти Капитана корвета от

неприятных последствий, и экспедицию от безславия. Лицо, обвиненное в первоначальном поводе к смутам, отправлено берегом обратно и возвратилось в Петербург, по выражению Чацкого<sup>125</sup>, «Алеутом», а в свиту полка комендант выбрал своего адъютанта, родного своего брата и лучшего из всех своих офицеров капитана Федорова. Таким образом Посол решился опять сесть на корвет и отправиться в Нангасаки.

С грустью, а нельзя не упомянуть, что из этого мира непосредственно произошла причина смерти вовсе ни в чем невинного офицера и одного из самых благородных моряков того времени. Прах его остал ся на острове Св[ятой] Елены, который, чрез десять лет потом принял на берега свои знаменитого смутника всей Европы<sup>126</sup>.

Обращаюсь к себе. По отъезде Резанова вскоре отправился к генерал-губернатору в Тобольск. Он уже и не возвращался. Умный и деятельнейший чуть ли не из всех тогдашних губернаторов, Трескин остался полным деятелем с неограниченною доверенностью Пестеля<sup>127</sup> и в отношении к нам был истинный *factotum*. Я имел случай вскоре обратить на себя его внимание. Вот этот случай.

По отъезде Резанова из Охотска лейтенант Хвостов, командир компанейского корабля, на котором Резанов прибыл из Новоархангельска, по данной ему прежде инструкции отправился в губу «Айнива» для соединения с Давыдовым, командиром тендера «Авось», и там разорили Японское селение, как им было предписано в инструкции, хотя потом и изменено, но неопределительно. Когда вместе они пришли в Охотской порт, Бухарин решился их арестовать. Они бежали из-под ареста в Якутск и без разрешения генерал-губернатора приехали в Иркутск.

[Подпись и дата отсутствуют]

*РГАВМФ, ф. 315, оп. 1, д. 813, л. 4 об. — 6 об. Рукопись.*

(М. Малышева / В. Познанский)

---

<sup>125</sup> Чацкий — литературный герой известного в России произведения А.С. Грибоедова «Горе от ума».

<sup>126</sup> Имеется в виду Наполеон Бонапарт (1769–1821), сослан победившими его противниками в 1815 г. на остров Св. Елены, где и умер.

<sup>127</sup> Трескин Николай Иванович — Иркутский губернатор, Пестель Иван Борисович — Сибирский генерал-губернатор(1806–1819).

*Сообщение Н.П. Резанова в Иркутскую главную кантору**Российско-Американской компании*

` 237

16 августа 1804 г.

Июля 4-го прибыл я на корабле Надежде в Петропавловской порт, а корабль Нева, разставшись с нами в островах Сандвичевых, взяла курс в Америку и надеюсь, что теперь при помощи божией она уже на Кадьяке. Привезенным сюда Российско-Американской компании товарам открыл я здесь продажу по ценам при сем прилагаемым, от чего должны в Охотске транспортныя цены знатно понизиться, ибо количество товаров в Америку и сюда доставленное, как из приложенной росписи кантора усмотрит, весьма знаменито, и кажется отправлять ей нужно весьма малое число и только таких, коих нет в привозе. К крайнему неудовольствию моему нашел я здесь переведенные от канторы на Камчатку три векселя суммою в 28000 рублей, тогда когда вырученные отсюда 20000 рублей высланы. Таковое распоряжение относится к стыду управляющих, и я предварить должен, что всякой протест векселя компании должен не только пасть на отчет, но и на строгий ответ тех, кои ассигнуют выдачи денег в те места, откуда в то же время вырученныя суммы без всякой предварительности высылаются. Таковую же неосторожность производства дел заметил я в контракте, заключенном с комиссионером Выходцовым, в коем включены в прибыль его половинные барыши от товаров, вверенною мне экспедициею доставленных. Я уничтожил неосновательное сие постановление, и в случае иска его должен он обратиться на лица, контракт с ним заключившия.

Теперь отправляюсь я в Японию, и оконча посольство мое, надеюсь при помощи божией возвратиться в июне будущего года, и отсюда идти или на Кадьяк, где забрав рухлядь, отправлю для продажи в Кантон, а оттуда в Санкт-Петербург, или буде котики в Японии приняты будут, то поручу г[осподину] капитан-лейтенанту Крузенштерну сходить еще в Японию, чтоб открыть торговлю.

Но как нет у нас на будущей год провизии, то предписал я Охотской канторе со всею поспешностью заготовить сухарей ржаных 790 пуд, солонины 400 пуд, гороху 60 пуд, масла коровьяго 60 пуд, круп овсяных 60 пуд и гречневых 20 пуд и выслать сюда судно не в августе, как обыкновенно отправляются, но в начале июня, как только позволит

навигация. А при том велел выслать от пятидесяти до ста тысяч котиков, юфти сколько имеет она, и тысячу ровдугов. Из сих товаров котики, ежели бы не пошли в Японию, могут быть отвезены в Кантон. Бude же судно не поместит требуемого числа товаров, то выслать только половинное число провизии, и стараться наполнить котиками, которые прежде внимательно обраковать, дабы горелых отнюдь не было. О чем кантора и с своей стороны к исполнению предписать должна. Ежели ж нет у компании судна, то сообщил я г-ну капитану над портом Башуцкому, чтоб снабдил казенным транспортным судном и дал пособие в офицере и штурмане, на каковой конец прилагаемое при сем отношение мое к его высокопревосходительству Ивану Осиповичу кантора имеет поднести, и исходатайствовав резолюцию, отправить тотчас в Охотск с естафетом, дабы экспедиция, бесполезно здесь проживая, не теряла времени, а не получа сея помощи и вовсе не остановилась в своем подвиге. Между тем кантора должна донесения мои в главное правление отправить также с естафетом.

Наконец Иркутскую главную кантору уведомляю, что Петропавловскую гавань отныне впредь назначил я главным складочным местом компанейских товаров и в ней учреждаю факторию. Суда с нужными для Америки товарами должны ходить только до Петропавловской гавани и там выгрузясь, получать американские, а приходящие из Америки будут брать в ней промышленных и товары охотские, и ежегодно в обе стороны суда должны возвращаться к местам своим. Иркутская главная кантора должна с своей стороны сделать свои распоряжения и с первым судном в Америку дать знать, чтоб отправлялись и оттуда суда ранее в гавань, а Охотской канторе, чтоб и она высылала неотлагательно с перьвою навигациею, дабы приходящая из Америки суда в гавани не проживали, а также и промышленные, когда отправлены будут, бесполезно в отягачение компании в гавани не зимовали. И ежели сие случится, то будет на строжайшем ответе тех мест, откуда поздно суда высланы. Учреждение сих оборотов должно неотлагаемо ныне же взять свое начало. Теперь самое удобное к тому время. В Америку, кажется, посылать нечего, ибо на корабле Неве отправлено множество товаров, как из приложенной о грузе его ведомости кантора усмотрит. Для первоначального сего здесь заведения предписал я Охотской канторе договорить сюда года на три дватцать человек вольнонаемных из промышленных для постройки здесь магазинов и исправления других работ, высылая ежегодно для них провиант и соль, а для разведения здесь скотоводства выслать рогатого

скота числом до дватцати и три лошади для возки тягостей, предписав между тем Ижигинскому комиссионеру, чтоб заблаговременно в Ижиге заготовил для них в зиму корму, дабы 1806-го года были уже они в гавани непременно. Поручая Иркутской канторе неупустительное исполнение означенных предметов, уведомил я главное правление, меня к оному уполномочившее, и всеподданейше донес Его Императорскому Величеству.

*РГИА, ф. 15, оп. 1, д. 2, л. 13–14. Копия.*

(М. Малышева / В. Познанский)

30

*Письмо Н.П. Резанова президенту Российской Академии наук Н.Н. Новосильцеву,  
члену Негласного комитета при императоре Александре I.*

20 августа 1804 г.

Милостивый Государь Николай Николаевич!

Ежели донесения мои из Бразилии к его Императорскому Величеству достигли и навели неприятность, то ни мало не укоряет меня совесть, чтоб был я тому причиною. Директоры Российско-Американской Компании объяснят Вашему Превосходительству, что сверх того претерпел я в пути моем. Одна только польза государственная могла меня поставить выше всех оскорблений и принудила оставить строгия меры, всякому начальству законом предоставленныя. Не имея возможности привести буйные умы в пределы должного повиновения, дал я помощь здешняго генерала сильно им почувствовать, сколь далече прешли они границы свои; и сколь ни прискорбно мне было остановить экспедицию, я решился было отправиться к Государю, ибо как можно мне с успехом исполнить посольство в Японии и заслужить должное для Империи уважение, когда свои подчиненные к доверенному от нея лицу оное совершенно забыли? Решимость моя привела их в уныние. Они дошли здесь до отчаяния, обещали быть послушными, и я, простя их, показал, что не личные их мне обиды, но растройство в деле государственном было причиною моего огорчения.

Рапорт мой Государю удостоверит Ваше Превосходительство в моих чувствованиях, и я

все употребил, чтоб извлечь их из строгого ответа, а рапорт генерал-майора Кошелева будет вам порукою в их неистовствах. Я возвращаю Графа Толстого как человека, без всяких правил привыкшего легковерные умы обращать в забаву свою, как человека, способности свои в единый вред обращающего и, следственно, опасного. Академика Курляндцова, по причине приключившейся ему жестокой каменной болезни не могущаго мне сопутствовать, обращаю я к своему месту, а для помощи в пути его и кандидата медицины титулярнаго советника Брыкина, которому поручил я довести сего достойнаго художника до Москвы, где нужно сделать ему операцию. Обоих их, как людей, поведением и правилами своими всякую похвалу заслуживающих, поручаю я в милость вашего Превосходительства и всепокорнейше прошу удостоить их вашего покровительства. Они будут живою грамотою всех происшествий. Я стыжусь их описывать.

В разсуждении предметов торговли и самой Камчатки, Ваше Превосходительство, изволите предположения мои усмотреть из донесения моего главному правлению. Я желал бы доставить вам особое объяснение, но истинно не имею времени. Всепокорнейше прошу, ваше Превосходительство, изъясняемые мною виды не приписывать воспаленному воображению и быть уверен, что довольно холодно обдумывал я все обстоятельства, и сама природа способствует к водворению здесь знаменитой торговли. Теперь спешу я в Японию и по возвращении моем лучше объясню те пользы, которые и теперь в виду предстоят безошибочно. Я полагаю сверх торгова в Нагасаки, на 18-м Курильском острове, в 1794 году названном Александры, поселить людей и помощью мохнатых курильцов завести ближайшую торговлю, выиграв на 20-м у жителей тамошних ласкою место для нашей фактории, и тогда японцы, сами приезжая, будут брать товары наши и возить пшено и другия, нам нужныя вещи. Готов я жертвовать самим собою и ежели только дадут от Правительства способы, то надеюсь на самом деле показать, что Россияне никогда в любви к Отечеству другим нациям не уступали, а разве могут превзойти их, а особливо в счастливыя для них дни Александра.

Не зная, Милостивый государь, как будет что принято, но в Петропавловской гавани основал уже я средоточие всей здешней торговли. Причины, к тому меня побудившия, также описаны в донесении моем Главному Правлению Компании.

Переводчика из японцов, регистратора Киселева, должен я, сколько ни нужен он мне,

оставить здесь до моего возвращения. Зависть у японцев к данному ему офицерскому чину, золотым часам, ему пожалованным, и прочия мелочи поселили к нему злобу, превратившуюся наконец в неукротимую ненависть. Они поклялись, что будет он примерно наказан, и я, опасаясь раздражить Японию привозом к ней соотчика, принявшего нетерпимую там христианскую веру, и, избегая всяких неприятностей, принужден был с ним разстаться.

Словарь японского языка и руководство к познанию онаго при сем к Вашему Превосходительству доставляя, всепокорнейше прошу поднести Его Императорскому величеству. Может быть, и слишком с моей стороны хвастливая будет правда, когда осмелюсь сказать, что о языке сем нет еще в ученом свете столь подробных сведений. Последнее путешествие Тунберга показывает, сколь много японцы к разпространению в других народах языка их препятствуют и даже учатся сами голландскому, чтоб голландцы не имели возможности непосредственно изъясняться. Знаю, Милостивый Государь, что несовершен труд мой, но я и не выдаю его за такой; он есть только следствие моего усердия. Время, конечно, исправит сии сведения, но, по крайней мере, для Иркутской японского языка школы будут какая-нибудь к обихчению учащихся правила. Словарь просил бы я, Ваше Превосходительство, приказать скорее напечатать, но не подумайте, чтоб из самолюбия, а единственно к обихчению торговли, ибо как производить оную Россиянам, когда они и нужных слов знать не будут. Признаюсь, что немало труда стоило мне вникнуть в язык сей, но я буду стараться в Японии заимствовать дальнейшие познания о нем, доставленные вам первые труды мои были, сколько можно, усовершенствованы.

Путешествие мое, конечно, известно уже Вам из рапортов моих к Государю Императору. Записки свои, сколь ни желательно мне было приготовить к высылке, но занимаясь в пути японским языком, а здесь распоряжениями, не успел я привести в порядок, а к тому и жестокая болезнь, которую выдержал я под экватором, лишила меня времени переписать их. Я так отправлен, что ни одного писца мне не дано, и словарь, и грамматика самим мною переписаны. Не для того сказал я, чтоб уважить труды свои, но чтоб известны Вы были о моих недостатках. Виды и рисунки г. Курляндцова честь имею препроводить к Вашему Превосходительству, а журнал мой доставлю по возвращении моем из Японии. Здесь сделал я также распоряжения о доставлении к приезду моему

разных сведений. Хочется привести Вашему Превосходительству статистическое описание Камчатки. Прискорбно, что нет у нас об ней ничего свежее г. Крашенинникова, а с того времени в семдесят лет здесь все переменялось.

Письма г[оспо]д натуралистов Тилезиуса и Лангздорфа честь имею Вашему Превосходительству доставить, как и рисунки перьваго. Собрание животных в спирте оставил я в Камчатке и по возвращении из Японии оправлю их к Вам кругом света, ибо иначе нет удобных средств, так как и превосходную коллекцию бабочек и насекомых, собранных г[осподино]м Лангздорфом, котораго принял я в службу экспедиции на равном с г. Тилезиусом основании. Я не смею ценить таланты их, но сколько позволено каждому по наружности людей обсуживать, то основательность в заключениях последнего мне более нравится, и, кажется, Академия в записках Лангздорфа не найдет столько знакомаго, как в записках другаго. Он в трудах неутомим. В путешествии принял он на себя труд от тропика до другаго делать ежечастныя наблюдения барометра и сочиненныя им перьвыя сего рода таблицы препроводил чрез г. Крафта к Вашему Превосходительству, так как и словарь языка островов Маркезовых. Примечания его о светящихся в море телах и повсеместныя оным испытанія усовершенствуют также сию часть натуральной истории. Небольшую коллекцию птиц и несколько чучел животных отправляю я отсюда сухим путем. Каталог им приложить честь имею. Весьма поспешной путь наш и малое число релашей не дали средств увеличить собрание Кабинета, но надеюсь, что в Японии труды г. Лангздорфа сделают его интереснее. Предприимчивость и деятельность сего человека позволяют мне иметь и другие на него виды. Кроме природнаго немецкаго языка знает он латинской, французской, англинской и португальской. При многих талантах его он медик, практиковал и надеюсь, что японцам чрез то приятен будет. Ежели торг с ними открыт будет, оставлю я его там с несколькими людьми, чтоб поставить твердую Российскую ногу, доколе настоящаго агента от двора учреждено не будет. Я признаюсь Вам, что чего б ни стоило, я все силы употреблю к открытию торга самым делом, а не на бумаге.

Между тем поручая себя в продолжение лестных для меня благосклонных Вашего Превосходительства расположений, имею честь быть с совершенным почтением и преданностию

Вашего превосходительства

Милостиваго государя

всепокорнейший слуга

*РГИА, ф. 15, оп. 1, д. 2, л. 8–9 об.*

(М. Мальшева / В. Познанский)

31

*Письмо Н.П. Резанова графу Н.П. Румянцеву*

[ 22 или 25 августа 1804 г.]

Милостивый Государь Граф Николай Петрович!

Торопясь к выходу в море, не имею я времени исполнить долг мой и особым донесением повторить вашему Сиятельству подробности всех предположений моих в разсуждении японского торга, и потому осмеливаюсь представить на благоусмотрение вашего Сиятельства копию с донесения моего в главное правление, все предметы в себе заключающая. Я старался сколько можно представить будущия пользы пути экспедициею нашею проложеннаго и остается патриотическому вашему духу возбудить таковой же и во всех акционерах. Я желаю быть полезным отечеству, сколько сил моих есть охотно отдаю себя на все путешествия, располагайте жизнью моею без всякой пощады, лишь бы к чему-нибудь она пригодилась. Столь же лестно для меня заслужить и доброе вашего Сиятельства заключение. Со временем изволите вы узнать, сколь выше я всех личных оскорблений и когда-нибудь отдадите жертве моей справедливость. Впрочем, истинно ничего я не желаю. Успех – в славе Государя – вот одна награда моя.

Со всеподданейше подносимых Его Императорскому Величеству двух рапортов честь имею прилагать копии.

В разсуждении оставленного мною японца Киселева, пожалованнаго регистратором и не имеющим жалованья, осмелился я определить ему в год 200 рублей и препроводить в Иркутск при оказии. Не угодно ли будет Вашему Сиятельству на подтверждение онаго испросить высочайшую волю.

Всепокорнейше прошу ваше Сиятельство повергнуть к стопам Ея Величеству вдовствующей императрицы и всей Императорской фамилии верноподданническия мои чувствования. Высочайшия ко мне милости их возбуждают во мне дух к предприятиям и

ободряют силы мои. Боже, продли дни Августейшаго дома, столь для нас щастливые!

Мы вышли на рейд и ожидаем благополучнаго ветра.

Поручая себя в продолжение Вашего Сиятельства милостей имею честь быть с совершенным почтением и проч.

*РГИА, ф. 15, оп. 1, д. 2, л. 7–7 об. Копия.*

(М. Малышева / В. Познанский)

32

*Письмо Н.П. Резанова министру коммерции Н.П. Румянцеву*

[До отплытия 25 августа 1804 г. в Японию]

Милостивый государь граф Николай Петрович!

Я имел честь писать к Вашему Сиятельству из Бразилии о разных встретившихся мне в пути моем прискорбиях. Теперь копию с всеподданейшего моего рапорта при сем прилагаемого удостоверит ваше Сиятельство, что все личные мне оскорбления ставлю я ниже, чтоб жертвовать для них пользою государственною, а потому займу ваше Сиятельство делами экспедиции. Мы вышли из Бразилии генваря<sup>128</sup>, обогнули мыс Горн марта 3, выдержали множество штормов, повредивших судно наше, совершили путь прямо в Камчатку, остановясь только на 9 дней в Нукаиве, одном из стровов Мендозиных, и пришли сюда благополучно июля 4-го. Ваше Сиятельство, может быть сказать изволите, что сколь поспешен был поход наш, столь же поспешно и я описание путешествия нашего довел Вашему Сиятельству до Камчатки, но Иван Федорович читал мне доставляемое им извлечение из журнала нашего плавания, и для того, чтоб не обременять вас вдвойне, приступлю я лучше к описанию коммерческой части.

По прибытии нашем нашли мы здесь цены необычайныя. Доверием господ акционеров понизил я их, и я, ваше Сиятельство, имею честь поздравить с первым полезным шагом компании, вами покровительствуемой. Я ожидаю, что охотския цены чувствительно понизятся. Они всегда будут, так сказать, торговым термометром для камчатской

---

<sup>128</sup> Точная дата отсутствует.

фактории, которая, имев торг с Япониею, не допустит уже их возвышаться. Положа здесь начало к облехчению края сего, иду я теперь в Японию. Время осеннее угрожает штормами, но жаль пропустить. Бесплезная зимовка лежала б у меня на совести и больше штормов замучила. Все мы знаем, что должны непременно отведасть и здешняго равенденствия, но мы уже довольно ознакомились с сими феноменами и держимся русской пословицы, что волка бояться, так и в лес не ходить. Ежели удасться посольство мое, то должно тотчас открыть торговлю и продолжать ее; но вопрос состоит – ни чем, ибо всего здесь много, но как, потому что людей нет для промысла. Я предписал между тем канторам: Иркутской – доставить сюда 2000 юфти, а охотской, где лежит до 300 000 котов, выслать сюда 50 000, дабы ежели будут они в Японии приняты, то вместо Кадыяка сходить нам еще в Японию. Ежели ж нет, то отвезены они будут в Кантон. Я сожалею, что от Иркутскаго начальства не сделано никаких предварительных распоряжений. Кажется, торг с Японией обещает не менее как преобразование всей Сибири. Между тем, без всяких пособий пробивая новый путь торговле, становлю я здесь твердую ногу компании и учреждаю в Петропавловском порте факторию, для которой предписал уже Охотской канторе, договоря 20 человек вольнонаемных выслать сюда и отправить рогатого скота и лошадей, кои здесь необходимы. Устроая здесь депо компании или складочные магазины, учрежу я, чтоб суда из Америки, привозя рухлядь, получали здесь нужные товары и того ж года возвращались; а Охотския, привозя сюда для Америки нужное, отвозили рухлядь для торговли Кяхтинской. Выгодное и центральное для всех мест положение здешней гавани столь же полезно и для торга с Япониею. Постарайтесь, Ваше Сиятельство, обратить внимание правительства на край сей, он достоин особливаго уважения. Описанныя в рапорте моем к Государю Императору обстоятельства истинно справедливы. Хлеб здесь без всякаго удобрения земли родится в восемь раз, а ячмень иногда в 14, но недостаток людей останавливает хлебопашество, а и последний народ погибнуть должен, ежели не дадут руку помощи. Здесь соли оставалось для военных чинов на один только месяц, а бедныя камчадалы хотя столь же охотно употребляли б ее, но давно уже не имеют. Я дал от компании железо, чтоб как-нибудь здесь выковали цырен и соли выварили. Начальник здешний генерал-майор Кошелев сколь ни старателен, но истинно всякое усердие потухнет, ежели не получает способов. Он представлял [прошение] о присылке цыренов и устроении солеварен, но по сие время не имеет решимости.

Простите, Милостивый Государь, что я обременяю ваше Сиятельство изъяснением недостатков здешняго края. Они великое имеют влияние на торговлю, а притом всякое доброе сердце должно быть ходатаем за страждущее человечество, а особливо в те дни, когда друг людей на престоле. Быв здесь всего очевидцем, привезу я министерству обо всем обстоятельныя сведения, по крайней мере, сколько достанет на то сил и способностей, а теперь заключу общими словами, что сама природа все обстоятельства для блага жителей расположила здесь столь щастливо, что остается только ими пользоваться и сделать здешнюю торговлю для всей России знаменитою.

С совершенным почтением и преданностию имею честь быть

Вашего сиятельства  
Милостиваго государя  
всепокорнейший слуга

*РГИА, ф. 15, оп. 1, д. 2, л. 6–6 об. Копия.*

(М. Малышева / В. Познанский)

33

*Донесение Главного Правления Российской Американской компании  
графу Румянцеву*

681

13 сентября 1804 г.

В Главном Правлении Р.А. Компании вторично рассматриваны бумаги, полученные минувшаго августа 6-го числа с острова Святыя Екатерины из экспедиции, кругом света отправленной, заключающия:

1. Письма от Г.Д.К. Кав. [господина действительнаго камергера и кавалера] Ник. Петровича Резанова
2. Донесения г. Кап[итан]-Лейт[енанта] и Кав[алера] Крузенштерна,
3. Донесения прикащиков Компании и
4. Письма от некоторых особ в экспедиции той находящихся.

Сии бумаги содержат в себе следующие известия:

1. Что экспедиция прибыла с обоими кораблями у помянутому острову 9 декабря 1803 года по старому штилю, и по отпуске сих депешей, по 3 февраля текущего года (что сделает 9 недель) задерживалась тут за переменою на корабле «Неве» мачт грота и фока, которые сгнили. И хотя сею остановкою довольно потеряно лучшего времени к обойдению Кап-горна, однако ж г. Крузенштерн (как он один пишет) решился оной обогнуть и без крайней необходимости не хочет спуститься к мысу Доброй Надежды. Обойдя же мыс Горн, прямо курс свой возьмет к островам Маркизов.

2. Как столь долговременное задержание экспедиции у упомянутого острова сделалось уже поздным и приход корабля «Надежда» к Японии, где также за исполнением Посольского препоручения, должно пребыть может быть столько времени, что принуждено будет и зимовать тамо, то прибытие онаго корабля в Камчатку (которое Компаниею предполагалось было летом нынешнего года) иначе не может совершиться, как весною будущего 1805 года.

3. Господин Резанов уверяет, что сей корабль «Надежда» (который куплен в Лондоне кап[итан]-лейт[енантом] Лисянским за самый крепкий и прочный и только что в 1800 году построенный) найден штурманом 12 класса Каменьщиковым старым уже девять лет, ибо усмотрено им внизу корабля выжженное клеймо того года (следовательно, построен в 1795 году.) и что связи, на коих утверждены палубы, так сгнили, что крупятся от руки! О старости корабля подтвердили в Тенерифе и французы, уверившие, что сей корабль был у них в полону, что очень кажется быть имоверным потому, что две мачты сего корабля, с коими он был куплен, были разстреляны ядрами и переменены новыми в Кронштате. Равным образом и о другом корабле «Неве» (купленном Лисянским же) по рапорту, поданному от корабельного подмастерья Корюкина, отзывается г-н Резанов, что и оной на острове Кадыке должно во многом, сверх многих уже сделанных со времени покупки починок, еще починить и исправить.

4. Г-н Резанов в одном из своих писем к Директорам сего Правления изъясняется следующими словами:

... § 4 ) Что при возвращении судна «Надежда» кап.-лейт. Крузенштерн предполагает отыскивать какие-то острова, гишпанцами в XVII веке в Тихом

океане найденные и потом потерянные, также как мы и сюда идучи тщетно другой остров Ascençao, который на гишпанском языке тоже значит, что Ascencion на французском. Не можно в одно время делать открытий и производить торговлю, так чтобы одно другому в чем-либо не противодействовало. Впрочем, зависит от воли гг. Акционеров и теперь знатный груз свой подвергнуть излишним опасностям...

5. Наконец, г. Резанов и г. Крузенштерн приобщили при своих бумагах взаимную между собою и единогласную переписку и другие разные бумаги, из коих значится, что г. Резанов как не только аккредитованный и от лица Америк[анской] Компании за непосредственно хозяйствующаго над всею оною экспедициею, ея грузом и торговыми видами, но и уполномоченный Высочайше данною ему (10 июля 1803 [г.] за собственноручным Е[го] И[мператорского] В[еличества] подписанием) инструкциею начальник оная экспедиции, требовал от Крузенштерна признания в сем Высочайше возложенном на него звании, объявляя ему еще на Кронштатском рейде помянутую инструкцию (в 1 пункте которой, между прочим, сказано:

сии оба судна с офицерами и служителями в службе Компании находящимися, поручаются начальству Вашему. Соображаясь пользам Компании, от которой Вы уполномочены, имеете Вы предохранять оную от могущаго в интересах ея последовать вреда и ущерба...

А во втором пункте:

... предоставляя флота г. капитан-лейтенантам Крузенштерну и Лисянскому во все время вояжа Вашего командование судами и морскими служителями, яко частью от собственного их искусства и сведения зависящею, и поручая начальствование из них первому, имеете Вы с Вашей стороны обще с г. Крузенштерном долгом наблюдать, чтоб вход в порты был не иначе как по совершенной необходимости, и стараться чтобы все споспешествовало сколько к должному сохранению экипажа, столько и к скорейшему достижению цели, Вам

предназначенной...)

Но г-н Крузенштерн, как из происшествий видно, скрывал с другими обязанность признания г-на Резанова за начальника своего под скромным и дружеским обхождением, желал противныя намерения свои сберечь до пределов, вне Европы лежащих, и там удобнее обнаружить неповиновение, что и сбылось: ибо на острове Святыя Екатерины, когда г-н Резанов, во исполнение означенной Высочайшей инструкции (повелевающей по прибытии в острова Сандвичевы отправить судно «Неву» на Кадык и снабдить капитана того корабля наставлением) послал капит.-лейтенанту на случай неожиданной разлуки, учтивейшее до хозяйственной и экономической части на о-ве Кадыке относящееся наставление, а г-на Крузенштерна тогда же особым письмом просил, чтоб и он снабдил Лисянского своими предписаниями по морской части в разсуждении курса и плавания его, – тогда Лисянский, не приняв того наставления, под предлогом будто не по команде ему оное доставлено, возвратил обратно г-ну Резанову; а г. Крузенштерн, взяв сие за повод, тремя письмами своими требовал от г. Резанова объяснения, почему он, лишая его права начальствования над экспедициею, будто бы непосредственно вверенной ему от Компании данною инструкциею, кроме которой он никакой иной не признает, нарушает дисциплину и почитает его, Крузенштерна, начальником только над парусами, отзываясь при том...

*ОР РНБ, ф. 152, оп. 1, д. 379, л. 126–129. Копия с копии [окончание документа отсутствует].*

(М. Мальшева / В. Познанский)

*Фрагмент записи Ф.И. Шемелина о встрече посольства Н.П. Резанова японскими  
чиновниками в порту Нагасаки*

26 сентября 1804 г.

Чиновник японской, стоявши посредине своего судна, взглянув на нас, учтиво

поклонился. Первые вопросы его были следующие: какое судно и откуда? Какие на нем люди? Куда идет и зачем?

Ему на то чрез одного у нас находящагося японца ответствовано, что судно военное Российское прибыло из России и люди на нем есть Россияне, что находится на оном от Российского императора Полномочный Посланник к Японскому императору с грамотою и дарами, что имеются на корабле четыре человека японских подданных, которые несколько лет тому назад имели нещастие претерпеть судокрушение и быть выброшены на берега, принадлежащие России, и которые теперь возвращаются паки в свое отечество, что судно наше идет в Нангасаки.

На сие возразил чиновник японской, что в Нангасаки никто не может войти без особенного дозволения их Государя и что одним только голландцам то дозволено.

Ему ответствовано, что мы на входе в гавань Нангасакскую от Государя их уже дозволение имели, которое Россиянами получено тогда, когда подобным же образом как и сии теперь находящиеся у нас четыре японца, прежде Кодай с товарищи возвращены были в Японию и отданы в Матмае.

Наконец наши японцы, все четверо, одевшись в Рус[с]кое нарядное платье, спустились в японскую лодку и в самом раболепнейшем положении представились к своему чиновнику. Они стали пред ним на колени, протянули руки и оными положили головы свои на полу. Во время же разговору с сим господином они не отделяли рук своих от полу, но только, приподняв голову, ответствовали ему или сказывали от излишняго подобострастия, каковое объяло наших японцов. Многова из ответов начальника нашего не смели они переводить, почитая то или за оскорбление их нации, или опасались, чтоб такие ответы не приписаны были собственной их дерзости, а потому с нашей стороны за глупостию сих переводчиков и не можно было всего объяснить и удовлетворить чиновниково любопытство, о чем знать ему хотелось.

*ОР РНБ, ф. 550, F. IV, 59/2, л. 26 об. – 27 об. Рукопись.*

(М. Малышева / В. Познанский)

*Из инструкции Н.П. Резанова Ф.И.Шемелину  
от имени Российско-Американской компании*

275.

26 сентября 1804 г.

Нагасакской Рейды на Корабле Надежде

Имея высочайшее от Его Императорского Величества поручение ходатайствовать у Японскаго Престола о прочном постановлении Российския с японцами торговли, беру я в соображение все в таковую торговую связь входящия обстоятельства и нахожу нужным вам, как доверенному от Российской компании в торговых ея производствах сообщать предварительно мои замечания, с таковым при том с моей стороны вам предписанием, чтоб вы, совершая со мною сие путешествие, обратили всевозможное ваше внимание к приобретению вернейших сведений по всем тем предметам, которые от меня вам здесь на вид поставлены будут, между тем как об отдаленной державе сей по необращению ея ни с кем, кроме голландцов, никаких достоверных сведений нет, исключая путешествия Кемфера, которому более 100 лет протекло, а в 1776 году путешествие Тунберга есть ничто иное как сколок с первого, то и должно теперь руководствоваться тем, что есть, доколе есть на месте сами себя в сем деле лучше не усовершенствуем.

В разсуждении вывоза из Японии товаров, могущих дать очевидную прибыль, считаю я полезным следующие: медь, пшено, камфора, чай, бумажные ткани и дабы, шелковые ткани, сахарный песок и леденец, фарфор, бумажные обои, роговые изделия, лаковые вещи, парасоли, опалы, тушь, трости и корня растущаго в Миако бамбука, соя, фрукты в сахаре и в соли.

Сказав вам о вывозимых товарах, намечу здесь и те, которыми мы Японию снабжать можем: жир китов[ый], тюленей и рыб, соленая рыба, моржовый зуб, мамонтовая кость, олени и лосиные кожи, юфть, клей рыбий, меха, железные «инструменты», «затрапезныя» материи, холст, и полотна, сукно, и «разныя шерстяныя материи», зеркала и др[угие] изделия из стекла, стеклянная посуда, поташ.

О всех, в сей инструкции упомянутых товарах, старайтесь в Японии узнать точныя их цены и не упускайте примечать, не можем ли сообразно их нуждам и обычаям, и притом соразмерно нашим способам и сверх того что-либо доставлять им.

Таковой подвиг вам послужит к чести вашей, сделает вас совершенно полезным Отечеству, для которого столь ревностно принесли вы уже себя в жертву, оправдает выбор компании, а мне доставит удовольствие торжественно вам отдать справедливость. На подлинном подписано: Николай Резанов

*ОР РНБ, ф. 550, F. IV, 59/2, л. 130 об. – 135. Рукопись.*

(М. Малышева / В. Познанский)

37

*Донесение посла Н.П.Резанова императору Александру I из Японии*

15 октября 1804 г.

Нагасацкая Гавань на корабле "Надежде"

Всемиловейший государь!

По отправлении Всеподданейшего донесения моего Вашему Императорскому Величеству из Камчатки, вышли мы из Петропавловской Гавани 26-го, а из Авачинской Губы 27-го августа. 30-го числа выдержали шторм в параллеле Курильских островов и наконец благоприятные ветры доставили нам удовольствие увидеть берега Японской Империи. 19-го числа вблизи их в  $31^{\circ} 7'$  северной широты и  $145^{\circ}$  западной долготы от Гринвича претерпели столь редкой шторм, что я нахожу достойным описать его вкратце Вашему Высочеству. Ветер свежел с утра постепенно и барометр понижался. Крузенштерн, капитан наш, в полдень успел убрать заблаговременно все паруса и наконец поставил уже одни штормовые стаксели. В  $3 \frac{1}{2}$  ч[аса] по полудни сделался столь сильной ветер, что громадные волны океана обратил в одну пыль, смешанную с атмосферою и, неослабно продолжаясь, рвал все без милосердия. Руль закреплен. Наконец стаксели вырвало, и нельзя было нести ни одного паруса. Сила вихря раздирала даже в куски паруса; галерею и корму обломало; вода лилась в каюты и через борт; мгла не позволяла видеть даже грот мачты; барометр – чего ни в одном путешествии не случалось – понизился ниже всех делений, так что ртуть упала и 3 часа не видно ее было. Капитан, офицеры, экипаж безстрашно работали; все сделано и неукротимая стихия взяла верх над искусством; порыв за порывом продолжались непрерывно и нас несло на

берег. Мы ждали судьбы своей, как вдруг в 8 часов переменившийся столь же жестокий ветер понес нас от берегов и в полночь стихать начал, но мы [от берегов?] так близко были, что на другой день их увидели. Судно однако ж в составе своем, как и такелаж, остались без большого повреждения. Наконец, пройдя между матерым японским берегом и многочисленными островами, пришли мы 26-го числа сентября к Нагасаки благополучно. Правительство японское приняло нас дружелюбно. Офицерам Вашего Императорского Величества оставлены шпаги и караулу моему ружья. Мы введены в гавань в виду города, но приблизимся к нему не прежде как через 25 дней по возвращении курьера из Иедо. Губернаторы приказали в знак гостеприимства доставить нам припасы без платы, и я, хотя лично их не видел, но пользуясь их благосклонностью, просил через банжосов отправить к Вашему Величеству мои донесения с идущими отсюда в Батавию двумя голландскими кораблями и вручил им в дубликате для доставления Вашему Императорскому Величеству оттуда с разными судами.

Капитан, офицеры и экипаж – все здоровы и благополучны и, не имея возможности писать к их родственникам, всеподданейше просят Ваше Императорское Величество высочайше повелеть известить их через газеты о благополучном нашем сюда приходе, или из Монаршей милости иначе их обрадовать.

Вашего Императорского Величества  
Верноподданный  
Действительный камергер Резанов

*ОР РНБ, ф. 152, оп. 1, д. 379, л. 87–88. Копия.*

(М. Малышева / В. Познанский)

*Фрагмент записи Ф.И. Шемелина в судовом журнале корабля «Надежда» о встрече  
посольства Н.П. Резанова в японском порту Нагасаки*

Декабрь 1804 г.

5-го числа был день торжественного въезда Посланника нашего в Нагасаки. В семь

часов по утру японския большия суда, как те, кои прежде составляли стражу, так и вновь приведенные и разставленные по обе стороны корабля, все одеты были шелковою одеждою, занавесы, закрывающие судовые бока и кормы прежде того состояли из толстой бумажной синей ткани, но сего утра превратились в гладкия фанзовых цветов разнообразных. Новые шелковыя прекрасныя и нами до того еще здесь невиданные флаги и вымпелы японския различных и ярких колеров с позлащенными на верху высоких древков шарами, полукружиями и других изображений украшали кормы судов их и являли для глаз поразительную картину.

Но судно, для Посла приготовленное, было о шестидесяти четырех веслах, называемое по-японски шекифуке, оное как по величине своей, так и по особенной конструкции было возвышающимся колоссом против других. Оно украшением своим гордилось подобно как златолазурными перьями своими гордится павлин: ветры разведали на оном занавесы на шелковом толстом шнуре вокруг его развешанныя, кои были из новаго атласу или канфы японской трафчатой, длиною каждая в три аршина белаго, пунцоваго, алаго, розоваго, голубаго, палеваго, синего и других цветов. Они спущены были сверху вниз, одна подле другой и представляли взору нашему нежную и веселую пестроту.

Коль скоро два Обер-Банджоса прибыли на корабль, то Его Превосходительство тот час отправил для обозрения дома Надворнаго Советника Фоссе, лейтенанта Ромберга, Астронома Горнера и Натуралиста Ланздорфа. Между тем, пока они ездили в Нагасаки, мы погружали вещи Посланнику принадлежащия, и свои на лодки Японския, нарочно для того присланный.

В 12 часов чиновники, посланные в город, возвратились и донесли Посланнику, что они нашли тот дом весьма хорошо устроенным, в котором комнат для пребывания Посланника находилось довольно и кои все во вкусе японском убраны прекрасно, равно и магазины для склада груза обширны и удобны.

Его превосходительство, получа такое одобрение, весьма был доволен и приказал лодкам, нагруженным вещами нашими, отправиться в город наперед себя. Посланник и мы стали обедать, и стол кончился в 1 час по полудни. Господа японския с самого утра до того времени, пока не отправился Посланник, с нетерпением ожидали на шканцах, где на юте поставлены были им стулья.

Когда все было готово, и судно Шекифут стояло подле корабля, с борту котораго на борт

нашего корабля положены были покойные и безопасные переходы с балюстрадом из дерева чистою столярною работою, нарочно для сего случая японцами сделанные, тогда вышел Посланник на палубу, где солдаты, поставленные в строй, командуемый капитаном при барабанном бое отдали ему честь, первые солдаты с капитаном вошли на Шекифун и Российский Императорский штандарт несен был наперед их унтер-офицером, они помещены на корме судна. Потом несена была двумя чиновниками Посольства в футляре, из красного дерева сделанном, Императорская грамота. За оною следовал Посланник, а за ним шли чиновники его свиты, флотские офицеры, между коими находился и я. Посланник и мы спустились по небольшой лестнице во внутренность судна, где находилась комната прекрасная, по середине которой на четырех столбиках сделан был четырехугольный продолговатой фигуры балдахин, черным наилучшим японским лаком вылакированный, под которым поставлены уже были кресла Посланников черным с желтыми пятнами косматым бархатом покрытия, куда перенесены благовременно. Стены сей комнаты, противулежащая носу и корме, завешены травчатою разноцветною канфою и такого же точно, каковы были занавесы на верху палубы по шнуру вокруг судна развешанные. Грамота положена была на столе, поставленном под балдахином, и Посланник сел под тем же на свои кресла. Вместе с нами находилось здесь японских унтер-офицеров и переводчиков человек до десяти. Посланник и мы угощаемы были чаем с апельсинами.

Когда старшие Банджосы оставили корабль и сели в свое судно, тогда дан знак к отвалу: матрозы, разставленные по вантам, кричали троекратно «ура», а с судна нашего ответствовали тем же солдаты. Каким восхищением объаты были сердца наши, когда видели Российско-Императорский штандарт на японской галере, среди флагов гордаго сего царства находясь, возвышался над оными и полоскаясь, развеваемый ветром по воздуху казался веселящимся и торжествующим. Российкий орел, преодолев все препятствия, полету его останавливающие, облетел безвредным кругом света и теперь парил уже по воздуху тихом и ничем невозмущаемому, спешит возвестить державе Японской мир и дружбу россиян и с основанием в Нагасаки новой торговли, выгоды от оной проистекающая утвердить между двух соседственных государств.

6 декабря 1804 г.

... Ответствовал Посол ..., что не получал он столь много от незнакомых ему особ одолжений, как от господ Губернаторов, и что ему весьма приятно видеть лично тех, кому он так много обязан. Губернаторы отвечали с благодарностию.

Потом другой Губернатор сказал, что хотя известна им причина приезда его в Японию, но как Даймио прислан из Иэдо, чтобы еще лично от него узнать и выслушать, то с превеликим удовольствием отвечал Посол и объяснил ему. По выслушании речи его проговорил Даймио и обер-толки перевели, что Император их удивляется благодарности, Российским Государем изъявленной за торговлю, на которую никогда позволение дано не было, а притом как можно только писать к Кубовскому Величеству, когда Лаксману имянно внушено и подтверждено было, чтоб никаких никто с Японией не имел переписок и что самое первое условие нарушено за то, что Император их был к нему милостив.

Посол посмотрел на них с улыбкою, сказал, что он не понимает, что это значит, и для него удивительно, как можно взыскивать оскорбление в том, в чем особливая честь заключается. Переписку великого Государя все Европейския Императоры и Короли иметь за щастие поставляют<sup>129</sup>. И может ли Кубовскаго величества повеление относиться Лаксман на великую особу всероссийскаго Государя, которой также Император, как и Кубо? И кто из них более, не нам решить здесь. Посол сие сказал с довольным жаром.

По переводе слов его Губернатор Фидабуйегона тотчас переменял тон, сказал, что он думает, что Посол беспокоим японским сидением и что они закрывают заседание их до завтрашняго дня.

Посол, встав с места, поклонился им, но они не отвечали.

24 декабря 1804 г.

Посол вышел и обер-толки перевели ему: 1-е, что Государь их приказал послу сказать, что в древние времена было всем народам ходить в Японию, также и японцам выезжать из отечества невозбранно, но два уже столетия как сохраняется неперменным правилом, чтоб никто в Японию, кроме древних приятелей их, вновь не приходил, и японцы из

---

<sup>129</sup> Вероятно, ошибочно переписано. Правильно будет – полагают. –Ред.

отечества своего отнюдь не выезжали. А как Российский Государь прислал Посла с подарками, то японския законы требуют, чтоб тотчас ответствовать тем же, а как Посла отправить в Россию не можно, ибо никому из Японии выезжать не позволяется, то ни Грамоты, ни подарков он не принимает, о чем все соизволения Японской Империи чины утвердительно определили.

2-е. Что Империя Японския издревле торгует только с Корейцами, Ликейцами, Китайцами и Голландцами, а теперь только с двумя последними, то и нет нужды в новой торговле.

3-е. Что как запрещено ходить в Японию другим нациям, то следовало бы поступить по законам, но уважая доброе намерение Российскаго Государя, отпустить судно наше обратно и дать на дорогу провизии, с тем чтобы никогда Россияне в Японию больше не ходили, и как другой бы нации судну шести месяцев в Японии быть не позволили, то принять это за милость ея.

Выслушав сие, сказал Посол, что до торга касается, то он Россий не нужен, а Российской Император хотел показать милость свою Японцам, которых многих надобностей иметь не могут, и буде отказываются то им же хуже.

Да как нам торговать с Вами, сказали обер-толки, у нас лаковых вещей для России не достанет. Они нам всего меньше нужны, сказал Посол, но что принадлежит до подарков, то напрасно Кубовское величество думал, что Государь мой хочет подарков или Посольства. Всему свету известно, что Япония не позволяет никому выезжать, посольств не посылает и имеет единственные и собственные свои обычаи, а принять подарки должны для того, что присланы от великого Государя, обещающего дружбу.

*ОР РНБ, ф. 550, F. IV, 59/2, л. 65–68 об., 76–76 об., 79–80. Рукопись.*

(М. Мальшева / В. Познанский)

*Запись Ф.И. Шемелина о вопросах Н.П. Резанова к японской стороне и  
полученных ответах*

24 декабря 1804 г.

1. Чтоб дали охранительный лист, чтоб в случае невольного от бурь и ветров приближения к берегам приняты были Россияне, как дружественной державы подданные и отпущены в путь свой, а не водить в Нангасаки, как у них объявлено, и притом дано было за деньги всевозможное вспомоществование.

Это уже опубликовано, — сказали они, — чтоб Россиян принимать друзьями, но еще и подтверждено будет.

Все это хорошо, — сказал Посол, — но надлежит известить вас прибрежных жителей обеих сторон Японии, потому что мы и Корейским морем ходить будем. Они при сем слове взглянули друг на друга и вскоре отвечали, что все без сомнения вельможами их решено будет.

2-е. Ежели японцы впредь, претерпев кораблекрушение, будут спасены на берегах российских, то куда доставлять их?

Обертолки ходили и, возвратясь, сказали Послу, что Совет разошелся, они обещали завтра принести ответ.

*ОР РНБ, ф. 550, F. IV, 59/2, л. 81. Рукопись.*

(М. Малышева / В. Познанский)

*Фрагмент записи Ф.И. Шемелина о таможенных действиях японских чиновников в порту  
Нагасаки в отношении японцев, привезенных посольством Н.П. Резанова*

27 декабря 1804 г.

... Чиновники потом вышли на двор, где находились вещи, принадлежащие привезенным нами Японцам, которые при свидетельстве их все были осмотрены и

переписаны; сверх хорошего суконного и из других материй платья, порядочного белья, шелковых и бумажных платков оказалось у некоторых и денег довольно число. У Гигея серебряных рублей сторонних молодых и гишпанских пиастров всех до 370 штук и 12 золотых червонцев; у несчастного и больного Танзуро нашли серебряных монет 160 и 12 тож червонцев; у старика Судаю серебром 33 штуки, а золотом он не показал, как и часов, пожалованных в сем числе в С. Петербурге от Государя Императора, при осмотре ни у кого не оказалось; у четвертаго – Софея денег явилось меньше всех; он показал только 10 пиастров, а прочия, как думать надобно, сокрыл.

*ОР РНБ, ф. 550, F. IV, 59/2, л. 84 об. – 85. Рукопись.*

(М. Малышева / В. Познанский)

42

*Фрагмент записи Ф.И. Шемелина о судьбе Кодая, вернувшегося из России*

4 января 1805 г.

Некоторые из соотчичей их, приезжающие на корабль наш с японскими чиновниками, уведомили, что японец Кодай, возвращенный из России, также как и они с самого того времени, как вступил он на Японскую землю, не имеют свободы жить в своем городе, не видался с своими родственниками, что ему запрещено всякое сообщение с гражданами и с своими ближними, что он живет теперь в Иэдо взаперти. И в сем положении находится уже 12 лет.

*ОР РНБ, ф. 550, F. IV, 59/2, л. 96–96 об. Рукопись.*

(М. Малышева / В. Познанский)

*Министерская нота посланника Н.П. Резанова приготовленная на тот случай, если бы случилось оному в Иэдо с японскими министрами трактовать о основании, на коем должна быть поставлена между обеих империй торговля*

1. Просить порта в северных пределах Японии.
2. Просить позволения на приход большему числу кораблей.
3. Объясниться о грузе, каковым приходящие из Европы российские купеческие корабли снабжены быть могут, полагая в необходимость получения меди и камфоры.
4. Объяснить, что в удостоверение того, сколь много российский император желает, чтоб между соседскими и дружескими державами торговля существовала ко взаимным выгодам подданных обеих империй, всегда некоторая часть пшена брана будет и для того отныне ни всегда постановить пшено как изобильному здесь продукту умеренную цену.
5. Испросить цены всем здешним продуктам и образцы всем товарам.
6. Постановить следующую в казну и безотяготительную для торгующих пошлину.
7. Отвести торгующим место, выстроить магазины и определить за то плату.
8. Российское купечество будет повиноваться законам японского правительства, но русскому начальнику или Обер Гоупту и другим россиянам с доклада господам губернаторам позволить выходить в город и за город.
9. Просить письменно обряд, каковым с россиянами торг производится будет, дабы российское купечество я о том предварить мог.
10. Как торговля должна быть свободной, то привезенные сюда и по изобилию тех вещей или дешевизне не распродающиеся здесь число товаров, дабы не было торгующим убытка, позволить отвозить обратно.
11. В торговле предоставить свободы, какие в Японию возить и из Японии вывозить товары, не делая в том ни малейшего принуждения.
12. Просить, чтоб при приходе кораблей они ни мало задержаны не были и в разсуждении съестных припасов снабжаемы были всем нужным и за сходные цены. Как равно и зимующия здесь суда.
13. Известно россиянам, что японские законы, кроме нангасакского порта, ни к каким

берегам иностранным судам приставать не позволяют, но как может иногда случится, что, чего боже сохрани, несчастливим случаем судно может бурей на берег или выброшено быть или для спасения к берегам приблизится, то не вменять сего в вину, но как с дружественной, державе создать всякую помощь.

14. Сколь ни желательно мне скорее удостоверить японский двор, что российское купечество готово предпринять здешнюю торговлю и ожидает только моего возвращения, но основывая всякое дело к истине, поставляю себе долгом сказать, что отправясь отсюда, возвращусь я в Россию наперед тринадцати месяцев, и как надобно будет того же лета снаряжать суда, приготовить людей для здешней фактории и груз товаров, что по замерзанию осенью Санкт-Петербургского порта и бурливому пред тем времени, едва ли успеть можно будет, то первое судно отправиться из России в Японию в 1807 году, сколь скоро откроется навигация и прибудет сюда в 1808 году непременно. Ежели же можно успеть будет, то может оно придти и в 1807 году.
15. Первое пришедшее судно, оставив груз и начальника или Обер Гоупта, который к будущему приходу судов будет приуготовлять товары, а между тем нагрузится пшеном и другими товарами для Камчатки, в сем подать ему всевозможную помощь, дабы купечество не потеряло убытка и судно успело благополучным воспользоваться ветром.
16. Ежели б первое судно, чего боже сохрани, не пришло, то японскому правительству считать не иначе, как оно претерпело нещастье и тогда сего в вину не ставя, принять другое судно, также как и первое.
17. Также будя европейские военные обстоятельства остановят торговлю, то таковое препятствие признать законным и в вину не ставить.
18. Умножение приходящих сюда кораблей будет зависеть от выгодности торга.
19. Ежели б по открытию торговли в продолжении оной оказалась бы она россиянам невыгодною, то позволить начальнику или Обер Гоупту и всем россиянам оставить Японию и отнюдь не считать сие нарушением дружбы, которую все милостивейший государь мой всегда и на вечные времена обещать изволит.
20. Всякую ветвь торговли россиян в пользу Японской Империи открытую предоставить им навсегда исключительно.

*АВПРИ, ф. С.-Петербургский Главный архив, I-7, 1802 г., оп. 6, д. 1, л. 2, л. 10–10 об, 26–27; Архив РГО, разряд. 99 (Ж. VIII. 1), оп. 1, N 135, л. 15 об. –16 об.*

(А. Кириченко)

45

*Калашников И.Т. Записки иркутского жителя (фрагмент рукописи)*

... В 1805 году была открыта в Иркутске гимназия с уездным и приходским училищами.

... Сверх наук преподавались языки европейские: латинский, французский и немецкий; азиатские – китайский и японский. Из преподавателей языков особенно были замечательны: немецкого лютеранский пастор Иван Юрьевич Беккер и азиатского Николай Петрович Колотыгин, природный японец...

Преподаватель японского языка Колотыгин был из Японии занесен бурей в Камчатку. Быв привезен потом в Иркутск, он принял православную веру и русскую фамилию; выучился по-русски и имел детей, которые учились в гимназии; словом, был счастливый семьянин, был весьма хорошим человеком.

Так иногда случай неожиданно располагает судьбою людей!

*ОР РНБ, ф. F IV, 814/2, л. 67–70.*

(М. Малышева / В. Познанский)

*Обращение Сибирского генерал-губернатора И.О. Селифонтова к министру коммерции  
графу Н.П. Румянцеву с вопросом об устройстве учеников Иркутского главного  
народного училища, обучающихся японскому языку*

756

13 февраля 1805 г.

Иркутск

Милостивый государь. Граф Николай Петрович!

Между занятиями моими по должности в Иркутске, входя в рассмотрение учрежденного здесь при народном училище класса японского языка нашел я, что находящиеся во оном с давних лет, достигнув совершенного возраста, остаются никуда не определенными и по малополучаемому ими жалованью терпят в содержании себя величайший недостаток, а притом и относительно служения, не имея никакой цели, разсматриваются в своем положении. Причины сии побудили меня узнать, в какое кто из учеников сих состояние поступить желает, вследствие чего директор училищ Иркутской губернии коллежской советник Кранц представил мне поданный к нему от учителя японского языку Колотыгина рапорт, в котором изъяснено, что из числа состоящих в японском классе учеников шести человек объявили желание быть: Андрей Амвросов – в духовном звании; Прокопий Косыгин – при народном училище; Лев Кокулин – в статской службе; Яков Парняков – в штате Почтового департамента; Иван Миронов – в нынешнем его звании и продолжать далее учение японскому языку, прося по дороговизне всего прибавить ему жалованья.

В имянном высочайшем указе, состоявшемся в 13-й день сентября 1791-го года на имя правившаго должность Иркутского и Колыванского генерал-губернатора Пиля, между прочим, в девятом пункте повелено: «Как из числа японцев (вывезенных с Алеутских островов) двое приняли христианской наш закон, и следовательно, в отечество свое возвратит[ь]ся не могут, то употребить их у нас для обучения японского языка, который при установлении торговых с Япониею отношений весьма нужен будет, чего ради и возлагается на распоряжение ваше, дабы они помещены были при Народном училище в Иркутске с соразмерным жалованьем, и на первой случай отдать им для обучения японского языка пять или шесть мальчиков, нарочно к сему выбранных из тамошних

семинаристов, дабы они со временем могли служить и переводчиками, когда произойдет у нас желаемая связь с японским государством и распространить учение столь нужного к тому языка японского».

Во исполнение сей высочайшей воли по распоряжению правившаго должность генерал-губернатора означенной при здешнем училище японской класс открыт сперва был из трех учеников, присланных из Иркутской семинарии, а потом по указу Правительствующаго Сената 1796-го года апреля от 7-го числа еще прибавлено из семинаристов же трое, из которых один по неспособности к сему учению и по собственному его желанию в 1799-м году уволен в первобытное звание, а на место его принят сын учителя Колотыгина Михайло, с коим находится ныне всех шесть человек. Содержание они получают от Приказа Общественнаго призрения, по мере успехов их в учении.

Поелику изучение японского языка учреждено на случай торговых связей с Япониею, которых однако ж поныне еще нет, а разве последуют оные по благополучном окончании известного посольства господина камергера Резанова, для чего по мнению моему довольно бы было оставить при учителе Колотыгине двух только учеников, а прочих по желаниям их употребить на службу. На как сие непосредственно зависит от благоразсмотрения вашего Сиятельства, то я, имея честь представить об оном к вам, Милостивый Государь, буду ожидать благосклоннаго вашего уведомления.

С истинным высокопочитанием и совершенною преданностию честь имею быть.

Милостивый Государь!

Вашего сиятельства

покорнейший слуга

Иван Селифонтов

*РГИА, ф. 13, оп. 1, д. 191, л. 1–2 об. В начале документа запись: «Докладывано Государю Императору 31 марта 1805. Учеников японс[кого] языка оставить в распоряжении Мин[истра] коммерции».*

(М. Малышева / В. Познанский)

*Из донесения Ф.И. Шемелина посланнику Н.П. Резанову о выполнении инструкции о  
сборе сведений о товарах экспорта и импорта Японии*

10 марта 1805 г.

Инструкцию вашего Превосходительства удостоился я получить в 26 число сентября на корабле Надежде при первом положении якорей на Нангасакском рейде, содержанием которого изволите предписывать мне обратить всевозможное внимание к приобретению вернейших сведений по всем тем предметам, которых Ваше Превосходительство в отношении будущей Российской с Японией торговли о вещах, могущих входить в оную на вид поставить мне изволили. Я, сколько могли допустить обстоятельства, в стесненное пребывание наше в Нагасаке, всемерно старался достигнуть некоторых познаний, хотя несовершенно, и чрез то выполнить Ваше предписание.

Я начну, во-первых, с собственных наших продуктов, как вырабатываемых на мануфактурах и фабриках Российских, так и о тех, которые производит Сибирь. Земля ее, леса и морские воды, обмывающие берега Камчатки и Курильских островов, о коих Ваше Превосходительство судить изволили быть с нашей стороны для сей новоучреждаемой торговли полезны<sup>130</sup>.

... Сверх всех тех статей о привозных товарах, могущих входить в японскую торговлю и коих Ваше превосходительство соизволило дать мне на замечание, открылись еще нижеследующие:...<sup>131</sup>

Российско-Американской компании прикащик Московский купец

Федор Шемелин

*ОР РНБ, ф. 550, F. IV, 59/2, л. 135 об. – 151. Подлинник.*

(М. Малышева / В. Познанский)

<sup>130</sup> Далее на 11-ти листах следует перечисление товаров, которые могла бы ввозить российская сторона в Японию.

<sup>131</sup> На 14-ти листах следует перечисление товаров, которые могла бы поставлять Япония в Россию.

*Объявление посланнику Н.П. Рязанову Нангасакского губернатора по повелению  
Его Императорского Величества*

Ненго Бунива, второго лета в 7 день Сангватса<sup>132</sup>

Япония, в Нангасаках

За десять лет в 1792 году прибыл российской корабль в Матсмай и тогда объявлено ему нами, что содержание дружбы и произведение торговли не могут состоять; что равно писанную по-японски бумагу, которой письмо довольно сходно с японским письмом, и коя однако ж невразумительна, нельзя препроводить в Японию по той особливо причине, что Матсмай не есть место, могущее извещать двор о делах иностранных государств; что ежели какая японцы есть в России и в Японию хотят посылать, и россияне о других делах хотят просить, сего в Матсмае никак нельзя учинить; однако ж что буде хотят оное возобновить, должно тогда идти в Нангасаки, потому что Нангасаки определено местом для исправления [дел] иностранных государств, вследствие чего дан паспорт, что российский корабль может притти в Нангасаки. Вышеупомянутыя причины уже изъяснены, а при всем том ныне опять из России привезено писанное по-японски письмо, из чего оказывается, что Россия поныне не совсем понимает объявления, и что сие происходит от разности поверья и от неведения земских обрядов, чего ради вновь по повелению японскаго Императора вышеписанное объявление повторяется.

Все корабельныя потребности, дрова и вода имеют быть даны.

Корабль по подъеме отсюда должен поспешно вытти в море и не приставать опять к валу, ниже остановиться на якоре у около лежащих островов японских.

*Архив РГО, разряд. 99 (Ж. VIII. 1), оп. 1, N 135, л. 5.*

(М. Мальшева / В. Познанский)

---

<sup>132</sup> 25 марта 1805 г. – *Ред.*

*Приветствие Императорского японского посланника к российскому послу*Ненго Бунива второго лета 9 день Сангватса<sup>133</sup>

Япония, в Нангасаки

Со времен прибытия на сдешния воды вы без всякаго сомнения немало были утруждены, причина однако ж, что оное столь долго продолжалось, есть, что дело часто в уважение было принято и рассмотрено с зрелостию разсуждения, потому что прошение происходит от великаго благоволения.

Перевел старший советник Костин.

*Архив РГО, разряд. 99 (Ж. VIII. 1), оп. 1, N 135, л. 5–5 об.*

(М. Мальшева / В. Познанский)

*Ответ министра коммерции графа Н.П.Румянцева Сибирскому генерал-губернатору**И.О.Селифонтову о шести учениках Иркутского народного училища,**обучавшихся японскому языку*

` 794

5 апреля 1805 г.

По отношению Вашего Высокопрево[сходительства] от 13 февраля об учениках японского языка, при Иркутском народном училище находящихся, я докладывал Государю Императору.

Его И[мператорское] В[еличест]во по смыслу указа бывшему генерал-губернатору Пилю 1791-го года 13 сентября данным высочайше повелеть изволил оставить тех учеников в моем распоряжении и впредь до усмотрения, не выводя их в другие состояния.

Сообщая Вам высочайшую волю, нужным нахожу знать, все ли шесть учеников хорошо обучились японскому языку или только некоторые, какие еще сверх того они берут уроки и по сколько жалованья они получают. Прошу Вас, М[илостивый] Г[осударь] мой,

---

<sup>133</sup> 27 марта 1805 г. – *Ред.*

уведомить меня о том. Полагать должен я, что не довольно обучаемым языку с сих пор настоятельнее будут обучаемы своему предмету, для которого были предопределены.

Честь имею быть с совершенным почтением

[Николай Румянцев]

*РГИА, ф. 13, оп. 1, д. 191, л. 3.*

(М. Малышева / В. Познанский)

51

*Выдержка из ответов Главного Правления Российской Американской компании на  
вопросы, рассматриваемые в сообщениях Н.П. Резанова*

282

29 апреля 1805 г.

... На 8-й предмет относительно разсуждения о Камчатке

Сколь вообще справедливо, столь и прилично во отношении к Камчатке сказать вы изволили, что без давольнага числа людей огромных видов достичь не можно, а потому еще более справедливее поступить изволили, что намекнули о том министерству, ибо когда правительство вникнет только в пользы свои, то мудрено ли в самом деле утвердить в Камчатке торговлю индейскую; но ежели всему во отношении сего края нужному споспешествовать одной компании, и толь еще поспешно, то это будет ей не под силу. Учреждая одно, разрушит она у себя другое. Дай только бог, чтоб успехи ваши в Японии были интересны, а тогда без сомнения и больший будет повод воззреть правительству нашему на весь тот забытый веками край.

На 9-й предмет о доставлении для корабля Надежды свежей провизии.

Предписание ваше Иркутской и Охотской конторам, чтоб доставить для корабля Надежды провизии, подтверждено от Директора Деларова и приказано назначенное для своих судов годовое заготовление обратить к Вам, и именно: 100 пуд масла коровьяго, 100

пуд крупы, 400 пуд сухарей ржаных, 300 пуд муки пшеничной, 70 скотин посолёных и все прочее, Вами требуемое с тем, чтоб из Якутска в Охотск отправить по ранним пластам. А как для доставления всего того к Вам у Компании нет в Охотске ни одного своего судна, на казенныя же принимать компанейскую кладь, как известно Вам, запрещено имянным Указом, то по сему случаю, а вместе с тем и по особливому вашему по требованию от Иркутскаго Главно-командующаго хотя и велено изготовить в Охотске казенное судно, но может ли оное застать Вас и доставить Вам означенныя приуготовления, того теперь узнать не можно.

Весьма жаль, что Директор Деларов, бывший в Охотске, не получил при себе сведений ни о прибытии Вашем, ни о требованиях. Он, конечно бы, остался там для дальнейших распоряжений по означенным предметам. Что принадлежит до товаров, требуемых Вами для японской торговли, то из них юфть, сколько оной будет в Охотске, конечно, к Вам отправится вместе с съестными припасами. 1000 замш едва ли в Охотске есть, ибо она привозится из Гижиги, отколь компанейские товары возить на казенных судах также запрещено, а потому два уже года оттоле не было. Но сколько оной сыщется в Охотске вся к Вам доставится. Котов морских в Охотске хотя и есть более ста тысяч, но оныя потребны для продажи в России, куда уже и свозить их приказано, и лошади наняты, а притом по тягости своей с прочею кладью на казенное судно и вместить трудно. Почему Главное Правление и не разсудило сих звериных кож к Вам отправить в том предположении, что удобно оных доставить зимующим ныне в Камчатске компанейскими двумя судами, или и тем, которое опять в Японию придет с островов Уналашки или Павла и Георгия, где уже есть и предписания сего правления, чтоб на случай требования экспедиции отпустить самых лутчих сих зверей кож.

! прочем за долг вменяет Главное Правление донести Вам, что корабль Надежда принадлежит не Компании, а Государю Императору, а потому Главное Правление ни в какое о сем судне распоряжение итти ли оному обратно кругом света или остаться где, входить не может, но токмо просит Ваше Превосходительство, что ежели по отношениям к Вам от верховнаго начальства, назначено оно будет к обратному путешествию, а Вы решитесь остаться обозреть Америку, то для опытной торговли в Кантоне или в других местах на пути том, не оставить поручить кому по благоусмотрению вашему разсудить изволите взять потребных для опыту товаров и оными распоряжаться по наставлениям

вашим, ибо посылка сей экспедиции и предмет оныя был опыт торговли.

На 10-й предмет, что оставится в Японии Шемелин, и что для Камчатской фактории нужен хозяин с просвещением.

Нельзя лутче сделать, как Вы расположены, чтоб Главного Экспедиции прикащика, как человека умного и сведущаго торговую часть, оставить в Японии, а в качестве агента г-на Лангздорфа. Но что принадлежит до сыскания человека для Камчатской фактории, чтоб был хозяин и притом хозяин с просвещением, то на сем пун[к]те Главное Правление останавливается, ибо самим Вам известно, сколь трудно сыскать такого человека. Людей с просвещением есть много, но о знании хозяйства их должно иметь опытных удостоверения. А такие люди захотят ли искать счастья в Камчатке, когда и здесь для них довольно есть занятий, да они же очень редки и здесь. Признание хозяйства с просвещением нужно еще, чтобы было знание и о торговле, но совокупно со всеми сими качествами и с доброю душою человека одно только большее жалованье или знатныя выгоды могут заинтересовать. Однако ж Главное Правление не оставит пещися о приискании достойнаго человека.

На 11-й предмет, о новом отправлении судов кругом света.

Предполагаемое Вами вторичное предприятие – строить здесь суда в 500 тонов и отправлять оныя кругом света – по всей справедливости должно, кажется, прежде сообразить с ожидаемою пользою от ныне отправленной экспедиции. Мы как хозяйственно управляющие делами Компании, усердствующие пользам ея и имея некоторые, хотя и не очень полныя еще сведения о нынешней экспедиции, однако U знаем, что весь ея груз потребный для оборотов компанейских и необходимых надобностей едва ли дойдет в надлежащие места в половину. О подробностях сего обстоятельства да позволено нам будет умолчать до получения полных сведений.

Судя же по сему, должно ли вверять вновь капитал Компании подобному риску, не видав еще никаких к тому прямо побудительных причин? А ежели бы оныя и открылись, то наперед должно согласиться со всем сословием Компании, чтоб не делить барыша

между собою, а соращать капитал ея. Но это, кажется, трудно согласить, ибо многие акционеры, вложив капитал свой для приращения, не внимают никаким другим видам, а требуют прибылей, которые ныне назначено уже за 1802-й и 1803-й годы выдать кому как угодно акциями или деньгами. И хотя желающих получить прибыли акциями и довольно оказывается, но за всем тем должно выдать деньгами более 700.000 рублей, и сей капитал выйдет уже из массы кампанейской. Впредь того ж ожидать должно. Следовательно, все действия Компании должно располагать по силам, соглашая оныя по возможности и с видами.

На 12-й предмет, о курильском отряде.

Сообщенное ныне от вас сведение о расстроенном курильском отряде на острове Александре, быв уже давно известно директорам, лежит на их сердце. Но причины несогласия между мореходами удалили Атхинского передовщика Лодыгина, отправившагося еще в 1799 году заглянуть на сей остров. Прошедшаго года отправленному на судне Константине в тот же Атхинской отдел мореходу вновь предписано побывать на оном острове, в чем он и контрактом обязан. Но ежели Ваше Превосходительство по собственному своему назначению удостоите оной вашим вниманием, то сей край, конечно, получит иной вид, и промышленность на нем усовершенствуется, почему Главное Правление всепокорнейше вас и просит, не исключить сего места из ваших попечений.

На 13-й предмет, о посланных счетах и о комиссионере Выходцеве.

Некоторые токмо счета о привезенных в Камчатку товарах и о подвергшихся из них гибели Главному Правлению прикащик Шемелин доставил. Разсуждение Ваше о камчатском комиссионере замечено. Кажется, что он и натурально не может воспользоваться прибылями от товаров, с вами прибывших, когда сии понижены ниже охотских цен. В прочем Главное Правление в полной мере надеется, что во вторичную вашу бытность в Камчатке узнать можете лутче все обстоятельства дел компании, подвергшихся там многим неприятностям; и ежели изыскание истин произведено будет

не по словам, но по сущности происшествий, то и безпристрастное суждение ваше будет верным наставлением Главному Правлению для будущего времени.

Затем имеет честь Главное Правление донести вам, что присланный словарь японского языка и руководство к оному в сафьян переплетены и Его Превосходительству Николаю Николаевичу для поднесения Государю Императору представлены. Доставка фамилии г-на Крузенштерна на год по 2000 рублей исполняется, о чем к нему и особой отзыв при сем прилагается.

Главное Правление, исполнив таким образом ответы свои Вашему Превосходительству, остается в том мнении и надеянии, что Вы, ежели чего теперь со стороны компании кажется исполнить и трудно и неудобно, найдете однако ж по местному обозрению обстоятельств возможность положить чему-либо из предполагаемых вами видов начало, конечно, не оставите тому событься.

Компания будет весьма довольна и счастлива всеми вашими в пользу ея сделанными учреждениями, во ожидании которых просит от всевышняго святого его благословения на все предлещие вам подвиги.

*РГИА, ф. 15, оп. 1, д. 2, л. 64–67.*

(М. Малышева / В. Познанский)

52

*Приказание Главного Правления Российско-Американской компании приказчику  
компании Федору Шемелину*

29 апреля 1805 г.

С[анк]т Петербург

Под Высочайшим Его Императорского Величества покровительством Российско-  
Американской Компании Главного Правления

Отправленной кругом света Экспедиции Главному приказчику г-ну Шемелину в  
Камчатку или в Японию

Приказание

Донесения Ваши из Петропавловской Гавани с приложением разных бумаг Главное

Правление получило и всеми ими совершенно довольно и Вас за оныя искреннейше благодарит, надеясь, что Вы и впредь, когда случай допустит писать в Компанию, не оставите продолжать Ваши аккуратныя извещения. Как Его Превосходительство уведомил Правление, что он намерен оставить Вас в Нангасаке, ежели бы успехи в Японии поблагоприятствовали дальним видам, то по тому уповая, что сей план собылся и не разсудило разспространяться своим к вам уведомлениями, почитая оныя в таком случае бесполезными, поелику Вас в Камчатке не застанут, довольствуясь токма сказать вам, что вы и в бытность вашу в Японии не оставите ничего того сделать, что сделать вам возможно будет в пользу Отечества и Компании, в чем на Вас Главное Правление и полагает сильную надежду, желая за тем Вам счастливых успехов и всех от бога благ.

*РГИА, ф. 15, оп. 1, д. 2, л. 95.*

(М. Малышева / В. Познанский)

53-1

*Сообщение Сибирскаго генерал-губернатора И. О. Селифонтова графу Н. П. Румянцеву  
о прибывших в Петропавловскую гавань шести японцах,  
найденных на Курильских островах*

2119

10 мая 1805 г.

Иркутск

Милостивый государь мой, Граф Николай Петрович!

Правитель Камчатской области генерал-майор Кошелев от 30 октября прошлаго 1804 года уведомил меня, что Петропавловской гавани священник Верецагин, возвращаясь из островов Курильских, нашел на матерой земле близ Курильской лопатки шесть человек японцев, которые быв им посредством курильского языка уверены в гостеприимстве и пособии россиян, доставлены в Петропавловскую гавань, где чрез перевод знающего японской разговор оставленного там действительным камергером Резановым коллежскаго регистратора Киселева из числа оных японцев штурман Цугуемон Сакай объявил, что генваря 19 дня 1804 года с препорученным ему судном,

именуемым «Киземару», отправлен был купцом Цыдаю из города Намбу к столичному японскому городу с соленою рыбою, но в следовании туда того ж генваря 25-го жестокими штормами отшибло у судна руль и переломило мачту и сильным западным ветром носило по морю семь месяцев. В продолжении сего времени померло от цынготной болезни японцов восемь человек, а 15-го августа принесло означенное судно к Курильской лопатке, где они при великом ветре остановились на якорь и от жестокости шторма при разбитии судна во избежание грозящей им гибели выехали в елботе на берег Курильской лопатки, имея при себе только одно платье. А на другой день видя уже судно их разбитое вознамерились идти в свое место в имеющемся у них елботе, мысля, что таковое нещастие их постигло у Матмайского японскаго острова, но вместо того увидели близъ берега идущаго в байдаре священника, которой по зделанному ими знаку пристав к берегу уверил их, что они находятся на Курильской лопатке принадлежащей российскому владению, почему они видя себя отдаленными от своего отечества согласились следовать вблизъ находящуюся Петропавловскую гавань, где они довольствуются всем нужным от Российско-Американской компании, о чем я ныне же всеподданнейше донес Его Императорскому величеству и долгом моим поставляю ваше сиятельство уведомить.

Пребывая с истинным высокопочитанием и преданностию

Милостивый Государь мой  
Вашего Снятельства  
покорнейший слуга  
Иван Селифонов

*РГИА, ф. 13, оп. 2, д. 1069, л. 1–1 об.*

(М. Малышева / В. Познанский)

*Сообщение Сибирского генерал-губернатора И.О. Селифонтова графу Н. П. Румянцеву*

№ 3790

14 августа 1805 г.

Иркутск

Милостивый Государь мой Граф Николай Петрович!

Имею честь получить почтеннейшее отношение ко мне вашего Сиятельства от 21 июня за № 1627. Я в то же время писал Правителю Камчатской Области г[осподину] Генерал-Майору Кошелеву, чтобы он по содержанию требования вашего Сиятельства отобрал от находящихся во Камчатке привезенных с Курильских островов японцов уважительныя относительно Японии сведения при посредстве регистратора Киселева доставил ко мне, по получении коих непременно донести вашему сиятельству.

С совершенным почтением и преданностию имею честь быть

Милостивый Государь мой  
Вашего Сиятельства  
покорнейший слуга  
Иван Селифонтов

Его Сиятельству Графу Н. П. Румянцову

*РГИА, ф. 13, оп. 2, д. 1069, л. 4.*

(М. Малышева / В. Познанский)

*Сообщение Сибирского генерал-губернатора И.Б. Пестеля графу Н.П. Румянцеву*

№ 501

26 октября 1806 г.

Иркутск

Милостивый Государь Граф Николай Петрович!

Вследствие отношения Вашего Сиятельства к предместнику моему от 21 июня прошлого 1805 года за № 1627 на предписание его правитель Камчатской области, г. генерал-майор Кошелев ныне доносит, что по случаю побега из Петропавловской гавани

на 30-е июня ночью находившихся там на содержании Российско-Американской компании шести японцев за всеми поисками около берегов моря и по губе не найденных, требование вашего Сиятельства касательно отобрания от них сведения о Японии выполнить он не мог, но что живший с ними на одной квартире коллежской регистратор Киселев по знанию японского языка вероятно известен от них о некоторых положениях Японии, который отправляется в Иркутск. О чем извещая вас, Милостивый Государь, не премину по приезде сюда означенного Киселева отобрать от него помянутое о Японии сведение и оное доставить к Вашему Сиятельству.

Имею честь быть в прочем с совершенным почтением и преданностию

Милостивый Государь!  
Вашего Сиятельства  
Всепокорнейший слуга  
Иван Пестель

*РГИА, ф. 13, оп. 2, д. 1069, л. 5–5 об.*

(М. Малышева / В. Познанский)

54

*Сообщение Сибирского генерал-губернатора И.О.Селифонтова*

*к министру коммерции Н.П.Румянцеву*

*об учениках, обучающихся в Иркутском народном училище японскому языку*

2855

3 июня 1805 г.

Иркутск

Милостивый государь мой граф Николай Петрович!

Вследствие почтеннейшего отношения Вашего Сиятельства от 5 минувшаго апреля № 794-м имею честь представить при сем на благоразсмотрение Ваше, Милостивый Государь мой!

1-е. Рапорт директора Иркутских народных училищ об учениках японского языка со списком, объясняющим их успехи и какие сверх того они берут уроки. 2-е. Копию с

донесения приказа общественного призрения, о производимом им жалованье. Причем долгом поставляю уведомить Ваше Сиятельство, что директору училищ подтвердил я, дабы ученики сии продолжали учение с лучшим старанием, имея за тем особенное его попечение.

С совершенным почтением и преданностию имею честь быть

Милостивый Государь мой  
Вашего сиятельства  
покорнейший слуга  
Иван Селифонов

Его Сиятельству Графу Н.П. Румянцеву

*РГИА, ф. 13, оп. 1, д. 191, л. 4.*

(М. Малышева / В. Познанский)

55

*Донесения к Сибирскому генерал губернатору Иркутского Приказа общественного призрения*

186

1 июня 1805 г.

Во исполнение предложения вашего высокопревосходительства от 31 числа минувшаго мая под № 2797-м относительно до учеников японского языка при Иркутском народном училище находящихся. Приказ общественного призрения честь имеет донести: на содержание показанных учеников японского языка по Указу Правительственного Сената от 7 числа апреля 1796 года положено на шесть человек в год по 324 рубли из губернских доходов. С начала поступления оных учеников в класс японскаго языка, то есть с 1-го числа марта 1792 года, по ассигнованию на них суммы производилось им жалованье из капитала приказа общественного призрения от 24-х до 42 рублей в год; по отпуске же в 1800 году за все означенное время суммы из губернских доходов на каждого японского ученика по 54 рубли в год, сделана им к полным окладам из приказа додача. Почему с самага их определения и поныне получают они из губернских доходов по отпускаемым в приказ им окладам по 54 рубли в год.

С подлинным верно: Секретарь Иван Тиханов.

*РГИА, ф. 13, оп. 1, д. 191, л. 5. Копия*

(М. Мальшева / В. Познанский)

56

*Рапорт директора Иркутских народных училищ Е. Кранца*

*Сибирскому генерал-губернатору И.О. Селифонтову*

*об обучении японскому языку учеников Иркутского народного училища*

24

1 июня 1805 г.

Его Высокопревосходительству господину действительному тайному советнику, сенатору, Сибирскому генерал-губернатору и разных орденов кавалеру Ивану Осиповичу директору Иркутских народных училищ коллежского советника Кранца

Рапорт

По ордеру Вашего высокопревосходительства, полученному мною прошедшего мая 31-го дня, коим изволите требовать все ли шесть учеников обучающиеся японскому языку хорошо ли обучились оному или только некоторые: какие сверх того они берут уроки и по сколько жалованья получают: имею честь при сем представить оным список с показанием, кто из них сколько успел в японском языке, чем в свободные от учения часы занимается и сколько получает жалованья. При сем вашему высокопревосходительству объясниться долгом моим поставляю, что японские ученики, судя по времени и их способностям, могли б более успеть в сем языке, но доселе, кроме японского словаря никаких других японских книг не имея, обучались единственно из учительских изустных разговоров, да и впредь совершенной недостаток японских книг оным ученикам к научению переводам полагает непреодолимое затруднение.

Директор училищ коллежской советник

Егор Кранц

*Список ученикам, обучающимся японскому языку в Иркутском Главном народном училище за 1805 год*

1. Андрей Амвросов, сын дьячка Василия Амвросова, 27-ми лет. В Иркутскую духовную семинарию вступил 1785 года, марта 2. Обучался в оной читать, писать и латинской грамматике, а в Иркутское народное училище для обучения японскому языку вступил 792 года мая 1-го. В свободное время занимается нотным пением. Жалованья получает в год 54 ру[бля]. Холост.
2. Иван Миронов, священника Михаила сын 25-ти лет. В Иркутскую духовную семинарию вступил 788 года, марта 1-го. Обучался в оной читать, писать и латинской грамматике. В Иркутское же народное училище для обучения японскому языку вступил 792 года, мая 1-го. В свободное время обучался ремеслу, в котором и теперь упражняется. Жалованья в год получает 54 ру[бля]. Холост.
3. Прокопий Косыгин, священника Федора сын. 25-ти лет. В Иркутскую духовную семинарию вступил 791 года, августа 17. Обучался в оной читать, писать, латинскому языку и риторике, а в Иркутское народное училище для обучения японскому языку вступил 796 года, августа 1-го. Обучившись в оном предметам нижних классов, русской грамматике и рисованию, служит в первом классе помощником [учителя]. Жалованья в год получает 54 ру[бля]. Женат.
4. Яков Парняков, священника Федора сын. 25-ти лет. В Иркутскую духовную семинарию вступил 791-го года, августа 1-го. Обучался в оной читать, писать, латинскому языку и риторике, а в Иркутское народное училище для обучения японскому языку поступил 796 года, августа 1-го. В свободное время занимается нотным пением. Жалованья в год получает 54 ру[бля]. Холост.
5. Лев Кокоулин, священника Дионисия сын 23-х лет. В Иркутскую духовную семинарию вступил 791 года августа 17. Обучался в оной читать, писать, латинскому

языку и риторике; а в Иркутское народное училище для обучения японскому языку поступил 796 года, августа 1-го. Сверх того в свободное время упражняется в приказном порядке. Жалованья в год получает 54 ру[бля]. Холост.

6. Михайло Колотыгин, сын японского учителя и переводчика титулярного советника Николая Колотыгина, 11-ти лет. В Иркутское народное училище вступил 1799 года, августа 1-го. Прошед низшие классы, обучается теперь в четвертом, а японскому языку начал обучаться с 1800 года, августа 1-го. Обучившись по-японски читать и писать, и начинает говорить. Жалованья получает в год 54 ру[бля]. Холост.

[В графе формулярного списка «Хорошо ли оубчались японскому языку» относительно Амвросова, Миронова, Косыгина, Парнякова и Кокоулина сказано «Японскому языку довольно успели»].

Иркутской губернии училищ Директор Коллежской советник  
Егор Кранц

*РГИА, ф. 13, оп. 1, д. 191, л. 7–8.*

(М. Малышева / В. Познанский)

58

*Донесение российского посланника в Японии Н.П.Резанова Императору Александру I  
об отношении японских властей к посольству*

8 июня 1805 г.

Всемилоостивейший Государь!

Последнее мое донесение Вашему Императорскому Величеству имел я счастье отправить из Нангасакского порта от 15 октября 1804 года с вышедшими оттуда в Батавию голландскими кораблями. Хотя и препроводил я оное в дубликате для отправления в Европу с разными судами, но легко быть может, что по военным обстоятельствам не могли они достигнуть до Вашего Императорскаго Величества, а притом и самое донесение мое было весьма кратко, ибо подозрительное японское правительство не позволило мне писать иначе, как доставя оное прежде в подлиннике губернаторам, от которых возвращено оно было мне для запечатания при японских

чиновниках и тогда уже ими для отсылки принято, а потому и поставляю себе долгом донести Вашему Величеству о всех происшествиях с самого выхода моего из Камчатки.

26-го числа вышли мы из Петропавловской гавани, а 27-го числа из губы Авачинской. Ветры довольно были нам благоприятны, мы шли открытым океаном весьма поспешно. Но отправясь около равноденственного времени, много претерпели бедствий. Корабль наш как здесь ни зачинивали, но по выходе оказал он еще сильнее течь, нежели была она в походе нашем кругом мыса Горна: всякие полчаса прибывало по 4 дюйма и помпы наши были не праздно. В параллели Курильских островов в  $45^{\circ} 46'$  северной широты и долготы западной в  $203^{\circ} 52'$  выдержали мы жестокий шторм. Наконец благополучной ветр доставил нам удовольствие сентября в 15 день быть ужу близ берегов великаго острова Нипона, и мы городились празднованием в Японских водах дня высочайшей коронации Вашего Величества. Курс наш был к проливу ван Диемена. Самыя лучшия карты нас руководствовавшия были неверны. Они сочинены по путешествиям голландцев в тех временах, когда ни наука мореплавания, ни нужные инструменты не достигли еще совершенства и потому восточные берега Японии были столь неправильно положены, что мы чрез них свой курс держали и нашли их гораздо западнее. 19-го сентября в  $31^{\circ} 7'$  широты и  $227^{\circ} 54'$  долготы имели мы с утра другой жестокой шторм, который наконец в 4 часа по полудни превратился в так называемый тифон или сильнейший вихрь, продолжавшийся до полуночи неослабно. С такою жестокостию свирепствовал он, что не только не могли мы нести ни одного даже стакселя и шли без парусов, но даже и закрепленные рвал в куски без милости. Барометр, чего еще ни в одном путешествии не случалось, был ниже всех делений так, что и меры определить не можно, ибо три часа ртути не было видно. Валов мы уже не видели, а одну только мелкую пыль, с атмосферою смешавшуюся, которая производила мглу, даже мачты видеть препядствующую, и било в лицо так больно, что стоять было не можно. Ибо самое дно морское всколебало так, что на другой день на марсах и снастях были песок и ракушки.

В сем положении, не видя спасения, ожидали уже мы спокойно своей участи и того часа, в котором ударимся о берег, на который несло нас. Но Провидению угодно было спасти Твоих подданных еще чудеснейшим образом. В 8 часов ночи ударил вал в корму с такою силою, что оглушил многих и чрез минуту другой, еще сильнее прежняго, оторвал у нас галереи, сорвал сверху балюстрат, вышиб с кормы окна, и мы в каютах в одну минуту по

пояс в воде очутились. В люки лила она столбами, залило свечи, и мы едва успели закрыть ходы в нижнюю палубу, которая уже начала водою наливаться. Сильное бросание корабля с боку на другой облегчило оной збежанием воды в шпигаты, и мы захватя окна ставнями держали их руками против валов, пока успели утвердить их упорами ангипугов, но в сей самой критической час ветер отошел с такою силою вдруг на 12 румбов и понес нас от берега. С полуночи начал стихать он и спорная его силы остановили волнение, в котором непременно б мы мачт лишиться должны были. Я не смею определить, далече ли мы были от берега, но только по утру мы оный увидели. В сей самый день было в Нангасаки землетрясение и тифон, котораго они не запомнят, ибо в голландском фактории претолстое дерево с корнем вырвало, и корабль в гавани с якорей сорвало. В таком неприборном положении проходили мы пролив Ван-Диемена, имея к югу острова Ликеи, а не к северу, как на картах Аросмита показано, и нашли тут оконечность провинции Сацума. Потом проходили Тотокими островами и наконец 26-го числа сентября по утру приблизились к Нангасаки.

Мы встретили лодку с рыбаками. Разговор японцов наших удивил их. Они приблизились и, взойдя на корабль, сказали, что четыре дни уже правительство их извещено огнями о приближении нашем, и что должны мы ожидать высылки навстречу чиновников. Чрез полчаса выстрелили мы пушку, и вскоре явилось японское судно с офицерами. Они, не входя на корабль, опросили нас, осмотрели лист, на приход нам данной, и были нашими вожатыми, но пришед ко входу в Нангасакскую губу, остановили нас в открытом море и сказали, чтоб бросили мы якорь, пока придут из Нангасак от губернатора уполномоченные и чтоб из пушек мы отнюдь не стреляли. Между тем сказывали, что почти 12 лет как ждали они российского судна и четыре года сряду к приему нас готовились. В 9 часов вечера увидели мы множество судов, с огнями к нам приближающихся. То была судовая для нас стража, а между ими большое с разноцветными фонарями судно с битием бубен к кораблю нашему пристающее. Переводчики вошед на шканцы удивились военному пикету и двум гренадерам, в касках стоящих у моей лестницы. Распрося обо мне, были они по просьбе их ко мне впущены и наконец испросили позволение войти уполномоченным от губернатора. Я сказал, что приятно мне видеть их. Вошед с большою вежливостью делали они мне вопросы о моем прибытии. Спрашивали буду ли я повиноваться их обычаям. «Весьма приятно для меня,

– сказал я, – исполнять все обряды дружеской нам державы, ежели не будут они величию Государя моего предосудительны». Наконец призвали они японцов, спрашивали их и записывали ответы, смотрели лист и просили позволения впустить голландцев, которые уже с час сидели близ корабля на плюбке своей и без приказания переводчиков войти не смели. Я велел впустить их, и едва вошел голландской фактор Дув с секретарем и капитаном корабля, как не дав почти окончить ему мне приветствия, главный переводчик закричал: Ober hoapt Doof! Complement an den grooten Herrn! – Дув и все голландцы нагнулись, в поясе держа себя за колена, и стояли несколько времени, поворачивая головы в сторону, пока им встать позволено было. Переводчики в это время лежали пред Банджасами на полу и по окончании сей церемонии оборотили ко мне речь: «Г-н посол, вам странны обыкновения наши покажутся, но всякая земля имеет свои, а мы голландцев имеем издревле друзьями, и вот вам доказательство их доброго к нам расположения, согласны ли вы ему следовать?». «Нет, – сказал я, – я слишком почитаю японцев, чтоб начинать нам дело безделицами. А обыкновения ваши, ежели они издревле с голландцами таковыми состоялись, нimalo для меня не удивительны, но у нас они другия и притом они также непоколебимо сохраняются». Согласны ли вы отдать порох, ружья и шпаги, из коих одна вашей особе представится? – Весьма охотно, кроме шпаг офицерских и ружьев и тесаков моему караулу. Они на это не соглашаясь говорили, что и голландцы сего права не имеют, кроме одной шпаги послу их предоставленной. Но я отвечал, что голландской посол есть от купеческого общества, но я Императорской и что это столько же предосудительно званию моему как бы собственно я сам шпаги лишен был. Голландцы, огорченные унижением, коего были мы свидетелями, начали меня уговаривать, чтобы я согласился. Нет, сказал я им решительно, и я уверен, что вы сами находите требование мое справедливым. Они обещали чрез трое суток мне доставить ответ, но я просил их ввести меня на другой день в гавань непременно, ибо корабль не в том положении, чтоб в открытом море в столь бурливое время держаться мог и просил их о присылке свежих припасов.

На другой день прислал Губернатор мне провизию и по полудни увидели мы идущую к нам флотилию, и одно большое и украшенное разными флагами и знаками судно пристало к кораблю нашему. Переводчики требовали, чтоб вышел я на встречу присланному в лице Губернатора. Не могу, сказал я, ибо столь велико звание мое, что

ежели б и самому губернатору решился я сделать сию вежливость, то разве из единого почтения моего к Японскому Монарху, от которого управлением края удостоен он. Они ходили с ответом и наконец возвратясь с бывшими накануне чиновниками разставляли стулья и показывали мне в боку мое место. Я благодарил их, что они потрудились, но кресл моих, сказал я, никому занять не можно. Наконец вошли они и приняв места поздравили меня с прибытием и сказали, что Губернатор всем офицерам шпаги и караулу ружья позволил. Ответ мой был, что я от столь просвещенных вельмож ничего другого и ожидать не мог. Они просили отдачи японцов. Но я отозвался, что лично отдам их Губернатору.

Наконец вошли голландцы. Церемония комплементная произведена была еще строже прежней, и Дув был уже при шпаге, которая ему на сей день не дешево стала ибо за все берут с них талеры. Переводчики делали разные вопросы и записывали: они весьма любопытные люди и довольно просвещены посредством голландских докторов, от которых получают они всегда книги, разные сведения, карты и даже учатся медицине. Наконец взяли у нас порох, отобрали ружья и сабли, у кого были лишние, а в вечеру лодок до 70 буксировало нас к Папенберху, где велели нам бросить якорь. Место сие было немного открытаго моря безопаснее, и отзыв их был, что за островом стоящая китайския джонки скоро выйдут в море и тогда введены мы будем за Папенберх ибо двум иностранным нациям по законам их в одном месте быть не можно. Но в самом деле, не решились они еще открыть ли нам положение города и ожидали прибытия другого Губернатора, который на смену первому из Иедо должен возвратиться. Они всегда сыскивали другия причины, а когда не могли оправдать глупых обычаев, то улыбаясь говорили, что это *japanisch manir*. Провизия нам присылалась безденежно и от Губернатора и от голландскаго фактора, который по письму министра Гогендарпа на перерыв делал нам услуги и в такое ввел себя подозрение, что нам более видеться не было позволено, и мы так и расстались. По приходе в Японию были голландцы у нас только два вечера, но всякой разговор их был японцами прерываем, и так лишались мы способов получать нужные о земле сей и ея обрядах сведения. Свидание с Губернатором до получения из Иедо курьера было мне отказано и я препроводил к нему завернутая в золотой паре копии с грамот, которыя чиновники с благоговением подняв на голову от меня приняли, а на другой день требовали объяснения и перевели снова, поелику дурной

перевод совсем другое заключал содержание.

Между тем мы познакомились, я говорил с ними по-японски, они удивлялись, поправляли неправильный мой выговор и старались сказать мне несколько слов русских, которых в два дни во сто рук они нарочитое собрание сделали. Делали мне тонкие вопросы о торговле, от которых всегда удалял я их тем, что говорить с ними о государственных делах званию моему неприлично и что не могу я менее говорить как с Губернатором.

Подарков они от меня никаких не принимали, покупать мне ничего не было позволено, с корабля никого не спускали, окружили нас на судах караулом коего до 500 человек было и уверяли, что скоро кончатся для меня сии неприятности и что ждут куриера, но в рассуждении торга говорили, что он никогда позволен не был и велено не приходить, а только притти российскому судну для трактования с губернаторами, что и действительно в Лаксмановском листе плутовски было сказано. Всякой день делали они новые вежливости, смотрели ордена мои, камергерской ключ и крестное изображение отнюдь их не отвращало. Всего более нравилась им звезда моя. Они сказали, что имеют портрет Великия Екатерины в голубой ленте и знают, что знаки сии даются в отличие. Спрашивали жалуете ли Ваше Величество их и иностранным вельможам и ежели торговая связь открыта будет, может ли получить их Губернатор? Я удивился вопросу, а более тонкости, которою дали они почувствовать тягость рабства их, и отвечал, что щедрость и доброта Российскаго Монарха простирается на всех без изъятия и не на одних тех, которые оказывают услуги Его подданным, но еще преимущественнее тем, кто печется вообще о человечестве. Мы кажется друг друга поняли и открывалась перспектива интересным разговорам. Нужно было только утвердить взаимную искренность.

Суда безпрестанно в гавани умножались. Октября 4-го пришла еще флотилия более нежели из 50 парусных судов состоявшая. Нам сказали, что приехал владетель Чингодин Киносама, но это было для безопасности, ибо они европейских судов крайне боятся. Стража наша казалась им недостаточна, между тем уверяли они, что это не караул, но почет послу великой империи и что я в городе еще более иметь буду. Мы увидели в разных местах так называемыя ими крепости. Первый ветер показал нам, что то были только белые полотна с гербами принца Физенскаго, которые во все время пребывания

нашего украшались множеством фонарей, так как и бездана судов их. Таковыми иллюминациями думали они вперить в нас уважение к многолюдству их и бдительности.

От дурного состояния корабля и сквозного ветра болезнь моя умножалась. Между тем прибыл и другой губернатор Фидабуенго Камисама на смену Нарусинабанукамисаме, но они оба остались по случаю прихода нашего. Они присылали спрашивать о здоровье и предлагали мне докторов своих. 5-го числа октября по уходе китайских джонок буксировали нас за Папенберх, но не доходя императорских караулов или казарм велели нам бросить якорь милях в четырех от города, говоря, что стоящие два голландских корабля скоро уйдут в море и тогда на подвинут ближе, а до того с купеческими судами кораблю столь великаго императора стоять не прилично и они из уважения допустить не могут. Переписка с голландцами нам запрещалась. Когда же корабли их выстрелили заревую пушку, то потребовал и я по два заряда на день, объяснив им, что иначе военный флаг оскорбляется. Но они решили тем, что голландцам стрелять запретили, между тем зарю у меня били в барабан ежедневно. Я просил на берегу какого-нибудь местечка для прогулки и дома для выгрузки посольских вещей, которые по подмочке подвергались гибели. Долго обещали они, но вдруг день и ночь работая отгородили они близ селения Кибачи местечко сажень в 25 длиною и до 10 шириною, поставили беседку, а за бамбу караульни и 17 числа приехали чиновники и с великими почестями и вежливостями принят я был на берегу и угощаем и судов до 20 с войском сопровождали меня.

Пыльная сия загородка не могла облегчить болезни моей и я не хотел ею пользоваться. Они успокаивали тем, что скоро будем введены в город, в котором чистят уже для встречи улицы и что окружные владельцы съезжаться начали.

Через несколько дней примечена вдруг нами во всех японцах холодность и на вопрос мой когда на берег приняты будем отзыв их был, что курьер еще не бывал за разлитием рек и что не ближе 30 дней ожидать его можно. Потом опять непомерные вежливости и, словом, видно было, что каждодневно получали они от двора разные повеления, которым в отпусках своих соображались.

Голландские корабли ушли 27-го октября, а на другой день губернаторы опять с большими вежливостями приказали буксировать нас за Императорские Караулы, где бросили мы якорь, и город нам уже открыт был. Мы разоружились. Болезнь моя

умножалась наконец так, что губернаторы обещали доставить мне на берегу дом, который и приказали отделывать и декабря 5-го числа перевезли меня на берег с великою помпой. Вся губа покрылась судами. По обеим сторонам берега сидели войска. Судно, на котором ехал я, было преогромное и принадлежало принцу Физенскому. Оно было в два дека, нижней украшался лиловыми шолковыми драпери с белыми гербами, а верхней разного цвета материями. Средина была раззолочена и потолок и стены лакированные. Я поставил гренадер с ружьями на верхней палубе, поднял род штандарта и с Гербом Российской Империи японцев ознакомил. В доме был я встречен множеством чиновников. Он содержал девять комнат, состоящих из бумажных перегородок и ширм. Они довольно хорошо были убраны, но ветер и стужа были непомерны. На дворе были четыре магазина и еще два за первыми воротами. Место было то самое, в котором в 1640 г., по истории Шарльроа приняты были португальские послы и были жертвою японского зверства. Я дал им сие с улыбкою почувствовать, и они, не признаваясь, краснели. С трех сторон окружено оно было заливом, обнесено фут в десять вышиною из бамбу тыном, ворота прямо в воду запирались с обеих сторон замками. Против дому самой залив сажен на пятьдесят в два ряда отгорожен был тыном, чтоб не могли суда вблизи ездить и на обеих концах стояли два большие военные суда для караула. От ворот наружной ключ был у морского чиновника, а внутренний вверен был сухопутным караульным. Другие ворота наши были в переулоч. Тут стояли две караульни, в коих было 18 офицеров тайтаогуми называемых. В боку караульная полицейская и далее караульня с 50 человеками из войск принца Омура, которые ежедневно сменялись. Всякой шаг наш был записыван и книги во всех караулах проверялись всякой день особыми чиновниками, а ночью приходили из города присылаемые патрули. Сверх того по горе разставлены были караульные дома так, что шаг каждого из нас на дворе виден был. Остров Десима разделялся от нас близ 300 сажен заливом. Но сие не остановило загородить и у голландцов дом их высоким тыном, дабы не могли мы в зрительныя трубы разговаривать знаками. Между тем выгрузка вещей и такелажа производилась японскими судами и людьми безостановочно.

11-го декабря перевели они корабль ближе к городу и это уже было пятое его место. Мы жили между тем в заключении своем по самый день нашего отбытия. Всю нужную пищу давали они безпрекословно, а корабль требованиям моим снабжали припасами и лесом

на саленги, гребные суда и прочие надобности и для обшивки кают дали 400 листов меди. Время продлилось до марта и они сказали, что в Иэдо я не поеду, но что будет уполномоченный, который еще лучше здесь все в разсуждении торговли к взаимному удовольствию постановит. Я велел с поспешностию вооружать корабли на всякой случай. Ласковости их умножались. Наконец прибыл ожидаемый великий чиновник по имени Тоямакинжиросама. 23-го марта назначили мне первую аудиенцию, прислали нарядное судно с множеством других судов и для встречи чиновников и мы отправились в Нангасаки. В городе все улицы были завешены полотном и ни одного человека не было видно. Меня несли в норимоне, а офицеры мои шли пешком. В доме правительства, где был совет из даймио и двух губернаторов, встретили нас множество переводчиков. Мы проходили несколько комнат, где рядами сидели чиновники и наконец вошел я к ним в последнюю. Я сел против них, и они, сделав приветствие, объявили наконец, что государь их крайне удивляется, что Вашему Величеству угодно было писать к нему, когда Лаксману объявлена была высокая воля, чтоб никаких россиянам с Япониею переписок и тем менее японскими характерами не иметь, а только позволено было притти для трактования одному судну, что посольства он принять не может, что торговли не желает и чтоб я выехал.

Переводчики, не ожидая такого отказа, остолбенели. Наконец едва перевели мне, как я, изменяясь в лице, не мог удержать себя. Я удивляюсь сей дерзости, сказал я, может ли кто запретить писать моему Государю, который неожиданную честь сделал Кубовскому величеству. Он и оба императоры: но кто из них более, не нам решить здесь. Впрочем, торг их нам не нужен и это была милость монарха моего к Японии, которая из единого человеколюбия к облегчению их недостатков последовала. Но не думают ли они трактовать россиян как португальцев? Переводчики пересказывали им, а я со вниманием слушая дополнял им по-японски. Они потупили глаза в землю и наконец Губернатор Фидабуенгонокамисами отвечал: скажите Господину Послу, что он сегодня обезпокоился и что лучше отсрочить нам заседание до другого дня. С великим удовольствием, сказал я, и от них вон вышел. Они высылали угощать чаем, табаком и конфетами. Я отказывался, а переводчики вздыхая говорили какая несчастная будут последствия и просили офицеров моих уговаривать меня, чтоб я умерял ответы мои и я признаюсь Вашему Величеству, что я и сам неумеренность свою почувствовал, но она вышла к лучшему.

На другой день аудиенция уже была ласковее. Они объясняли, что Император их не принимает посольства и даров единственно для того, что по обычаям японским должно отвечать тем же, а сие невозможно, ибо уже лет с двести как поставлено, чтоб японцы не выезжали, что начинать торговлю ни с каким новым народам коренныя постановления их запрещают, что японцов принимает он с благодарностию, что ежели есть всеобщее правило и чтоб не приходили в их порты никакия иностранныя суда, то и российские не могут сего на свой счет принять, так как и то, что к берегам Японским никому приближаться не позволено. Я отвечал им, что законы их нам известны и взаимнаго посольства Ваше Величество не потребуе и спросил, ежели впредь японцы претерпят бедствие, куда привозить их, и буде бури завлекут нас необходимо искать убежище в других портах, то получим ли мы дружеское пособие, так как и ныне нужны нам харчевья за наши деньги припасы? Об том, сказали они, завтра рассуждать будем.

В третью аудиенцию отвечали они, что удовлетворяют вопросы мои письменно, что между тем в доказательства уважения к Вашему Императорскому Величеству приказал Император их снабдить двухмесячною провизиею, а как непременно желал я купить две тысячи мешков соли, то велено отпустить и оную безденежно и притом 2000 шелковых ват подарено мне и чиновникам, а в благодарность за гостеприимство японцам в России оказанное все содержание экипажа во все шесть с половиною месяцев и отпуск на разныя корабельныя надобности материалов принять на счет Кубовского Величества. Я просил их, чтобы они оставили дары Вашего Величества и приняли подарки мои и тогда докажут они более их уважения, но получил в ответ, что чувствуют они всю великость Российского Монарха, но сами решиться не могут и я должен буду дожидаться ответа их из Иэдо, который может быть отнимет у меня время, а когда он получится, они определиться не смеют, ибо в законах их сказано и то, чтоб иностранных судов обратно не отпускать, и что это дело весьма щекотливое. Наконец изъявляли сожаление свое, что он никак столь неприятнаго окончания не ожидали и слыша, что намерен итти Корейским морем, советовали отложить путь сей для того, что он наполнен подводными камнями. Я уверял их, что он ближе и что сии трудности для российских мореходов уважения не заслуживают. Мне представляли на волю выйти, когда я хочу, и ежели б это и несколько месяцев продолжилось, отпуск провизии всегда будет безденежно. Я благодарил их. Наконец прислали они Мегасаки, так называлось место нашего заключения, копии с

грамот и перевод с листов их, в которых запрещено подходить к берегам и навсегда приходить в Японию, а людей их впредь отдавать голландцам и то, когда будет на то Вашего Величества воля. Последние дни приходили в караульни наши чрез преданных нам офицеров разного рода люди со мною прощались, уверяли, что никогда россиян не забудут и ежедневно приносили связки больших вееров из Иедо и Миако, чтоб надписал я имя свое и день нашего прихода, что они будут сохранять как драгоценность. Я писал им по-русски, голландски и японски разные девизы и они весьма были довольны. Офицеры мои по прозвбе их также довольно были сим упражнением занимаемы.

Отказ в торговле произвел в народе сильное в нашу пользу впечатление. Приехавшие из Миако коммерческие спекулянты уже предлагали мне чрез переводчиков свои условия. Чиновники, офицеры и рабочие люди ожидали щедрого награждения, которое им даже до безделки запрещено было, и все они вдруг неожиданным отказом более нас огорчились. Неудовольствия их и свычка с нами родили более искренности.

В заключении моем исправил я Японской словарь мой и собрал до 3000 слов, учился языку их более и более и сколь не слабы были познания мои в нем и строго правление, но при всем том получил я многия от чиновников сведения, а наконец и всю тайну отказа нашего.

Во время прихода Лаксмана был фаворитом нынешняго Императора Јенарико\* вельможа Девасама, человек редкаго ума, красноречия и проницания. Предприимчивый дух его чувствовал тягость деспотизма и хотел прославиться, сделать посредством России реформу в правлении, видел в духовном Даири один фантом власти и не имел к нему уважения, уговорил он императора воспользоваться предложением Российской Империи и представил от соседственного союза сего пользы столь ясно, что и самые враги его должны были уступить сильному его убеждению, а Император весьма решительно объявил свое согласие.

Ежегодно ожидали прихода россиян в Нангасаки тем паче, что европейския военныя тогда обстоятельства остановили торговлю голландцов, которые едва одно судно присылать могли, а во время французской революции уже нанимали они американския суда под голландским флагом приходившия.

Семь лет приход наш в Японию был предметом народного блаженства, как в восьмой год Девасама умер. Противная ему партия тотчас возникла и, не понимая настоящей

цели, критиковала все деяния его. Из нея один по имени Унемасама и егоист безпримерный возвысился до такой степени, что вся Япония, хотя не терпит его, но боится. Второй Министр и друг Россиян по имени Езосама не имел должной твердости духа и удалился в свои маятности. Но еще третий Фидафогосама оставался подобный Девасама и один поддерживал все проекты его. Приход судна решил тотчас императора принять нас, и хитрой Унемасама объявил также свое согласие, но советовал послать к Даири для того, чтоб от впуска без его ведомы новаго христианскаго народа не родилось неприятных последствий. Сие было апробовано, но родственник Унемысамы был в Миако начальником и исходатайствовал у Даири ответ, что дело сие так важно, что он хотя и желает всех объясненных для Империи выгод, но требует созыва всех принцов в Иедо, дабы дело не обще обдумано и на твердой ноге поставлено было. До двухсот владельцев и вельмож съехались в столицу сию. Унемасама работал против России, но наклонность императора слишком была обнаружена. Государственные чины не знали, как окончить и которой стороны держатся. Решено препроводить выписку из всего дела к Даири. Едва увидел сей, что Лаксману дано было позволение без его на то воли и тогда не был он уведомлен, как прислал в совет чинов требовать удовлетворения в обиде его самим Кубою, который вопреки постановлений не известил Даири в свое время. Государственные чины, увидя начинающееся междуусобие, представили Императору сколь велико Даириево оскорбление и Кубо против воли своей, чтоб остановить кровопролитие, принужден был согласится отказать нам в торговле и в жертву гнева Даири отдать Фидафигосаму, который всех лишен чинов и отправлен в Фатцитзио в заточение. Столь хитрым образом Унемасама успел все опровергнуть, но мне за такую же тайну сказывали и то, что неудовольствие народное так велико, что отказ нам торга и приема посольства необходимо великия должен иметь последствия и что постановление сие подвержено еще перемене.

В разсуждении Японскаго правительства оно столь деспотно, что никто ни в жизни, ни в собственности своей не уверен. Не только владельцы, но Губернаторы и чиновники в разные места определенные сменяются погодно, а семейства их в Иедо.

Сколь ни велика умеренность их, сколь ни дешевы припасы, но неимение торговли лишает возможности покупать их. И обилие даров природы служит только утехою богатых, которые как и сам Кубо сокровища свои в одном количестве пшена заключают.

Рукоделия у них превосходны, обработка чрезвычайна, но все сие не оживлено торговлею. Чернь ропщет и при первом случае готова свергнуть иго свое. Многие чиновники неоднократно мне и офицерам в шутках говорили: возьмите нас в Камчатку. Христианская религия отнюдь не так страшна им, ибо во все время ни одного слова об ней нам не было, а боятся они водворения иностранных, чтоб не открыли глаза народу и на сей конец строжайшими мерами всякое пресекают сообщение.

Переводчики искренно признавались мне, что несносно жить им и что не знают как улутчить бытие свое. Они уверяли, что рано или поздно советы Девасама будут приняты с большей силою, что изверг ныне Министерством управляющий, так называют они хитраго Унемасаму, недолговечен и как ему за 60 лет, а злоба довольно уже изнурила силы его, то с смертью его опять пожелают торгова с Россиянами и может быть будет для нас он еще выгоднее. Они обещали писать ко мне чрез голландцев, уведомлять о всех происшествиях и разные предлагали планы, например: когда не будет Унемасама, то по письму их может Российское судно смело под видом убежища от ветров зайти в порт их и ласковой прием нас тогда в успехе может удостоверить, что можем мы также прислать в числе голландских служителей своего чиновника, который прожив год в Дезиме чрез них все подробности узнать может. Что голландцы на то согласны и должны делать то, что переводчики им приказывают, ежели, сказали они, получите вы от нас уверение, то приезжайте сами в Матмай для переговоров, а без нас уже дело и там не обойдется и вы видите, что на кого бы жребий ни пал, все готовы служить России. Мы клянемся, что кто бы из нас в Иедо на будущий год ни поехал, еще более умы в вашу пользу приготовить и ручаемся, что Даимио и оба Губернатора столько на стороне вашей, что мы боимся, чтоб сии добрые и честные люди не пришли доброжелательством их к Россиянам у нашего правительства в подозрение.

Голландцы, хотя в торговле своей не имеют прежних выгод, ибо ограничена она двумя судами и суммою на 300 000 талеров, но со всем тем они для них велики. Мед по древнему условию получают они по 12 талеров Пикль или 125 голландских фунтов, когда в Японии продается она ныне по 20 талеров, они привозят сукна, ситцы, выбойки, стаметы и разные шерстяные материи и большею частию толстые, сафьян, шогрин, сахар, пряные коренья, свинец, олово, железо, ртуть, киноварь, мумию, раковыя жерновки, рабарбар, катешу, смилак, напатырь, сандал, индиго, лазорь, перец, стеклянную посуду, зеркала,

люстры, часы, борнейскую камфару и многия другия статьи, а берут у японцев пшено, мед, камфору, воск, сою, посуду, ткани, лаковые и другия вещи. Голландцы весьма бы рады были, чтоб Россия торговала, ибо может быть переменялись бы жестокие в Японии для иностранных обычаи. Поступают с ними весьма уничижительно, а к тому и расходы для них непомерные. Когда во время французской революции торговля их прервалась, то исходатайствовали они, чтоб вместо ежегодного посольства отправлять оное в каждые пять лет один раз, чтоб избежать издержек. Но ныне просят опять позволить отправление ежегодно, ибо японское министерство отозвалось, что даровало свободу только не ездить самим, а о подарках умолчано и с того времени поныне отправляются в лице голландского посла с дарами переводчика, которые еще дороже им стоят и они обязаны щедро платить им, чтоб совсем торговли их не испортили. Притеснения превосходят также всякую меру. Голландской фактор Дув сам сказывал мне, что о каждом выходе из Десимы должен прежде просить он и считать позволение сие милостью. Хотя стоит оно одному ему в день 16 талеров, а когда с капитанами судов был он за городом, то за почесть или лучше сказать за стражу без прозбы его данную 400 талеров за один день заплатить был должен. Я должен сказать здесь, что сей человек снабжал нас провизиею и усердствовал Вашему Императорскому Величеству и я всеподданнейше прошу из Монаршей милости послать ему перстень.

Высочайшее благоволение Ваше почтет он особливим счастьем. Не имея возможности ничего купить, снабдил он меня некоторыми вещами, из коих шкатулку всеподданнейше подношу Вашему Величеству, а притом обещал он выслать в Амстердам разных редких японских и батавских растений семена, о коих просил я по высочайшему от Ея Императорского Величества любезной родительницы Вашей мне поручению, а для Академии наук японскую флору и учебныя книги. Я осмеливаюсь всеподданнейше поднести Ея Величеству модель японскаго летняго дома и Ея Императорскому Величеству Елизавете Алексеевне бюро, повергая себя к освященным стопам их. Воззрите, Государь, на усердие, а не на доброту вещей, которых я лучше получить не мог.

Далее о японцах донесу Вашему Величеству, что нет в свете правительства столько подозрительнаго. Никогда переводчик один войти не может, но всегда двое и при них двое приставов. Нет нигде одного чиновника, но всюду два и сверх того опять два для присмотра за теми, и с которыми говорил сего дня, ответ всегда приносят другие. Они

чрезвычайно боятся европейцев может быть потому, что чувствуют слабые силы свои. Войска их без всякой дисциплины, артиллерии в Японии совсем нет, кроме некоторых взятых в 17 столетии у португальцев пушек, лежащих в Нангасаки без лафетов. Ружья у них с фитилями, но действуют они луками. Суда их в открытом море держаться не могут и конструкция их никуда негодная. Оне одномачтовые и с одним посреди парусом. Правда, что не дорожат они людьми по многолюдству их, но тем более человечество чувствует угнетение. Ежели они когда-либо и войну имели, то с одними китайцами и корейцами, которые подобно им неорганизованы. Но буде некогда победили португальцев, то те сами тому причиною, ибо пезуиты в фанатизме христианства поощряли их и крещенных японцев к страданиям, и они быв довольно сильны к защите своей не употребляли оную и радовались казни своей в чаянии заслужить венца мучеников. Я смею Вашему Величеству утвердительно сказать, что ныне сего быть не может видева оба сии народа, считаю я японцев в сем случае здравомыслящее.

Один порок, что они совершенные Епикуры, что сладострастие составляет все блаженство их. Они не видят собственного расслабления своего, спешат пользоваться жизнью и буде столь часты между ними самоубийства, то не столько от горделивости как от любви к той же жизни они происходят, когда не видят возможности с удовольствием наслаждаться ею. Политика правления позорные дома покровительствует и в сем заблуждении подкрепляет их, дабы чувственными удовольствиями услаждать горесть безпримерного их рабства, впрочем, обезпечивает себя во всем строгостию законов и недоверчивостию удаляет все способы к просвещению, но раздражает чрез то дух народной, и просвещение хотя медленно, но действует. Нужно только обдуманной предприимчивостью бросить одну искру света, чтоб зажечь вдруг все огромное тело свое. Возвращенный с Лаксманом Кодай, как сказывали, сидит и теперь в заключении и когда вести сии дошли до японцев наших, то они предались жестокому отчаянию, просили меня взять их обратно с собою; но получа отказ, один из них по имени Татзюро хотел себя резать, вколотил бритву в горло и хотя успели отнять у него, но он едва не изошел кровью. Сему хотели последовать и другие, и я рад был, что здал их. Деньги и вещи у них были отобраны, а после сказали мне, что они посажены под стражу как преступники возвращением своим подавшие причину к великим в Государстве неудовольствиям. Какое сильное таковой поступок должен производить впечатление!

Торговля для нас с Япониею весьма бы была выгодна. Самыя превосходныя во всей Азии пшено и мед суть произведения японскія. Пшена лучшаго здесь пуд менее талера, мы могли бы снабжать многими вещами Камчатку, в которой сего года ржаной муки четверть в 7 пуд казне близ 32-х руб[лей] обошлась, а обыватели кроме военных служителей вовсе не имеют. Воск древесной добротой пчельему ничуть не уступающий дал бы также до 200 процентов. Ярь медянка, ткани шелковыя и бумажныя весьма бы принесли пользу. Медная посуда и лаковыя вещи также у них превосходныя. Мы могли бы возить к ним юфты, козлы, толстыя выбойки, затрапезы, сукна и вместо балласту железо, котораго бы меною на пшено рублей за пять и гораздо более каждой пуд уходил. Шагрин употребляемой ими на сабельныя стрелы всю роскошь их составляет, ибо нет человека, который бы не носил сабли, а военные носят по две и потому на шагрин расход необъятной. Кстати о саблях скажу я здесь, что клинки у офицеров превосходныя, но не гнутся и кажется ломки, а у нижних чинов и простолюдинов они наших обыкновенных несравненно хуже. Стеклянная посуда, но не цветная и фарфор наш весьма им нравится, ибо последний в Японии более на фаянс походит. Меха в северной части несомненно расход иметь будут. Маия 1 число видели мы на Матмае горы снегом еще покрытыя да и в Нангасаках, где гораздо теплее, приметили мы зимою фуфайки овчинныя и крысы меха, которые они не всегда и в малом количестве от китайцев получают. Толстыя сукна, полотна, словом, все российскія рукоделия не могут лучше иметь ходу как в Японии да и завести торговлю не так трудно, когда весь народ желает ее и кроме Нангасак, где уже вкоренились притеснения можно с севера устроить ее гораздо выгоднее, ибо одной России самую природою предоставлены к тому способы. Оленьи кожи и замши весьма им нравятся. Ими одна [Г]ижига снабдит их, а для рыбы составляющей главную у них пищу можно под самым у них боком промысла завести.

В сем предмете желал я, Всемилостивейшій Государь, несмотря на строгія предписанія их, взглянуть на Северный край Японии. Мы шли Корейским морем, описали весь западной берег Японии и в поверке сей части географія обязана теперь благополучному Вашего Величества царствованію, ибо находили мы берег местами на 30 западнее, нежели на новейших картах показано. Мы держали курс в виду его. Подходя к Сангарскому проливу, проходили мы мимо одного лежащаго на берегу острова Нипона большаго города. Оттуда выехали четыре лодки, в коих более ста человек было. Они

объехали вокруг корабля нашего, но видя пушки, не смели приблизиться. Наконец прошли мы мимо пролива Сангарского и обошед всю западную часть Матмая бросили на северной оконечности онаго якорь в проливе Лаперузовом. Тут съехали мы на берег. Северная часть совсем японцов не имеет, а живут народы Аино, которых называют мохнатыми курильцами потому только, что у них бороды: и хотя издревле говорили, что они все в шерсти, но мы нашли это совершенною баснею. Они промысляют рыбу, живут в юртах подобно древним камчадалам, и японцы приезжают обирать у них рыбу. Два чиновника присылаются на лето для караула, а жены их оставляются в заливе в городе Матмае, которого именем вся южная часть острова называется, но с севера народ Аино тот же остров называет Езо.

Чиновники были у нас на корабле и не верили, что мы Россияне потому только, что с Лаксманом были они в косах, а мы в кружок обстрижены. Но уверились русским языком, которого они несколько слов имеют по случаю первой экспедиции. Кушцы Японии торгующие рыбою сказали нам, что они ежегодно ездят на остров Уруп зверей выменивать и подтвердили, что он принадлежит России. Они приезжали к нам менять куньи парки на желеты суконные и старое платье и вот в возможности торга первое доказательство. Оленьи ровдуги или замши чрезвычайно им нравятся, а для рыбы главную пищу составляющей можно под самым боком у них промысла завести.

На другой день снялись мы с якоря. Я хотел итти к острову Уруп, но капитан отозвался мне, что нет там гавани и что судно наше много рисковать может. А потому, чтоб воспользоваться временем и обстоятельствами, предписал я именем Вашего Величества, чтоб описать восточную часть Сахалина и северную его оконечность и поискать там гавани, не упуская из виду нужной предосторожности, чтоб к берегам Китайской Империи отнюдь не приставать и не подать малейшаго сей державе подозрения.

К северу была уже земля в виду нашем. Японцы на Матмае сказали нам, что это южная часть японскаго острова Карафуто, который пространством в половину Матмая, что они ходят туда за звериными и рыбными промыслами. Что народ там тот же Аино как и на Матмае и Урупе. Но как по последней от Российскаго депо изданной карте, также и по Японским картам означено между Матмаем и Сахалином остров Карафуто и мы идучи вдоль Матмайских берегов первого пролива не видя пришли во второй, который по

северной широте его был пролив Лаперуза, а притом и пик де Лангль нами видимой, удостоверял нас в том, что спрашивал я у японцев далече ли Карафута простирается, ибо должен тут быть Российский остров Сахалин. Они отвечали, что северной части Карафута они не знают и туда не ездят, что там пролив мелкой и за ним лежит остров Сандан или Сахалин, который принадлежит не России, а манджурам. Отобрав сии сведения, поспешили мы пересечь пролив, миль 30 имеющий, нашли, что это Сахалин и с южной части вошли в губу Анива голландцами в 17-м столетии описанную. Мы нашли ее гораздо менее. Народ был тот же Аино и весьма добродушной. Мы нашли тут японскую факторию, двух присылаемых на лето от правительства офицеров, порядочный для сих чиновников дом, кумирню, виселицы и на обоих берегах 16 преогромных магазинов, из которых некоторые уже были наполнены, а другие наполнялись рыбою, которую невероятно до какой степени губа изобилует. Солят они ее не в бочках, но провялив кладут рядами и осыпают солью и точно так же и в суда грузят, которых нашли мы здесь два на якоре. Я ездил на одно из них и с помощью языка получил сведение, что компания купцов из Осака сделала восьмой год здесь свое водворение и действительно строения были новы. Народ здесь предоброй, губа очень заселена Аинами, мы видели несколько сот их и японцы подчинили уже их своему рабству. Все лето ловят они и солят рыбу, а зимою промышляют зверей, которых японцы весною обирают. Несмотря на превосходное число жителей, хотя японцев всего и с судовыми не более 40 человек было, но они ими управляют и один японец гонит 50 на работу. Японцы нас чрезвычайно испугались. Я взял у них жибики или гиероглифическую азбуку, которую в Нангасаки по строгому присмотру мне передать не хотели и на вымен оной, хотя они на аршин бархату согласились. Но когда запретили им чиновники мену, то они и от книги отступились, а я между тем не менее был доволен, что сделал для Академии наук сие приобретение.

В бытность нашу в Аниве видели мы при входе каменной риф усеянной сиучами, в губе ловились на одной стороне лосося, а на другой превеликия сельди в таком невероятном множестве, что невода на берег не вытаскивали, а наполняли лодки, черпая из моря саками. Китов видели стадами преследующих рыбу тогда икру метавшую и китовый промысл по множеству их по редкой в ловке безопасности, по удобности в топке жиру, ибо лесу бездна да и строевой есть. По обильным для рабочих людей кормам рыбою и дичиною должен здесь быть во всем свете примерной. Тюленей больших или нерпов

также бездна. Словом здесь муравейник морских зверей: домашних животных кроме кур и собак мы не видали. Мы вышли из Анивы мая 6-го и обошед мыс Крилион шли к порту в виду восточного берега, ибо западной описан Лаперузом. Немного не доходя реки Амура, в 470 широты нашли мы изрядную гавань, которая хотя с Оста открыта, но может на случай нужды дать убежище. Сильной противный ветер препядствовал ее всю исследовать. Жители были те же Аино, столь же добродушны и побогаче Анивских, потому что японцы не успели еще распространиться. У них видели множество японских вещей и лаковую посуду. Собаки и у них подобно камчадалам заменяют лошадей, и мы видели зимние нарты. Продолжая плавание к мысу Patience, встретили мы льды. Чтоб не пролавировать нам долгое время напрасно, предписал я идти в Камчатку, куда проходя Курильскими островами вытерпели мы шторм и проходя курс между 5-м и 6-м островами, пришли в Петропавловской порт благополучно мая 25 числа.

Здесь, Всемилостивейший Государь, нашел я два судна: транспорт «Феодосия» и Американской компании судно «Марию», которое в прошлом году отправилось на Кадык, но по дурной его постройке едва всеми помпами отливаясь, достигло здешнего порта и здесь зимовало. А третье судно «Константин» вследствие прошлогдних в Охотск предписаний вышло мая 15 на остров Атху, Уналашку и северные за промыслами, чтоб привести их сюда в июле для снабжения корабля «Надежды», которому поручил я выгрузя соль идти окончить описание острова Сахалина и отыскание гавани и опять к августу возвратится сюда, дабы здав остальной груз и приняв с «Константина» рухлядь возвращаться чрез Кантон в Россию. Сам же я, Всемилостивейший Государь, как судно «Мария» ни плохо иду на нем на Кадык, и ежели здоровье мое вынесет, хочу обозреть и далее. Словом я бросил себя теперь в край сей и готов питаться сивучами и ракушками, лишь бы только мог я принести Вашему Величеству пользу.

Простите, Государь, ежели я опять обращаюсь к острову Сахалину. Я донести должен Вашему Величеству, что губа Анива требует скорого, да весьма скорого заселения. Обилие природы со времени голландцев еще в 17-м столетии там бывших, коммерческому свету совсем не известно тем паче, что голландцы не издавали никогда своих журналов. А ежели оно и не погребено у них в забвении, то по малой мере не сильны они теперь, водворятся там, когда они с нуждою и японский торг отправляют. Ныне же не может уже место сие утаиться в свете и чрез бывших в экспедиции нашей

иностранных ученых, а предприимчивые англичане и спекулятивные бостонцы посетят оное непременно и конечно водворятся. Для России место сие не только нужно, но и необходимо. Зная теперь Японию, смею я отвечать Вашему Величеству, что торг с нею к славе Вашей тут непременно и еще с большею пользою, что японцы сами бежа от деспотизма охотно переселяются. А как устроил я с японскими чиновниками переписку, то зная внутренния обстоятельства их тем способнее будет приступить к делу.

Я всеподданнейше прошу Ваше Императорское Величество приказать вести оную от моего имени, ежели соизволите сие нужным найти. Китовый промысл в Аниве весьма удобен и нужно Компании завести его, ибо рухлядь не есть столь прочной торг, когда бостонцы из Шарлотиных островов, возя в Кантон меха в изобилии, ежегодно на них цены понижают. Но жир китовый во всей Индии необходим и торг им в сем месте весьма выгоден будет, ибо и переходы в Индию близки и муссоны благоприятствуют. Жителей на Сахалине довольно, и положи прочное и обдуманное начало могут чрез то ускорится и на реку Амур великие Вашего Величества виды, тем более, что торг с Япониею откроет путь рухляди и понизит гордость Китая. Между тем умеренный климат будучи южнее камчатских хлебородных мест восемью градусами будет для всей Сибири полезен, привлечет жителей. И когда мало-по-малу связываться будут в сем краю предметы Остиндской торговли, то кто поручится может, чтоб не было и в Петропавловской гавани праздновано когда-нибудь столетие в честь своему основателю! Великия дела идут только медленно с начала, но когда верен план, то прогрессия в ходу их удивительна. Ботаникей давно ли занята и хотя как в новой части света и отделена отовсюду, но теперь уже там города возникли. Издержки для водворения на Сахалине ничтожны и сугубо возвратиться могут, а исполнение сего никакой не имеет трудности. Я не смею затруднять Ваше Величество всеми подробностями и только главные черты изобразил здесь. Впрочем обширный план сей требует времени, а я не имею даже к порядочной переписке и сей бумаги и спешу на Кадьяк к исполнению Высочайшей воли вашей, где буду ожидать подтвердительных повелений.

Камчатку, Всемилостивейший Государь, не имею я также времени обозреть, но донесу, что в хлебопашестве нет ни малейшего успеха и нынешнее ее состояние, как я чрез год ее увидел, ничего другого не обещает кроме прежних великих и бесполезных для казны издержек. Область сия требует хозяйственного глаза. Недостатки ее изъяснил уже я в

прошлогодных моих донесениях. Камчадалы совсем истребляются. Я весьма много пекся купить в Японии соли и радуюсь, что помощью снисканного там знакомства успел получить 2000 мешков, которыми, привезя их сюда весь край пищею на год и более обеспечил и теперь правительство может исподволь приступить к заведению здесь соловарен. Отказывая себе в пище, привез я также сюда свиней, кур, также и огородных семян. Но за будущий успех здесь не ручаюсь.

Камчатского гарнизона капитана Федорова и адъютанта Кошелева и нижних чинов восемь человек возвратил я к местам их.

О вещах в Японскую миссию отпущенных доставил я г[осподину] министру коммерции ведомость, а подробный отчет послал с надворным советником Фоссе, котораго, как и майора Фридриция обратно с вещами на корабле «Надежде» отправленного как достойных и испытанных в верности Вашему Величеству людей, повергаю труды их и усердие Всемилоштивейшему воззрению.

Из есктраординарной суммы в распоряжение моей отпущенной 20 000 пиастров во все время путешествия в два года употребил я 482, да купил астрономических инструментов и книг на 1109 пиастров, а оставшиеся у меня 18409 пиастров здал я здесь г[осподину] Крузенштерну. Я осмелился дать здесь всей сумме Вашему Величеству отчет для того, что Экспедиция безкорыстно управляемая никогда не будет иметь важных расходов. В разсуждении хозяйственного збережения интересов Компании, сколько ни желал я умеренностию поощрить всю торговлю, но лишен был способов.

Собранные [материалы] по естественной истории натуралистами Тилезиусом и Лангздорфом довольно любопытны будут. Последний отличился более редким собранием в Бразилии насекомых и в Японии рыб и, надеюсь, что имя его еще известнее в ученом свете будет. В каждой приход в Камчатку пользует он больных, а теперь идет со мною в Америку. Я произвожу ему одинакой трактамент с Тилезиусом, но в сведениях кто из них преимуществует будет судить Академия. Приобретение для Экспедиции Лангздорфа лестно потому, что он член многих ученых обществ и здесь в Камчатке получил известие, что Геттингенский университет его в члены принял.

Во все время вояжа нижние чины были послушны. Хотя изнурены были трудами и недостатками, но сносили безропотно, а по входе в порты вместо отдыха употреблялись в выгрузке товаров, нагрузке балласта и починкою корабля, который неоднократно

сильную течь имел. Но теперь исправлен и надежно дойдет до России, где нужно его в док ввести будет и пременить згинвшия бимзы, ибо лет 12 как служит он. Труды экипажа болшею частию содействовали успехам в путешествии, а в Японии скромное поведение и повиновение их моим предписаниям было до того, что вселили они доброе о Россиянах заключение.

Я осмелился, Всемилостивейший Государь, удовлетворить честолюбие их и дал каждому по маленькой медали.

Всеподданейшее донесение мое заключаю тем, что совершенно счастливым почту себя, если бы благоволите недостатки мои заменить тем усердием к служению Вашему Величеству, для которого последние силы истощает.

Вашего Императорского Величества

\* Имя Японского Императора есть великая тайна для иностранных, ибо и японцы немногие знают его, но я подучил из многих рук и вот доказательство и расположения к нам, и Тунберг пишет, что мы имеем...<sup>134</sup>

*РГИА, ф. 1264, оп. 1, д. 577, л. 90–149 об.; ОР РНБ, ф. 152, оп. 1, д. 379, л. 89–110. Копия.*

(М. Малышева / В. Познанский)

59

*Донесение Н.П. Резанова в Главное Правление Российской Американской компании*

^ 369

8 июня 1805 г.

Петропавл.: Гавань в Камчатке

Милостивые государи мои!

Возвратясь из Японии минувшаго мая 25-го спешу я отправить с судном Феодосия всеподданейшия мои донесения и потому не имею времени распространяться здесь так, сколько бы требовали обстоятельства.

Торг нам в Японии отказан, но надежды впереди еще много. Мы имеем все в виду

---

<sup>134</sup> Это примечание незакончено Н.П.Рязановым или, быть может, не дописано переписчиком его документа. – М.М., В.П.

способы начать его с Севера. Выходя из Японии, прошли мы Корейским морем, были на северной оконечности Матмая, где живут курильцы. Японцы, хотя и везде слабы, но многолюдны, а тут и совсем их нет. Оттуда прошли мы в Сахалин проливом Лаперуза Матмай в тридцати милях разделяющим и вошли в губу Анива. Мы нашли тут японцов, уже восьмой год водворившихся. У них живут два офицера, построен дом, кумирня и 16 огромных магазинов, наполненных рыбою, которую они и здесь, и на Матмае солят руками бедных жителей, кои люди предобрые, и мы в Аниве их несколько сот видели. Тут было два судна купеческих, говоря с ними по-японски, узнал я, что они из Осака и торгуют рыбою, также обирают зимней их звериной промысел лисицы, выдры и куницы. Возят же к ним безделушки и армяки, из которых один я выменял и при сем посылаю. Губа изобилует рыбою, нерпами, сиучами и китами до невероятности. Лов последних весьма удобен, и я поставляю его в особое ваше замечание, ибо и леса для бочек столькоже на всех берегах изобильно.

Из Японии могли бы мы получать мед, камфору, древесной воск пчел ему ни белизною, ни добротою не уступающей, ткани, чай, медную посуду, лаковые вещи, а паче всего пшено, которое во всей Азии лутчее и весьма дешево, а туда могли бы мы весьма выгодно збывать железо, сукна толстые, затрапезы, русской фарфор, стекло, юфть, ровдуги, меха бельи, горностаевыя да и лисьи, также и котики, и вести торг рыбою. Для последнего Сахалин нужен. Мы хотели описать его, но у мыса Patience льды нам попрепятствовали и потому пошел я сюда, чтоб между тем здать часть груза, а теперь, нашед здесь судно Св. Марии, иду на нем на Кадык: какое зделано от меня распоряжение прилагаю копию с отношения моего г-ну Крузенштерну, заключающего полную для всего путешествия инструкцию, коему предписал я 6-го числа отправиться в путь свой. Из Японии привезенныя образцы меда два подносна, древесного воска три штучки, камфару и ящичек чаю получите от г[осподина] Фоссе, котораго я отправил.

Здесь нашол я судно Марии, зимовавшее по претерпенному бедствию, оно едва отливаясь сюда достигло. Двое промышленных в сильной венерической болезни и ранах: я отправил их обратно в Охотск, чтоб не заразить нам экипажа, да и в Америку не годится возить такие гостинцы. Я прошу от Главнаго Правления подтвердить всем канторам, чтоб людей в вояж отправляли, прежде через медицинских чиновников освидетельствовав, и что иначе будет с тех взыскано, кто виною отправки их, о чем я

Охотской канторе настрого предписал с приложением расчета о заборе их.

Штурман Григорьев, обращаясь всегда в пьянстве, компании бесполезен. Офицеры принесли на него жалобу, да и я напол его здесь в том же положении. Я прилагаю об нем ко мне вступившую бумагу и обращаю назад к команде, ибо поверить ему судно будет для компании еще убыточнее. Чтож до забора его, то Главное Правление может представить начальству о вычете у него из жалованья. На сей раз должен заметить вам, чтоб не просить штурманов офицеров, а лутче брать из нижних чинов. Между тем пример сей будет для компании полезен.

В разсуждении расчетов с офицерами корабля Надежды я уже не вступаюсь, ибо нет никаких средств ладить с ними. Прикащики ваши опишут вам подробно, а я довольно уже и без того имею огорчения.

Лейтенанту Ратманову по сообщению здешняго начальства объявил я чин капитан-лейтенанта. Мы сходили в Японию, он вахты не правил и, следовательно, пустой пассажир на жалованье и трактаменте; в сем случае для предбудущих времен должно в условиях оговаривать, чтоб несмотря на чины править вахтою. Могли бы легко и все лейтенанты быть пережалованы. Теперь на досуге изволит он заниматься в пользу вашу. Я доставил вам в прошлом годе бумаги, вступившия от него ко мне, о выключке его из акционеров за то, что прикащику вашему в болезни штоф виноградного вина понадобился. Ныне по приходе уничтожил я и возвратил ему акцию, думая чрез то ввести его в правила, но ето напрасно. Я головою отвечаю, что с Шемелиным бог ведает, что они в пути сделают. Им звание купца такая есть вина, какой подобной нет в свете.

Деньгами корабль Надежду я обезпечил и отдал им 18,409 11/18 пиастра, но они добираются прежде до тех, которые у Шемелина хранятся. И хотя я письменно дал, что ета сумма употреблена быть должна для торговых опытов, но уверяю вас, что ето не поможет нисколько.

Дальния сведения в разсуждении Японии заключаются в журнале моем, который насилу успел я переписать и доставить его Сиятельству Г[осподину] Министру коммерции. И так, пользуясь милостивыми его расположениями, можете вы, надеюсь я, получить от Его Сиятельства все то, что до торговли и цен вещам относится может.

Здесь пять человек японцов претерпевших осенью кораблекрушение. Правительство здешнее не дало им помощи, и комиссионер ваш кормит их на счет компании. Я думал бы

отвезти их на Кадьяк и жена их там, сделать полезными для того края гражданами, но кормить их не хотят, а брать не дают. Исходатайствуйте как на них, так и на предбудущие времена повеления. Они бы великую принесли пользу, а здесь скучают и без компании умерли бы с голоду.

Я привез из Японии соли 1300 пуд и отдал здешнему начальству для всей области. Нужно вам исходатайствовать повеление о заимообразных для компанейских нужд отпусках. Я просил ныне пятьдесят пуд муки для корабля Надежды, но какой получил ответ у сего в оригинале прилагаю. Что цены понижены и что в прошлом году подарено батальону, то уже забыто. Не знаю, будут ли у нас сухари, которых требует Надежда сто пятьдесят пуд и об отпуске которых отнесся я к начальнику области, чтоб ссудил мукою и приказал печь солдатам, ибо здесь нет других жителей, а за печенье от компании заплачено будет; также и мука из Охотска возвращена будет с первым транспортом, о чем я тамошней канторе предписал.

Судов в Кадьяке теперь много, да и все почти там, я думаю, ветхие, как то С[вятой] Павел и другое еще обратить сюда, ежели они негодны. Они могут притти сюда из Кадьяка с лесом, а и здесь из Нижнекамчатска возя могут рейса два-три сделать и обстроить здесь.

С Надежды взял я четыре трехфунтовые пушки для отвоза на Кадьяк с приличным числом ядер и картечь, да пороху восемьдесят пуд. Думаю завтра отсюда вытти и потому спеша моими донесениями, заключаю я тем истинным почтением, с коим имею честь быть вам,

Милостивые государи мои  
покорнейший слуга  
Николай Резанов

Их высокобл: г-м Директорам Российско-Американской Компании

*РГИА, ф.15, оп.1, д.2, л.117–119 об. Копия.*

(М. Малышева / В. Познанский)

*Донесение Н.П. Резанова в Главное Правление Российской Американской компании*

` 368

10 июня 1805 г.

Милостивые государи мои!

Сего дни был бы я в море, но оказавшаяся в кормовой части судна Марии течь принудила третьего дни выгружаться и отняла время, но завтра надеюсь я выйти.

Я доставил вам копию с предписания, данного мною г[осподину] Крузенштерну в разсуждении плана продолжения экспедиции. Он не идет, и я должен против воли моей объяснить вам все причины медленности, дабы она на счет мой не обратилась.

Выходя из Японии, дал я предписание осмотреть остров Уруп и наше поселение. Он отозвался мне словестно, что исполнить не можно по величине судна, и я, согласясь на то, взял в предмет обозрение Матмая и Сахалина. Приметя льды нас встречающие, советовал я итти в Камчатку. Он отозвался, что ето задержит его, но в самом деле не хотелось ему в Камчатку, опасаясь, чтоб по бразильским бумагам не было ему отказано от команды и не лишился способов показать заслугу, а потому и настаивал в описании. Я убеждал его всячески и наконец дал ему предписание, с коего прилагаю копию, уверяя его, что что бы получено не было, я дам ему повеление окончить сию экспедицию. Резоны мои были весьма сильны и наконец ответ его здесь прилагаю.

До прихода сюда в порт было тихо. Но здесь по получении почты опять поступки всех переменились. С 25-го числа вместо 6 или 8 дней мешкал он получать мои предписания, но 6-го числа насилу пришел ко мне. Я ему отдал, и он из порта вытянулся. Между тем слышно, что в Нижнекамчатске есть еще почта. Они ждут от благодетелей своих, как приметно, подкреплении. Я капитана не вижу, разгневавшись на меня за требуемую в получении денег росписку, он от меня ушел и с 6-го числа не бывал. 7-го числа, видя я на берегу офицера и спрося за чем нейдут, получил в ответ, что диферент поправляют нагрузскою немного балласта, но и то была отговорка и тот же день одним баркасом и кончили. 8-го числа вдруг привезли кухню на берег, говоря, что надобно котлы паять, и я теперь не знаю, уже когда они выдут, ибо как приметно решились дожидать почты. Вот вам, милостивые государи, производство дел моих и плоды петербургскаго покровительства! Капитан не повинуетя указам, меня ни о чем не извещает, хотя ето и в

своем порте и так можете посудить, каких при безначалии стоят успехи трудов мне, а нравственность вам видна, когда за прощение платят грубостями.

С совершенным почтением вам милостивые государи мои покорнейший слуга

Николай Резанов

*РГИА, ф.15, оп.1, д.2, л.123.*

(М. Малышева / В. Познанский)

61

*Донесение приказчика Российско-Американской компании Федора Шемелина в  
Главное Правление компании*

14 июня 1805 г.

Петропавловская гавань в Камчатке

Под высочайшим Его Императорского Величества покровительством

Российско-Американской компании в Главное Правление

экспедиции, отправленной кругом света

приказчика Федора Шемелина

Донесение

В донесении моем из гавани Св[ятых] апостолов Петра и Павла от 22 числа августа 1804 года, хотя я сказал, что сей час садимся на корабль и отправляемся в Японию, но ветер противный удержал наше намерение; и уже по утру 25-го числа Его Превосходительство Николай Петрович взоспел на корабль, когда сопровождал его с штабом и обер-офицерами Камчатский областной начальник Его Превосходительство Кошелев, по изпрошении от бога благополучного пути в 9 часов при пушечном выстреле снялись с якоря и подняв парусы пошли. Его Превосходительство Кошелев оставил корабль и возвратился на берег. Петропавловския пушки салютовали Надежде тринадцатью выстрелами из пушек, на которые тем же числом и Надежда отвечала. Ветер был малой и скоро утих. Надежда тянулася буксиром, но безветрие и противное принудили нас положить якорь. В 26 день августа по полудни в 7 часов имели мы удовольствие выйти из Авачинской губы и пошли в путь, нам принадлежащий.

Плавание наше было успешно, но мы в продолжении онаго претерпели сильныя три шторма, последний свирепый тифон на 20 число сентября привел всех, как начальников, так и матросов в отчаяние. Все приготовились уже к смерти, и когда думали, что нет уже нам спасения, вдруг начал ослабевать ветер, и мы чудесным образом остались спасены. Подробныя обстоятельства о свирепости ужасного сего тифона описаны в моем журнале.

15 числа сентября как день высочайшей Его Императорскаго Величества коронации праздновали мы под широтою  $31^{\circ} 21'$  и долготою  $226^{\circ}$ . Его Превосходительство ознаменовал сей для россиян щастливейший и блаженный день награждением за ревностную службу и труды унтер-офицерам и матросам возложением на них мален[ь]ких сребренных медалей на Владимирской ленте, которыя привешаны им на груди. Таковыя же медали имели щастие получить восемь человек солдат, взятых из Камчатского баталиона. Всех медалей роздано сей день шездесят три. Раздача была на шканцах, медали были вынесены на золотом глазете, положенном на большом блюде. Пред раздачею Его Превосходительство изволил говорить речь, содержание которой в копии помещено в моем журнале. Во время обеденного стола за здоровье Государя Императора выпалено из 11 пушек и потом всево экипажа из 9-ти.

26 числа сентября, а по морскому 27-го, по полудни в 5 часов, достигли мы благополучно Нангасакского залива, в которой еще не входя принуждены мы были от японскаго начальства в открытом море положить якоря, по учинению чего тридцатью или более окружены мы были японскими стражевыми судами. В вечеру при свете фонарей прибыли на корабль два большия из Нангасаки чиновника с вопросами о судне: какой нации оно принадлежит, о намерении с каким пришли и проч[ее]. Был сего вечера у посла нашего приехавший вместе с японскими чиновниками голландской фактор дуф, носящий звание обергофта и с ним корабельной капитан мушкетир и другой секретарь его; разговоры сего дува с послом изображены в журнале. Чиновники японские требовали порох и оружие, говоря, что без того мы в залив не будем впущены.

27-го числа прибывшим на корабль японским чиновникам отдан порох, ружья, сабли и излишния шпаги. Посол выговорил, чтоб по одной шпаге как ему, так и всей свите его равно и ружья оставлены были его солдатам служащих почестью ему. Сего числа еще вторично был у посла голландской обер-гофт и с ним вояжир барон Папст, которой был во многих местах Восточной Индии, а теперъ находится здесь, два корабельных капитана

бильмер и мушкетир и еще тот же секретарь его. По отобрании у нас пороха и оружия тотчас приказано было японским лодкам, кои в готовности находились и коих было до 52, тащить корабль в залив буксирами, двенадцать или тринадцать верст протащив нас в обширной закрытой с трех сторон губе, но открытой только с моря недалеко от острова по-голландски называемого Папенберг. Нам не хотелось здесь оставаться далее, и посол просил, чтоб корабль наш был поставлен был на месте гораздо того безопаснейшем, но японския господа под разными предлогами невозможности удерживали нас на сем месте до 4 числа октября, но сей день буксированы мы были за остров Папенберг. Лодок тянувших наше судно в сие время было до 80. Едва начали мы заворачиваться за Папенберг как к большому удовольствию нашему увидели вдали город Нангасаки, находящийся отоль не далее пяти или шести верст. Японцы протащили нас с одну версту за Папенберг и приказали тут положить якорь. Хотя город отсюда и был нам виден, но строение за дальностию сливались вместе и никаких предметов и даже чрез трубу хорошенько рассмотреть было не можно. Мы принуждены были стоять здесь до 29 числа октября поколь два голландские корабли нагруженные японскими товарами не вышли в море, с которыми вместе, как рассуждал губернатор нангасакской, стоять Российско Императорскому кораблю вместе и наряду с оными несовместно. Но в самом деле опасался, чтоб мы, стоявши поблизости друг подле друга, не нашли средства каким-нибудь способом видетсья с голландцами или какими знаками между собою разговаривать. 28 числа голландския корабли отправились в Батавию, и судно наше 29 числа было паки тянуто буксирами. Мы надеялись, что будем иметь удовольствие находиться сего дня в Нангасакской гавани, но обманулись: японцы подвинули нас к городу со две только версты и опять остановили. Чиновники объявили послу, что губернатор до получения из столицы их повеления не может и не смеет сделать более, что сделал уже российскому послу. Посол требовал у губернатора приличнаго места для корабля, котораго большия повреждения от бурь требуют исправления и починок, представляя, что не можно онаго иначе сделать, как чтоб корабль был облегчен и освобожден от своего груза, почему просил о магазинах, в кои бы помещены были дары от Российскаго Императора Кубо same посланные как равно и другие тягости. Но все таковыя прозбы и представления оставались тщетными. Между тем Николай Петрович сделался нездоров и болезнь его каждодневно более усиливалась, о чем знал и

губернатор. 12 числа ноября переводчики японския прибыв на корабль, объявили послу, что губернатор, уведомившись о нездоровье его, крайне сожалеет и опасается, чтоб наступающая зима в пребывании на корабле не нанесла здоровью его больших еще неприятностей, приказал он для него изготовить в городе один дом, который скоро будет готов. Мы ожидали сего до 5 числа декабря, а в сей день был торжественной въезд Его Превосходительства в город. Церемония была чрезвычайная, которую описывать подробно здесь неуместно и которая помещена в моем журнале. Дом имел пять комнат, кои убраны были во вкусе японском весьма хорошо, кладовых было довольно и Его Превосходительство обозря сам сей дом и его удобства был весьма доволен и приказал благодарить за то губернатора. Дом сей был не в самом городе, но в предместьи онаго разстоянием от фарштата городского на две версты. Место сие называется Мегасаки и то самое, как мы потом узнали, содержались последние дни португальские послы, которыя потом были перевешены или на кострах сожжены, двор вокруг обгорожен высоким тыном из тростника бамбу, из коего были двои ворота: одни к воде в залив, а другия в уской переулок, где находились караульни со множеством офицеров. Первый день, когда кончилась церемония и чиновники японския ушли со двора, то обои ворота были заперты на замок, и мы остались взаперти. На другой день декабря 6 началась у нас выгрузка с корабля в магазины. Японския чиновники распоряжали оною и одними японскими руками в два дни весь груз корабля выважен был на берег. 10 числа декабря чрез чиновника присланного от губернатора известился Его Превосходительство о повелении Императора впустить судно наше в гавань и больше ничего, что дальнейших повелений еще губернатор из Иедо ожидает. Мы пребывая в сем заключении, не видели конца ежедневным обманам и проводам от губернатора и чиновников, откладывающих время от времени далее приезд курьера из Иедо. Мы не знали, что значит долговременное наше заточение в Мегасакской тюрьме и почему иедской двор медлит решением объявить нам то или сё. Как в первых числах февраля приходят переводчики и объявляют от имени губернатора, что Государь их Император по случаю российского посольства повелел одному из государственных советников отправиться в Нангасаки с полномочием. 28 числа февраля обер толки или переводчики быв у посла дали на примечание, что посол за прибытием сюда из Иедо даймию или уполномоченного не поедет уже в столицу, что все, что касается до удовлетворения российского посольства повелено решить здесь

вместе с губернаторами. Переводчики потом объявили послу, что когда посольское его поручение скоро конец свой воспримет, то и жить, говорили они, вам здесь долго будет незачем и что чрез месяц должны вы будете оставить нашу гавань. Сколь ни было прискорбно Его Превосходительству такое известие, но нечего было делать, а так как судно наше было починкою и конопаткою исправлено, то Николай Петрович, призвав г[осподина] капитана Крузенштерна, приказал ему вооружать Надежду и исподволь приготовляться к походу. Марта 17-го даймио в Нангасаки приехал. 22 числа губернатор прислал переводчиков уведомить посла о прибытии в Нангасаки даймио и что губернаторы просят посла, чтоб завтрешний день пожаловал он в дом их, для чего завтра по утру в 8 часов прислано будет нарядное судно, а для встречи и сопровождения его в город придут к нему два банжоса. Между тем много говорили об этикете, каким образом учрежден прием послу, и как ему будучи в доме губернаторском поступать должно. Наконец была соглашенность: как пристойность и честь российского посла требует, не нарушая притом и японских обыкновений. По утру прислано было прекрасное судно, и посол отправился в город с двумя кавалерами посольства. По прибытии к пристани городской посол несен был городом в богатом норимоне, а офицеры его шли пешком. Посол вошел в комнату, где сидели даймио и губернаторы, и по условию сел против их на своем месте. За приветствиями, какие были сделаны послу, последовал вопрос даймио такого же содержания, что император их удивляется благодарности российским государем изъясненной за торговлю, на которую никогда позволение дано не было, а притом как можно только писать к кубовскому величеству, когда Лаксману имянно внушено и подтверждено было, чтоб никаких никто с Японией не имел переписок и что самое первое условие нарушено за то, что император их был к нему милостив. Я не буду здесь в коротком моем донесении изображать ответы нашего посла кой от слова до слова помещены в моем журнале, но только слова даймио и губернаторов. После надлежащего ответа на то Его Превосходительства вельможи, не хотя сего дня более распространяться объяснениями и приметив посла от первых предложений их огорченным, один из губернаторов сказал, что он думает, что посол обеспокоился японским сидением и что они закрывают заседания их до завтрешняго дня. Посол затем встав, рапрощался с ними и пошел. На завтре 24 числа паки прислано было тоже судно, и посол с подобною ж церемониею был препровожден в дом губернаторской. Коль скоро

посол вошел в покой, то вышел первой секретарь губернатора и от имени даймио и губернатора сделал ему приветствие и сказал, что как дело будет трактоваться государево, то никакия сего дня взаимныя комплименты не нужны. Посол отвечал, что тем лутче, чтобы поскорее приступить к делу, почему вошед в комнату и как условленось не кланаясь сел на свое место. Долго было глубокое молчание, наконец губернатор что-то спросил и один из чиновников приполз к нему, подавая большой сверток бумаги. «Вот, – сказал он, – ответ из Иедо российскому посланнику и я прочту его». Он читал его весь и прислал к сидящим подле посла обер толкам, которыя в то время ниц лежали. Они с благоговением прочитав оную сказали послу, что ето очень глубокомысленно и что они вдруг перевести не могут. Между тем другому губернатору такой же поменьше сверток. «Вот ето, – сказал он, – и наш ответ послу во исполнение повеления государя». Церемония и с сею бумагою была такая же: обер толки просили посла в другую комнату, где скажут они содержание под видом, что при всех читать не можно, но дело было только в том, чтоб дать только пищу азиатской гордости двора их. Надобно было терпеливо выносить все таковыя дружества их. Посол вышел и обер толки перевели ему. 1-е, что государь их приказал послу сказать, что в древния времена было всем народам ходить в Японию также и японцам выезжать из отечества невозбранно. Но два уже столетия как сохраняется неперменным правилом, чтоб никто в Японии, кроме древних приятелей их, вновь не приходил и японцы из отечества своего отнюдь не выезжали, а как Российской Государь прислал посла с подарками, то японския законы требуют, чтоб тот час ответствовать темже. А как посла в Россию отправить не можно, ибо никому из японцев выезжать не позволяется, то ни грамоты, ни подарков он не принимает, о чем все созванныя японской империи чины утвердительно определили. 2-е, что империя Японская издревле торгует только с корейцами, лийцами, китайцами и голландцами, а теперь только с двумя последними, то и нет нужды в новой торговле. 3-е, что как запрещено ходить в Японию другим нациям, то следовало бы поступить по законам, но уважая доброе намерение Российского Государя, отпустить судно наше обратно и дать на дорогу провизии с тем, чтоб никогда россияне в Японию больше не ходили и как другой бы нации судно шести месяцев в Японии быть не позволили, то принять ето за милость его. Выслушав сие, сказал посол, что до торга касается, то он России не нужен. А Российский Император хотел показать милость свою японцам, которыя многих

надобностей иметь не могут, и буде отказывают, то им же хуже. Но что принадлежит до подарков, то напрасно Кубовское Величество думал, что Государь мой хочет отдарков или посольства. Всему свету известно, что Япония не позволяет никому выезжать, посольств не посылает и имеет единственные и собственные свои обычаи. А принять подарки должно бы для того, что присланы от Великаго Государя обещающего дружбу. «Скажите, – говорили толки, – может ли быть узел дружбы завязан, когда один за конец потянет сильною рукою, а другой не столько имея оной будет должен к сильному податься и тут натурально, что никогда узла хорошо не завяжут». Между тем их кликнули вельможи и вскоре туда же попросили посла. Даймио прочел также бумагу и передал обер толку. Они опять просили посла вытти для переводу. Они объявили, что император их жалует пшена и соли и чтоб мы шли. Посол сказал, что мы жить не будем. Император мой жалует также сих вельмож подарками, которые они от меня получают. «Нет, – сказали они, – им принимать запрещено». А когда так, то я что стоило содержание наше заплачу и желал бы провизии за свои деньги. Нет, сказали они, этого у них нельзя, вы должны получить даром и проч[ее]. Много было в том спору, но наконец решенность принять провизию от них даром. Мы думали, что тот день даймио и губернаторы будут трактовать о торговле, и посол конечно возвратится домой с интересными известиями, но когда узнали, что даймио не с тем уполномочием приехал, чтоб трактовать о предметах до пользы торговли обоих империй касающихся, ибо все то прежде уже решено в Иедо, но прислан только объявить послу повеления своего двора, коих грубость и несправедливость против российского монарха, предлагающего неблагодарной Японии дружбу свою, в несказанное огорчение нас привело. Какой министр в делах государственных здесь успеть может, когда не в состоянии иметь способов употребить разум и способности свои к тому, чтоб посредством стараний мог достигнуть тех намерений, какия во всяком другом государстве легко получил бы. Кубо есть государь себе самому только подобный и единственный в свете. Он не хочет ни с кем равняться и потому убегает всяких актов с другими нациями, чтоб не быть в обязанности и сохранить приятное и неприятное зделанное от него другим, обык Кубо называть милостию, так как и нас продержав в заточении за бамбу шесть месяцев повелевает нам почитать то за особенную его милость.

Никто не думал, чтоб кто-нибудь кроме нас самих мог в огорчении сем иметь участие, но к удивлению нашему перввыя караульные офицеры изъявили послу свое сожаление и

все единогласно роптали на несправедливость своего правительства. Они сказывали послу, что не одни они о том сожалеют, что нангасакские и приехавшие из Иедо купцы, услышав об отказе нам в торговле, весьма находятся огорчены и даже все граждане остаются тем недовольны. Словом, ропот сделался всеобщей. Народ бранил голландцев и своих переводчиков, приписывая сделанной нам отказ проишкам и стараниям их. Переводчиков называли подлыми рабами голландцев и проч[ее]. На вопрос посла у обер толков снабдят ли они нас провизией и свежими съестными припасами, без сомнения, сказали они, вы все получите, вы находитесь в земле приятельской. Они обещали еще, что когда перевозка будет вещей наших на корабль, то пришлются для того к нам лодки и люди.

27 числа присланным японским чиновникам от губернатора сданы с рук привезенные нами японцы. 28 числа присланы большия японския лодки с людьми для перевезения грузу нашего обратно на корабль. Перевоска вещей и провизии продолжалась до 4 числа апреля. Сего дня я с дозволения начальника оставя тюрьму Мегасакскую переехал на корабль. 5 числа апреля с почестями и церемонией препровожден был и Его Превосходительство на корабль, а 6 числа по утру имея попутной ветр пошли в путь свой.

Начальник предписал г[осподину] капитану Крузенштерну итти в обратной путь Корейским морем. Мы шли оным, были 21 числа в Сангарском проливе и видели на острове Матмае строение города Матмая. Курс наш был подле западных берегов Матмая. Мы шли в виду сего острова до самой его северной оконечности. При последнем мысе Нонцебу в бухте 29 апреля стояли мы на якорях двои сутки. Видели курильцов тут живущих, образ жизни их и проч[ее]. 2 мая оставили сию бухту и того же дня перешли Лаперузов пролив. При захождении солнца, приближаясь к берегам южной оконечности острова Карафута или Сахалина, вошли в бухту Анива, где нашли два японския судна ходящие с Матмаю в сие место для получения соленой рыбы. 4 числа взяв якори пошли в виду Сахалина заливом Пасианс или заливом Терпения. Туманы и противная погода удалили нас от берегов Сахалина. Мы хотели паки приблизиться ко оным, не доходя до мыса Пасианс, лежащей в широте  $49^{\circ} 14$  минут, повстречали непроходимые льды, которые воспрепятствовали нам совершить наше намерение. Начальник видел невозможность достигнуть паки Сахалинских берегов, и чтобы льды понапрасну не могли отнять время на другое употребление нужного, приказал держать курс прямо в

Камчатку. 16 мая претерпели мы шторм, а 17, со светом, вдруг увидели берега Курильских островов. 20 числа прошли мы проливом между пятым и шестым островами, а 24 прибыли в Камчатскую Петропавловскую гавань благополучно. Мы нашли здесь в гавани два судна: одно казенное транспортное Феодосия, а другое компанейское Мария, отправленное 1804 году из Охотска на Кадьяк, но за великою течью не могшее следовать далее: принуждено было войти в сию гавань октября 1 числа и здесь зимовало. Начальник сего судна г[осподин] лейтенант Машин, а пассажирами на оном лейтенант Хвостов, мичман Давыдов и штурман офицерского чина Григорьев. Здесь зимовало еще одно другое компанейское судно Константин, но 15 числа мая оставило гавань и пошло на Атху и северные острова для забрания промысла.

Начальник мой, будучи еще в Японии, твердое намерение положил, чтоб по прибытии в Камчатку оставить корабль Надежду и обозря область Камчатскую возвратиться в Санкт-Петербург. Надежда так ему омерзела, что он совсем оставил думать о Кадьяке, хотя прежде весьма там быть желал. Испытанные им неприятности остановили его: верить более особу свою тем людям, ни малейшего почтения к нему не имеющим. Утраченное здоровье страданиями, которые он имел несчастие перенести, принуждало его неотменно ехать в Россию, как и связи утверждения в Нангасаки не менее имели нужду в присутствии его в столице, как вдруг при воззрении на Марию он оставляет прежний план, забыв слабые свои силы, и не страшась, что судно Мария малое и текучее, водворяется на оное и с пламенеющею охотою едет на Кадьяк. Перемена в намерениях толь скорая крайне удивила меня и вместе несказанно опечалила. Его Превосходительство объявил мне, что я должен буду один уже остаться на Надежде и идти в Кантон с грузом, какой доставлен будет Константином сюда в гавань с северных островов, и оттоль возвратиться в Петербург.

Я ужаснулся, мне не хотелось вторично подвергнуть себя тем жестоким опытам, которые много отняли у меня жизненных дней. Одно только воспоминание приводило душу мою в смятение. На помощь физических моих сил мало имел я надежды, оне расстроены, до того слабы уже были ободрять настрашенный дух мой: разве не те же притчины, представляя я Его Превосходительству, приводят его к отвращению путешествовать на Надежде, как и мои опасения, разве огорчения и печали делают не равное впечатление на душе как князя, так и простаго человека и не с тою ли же силою

поражают оную. Вы, говорил я, ограждались щитом достоинства и высокого характера своего, но я купец, а потому презрен и беззащитен. Мне будут стараться делать все преграды к успехам, какия я начну к пользе компании. В Кантоне нужны иностранные языки, но я их не знаю. Флотские наши офицеры могли бы подать мне в том помощь, но никогда сего не сделают, для того, что я не ревельской кожевник представляемой господином Крузенштерном компании, но Шемелин. Все неуспехи какия произойти могут от того, припишутся на счет моей неспособности. Следовательно, я там буду излишен и бесполезен. Противуборство доставит компании только один вред и мне принесет безчестие, им больше могут в том поверить нежели мне. Лучче в отвращение сего вреда вверить торговое дело в Кантоне одному г-ну Крузенштерну, которой о познаниях до сего касающихся много себя рекомендует.

Его Превосходительство хотя живо был тронут моими представлениями, но не согласился со мною. Я не мог устоять против его убеждения, чтоб не остаться при обязанности ехать в Кантон. Он поставил мне примером рвения свои, с какими силился он доказать отечеству и компании. Вот, говорил он, видишь изнемоги[и] состав тела моего: знаешь, сколь любезны дети мои, но я оставляю их промыслу. Спешу окончить мой подвиг на утлом и текучем судне Марии и без ужаса отваживаюсь преплыть на нем в Америку и проч[ее]. Он изволил знать и мою жертву, которой я вновь предавался. Разговоры наши были о трудностях, о великодушном всего терпении и потом о сладостном удовольствии, когда щастливо те преодолеются, и наконец заключили тем, что тот не венчается, кто не мучен будет. С этим словом Николай Петрович залился слезами. Я имел те же раны, и мы поплавав вместе окончили решимостью с призванием божеской помощи приготавливаться на предположенной нами подвиг.

Между тем Его Превосходительство предписал господину Крузенштерну идти к Сахалину для исследования берегов его, а по исполнении того возвратится в Петропавловскую гавань, где взяв груз состоящей в котиках отправиться со мною в Кантон.

В прошедшем еще году во время пребывания нашего в Петропавловской гавани по случаю раздачи г[осподином] капитаном Крузенштерном заслуженной матрозами порции водки, я получив ведомость от клерка Чугаева о количестве той кому сколько отлито донес 26 числа июля Его Превосходительству бумагою, с коей при сем прилагаю

копию. А ныне по возвращении нашем из Японии г[осподин] Крузенштерн роздал матросам цельной французской водки до 15 и можжевельной до 7 ведр. Записки, каковы доставлены ко мне о том клерка Чугаева у сего, препровождаю в подлиннике. Отлитую водку у матросов скупил брат здешнего областного начальника г[осподин] порутчик Кошелев и продает здесь в розницу. В подрыв компании он купил дешево. За месячную порцию гольнаго каньяку или за два штофа без двух чарок по 3 пиастра, а продает по 8 руб[лей] за штоф. Сколь ощутителен напрасной убыток для компании и каков поступок Ивана Федоровича, Главное Правление само судить изволит.

Господин Крузенштерн без дозволения Николая Петровича правящему здесь коменданскую должность г[осподину] порутчику Колмакову подарил бочонок англинской солонины.

Я занят непрерывным делом, кроме моей должности и своего письма, помогая в переписке бумаг отправляемых в Санкт-Петербург. Начальнику не мог успеть перемерять французскую водку, оставшуюся за отсутствием моим в Японию за печатью у г[осподина] комиссионера Выходцова и окончить с ним мой щет. Расчеты его с 80 человеками промышленных идущих в Америку, разные требования на Надежду и Марию и многия приказания начальника не давали ему также не на минуту времени, чтоб заняться сим приемом. Я не пошел на Надежде к Сахалину для того только, чтоб иметь время с г[осподином] Выходцовым окончить наше дело. Надежда, Мария и Феодосия готовы совсем уже к выходу. По выходе их из гавани мы исполним нашу обязанность и с нарочным естафетом Главному Правлению донесем. Естафет сей, по мнению г[осподина] Выходцова, не позже может доставить наши бумаги в Главное Правление, как и приезд последует в столицу г[осподина] надворного советника Фоссе. Я доставляю при сей okazji Главному Правлению мой журнал означающий прибытие наше в Японию, пребывание во оной по самой день выхода из Нангасак. Журнал во время путешествия нашего в Японию и обратного пути доставлю я с будущим естафетом, а теперь не имел времени переписать.

Два приказания от Главного Правления – одно от апреля 11 числа под № 320 и второе от мая 19 под № 429 1804 года имел счастье получить в день прихода нашего в Петропавловскую гавань 24-го числа мая 1805 года. Предписываемое мне оными буду стараться исполнить, а ответственность на оныя не имею совсем теперь времени.

Я просил Николая Петровича пожаловать мне особенное наставление как поступать мне по торговым делам в Кантоне и в отношении капитана за неприсутствием Его Превосходительства на Надежде, до какой степени может надо мною простираться власть. Я просил поставить меры и оградить меня от излишеств. Что мне писать, сказал он, когда мои предписан[ия] никогда не выполняются. Вы имеете инструкцию, которой руководствоваться можете, а я, говорил он мне, Американской Посельщик, препоручаю тебя богу и не хочу более вступаться ни во что. Я услышал от него ужасн[ое] намерение остаться навсегда в Америке и никогда н[е] возвращаться в Санкт-Петербург. Причин побуждающи[х] его к тому других мне не объявил, как только сказал, что он огорчен, просил меня, чтоб я более его не испрашивал. Я был свидетелем только слез текущи[х] ручьями из его глаз. Уста его произносили мать, детей и близких к сердцу его. Я не мог без жалости и слез смотреть на него и видел сколь много страдала душа его. Он приказал мне написать, что я слышал от него и видел, и я не смел умолчать сего.

Таким образом, решившись спешил скорее оставить Камчатку. 13 числа июня Мария вытянулась из гавани завозами, а в 6 часов проводил я начальника моего на судно. Сто раз целовал он меня и тех, которые имели честь провожать его. Здесь хотя показывал он дух веселой, но горесть ясно написана была на чел[е] его. Прощайте! – твердил он многократно, и мы слышали поразительной для сердца отголосок произношения и тогда, когда уже оставили его и находились в шлюбке. С полуночи 14 числа Мария, пользуясь благоприятным ветром, вышла из губы и в 5 часов по утру скрылась из глаз наших.

Хотя господин Крузенштерн получил предписание от начальника еще 6-го числа июня и имел хорошия ветры, но не вышел, и Надежда стоит еще на рейде. Николай Петрович не выждать его. Мария проходила мимо Надежды, с которой никто, кроме лейтенанта Головачева, не разсудил зделать последней чести, чтоб приехав проститься со своим начальником. Был еще г[осподи]н Ромберг, но тот не для прощанья приезжал, а доставил только на Марию бочку гороху.

Прилагаю при сем две ведомости, первую под литерой А, сколько употреблено на продовольствие экипажа корабля провизии и прочаго с 15 числа июля 1804 года по день прибытия нашего из Японии в Петропавловскую гавань по 28-е число мая 1805 года; вторую Б с выхода на Кронштатской рейд с июля 7 числа 1803 года до прибытия в

Камчатку по 15 день июля 1804 года, и еще копии с донесений моих к начальнику от 16 и 26 июля 1804 года, и еще копию с рапорта от штурмана 12 класса г-на Каменьщикова. От компании прикащик Федор Шемелин.

*РГИА, ф.15, оп.1, д.2, л.155–161.*

(М. Малышева / В. Познанский)



## 監修者・編訳者・訳者一覧

### 監修者

平川 新 東北大学東北アジア研究センター 教授

### 編訳者

寺山恭輔 東北大学東北アジア研究センター 准教授

畠山 禎 名城大学理工学部 非常勤講師

小野寺歌子 東北大学東北アジア研究センター 教育研究支援者

### 訳者(五十音順)

オイドフ・バトバヤル 北海道大学大学院文学研究科 博士後期課程

木寺律子 同志社大学言語文化教育研究センター 非常勤講師

斉藤由佳 近畿大学留学生別科 非常勤講師

藤原潤子 国立民族学博物館 外来研究員

前田ひろみ 同志社大学言語文化教育研究センター 非常勤講師

横井幸子 ミネソタ大学大学院教育・人材開発学部 博士後期課程

渡邊 聞 サンクトペテルブルグ国立大学大学院文学研究科 博士後期課程修了

ロシア史料にみる 18～19 世紀の日露関係 第 4 集  
(東北アジア研究センター叢書 第 36 号)

---

2009 年 3 月 31 日発行 非売品

監	修	平川 新
編	者	寺山恭輔・畠山 禎・小野寺歌子
発	行	東北大学東北アジア研究センター
		〒980-8576 仙台市青葉区川内
印	刷	東北大学生生活協同組合 プリントコープ
		〒980-8579 仙台市青葉区荒巻字青葉 6-6
		工学部中央厚生会館

---

the 1990s, the number of people in the UK who are employed in the public sector has increased by 1.5 million, from 2.5 million in 1980 to 4 million in 1998. The public sector has grown from 10% of the economy to 15% of the economy.

There is a growing emphasis on the need to improve the efficiency of the public sector. This has led to a number of initiatives, including the introduction of competition, the restructuring of public services, and the introduction of new management practices. The aim of these initiatives is to reduce the cost of public services and to improve the quality of the services provided.

One of the main challenges facing the public sector is the need to reduce the cost of services. This is a difficult task, as the public sector is often the only provider of certain services. However, there are a number of ways in which the cost of public services can be reduced. These include the introduction of competition, the restructuring of public services, and the introduction of new management practices.

The introduction of competition is one of the most common ways in which the cost of public services can be reduced. This involves the introduction of private companies into the public sector. This can be done in a number of ways, including the privatization of public services, the introduction of private companies into public services, and the introduction of private companies into public services.

The restructuring of public services is another way in which the cost of public services can be reduced. This involves the restructuring of public services so that they are more efficient. This can be done in a number of ways, including the restructuring of public services so that they are more efficient, the restructuring of public services so that they are more efficient, and the restructuring of public services so that they are more efficient.

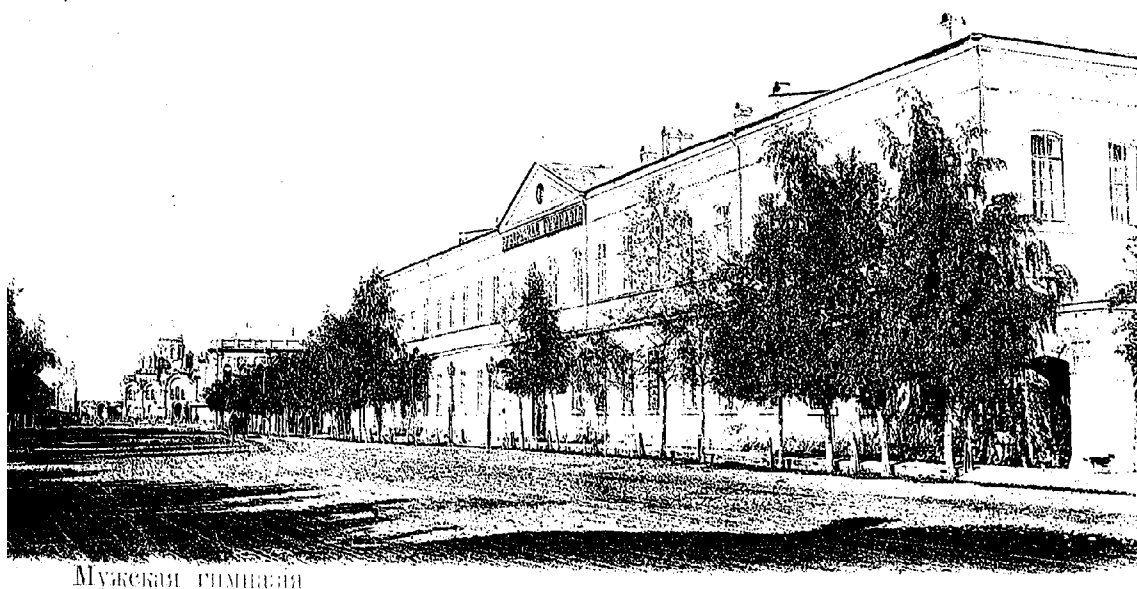
The introduction of new management practices is another way in which the cost of public services can be reduced. This involves the introduction of new management practices into the public sector. This can be done in a number of ways, including the introduction of new management practices into the public sector, the introduction of new management practices into the public sector, and the introduction of new management practices into the public sector.

There are a number of other ways in which the cost of public services can be reduced. These include the introduction of new technologies, the introduction of new management practices, and the introduction of new management practices. These initiatives are all aimed at reducing the cost of public services and improving the quality of the services provided.

The public sector is a complex and challenging environment. There are a number of challenges facing the public sector, including the need to reduce the cost of services, the need to improve the quality of services, and the need to improve the efficiency of services. These challenges are all being addressed by a number of initiatives, including the introduction of competition, the restructuring of public services, and the introduction of new management practices.

The public sector is a vital part of the economy. It provides a number of essential services, including health care, education, and social security. The public sector is also a major employer. It is important that the public sector is able to provide these services in a cost-effective and efficient manner.

Имя, фамилия Порода и лета ихъ	Списокъ Учениковъ Японскому Языку обучающихся при Приказномъ Народномъ Училищѣ.		Хорошо ли обучились Японскому Языку	Сколько классовъ въ году получа- ли на- казанія	Желать или Холостъ
	Имя, фамилия	Учениковъ			
1	Андрей Аморосовъ. сынъ дворяна воево- ды Аморосова 21 <sup>ми</sup> Лѣтъ	Въ Иркутскую Духовную Семинарію вступилъ — обучался въ оной грамотѣ, писанію и Латинскому Грамматикѣ, а въ Ир- кутское Народное Училище для обучения Японскому Языку вступилъ въ свободное время занимается по своимъ письмамъ	1785 2 <sup>го</sup> 1792 1 <sup>го</sup>	5 <sup>й</sup>	Холостъ
2	Иванъ Мироновъ Свищенника Ми- хаила сына 25 <sup>ми</sup> Лѣтъ.	Въ Иркутскую Духовную Семинарію вступилъ — обучался въ оной грамотѣ, писанію и Латинскому Грамматикѣ. — въ Иркутское же народное училище для обучения Японскому Языку вступилъ въ свободное время обучался ремеслу, въ которомъ и теперь занимается.	1788 1 <sup>го</sup> 1792 1 <sup>го</sup>	5 <sup>й</sup>	Холостъ
3	Проникей Косыгинъ Свищенника Федо- ра сына. 25 <sup>ми</sup> Лѣтъ	Въ Иркутскую Духовную Семинарію вступилъ — обучался грамотѣ, писанію, Латинскому Языку и Риторикѣ; а въ Иркут- ское Народное Училище для обучения Японскому Языку вступилъ — обучившись вѣдомъ предметамъ низшихъ классовъ, руской Граммати- ки и рисованію служилъ въ первомъ Классѣ Помощникомъ.	1791 1 <sup>го</sup> 1796 1 <sup>го</sup>	5 <sup>й</sup>	Желать
4	Анонъ Карякинъ Свищенника Федо- ра сына. 25 <sup>ми</sup> Лѣтъ	Въ Иркутскую Духовную Семинарію вступилъ — обучался въ оной грамотѣ, писанію, Латинскому Языку и Риторикѣ; а въ Ир- кутское Народное Училище для обучения Японскому Языку поступилъ въ свободное время занимался катанью Катанью.	1791 1 <sup>го</sup> 1796 1 <sup>го</sup>	5 <sup>й</sup>	Холостъ
5	Анонъ Колосовъ Свищенника Фотомисла сына 23 <sup>х</sup> Лѣтъ.	Въ Иркутскую Духовную Семинарію вступилъ — обучался въ оной грамотѣ, писанію, Латинскому Языку и Риторикѣ; а въ Ир- кутское Народное Училище для обучения Японскому Языку поступилъ — свернувъ по во въ свободное время занимается въ Приказномъ Народномъ	1791 1 <sup>го</sup> 1796 1 <sup>го</sup>	5 <sup>й</sup>	Холостъ
6	Михайло Колосовъ Имя сына Японца по Читской и пере- сказа Митиуверна- го (братъ сына) Николаи Колосовъ Имя. 11 <sup>ми</sup> Лѣтъ	Въ Иркутское Народное Училище вступилъ — прошедъ низшіе классы обучался теперь въ четвертомъ; а Японско- му Языку началъ обучаться въ — — —	1799 1 <sup>го</sup> 1800 1 <sup>го</sup>	5 <sup>й</sup>	Холостъ
Иркутской Иркутской Иркутской Иркутской Иркутской					



Мужская гимназия

Издание фотографического издания Густав Невел.

### 3. 日本語学校が入っていたイルクーツク男子ギムナジアの建物（1899～1901年頃の写真）

男子古典ギムナジアは1805年11月12日、ザモルスкаヤ通りにある国民学校の施設および建物を利用して開校した。写真は、建築家 A.V. ヴァシリエフによって1843～46年に行なわれた改築後のギムナジアである。建物全体のうち中央の二階建て部分が、ギムナジアの旧校舎にあたる。1920年代末、建物の二階建て部分は一階分増築された。現在はここにイルクーツク航空技術専門学校が入っている。

Медведев С.И. Иркутск на почтовых открытках. 1899—1917. М., 1996. С. 59.

March, 1887



10

9

4. 史料 No.53-1「シベリア総督 I.O.セリフونتフから商務大臣 N.P.ルミャンツェフ伯爵への通信。クリル列島で発見され、ペトロバヴロフスク港に到着した 6 人の日本人について」の一枚目

№ 5. (отдѣл. III, Сурдъ VI);

90

Спешно съднесетъ Всевеличившій  
бывшаго въ Японіи Гоураръ!

помощь Шмидтвицъ-

наго Шамперлера Д.

занова въ 8 Июль 1803.

Позднее мое до-  
несеніе Вашему Им-  
ператорскому Вели-

честву иному и сего

отправитъ изъ Хан-

кавскаго порта отъ

15 Октября 1804 года съ вы-

шедшими отсюда

въ Батавію Голланд-  
скими кораблями. Хотѣ-

ли препроводить и о-

ное въ Сурбима-  
рѣ отправленіе въ Ев-

ропу съ разными су-

дами; но немо-  
жетъ, что по во-

еннымъ обстоятель-

ствамъ не можемъ

и достигнуть до

